ＩＳ これが私の弟よ

梨音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　これが私の弟よ

【Ｎコード】
Ｎ４９７２Ｖ

【作者名】
梨音

【あらすじ】
「あれここどこだ？」

俺は鈴姉を迎えに中国のＩＳ研究所に来たのだが中は広くて道に迷ってしまった

「あ、ドアがある　とにかく入ってみよう」

「鈴姉……ＩＳだ」

ドアを開けたらそこはＩＳ保管庫だった

「鈴姉はいいな～ＩＳを使えて」

そうＩＳは男には使えない

「確か一夏も使えたんだよな　あいつ初だな」

俺はＩＳに近づき触れる

キュィーン

「え!?　反応した?　なんで?」

触れた瞬間ＩＳが反応した

「誰よ勝手にＩＳ使ってるのわ……紫苑!?」

「鈴姉　起動しちゃった」

「え、嘘なんで!?」

「俺に聞かれても困るのだが」

「とにかく降りてきなさい!」

「了解」

俺はＩＳから降りる

「とにかく、あんたは制的にＩＳ学園に入学ね」

「え、じゃ鈴と一緒に居られるの！」

「そうみたいね。いったいなにがどうなってるのよ」

そのあと中国中の騒ぎになったらしい

俺はいろいろ調べられたよ

クラスメートは全員女子1人をのぞく（前書き）

ＩＳの鈴の弟版を描いてみました

弟はすごいシスコンですでは本編どうぞ

クラスメートは全員女子1人をのぞく

「う～これは非常にきつい」

俺は右隣にいる少女鈴に顔を向ける
それに気づいた鈴はこちらを見て笑うだけだ

おい、それが弟に向ける行動かよ

「凰さん　凰　紫苑(しおん)さん」

「あ、はい」

俺は先生に呼ばれたので席を立ち
確か自己紹介してたんだっけ

「え～っと凰　紫苑です一応男ですよろしく」

「もっとまともな挨拶出来ないの？」

「悪かったな鈴てか次お前だろ」

俺は鈴を見ながら座る

「そうよ　私が中国代表候補生の凰　鈴音よよろしくね」

「カッコ付けちゃって」

バシ

「いってーななにしやがるバカ鈴!!」

鈴は俺の頭を叩く

「姉に向かってばかとはなによばかとは!!」

「バカはバカだろバカ鈴」

俺は立ち上がる

「この!!」

「当たるかよ」

鈴の拳を避ける

「避けるな!!」

「殴られるとわかってて避けないなんてどんだけマゾなんだよ　おい、鈴姉ちんちくりんでも代表候補生なんだろ？　なら俺を一発殴って見ろよ無理だろうけどな」

俺は鈴と喧嘩して負けた事は一度目ない　鈴が代表候補生になった今でもだ

バシバシ

「いた」

「いて」

「おい、お前らうるさいぞ！」

主席簿片手に現れたのは

「「げ　千冬さん！！」」

俺も鈴と同時に叫ぶ

そして

バシバシ

千冬さんの主席簿が火を噴く

「いた」

「いて」

「ここでは織斑先生だ」

「「はい」」

「では、私はクラスに戻るが騒ぐなよ」

「「はい」」

俺と鈴が席に座るのを見てから千冬さんは隣のクラスに戻る
確か俺と同じように一夏も来てるんだって

「一夏驚くだろうな」

そんな事を考えていたらＳＨＲは終わっていた

「ふぁ～眠い」

「ちょっと、いいかなしら？」

誰だこいつ？

「なんだ出来れば授業始まるまで寝たいのだが」

「あんたは直ぐ寝る起きれなくても知らないわよ」

「鈴お前と違って寝起きがいいから問題ない」

「どこが寝起き悪いのよ」

「お前いつも俺が起こすとグーパンチじゃねぇーかよ」

「ちょっと、無視しないでくれる？」「ごめん君の事知らないししかも興味ないし」

「へ～いい度胸ね私に興味ないなんてこの私アメリカ代表候補生のエイミー　エドワードを！！」

いや、知らないしあと、俺は女自体興味ないし

「じゃおやすみ」

「もう、始まるわよ」

「まじでか　あ、確か俺も鈴と同じ中国代表候補生だったと思う」

「まだ非公認だけどね専用機がくればあんたも候補生になるんじゃないの？」

「てか、俺の専用機いつくるんだ？」

「さ～ね」

「ちょっと、怒るわよ私を無視するなんて」

「あ～こいつあまり人間に感心ないから無駄よ」

「まあな」

「誉めてないからね」

「知ってるよ　俺は鈴にしか興味ないし」

「「「き　禁断の愛！！」」」

聞き耳立てていた数人が騒ぎ始める

「私はそんな趣味ないわよ」

「え～まぁ俺も無いけどな」

そこに授業開始のチャイムがなる

「また後でくるわ逃げないでよね」

いや、一組に行くから
逃げると思う

「では、授業を始める　とその前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないね」

担任が思い出したように言う　代表者か俺には関係ないな

「クラス代表者はそのままの意味で対抗戦ではなく生徒会の開く会議や委員会への主席　クラス長ね　あと、クラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものなのね。今の時点でたいした差はないが、競争は向上を生むので。　一年間変更はないからそのつもりでね」

教室全体がざわざわする
すごくめんどくさいそうだな俺はパス

「はい、凰君がいいと思います」

「鈴姉ご指名だぞ」

「なに言ってるのよあんたよ」

鈴が俺をジト目でみる

「まじでか！！じゃ俺は鈴を推薦します」

と言いながら鈴を見るが余裕な顔をしている　まあ理由はわかる
確実に俺が代表者になるだろうな覚悟決めるか

「待ってください！　納得いかないわ！」

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、さっきのエイミーだ
またでたよ

「そんな推薦認めない　凰さんがやるならまだしも　その弟がやるなんて考えられないわ！」

勝手に言ってなよ

「実力ならこの私の方が上です　代表者になるなら私の方が適任です」

なんかむかついてきたな

「なら何故自分がやると言わなかったんだ？」

俺は立ち上がりそちらを向く

「う〝！」

「俺は代表者が誰になろうと構わない　俺には関係ないし　自分が弱いから言えなかったんだろ？」

「くっ！数だけの国の分際でエリートのアメリカ代表候補生の私を侮辱するだなんて」

鈴は我慢してるみたいだがすまんな鈴

「一番新しい国が何を言う　それにそちらさんが先にこっちの国を侮辱したんだぜ」

「なら私と戦いなさい！」

「いいけど、ゆっとくけど俺強いよ？」

そうすると教室中が笑い出す

鈴を覗いて

カチン

俺は完全に切れた

ガシャーン

俺は手刀で自分の机を真っ二つにする

「笑ってんじゃねぇーよ　なにが可笑しいんだ？　教えてくれよ

今ＩＳが使えるから女が強いってなってるがＩＳなしで女が男に勝てるのか？　素手でこんな事が出来る女がここに居るのか？　居るならで出てきて見せてくれよ・・・・・・・・・居ないんじゃねぇーかよ」

俺はそのまま教室を出る

「あ、凰君！」

「私が追います」

鈴がその後ろを追いかける

「やっぱりここにいた」

校舎の屋上俺は金網の上に腰掛けている

「なんだ　鈴姉か」

俺は振り向かずとも声でわかる　俺の片割れの鈴だ

「あんたあんな事したらクラスから浮くわよ」

鈴は金網にもたれ掛かる

「別に昔から俺はそうだろ　今さら誰かとつるむ気はないよ」

俺は昔っから人付き合いが苦手で浮いていたそしていつも鈴に助けられてきた
まあ、浮いてたのはこの力もあるからだけどな

いくら武道の達人でも鉄で出来ている机を真っ二つにする事はほぼ無理だろ
だが俺は出来てしまう
昔っから力は強い方だったが空手やいろんな武道をやってるうちにあんなことが出来るようになってしまった

空手師匠いわく　中国四千年の逸材だといわれた
簡単に言うと中国四千年の歴史始まって以来の最強って事みたいだ

「だからって、放棄しちゃダメよ」

「姉ちゃん」

俺は金網から飛び降りて鈴の前に降りる

「私をそんな呼び方するときは甘えたいって事だね　いいはここにおいで」

鈴は座り膝を叩く

「うん　ありがとう」
俺は鈴に膝枕をして貰う鈴は頭を撫でてくれる

「本当甘えん坊なんだから」

言いながらも優しい笑顔で撫でてくれている

「だって姉ちゃんしか甘える人いないんだもん」

俺はあまり親に甘える事が出来なかった　そして今も出来ないだからいつも姉であり自分の片割れの鈴に甘えていた

「そうだけどもう高校生なのよ　そろそろやめないとね」

何故か体が親に甘えるのを拒否したのだ　だから幼稚園の時から鈴に甘えていた

「姉ちゃんは嫌なの？」

「そうじゃ無いけどもう大人なるんだし　私だっていつかを嫁に行くし　紫苑だっていつかは結婚するでしょ　いつまでもこんな事してられないのよ」

「姉ちゃんと結婚する！」

「バカな事言わないの」

「バカじゃないもん」

「はいはい　わかったから少し寝なさい」

「うん　そうするよ」

俺はゆっくりまぶたを閉じる
そのまま眠りにはいる

「はぁー紫苑が他の女の子に興味なくなったの私のせいかもね」

鈴は静かに寝息を立てる紫苑をそっと撫でながらそうつぶやく

「ふぁ～　鈴ありがとう」

「あんたのせいで二時間も授業でれなかったじゃないのよ」

鈴はムスッとしながらも俺の隣を歩いている

「ごめん　ごめん　なんか甘えたくなっちゃったんだよ」

「まあ別に嫌じゃないけどね」

「そうなんだじゃまた甘えさせてね」

「時と場所を考えてよね」

「はいはいわかってるって」

本当にわかってんのかなこいつ

「ここか食堂は」

俺は鈴の分の食券を買いだす

「鈴ラーメンでいいでしょ？」

「うん　いいわよ」

まあ、聞かなくてもだいたいわかってたけどな双子だから

「鈴、一夏探してるんでしょ一夏ならあそこに居るよ」

鈴がキョロキョロしてるのですぐにわかった

「な　そんなんじゃないわよ」

と、いってるくせに一夏の方ガン見じゃねぇーかよ

「はいはい」

そこに

「はいラーメン２つ」

ラーメンが２つが出てくる

「ありがとう　おい鈴出来たぞ」

「あ、うん」

俺と鈴はそれぞれ自分の食事を持ち一夏の元に向かう

「よっ一夏」

「う？　お～紫苑ってなんでここにいるんだそして鈴も？」

一夏は日替わりの鯖の塩焼き定食の焼き鯖をほぐしていた

「俺はお前と同じだよ　そして鈴は中国代表候補生だよで、このムスッとしている美人さんは誰？」

一夏の前に座っている女の子を見る

「そうか　知らないのか　紫苑達が小五の頭に転校してきたからな～ちょうど入れ違いだな」

だから誰だよ

「篠ノ之　箒だ。よろしく」

「凰　鈴音よ。よろしく」

「同じく凰　紫苑だ。よろしくな」

鈴と篠ノ之さんの間に火花が

「鈴こっちに座れよ」

俺は一夏の隣を指す

「あ、うんありがとう」

鈴は素直に一夏の隣に座る

「篠ノ之さん隣いいかな？」

「ああ、どうぞ」

「ありがとう」

俺は篠ノ之の隣に座る

「てか、紫苑に鈴なんでこっちに来てるんだったら連絡しなかったんだよそれに紫苑がＩＳ動かせるなんて知らなかったぞ」

「いや、連絡しなかったのはめんどくさかっただけだよ　な、鈴」

「なんで私に振るのよ」

「なんとなくだ　俺の事も一応テレビに流れたがお前の話で全て消えてしまったよ　元日本代表織斑　千冬の弟ってね」

俺はラーメンを食べながら答える

「そんな事になってたのか知らなかった」

テレビ付けろよ

「一夏私は先に行くぞ」

「おう、また後でな」

篠ノ之さんは席を立ちトレーを戻して食堂を後にする

「あ、思い出した一夏あんた代表候補生と戦うんだって」

鈴がラーメンを食べ終えてから話す
いつもながらも早いな

「ああ、でもどうにかするよ」

「それなら鈴をコーチに付けようか？」

俺も食べ終えてから話にはいる

「お、それは頼もしいな頼むよ鈴」

「あ、うんいいけど紫苑あんたはどうするのよ」

「おい、俺も一応中国代表候補生だぞ非公認だけどな、なんとかするよ　俺は一夏より強いし」

「なんだ　紫苑も代表候補生の人と戦うのか？」

「成り行きだよ」

「じゃそろそろ私行くわよ」

鈴がトレーを持ったので慌てて俺も持つ

「あ、俺も行くよ　てか待ってよ！」

鈴はスタスタ行くので俺は小走りで追いかける

「相変わらずのシスコンぶりだな紫苑は」

それを見ていた一夏は苦笑してつぶやく

「うう、入りずらいな」

自分の教室の前に居る

「自業自得でしょ」

それを言っちゃおしまいだよ鈴姉

「わ　わかってるけど」

「はいはいてか　私だって入りずらいなのよ」

まあ、二時間もサボってしまったからな

「ごめん鈴姉」

「もういいわよ　先に入るわよ」

鈴は先に入ってしまった

「俺も覚悟を決めて入るか」

俺は教室に入る
さっきまでざわついていた教室が静かになる
やっぱりか

俺は自分の席に座る

壊したのにもう治ってる凄いな

「その机の申請私が出しといたんだからね感謝しなさいよ」

「そうなのか　サンキュな鈴」

「はいはい　さて、授業の準備しなさいよ」

鈴は教科書をだす

「わかってるよ」

俺も続いて教科書をだす

「やけに静かね　じゃ授業始めるわよ～」

そこに担任が入ってくる

「あら、凰君帰ってきましたか」

俺に気づいた担任が話しかけた

「ええ、迷惑かけてすいません」

俺は立ち上がり頭を下げる

「いいのよ気にしないからそれよりクラス代表を決める試合は一週間後の月曜。第三アリーナで行いますから準備しといてくださいね」

「はい、わかりました　専用機さえくれば大丈夫です」

「せ、専用機!?　この時期に!?」

「それって政府からの支援がでるって事?」

「その説明は私がするわ」

鈴が席を立つ

「鈴姉いいのかそ説明しちゃって?」

「いいでしょどうせ一夏だってそうなんだし」

そうか、一夏も俺と同じ非公認で専用機持ちになるのか

「なら頼むよ　俺は少し寝る」

バシ

鈴がすかさず叩く

「いて！！」

「寝るな」

「はいはいわかったから説明頼むよ俺と同じ中国代表候補生さん」

「「「「ええ！！」」」」

あ、言ってしまった

「それも鈴が言うから　頼んだよ」

「はぁーはいはい　えーっと紫苑は特例だから中国側で専用機を出すのね確か私と同じ研究所からねそして、代表候補生なのは中国側が専用機持ちは全て代表または候補生にするとぶっ飛んだ事をしてるだけよ　まあ、紫苑の場合はアラスカ条約に引っかかるみたいだけどね　それでも一応候補生って事になってるのよ　以上！」

鈴は話終わって席に座る

「そう言う事なので　では授業を始めるわ」

そうして授業が始まった

「ふぁ～眠い」

授業が終わりみんな各自寮に戻る為に帰り支度をしている
その感も俺に視線を送っている

まあ、興味ないからいいけど

「そんな事より　授業理解できたの？」

「うん、大丈夫　鈴より頭の出来はいいから理解はできた後は動かすだけ」

「そうならいいわ　後」

バシ

「いて」

「一言余分よ」

「だからって殴るな！」

「あ、居てくれましたか凰君に凰さん良かったです」

そこに担任が登場する

「「なんですか？」」

お、珍しくハモった

「寮の部屋が決まりました」

そう言って俺と鈴に同じ番号の書いた紙とキーをよこす

ＩＳ学園は全寮制なので生徒は全て寮で生活する事になっている

これは将来有望なＩＳ操縦者たちを保護する目的らしい

「俺と鈴は同じ部屋か」

「ええ、だけど姉弟なのでいいでしょって感じで無理矢理変更しました」

どうせ政府がなにかしたんだろ・・・あれ？

「先生いいですか？」

「はいなんでしょう？」

「確か一組に一夏居ましたよね？　なんで男同士なのに同じ部屋じゃないんですか？」

「あ、それは私も気になるわ」

鈴も気にしてたのか

「それは、私もよくわかりませんでもすぐに一緒になれると思いますよ」

いや、ずーっと鈴と一緒がいいんだがな～

まあ、無理だろうな

「あ、後各部屋にシャワーあります。でも大浴場もありますだけど鳳君は使えません」
「わかってますよ　鈴以外の裸には興味ないです。あ、俺荷物ホテルなんだけど　確か鈴もだろ？」
「「「やっぱり禁断の愛！！」」」
いや、少し違う気がする俺が一方的に好きなだけだから禁断の愛にはならないと思う
「え、私は持ってきてるわよ」
バシ
鈴は俺を叩きながらいつも愛用しているボストンバックを見せるいつの間に！！
「あ、それなら―」
「私が運んどいてやったぞ。　ありがたく思えよ紫苑」
千冬さんが担任の後ろに現れる
「それはどーもそしてさっきは言いそびれましたが久しぶりですね織斑先生」
俺は一礼する
ちょうど一夏と離れて一年ちょっととってとこか

「ああ、久しぶりだな凰姉弟それにしても紫苑のシスコンぶりは変わらんなそうだろ？なあ、鈴音」

え、ここで私に振るんですかって目をしている

「ええ、まあそうですね」

しかも超ビビってるし

本当に鈴は千冬さん苦手だよないい人なのに

「さて、そろそろ部屋に戻れ。　夕飯は六時から七時、一年生用食堂を使えよ。ではな」

そして教室を去る

それを見送ってから俺たちも教室をあとにする

「えーっと、１０９８室だっけ？」

「どこ行くのここよ」

俺が部屋の番号が書いてある紙を見ながら歩いていたら過ぎてしまい鈴が呼び戻す

「おう、そこか。　通り過ぎてたぜ」

「しっかりしてよね～全く私がいないと部屋にも付けないわけ？」

鈴が呆れながら部屋の鍵を開けて部屋に入る

「そんな事ないよ」
俺も鈴続き部屋に入る
「で、あんたどっちのベッドで寝るの？」
「鈴と同じベッドー」
バシ
俺が言い終わる前に鈴に叩かれる
「あんた壁側ね」
「わ　わかった」
叩かれたところをさすりながら返答
鈴のやつ本気で殴りやがったな
「さて、夕飯前にシャワー浴びて来るね」
鈴はベッドにボストンバックを投げて着替えを出しながら言う
「わかったごゆっくりと」
俺もベッドに腰掛けながら返答する
それを聞きながら鈴シャワールームに入る
「やっと。　落ち着いたな」

ベッドに倒れる

「眠い　少し眠るかな」

まぶたを閉じて眠りに落ちる

「ほら、紫苑起きなさい」

「う？　姉ちゃん？」

「そうよ、夕飯いらない？」

「いる」

もそもそとベッドから起きる

「ほら、顔洗ってきなさい」

「は～い」

紫苑はとぼとぼと洗面所に入る

紫苑は寝起きのいい方なので苦労しないが逆の場合紫苑は鈴を起こすだけで疲れる事が多いのだ

「ふぁ～鈴姉行こか」

「うん」

2人で部屋を出て食堂に向かう

「ここが食堂か広いな～」俺が食堂について第一声だ

「鈴麻婆豆腐定食でいい？」

「いいわよ」

「了解」

鈴の文の定食を取りテーブルに座る

「一夏はまだみたいだね」

「そうみたいね」

ドンマイ鈴

一応鈴の事は応援する
どうせ姉弟で結婚する事は出来ないんだしなら俺の知ってる男なら恋の応援しょうと考えたのだ

それからＩＳの事を話ながら食事を終わらせて部屋に戻る

「じゃ俺シャワー浴びてくるよ」

「うん、その間に着替えておくわ」
俺は着替えを持ってシャワールームに入る

「一夏一体誰と一緒の部屋になったのかしら？」
鈴は呟きながら着替えを始める

それから五分程で紫苑が帰ってくる

「さて寝るわよ」

「うん」

鈴は俺がベッドについたのをみてから電気を消す
「おやすみ鈴」

「ええ、おやすみ紫苑」

数分後

ごそごそ

なんの音？

なにか足に当たった気がする

「し　紫苑！！」

すりすり

「なに？」

やっぱり紫苑だったか

「なにじゃないわよなんで入ってくるのよ！！」

「いいじゃん」

「よくないわよ　早く自分のベッドに戻りなさい！！」

「やだ！」

「ダメ！」

「今日だけだから～」

「ダメいいから戻りなさい！」

「やだ！」

紫苑は私の洋服の裾をぎゅーっと掴む

もうこうなったら無駄ね

「はぁー今日だけよ」

「え！　いいの！　やったー！！」

「騒がないの！」

「あ、ごめん」

「それじゃ改めておやすみ紫苑」

「うん　おやすみ姉ちゃん！！」

そして本当の眠りに入る

「ふぁ～もう朝なの？」

珍しく早く起きてしまった

その隣では幸せそうに眠る自分の片割れ紫苑が私の洋服の裾を掴んだまま寝ている

「全く紫苑わ」

そんな事を言いながらも優しい笑顔で紫苑の頭を撫でる

この顔は紫苑が寝てる時しか見せない顔だ知ってるのは千冬さん１人だけ

「離してくれないと顔洗いに行けないんだけどな」

仕方ないので手を使って無理矢理離す
そして顔を洗いに洗面所に行く

「ふぁ～、あ　あれ姉ちゃんがいない！！」

そのあとすぐに紫苑が起きる

「ね　姉ちゃん？」

「なに？」

鈴が歯を磨きながら洗面所を出てくる

「姉ちゃんいた！！」

こら、抱きつくな！

「あ～　朝っぱらから鬱陶しいな～私はどこも行かないわよ！」

「本当？」

「本当よ　だから離れなさいそして顔洗ってきなさい」

「は～い」

とてとてと洗面所に入る

「返事だけはいいんだから」

そう言いながらも私も洗面所に入る

「さて、今日も頑張りますか」

「頑張りなさいよ」

食堂に向かいながら鈴と会話する

「早く専用機来ないかな～早く動かしたい」

「試合前には届くって言ってたわよ」

「そうなんだ　じゃ基礎知識を忘れないように覚えて置かないとな」

そう話ながら食堂に入る

そこに一夏と昨日の篠ノ之さんがいただけてど少し様子が変だ

自分の分の食事を取り一夏達から一番近いテーブルに座る

「なあ…」

「・・・・・・・・」

「なあって、いつまでも怒ってるんだよ」

「…怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

一夏のやつなにしたんだ？

まあ、一夏ならやりかねんか

「ねえねえ、彼が噂の男子だって～」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱり彼も強いのかな？」

相変わらず一夏は人気ものだな　いや、千冬さんか　そう思いながら朝ご飯を食べている

「確か姉弟揃ってＩＳ操縦者って言ったら、凰君もそんじゃない？」

俺の名前が出たので苦虫潰した顔をしてると隣の鈴が

「まあ、あんたも他の意味で有名だからね」

昨日鉄で出来ている机を手刀で真っ二つにしたしな

それにテレビであまり流れなかったのに空手全国大会優勝者でもある事がばれてしまっているのだ

「うるさい、昨日のはやりすぎたと思ってるよ」

「しっかりやりすぎよこのバカ」

「うっ　ごめんなさい」

うっやっぱりやりすぎだよね　だけどあれはあのアメリカ代表候補生が悪いんだよ

俺がうなだれてると鈴が頭を撫でていた

「反省してるならいいのよ」

やっぱりいいお姉ちゃんだ！

「ありがとう　姉ちゃん」

「だから箒―」

「な、名前で呼ぶなっ」

「……篠ノ之さん」

「……」

なんなんだ本当になにをしたんだ？　一夏のやつ？

「さて、そろそろ行くかな鈴姉行こ」

「え、あ、うん行こうか」

鈴のやつ相当気になるみたいだな

「鈴気になるなら行ってくれば？」

「ば　バカ気になってなんかないわよ！」

何故にツンデレ？

てか正直になったら？

「なら、行こ　今日は少し早く教室に入りたいから」

「じゃ行きましょう」

俺たちはトレーを返して教室に向かう

「おはよう！」

鈴は朝の挨拶して教室に入る

「……」

バシ

「いて」

「朝の挨拶ぐらいしなさい」

「はいはい、おはよう」

叩くなよ
俺は心の中でぼやきながら挨拶して座る机に伏せる

「ねぇ凰さん」

「なに？」

「凰君ってどんな人なの？」

誰か知らないけど俺の隣できくか普通？

「簡単に言うとシスコンね」

まあ、鈴好きだよ

「あ～やっぱり見ててだと思ったんだよね。性格は？」

俺教室ではそんな素振り見せたことないぞ？

「性格　優しいわよ　まあ、短気だけど　それに器用よ　何でも出来るし。あ、後女の子に興味ないのよだからって男子に興味がある訳じゃないないのよ。姉弟と織斑家の人しか興味ないみたいなのよね～私にも全くわからないわ」

鈴短気は鈴もそいでしょ？
てか、俺鈴にしか興味ないし

「そうなんだ～意外だね～」

悪かったな

「ねぇ、空手全国大会優勝者って本当なの？」

「本当よ　あの千冬さんとも互角に戦える強さよ。ねぇ、紫苑？」

無視するかなでも鈴が振ってくれたし答えるか

「そうだよ。後、剣道も柔道もどの武道でも互角だよ」

「そうなんだ～凄いんだね凰君」

紛らわしいな

「なあ、俺の事紫苑って呼んでくれない？　凰って名前が二人居るしもしくは鈴姉を鈴と呼んで」

「じゃ紫苑君でいい？」

「ああ、それでいいよ」

俺は再び机に伏せる

「珍しいね　あんたが名前を呼ばせるなんて」

「ただ紛らわしいだけだよ　別に意味はないよ」

「そうなの？　まあ、いいわそろそろ授業始まるわよ。しゃきっとしなさい」

「はいはい。　わかってるよ」

俺は起き上がり教科書を出す

そこに

「はーい授業を始めますよ～」

そして授業が始まる

クラスメートは全員女子1人をのぞく（後書き）

なんか凄く楽しくかけました

このまま書き続けたいと思います

あ、後ＩＳもう1人のイレギュラーもよろしくね

では次回でお会いしましょう

クラス代表決定戦！（前書き）

ついに、戦闘シーンです
なかなかいい出来映えだと思います
そして紫苑の幼なじみを作ってみました

では本編どうぞ！

クラス代表決定戦！

そして翌週、月曜俺はエイミー　一夏はセシリアとの対決の日

「―なあ、箒」

「なんだ、一夏」

一夏と篠ノ之さんは同室になったみたいだ　一時は関係が崩壊しかけたが今は戻ってるみたいだ　よかったな一夏

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろ」

最終的に一夏は箒　俺は鈴にＩＳの事を教わる事になった
まあ、何故そうなったのかは　簡単な話だ　同じクラス、同じ部屋の者同士が教えた方が効率いいだろうと話になったのだ　鈴は不機嫌だったけど
鈴、俺に当たるのはお門違いだぞ

「鈴、最終的に俺のＩＳ来なかったな」

「そうね、あいつらなにやってんだか」

まだ一夏はギャギャ騒いでいる

「おい、一夏うるさいぞ　こうなったら腹をくくれば男だろ」

「うっ、そんだけど」

「そうだ一夏、今更ギャギャ言うのは男らしくないぞ」

いや、篠ノ之さんもしっかり教えてやれば良かったのに

「お前なら　大丈夫だろなんたってあの千冬さんの弟なんだからな」

「そ　そうかもう　土壇場だけどがんばるぜ」

「お、織斑くん　ふ、　凰くん」

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す～～は～～す～～は～～」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

この先生は本当に先生なのか？

てか、ノリのいい先生だな　本気で止めたよ

どんどん赤くなってるぞ　冗談が通じないのか？

「……」

「……ぶはあっ！　ま、まだですかあ？」

「……」

「目上の人間には敬意を払え馬鹿者共」

パァンッ！　パァンッ！

と俺と一夏の頭に入る

え、何故俺も？

「千冬姉」

パァンッ！

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

すごいな身内に死ね宣告とはまあ、いつもの事だろ　学習しない一夏がわるい

「織斑先生、何故俺まで叩かれたんですか？」

「織斑の保護者はお前だろ？」

あなたですよ！！

「何故俺がこのバカの保護者なんですか俺は鈴の保護者です」

「誰がバカだ！！」

「なに言ってるのよ私があんたの保護者でしょが！！」

バシ

何故すぐに叩くんだよ鈴姉は

「それで山田先生あれは来たのですか」

「そ、そ、それですねっ！　来ました！　織斑くんと凰くんの専用ＩＳ！」

やっときたか、本当中国はやること遅いんだから

「織斑、すぐに準備しろ。　ついでに凰弟も。アリーナを使用出来る時間は限られているからな。ぶっつけでものにしろよ　さもなくば負けるぞ」

初期化と最適化は土壇場か一夏頑張れよ

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろよ。　一夏」

「え？　え？　なん……」

「「「「「早く」」」」」

山田先生、千冬さん、篠ノ之さん、鈴、そして俺の声が重なった。

ごごんっと鈍い音が聞こえて俺はそちらを向く

そこには、『白と蒼』が、いた

「織斑くんのＩＳは『百式』　凰くんのが『青龍』です」

青龍、いい名だ

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッシングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

一夏は純白のＩＳひ触れた

「あれ……？」

「どうした一夏？」

「いや、なんでもない」

一夏のやつどうしたんだ？　まあ、いいか

「背中を預ける感じに、ああそうだ。　座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

一夏が座るようにすると装甲が開き一夏と一体になる

「あ」

一夏と百式が完全に一体になった途端に発言したまあ気にせず行くかな俺も自分の事でてがいっぱいだ

「ハイパーセンサーさ問題ないな。　一夏、気分は悪くないか？」

千冬さん心配してるんだな

「大丈夫、千冬姉。いけるよ」

「そうか」

ほっとしたような声をだす千冬さん

「箒、鈴、紫苑」

「な、なんだ？」

「な、なによ？」

「ふ、なんだよ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

「頑張りなさいよ」

「少しは観客を盛り上げといてくれよ」

そして一夏はピットに進む　そして飛び立った

「さて、今度は俺の番だな」

俺は青龍に触れる

「ふ、」

「どうしだの紫苑？」

俺の含み笑いを聞いて首を傾げる

「なんでもない、青龍も暴れたいと言ってるだけだよ」

「そう、なら早く装着しなさいフォーマットとフィッシングには時間がかかるのよ」

「ああ、知ってる」

これで鈴と同じステージに立てるな

俺は千冬さんが一夏に言ったように座るように青龍に体を預ける

「どうだ紫苑？」

「ああ、最高の気分だよこれで千冬さんと鈴姉と同じステージに立てたんだからな」

「そうか。それはよかったな」

「あんたなんてまだまだだよ」

でも、俺はこれだけじゃ終わらないよ　千冬さんを越える！

「さて、鈴音フォーマットとフィッシングを手伝ってやれ」

「そのつもりですよ」

そういい鈴は青龍にコードを挿す

「形状は私の甲龍と似てるわね」

「双子だからじゃねぇーの」

「そうかもね　ただ違うのは私の甲龍より装備が多いこととアンロック・ユニットの形が羽の形をしてるだけね」

「確か衝撃砲使えるんだろ？」

「一応ね　まあ、甲龍と青龍の違いはあんたに合わせて両手が武器になってる事みたいね　はい、フォーマット終了っと後はフィッシングだからＩＳに任せなさい」鈴は青龍からコードを抜き機材をしまうそれを帰って来るのを見てから話す

「わかったところど一夏はどうなってるんだ？」

「一夏は中距離射撃型に近距離格闘型装備で戦ってるわよ」

「がんばりますな～」

そこにフィッシング終了のウィンドが出たので確認ボタンを押す

そうすると膨大なデータが整理されていく

「フィッシング終わったみたいね、本当の龍みたいよ」

鈴に言われて俺は今は自分の手足になっている青龍を見る

「龍の鱗？」
そう、両手両足は龍の鱗みたいに模様がある
その後ろの羽みたいなスラスターは少し大きくなりなんかまだ孵化してやっと飛ぶことの出来る龍の羽だ

「一夏もフォーマットとフィッシング終了したみたいよ」

俺は青龍を待機状態にして鈴に近づく
青龍の待機状態は鈴と同じ腕輪だが俺は左手に付いている

「本当だ……？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

なんだろうあの百式の姿白騎士に似ているそして一夏の持っている近接ブレードは千冬さんの雪片に似ている
やっぱり姉弟だからか？

「俺は最高の姉さんを持ったよ」

「今更だな一夏わ」

一夏の言葉はオープンチャンネルでこちらにも届いている。その一夏の言葉をため息混じりで鈴と話す

「そうね」

鈴もため息混じりで答える

1人だけずーっと黙っているのは篠ノ之さんだけだ

「俺も、俺の家族を守る」

俺もだよ一夏。俺も大好き鈴そして鈴が大事とする家族、友を守る
これは別れるときに約束したものだったな覚えていたのか一夏

「……は？　あなた、何を言って―」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

元日本代表　織斑　千冬　俺の憧れの千冬さん今俺はＩＳ操縦者としてのスタートラインをふんだんだ一夏お前もな勝てよ一夏、絶対に千冬さんの弟ならばな！

「というか、逆に笑われるだろ」
だなあの格好いい千冬さんが格好がないなんてな

「だからさっきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

オルコットさんがあのビットで一夏を撃つ
だが

ギンッ――！

一夏はビットを切り裂きそのままオルコットさんに突撃する

「おおおっ！」

一夏の声と共にエネルギーの刃が光を増していくあの光は零落白夜〈れいりゃくびゃくや〉だ

「やっぱり」

「なにが？」

「一夏が振るっている近接ブレードは雪片だそしてあれはワンオフアビリティー零落白夜だ」

「待って、まだファースト・シフトよワンオフアビリティーはでないはずよ！」

「それは俺にもわからんよ」
束博士が一枚噛んでるのか？
後で千冬さんに聞いてみよ

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

「さて、行きますか」

「ちょっと待って！なんで一夏負けたのよ」

「それは一夏が帰ってきてから千冬さんが教えてくれるでしょ」

そこに一夏は帰っていた
なんで？って首を傾げてぼやいているそこに千冬さんが来たので小走りでそこに行く後ろから鈴が追いかける

「俺どうしても負けたんだ？」

「千冬さん、零落白夜でしょ？　それに一夏が振るっている近接ブレードは雪片何故です？　あれはあなたの武器でしょ？」

「紫苑の言う通りだ　だが説明は紫苑が帰ってきてからにする　紫苑ＩＳを起動しろもうフォーマットもフィッシングも出来てるだろ」

「ええ、出来てますよ　来い、青龍！」

俺は青龍を起動する

オルコットさんより薄い蒼色の機体が現れる

「行ってこい！　もう待ってるぞ」

―戦闘待機状態のＩＳ感知。操縦者エイミー・エドワード。ＩＳネーム『シルバーｍ？』戦闘タイプ近距離射撃型。特殊装備有り――。

「近距離射撃型とは俺と相性悪いな～だが負けないここがスタートラインなんだからな！　じゃ行ってくるよ鈴、千冬さん、篠ノ之さん、山田先生、そして約束を守ってくるよ一夏」

「紫苑、負けんじゃないわよ」

「ああ、行ってこい」

「勝ってこい凰弟！」

「いってらっしゃい紫苑くん」

「ああ、俺とお前でみんなを守るって約束か、俺負けたけど紫苑なら勝てるよ」

俺はみんなの言葉を首肯して飛び立つ

「やっと来たわね、レディーを待たせるのはよくないわよ」

「悪かったな」

「さて、さっきのイギリス代表候補生に習ってあなたにチャンスをあげるわ」

「いらんよ」

「なら、終わりよ」

ギューッ！

「チッ」

遠距離射撃武器があるとは思わなかったぜ

俺は右側によける

「へーＩＳを動かしたのが二回目なんて思えない交わし方だね」

「それはどーも　鈴姉の動きを見て真似てるだけだよ」

「真似てる？　さすがに双子ね　だけど真似てるだけじゃＩＳの戦

いは勝てないわよ！」

エイミーは瞬間的に近づく

イグニッションブーストか！

「これで本当に終わりよ！」

エイミーは近距離でのショットガンを撃つしかも両手で

バンバン

俺はイグニッションブーストだとわかった瞬間扇子を両手に開いた状態で展開して防ぐ

「それがあなたの装備？」

「ああ、中国の伝統の武器バトルファン名前は想龍〈そうりゅう〉だよ」

「そう、でもそんな短いまわいでこの私に勝てると思うの？」

「勝つよ、お前には負けない、俺はやっと大空を飛ぶ事を覚えてたのかだからな」

俺は想龍をを閉じる

「そう、でも私も負けられないのよ！」

エイミーは近接ブレードを展開して切りかかる

俺はそれを右手の想龍で受け止める

「風の舞　霧風」

左手の想龍を開き斬りつける

「ぐっ！」

エイミーは攻撃を少し食らっただけだ

チッ交わされたか

「やるわね」

「ふ、おまえもな、俺の舞を交わすなんてな」

風の舞　俺の得意な武術扇子の舞だ

「そう？　そろそろ終わりにしょうか」

エイミーは近接ブレードを二本展開した

「そうだな、俺も鈴姉甘えた気なってきたしな」

俺は想龍にクローズして鈴と同じ青竜刀を二本展開する

「そんなものあるんだ」

「ああ、青竜刀　蒼龍牙月〈そうりゅうがけつ〉だ」

「じゃ行くわよ！」

ガキッン！

俺は蒼龍牙月を連結させるエイミーは突撃をしてくそれを計算して次に次のルートに投げる

「嘘！？　だけど！」

それを交わす

応用力と判断能力が高い侮っては行けないな

「これで！　落ちろおおお！」

「ふ、なんだそれしかないのかなら俺の勝ちだな」

俺は蒼龍牙月に戻れと念じつつアンロック・ユニットの翼をを開く。中心の球体を光らせた瞬間エイミーは吹っ飛ぶ

「きゃ！　今のはなに！？」

「そんな事言ってる場合じゃないぞ」

後ろから蒼龍牙月が来る

「あぶな　きゃ！」

エイミーが蒼龍牙月に集中してたのを狙って衝撃砲鈴と同じ龍砲を連射するそれがすべて当たる

『試合終了。勝者――凰紫苑』

「ただいまみんな！」

「ただいまじゃないわよ！　なんですべて手の内を見せるわけ！？」

ピットに戻るなり鈴姉に怒鳴られた

「出さなかったら勝てなかった」

「嘘をつくな！」

ぐっ！　恐るべし俺の片割れ！

「う　嘘じゃねぇーよ」

「鈴音の言うとうりだろ紫苑」

千冬さんまで

確かに想龍だけで勝てたよ

でも、まだ一つ残してある

「ううん、　ごめんなさい」

「本当にーあんたと私のＩＳはほとんど似た装備なの！　あんた、わたしの装備全部使ったでしょが！」

蒼龍牙月と龍砲あ、確かに

「鈴姉～許して～」

「全くあんたは、すぐに調子に乗るんだから」

ご最もですごめんなさい

「まあまあ、そのぐらいにしてね」

山田先生が救ってくれた

「そうだ、一夏これを」

どさっ

あれ入学前に読みＩＳ起動に置けるルールブックだっけ

てか、なんで？

「一夏、もしかして…それ電話帳と間違えて捨てたのか……？」

まさかな

「お、　なんでわかったんだ？」

バシ

「なにしやがる！」

「馬鹿がいたから殴った」

「お前は、ヤクザか」

「一夏、もう一発欲しいのか？　そうか。欲しいのか仕方ない本気でやってあげるよ」

俺が指をこきこき鳴らしながら一夏に近づく

バシ

俺の頭にチョップが入る

「いて！」

「バカはあんたよ！　あんたが本気で殴ったら死ぬでしょうが！」

確かに俺が本気で殴ったら死んじゃいます

それが一夏でも

「うるさいぞ！」

ピシッ

俺と鈴は凍りつく千冬さんを怒らせると怖いからな

「何にしても今日はこれで終わりだ。帰って休め」

「一夏、帰るぞ」

「お　おう」

「紫苑、私たちも帰るわよ」

俺たちピットを出て一夏たちは右側、俺たちは左側から寮に帰る

「鈴姉、先にシャワー浴びさせて貰ったよ」

俺は部屋に戻ってすぐにシャワー室に　飛び込んだ

「いいわよ、部屋の中を汗臭くなるよりはいいわよ」

汗臭くて悪かったな

「じゃ私シャワー浴びてくるわ」

今度は入れ違いに鈴がシャワー室に入る

俺はベッドに腰掛ける

「想龍はまだなにかありそうなんだよね」

エイミーとの試合で一番最初に使ったバトル扇子の想龍、あれはなんか他に使い方があるとずーっと考えていたのだ

「まあ　あれ、飛ばしてみるか」

青龍刀と同じように飛ばしても帰って来るかもしれないし

「なに、珍しいじゃないあんたが難しい顔してるの」

俺が考え事をしてると鈴が戻ってきた

「そうか？　まあ、解決したからいい」

「そう」

鈴は隣のベッドに座りコーラを飲んでいる

「ねぇ、鈴姉」

「なに？」

「甘えていいかな？」

「仕方ないわね　おいで」

「わーい！」

俺は鈴に膝枕をして貰う

「本当、子供みたいね」

「いいでじゃん」

「いいけどね」

撫で撫でしてくれる

鈴の手気持ちい

「僕、姉ちゃんの事大好き！」

「ありがとう　私も紫苑が好きよ」
嘘だ、鈴が好きなのは一夏だ
「……。」
「どうしたの？」
「……姉ちゃん嘘つき」
「どうしたのよ急に！？」
急にいつも言わない事を言ったので鈴は驚いてる
「……姉ちゃんが好きなのは僕じゃない……一夏だもん」
「……。」
「……そうなんでしょ？知ってるよずーっと前からね」
鈴が急に可愛くなった　前に読んだ雑誌で女の子は恋をすると可愛くなると書いてあったのを思い出した
そして、その恋は僕に当てたものじゃない事も知っていた
「うん、そうだよ。私は一夏が好き。誰にも渡したくないぐらいにでも紫苑も好きよ恋愛感情じゃないけど家族としてね」
「……。」

「紫苑聞いてる？」

「うん、聞いてる」

「そう、ならよかった」

「僕は応援するよ！」

そう決めたんだ！　なに決心が緩んでるんだよしっかりしろ！　凰紫苑！

「ありがとう」

「その代わり」

「その代わり？　なに？」

「一夏を絶対ものにしてよ！　あの唐変木はそう簡単に行かないけど　それで他の男になびいたら僕鈴姉を恨むよ」

そうだ、俺は身を引いたんだ鈴姉には頑張って貰わないと僕が身を引いた意味がない

まあ、実際姉弟だから無理だけど

「わかってるわよ！　頑張るから見守っててよね」

「うん、時々甘えさせてね」

「はいはい」

なんか今日は一段と鈴の手が気持ちよく感じる　なんでだろう？
そのまま意識が遠くなり眠りに入った

「珍しいこともあるのね　紫苑が私に感情をぶつけてくるのわ」

紫苑は甘えて来るだけで自分の感情を表に出すことは滅多にない増してや私に感情をぶつけてくるなんて数える程しかない

「一夏の事でそんなに紫苑に心配かけたのかな？　本当に頑張らないと紫苑に恨まれちゃうわね」

膝で眠る紫苑を見ながら呟く

チュ

「これは、お礼よ」

寝ている紫苑のほっぺにキスをしてあげる

「「え！！　紫苑が目覚めない！！」」

場所は会議室居るのは等に一夏、千冬さんさんだ

「うん、昨日珍しく私に感情をぶつけて来たの　そのあとすぐに紫苑は寝ちゃったんだけど、今日起こしても起きないのよ」

前はそんな事無かったのになんで？　訳が分からないわ

「もう少し様子を見よう　ただ疲れて起きないだけかもしれないしな　では、そろそろ授業が始まるから戻るぞ」

千冬さんが先頭に会議室をあとにする

「ここは？」

俺は確か自分の部屋で鈴に膝枕して貰ってたはずだぞ？　ここどこなんだ？

大空と草原が広がるなにもない場所だ
だが知ってるような感じがする
中国にもこんなところがあった俺の一番好きな場所

「貴様が妾のパートナーか？　なんか腑抜けじゃの」

「誰だ！！」
いつの間に！
どこから出てきた
だが近くに居るようで近くにいない感じがする

「誰だとはなんじゃ　妾は青龍貴様のＩＳじゃよ」

「青龍！？」

「そうじゃ　でここは妾の空間じゃ」
「俺をなんのために連れてきた？」
「ただの挨拶じゃよ」
「ならばそろそろ戻してくれないか？」
「そうじゃの　ではまたいつか」
意識か飛んで目を覚ます
「ここは？」
夢の中でも言ったような事をいって起きる
「や　やっと起きたあんた1日寝てたのよ」
「そうか。ごめん　それにしても変な夢だったな」
だけどどんな感じだったか覚えていないただなんとなく変なん感じがした
「変なん夢って？」
「いや、それが思い出せないんだよ、ただなんとなく」
「ふ～ん、ご飯は？」
「姉ちゃんの酢豚が食べたい」

「今、材料ないからまたでいい？」

「うん！」

「じゃそれ以外になにが食べたい食堂に合ったら持ってきてあげるから」

「うどん」

「うどんならあるかもじゃ取ってくるね」

鈴は部屋を出て行った

「あ、ラストのうどん発見」

うどんのお椀を掴んだがその腕はもう一つ合った

「エイミー！　このうどん私に譲りなさい」

「あなたこそ、私に譲りなさい」

「これは紫苑が食べるのよだから譲りなさい！」

「そんな事知らないわ　これは私のよ」

「負け犬の分際で！」

「あなた！紫苑さんは愚かあなたまでこの私を侮辱するの！」

「だって本当の話でしょ」

「ぬぐぐぐぐ！　シルバー！」

「へーやろっての甲龍！」

バシバシ

「いた」

「いた」

2人の頭にチョップが入る

「こんな所でＩＳを起動するなよな～鈴姉にエイミー。　ふぁ～眠い」

俺は中国の民族衣装を羽織りながらうどんをとって一夏のいるテーブルに座る

「ふぁ～いただきます」

俺は合掌してうどんを食べる

「紫苑起きたのか」

「ああ、心配かけたな一夏に篠ノ之さん」

「気にするな心配などしてないそれに私の事は箒と呼べ名字で呼ばれるのは嫌いだ」

一緒きょとんとしたが

「ああ、わかったよ箒さん」

「……／／／」

？なんで紅くなるんだ？

「てか、なんで起きなかったんだ？」

「わからない。夢をみていた気がする　それが覚めたら、起きたそれだけだ」

俺はスープを飲み干して合掌する

「なんにしても起きてよかったわよ」

鈴が後ろから抱きついてきた

「鈴姉珍しいね」

そんなに心配かけちゃったのか

約束破っちゃったな

「心配はかけないと約束したのに全くあんたは」

俺が、夏休み一夏と一緒に遊んでた時一夏と俺は誘拐された　ちょうど第二回モンド・グロッソの決勝戦だったな千冬さんが決勝戦を

放り出して助けにきてくれた

「ごめん　約束破っちゃったな」

俺は鈴の頭を撫でる

「仕方ないわね　許してあげる」

鈴は離れて隣に座る

「ありがとう」

「お前ら本当なかいいな」

みていた一夏がお茶を啜りながら言う

ちょっと恥ずかしいぞ鈴　俺は鈴を見ると鈴も紅くなっていた

「一夏だって似たようなものだろう」

「お前らには負けるよ　さて、そろそろ帰ろうぜ箒」

「ああ、そうだな」

俺は一夏、箒さんを見送っる

「鈴姉、俺たちも帰ろうぜ」

「そうね、長居は無用ね」

「？」

なんかキャラがまあ、たまにするからいいか
俺たちは部屋に戻った

「シャワーも浴びたし、あとは寝るだけか」

俺は鈴買ってもらったパジャマを着ている
お揃いなんだ～いいでしょ～

「あんだけ寝てたのに、寝れるの？」

鈴は髪をとかしながら聞く

「俺は寝るのが好きなんだよ」

「暇さえあれば寝てたものね」

授業はほぼ寝ています　そして鈴に起こされる

「寝ることはいいことなんだよ　特に発育の悪い鈴姉にはね」

ピシ
あ、いっちゃった

「し～お～ん～、いってはならないことを言ったわね～」

鈴姉が一番気にしてること発育関係だ特に胸の事を言うと切れるのだ

「ごめん、ついつるっとね」

「許さないわよ……。」

鈴は甲龍の装甲を右手だけ展開した

そのまま殴りかかってくる

「あぶな！」

俺は左足に体重をかけて右足を左足の後ろにして右肩を後ろに向かせてよける

その後ろでドアが吹っ飛ぶ

「避けるな！」

「その攻撃食らったら俺死ぬでしょ？」

俺はにこって微笑んで答える

「大丈夫、死なない程度に殺すから」

矛盾してないか？

「鈴姉、自分が言ってる言葉わかってるものすごく矛盾してるよ。

その言い方は」

「やめた、あんたと喧嘩しても勝てないし」

鈴は部分展開を解除する

「賢明な判断だよ鈴姉」

「さて、寝る」

え、ドアの申請は？

て、布団にもそもそ入ったし！

「ドアの申請行ってくる」

俺は申請に行って帰ってきた頃には鈴は寝ていた

「じーーー」

「すーすー」

もそもそ

俺はあの日以来ベッドに潜り込んない

「今日特別。鈴姉おやすみ」

鈴のベッドに潜り込んで一緒に眠った

翌日、朝のＳＨＲ。

「ふぁ～眠い」

「じゃ、昨日の試合の結果で1年2組の代表は凰紫苑くんに決定です　異論はないですよね？」

「「「「「ないで～～す」」」」」

2組に元気な女子高生の声が響く

「めんどくさい」

俺は机に伏せて答える

「めんどくさいじゃないの、この私を倒したのだから誇りに持ちなさいよ」

一番後ろにいたエイミーがいつの間にか俺の隣にいる

「くだらない挑発に乗るからよ」

鈴は隣で頬付きして言う

「鈴、お前だって爆発寸前だった　くせに」

ジト目で見る

「何の事かしら？」

「はいはい、それではＳＨＲを終わりにします。次の授業はグランドに集合してくださいね。あ、ＩＳスーツに着替えて来てください

ね」

俺は先生と一緒にクラスを出て第三アリーナの更衣室に向かう

「あ、鳳くん発見！」

「なに！　みんな囲め！」

ダダダダって俺を囲む

「ごめん、通してくれない？」

「えー、せっかく鳳くん捕まえたのに～」

「お昼でいいでしょ？」

「お昼ですか？」

「うん、俺第三アリーナまで行かなきゃならないから、じゃ！」

俺は女子の間をぬって抜け出しそのままアリーナまでダッシュした

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦をしてもらうわ。　鳳姉弟、エドワードさん。試しに飛んでみてください」

4月の下旬、桜の花びらが舞いほとんど木からなくなった頃　俺は欠伸をかみしめながら話を聞いていた

「2人とも早いな、さすが代表候補生だな～」

「あんたも早く展開しなさいよ」

「そうよ、早くしてください」

「はいはい」

2人に急かされながら頭の中で青龍の展開をイメージした
光の粒子が俺の全身をつつみＩＳ本体として形成される

「展開出来たわね、じゃ飛んでみて」

言われて、2人の行動は早かった。　俺も2人を追いかけるが追いつかない
確か急上昇と急降下は
『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』だっけ？

「なにやってるのスペック上の出力だと甲龍やシルバーより上よ」

鈴がオープンチャンネルで言われる

「知ってるよ、角錐のイメージが掴めないだけだよ」

「イメージはイメージよ自分が一番わかりやすい方法を探すのがいいのよ」

今度はエイミーがオープンチャンネルで言われる
あの試合以後、なにかと俺に絡んでくるんだよな、なんなんだよ
最初にあったときはあの態度だったのに　まあ、いいか関係ないし

紫苑も意外と唐変木の鈍ちんです
自分のことは本当にダメなのです

「いつまでそこにいるの～！　早く戻ってきなさ～い　あ、そうだ、
急降下と完全停止を見せてもらえる？　目標は地表から１０センチ
ぐらいね」

「了解しました。では２人とも、お先にね」

俺と鈴が隣に揃ったのをみて地上に向かう

「へーやるわね、　じゃ次行くわね」

といって、エイミーが着地したのをみて鈴は地上に向かう

「やっぱりうまいな～さて、行くか」

角錐をイメージしながら地上に向かい
そして地上近くで相殺

ギュンッ――――――

「紫苑、やるわね」

「紫苑くん、やるね」

完全停止は出来ただけど目標の１０センチはクリアー出来なかった
２０センチ弱だった

「鈴姉ー誉めて、誉めて～」

「それは、後ね」

「……。」

紫苑くんは噂通りのシスコンだったのね、しかも他の人は興味ない
って言う事も

「じゃ、次は武装を展開してみてください　はい、紫苑さん」

「あ、はい」

俺は想龍の形を想像して両手に展開する

「まあまあ、の早さだね、じゃ次は鈴音さん」

「はい」

鈴が両手を出して握ると両手に青竜刀が握られている

「さすが代表候補生だね　じゃ次はエドワードさん」

「……。」

ぶつぶつ

「エドワードさん？」

「お前なにやってんだ？」

俺はぶつぶつ言っているエイミーの隣に行き話かける

「ひゃん！」

「エイミー？　どうした？」

なんだ？　らしくないな

「急に話かけないでよ！」

「わるい、だが先生が呼んでたし」

「そう、ありがとう　先生なんですか？」

「見とれてるのは、いいですけど、授業は授業に集中しましょうね
武装を展開してください」

「み、見とれてなんかないです！」

話ながらでも、近接ブレードを展開した

凄いな

「2人ともさすが代表候補生ですね。では、時間なので、授業は終

わりにします」

「はぁー、やっとついた」
夜。ＩＳ学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いな大きいバックを２つ持った少女が立っていた。

「確か、受付はっと」

上着のポケットから１枚の紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれをきれいする
「えーと、本校舎１階総合受付……って、どこ？　まあ、歩いていれば見つかるでしょ」

行動力のある少女は中国人と韓国人のハーフだった

「あ、あった」

「ええと、それじゃあ手続きは以上です。　ＩＳ学園へようこそ、李　名鈴さん（リー　メイリン）

「ねえ、凰　紫苑と鈴音は何組ですか？」

「ああ、噂の子とそのお姉さんね　２組よ　李さんと同じね」

「へーそれは良かった」

笑顔でその場を去った名鈴だった

「というわけでっ！　織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう～！」

ぱん、ぱんぱーん。　クラッカーが乱射されている。

それを俺は鈴と遠くで眺めている

「盛り上がってるわね」

「そうだな、こっちはやらなくて良かったよ」

俺は肉まんをかじりながら答える

机には5この肉まんが置いてある

「やって欲しかったんじゃないの～」

鈴はニヤニヤしながら肘で脇をつつく

「あるわけねえーだろ、めんどくさい」

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」

「なんか、来たな」

「そうね、なんか来たわね」

「お待たせー」

そこにエイミーが来る

「いや、待ってないし」

俺は最後の肉まんを食べ終えてから返す

「おっと、忘れちゃいけない　鳳君もいたね」

俺は振り向かれて自分の名前を振られたので苦虫つぶした顔をする

「忘れてくれたらどんなにありがたかったか」

「ほら、行ってきなさいよ」

鈴に背中を押されたので仕方なく一夏の元に行く

「あ、私は2年の黛薫子。　よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

受け取って、すぐにポケットにしまう　隣の一夏は名刺を読んでいる

「ではではずばり織斑君、凰君！　クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ボイスレコーダーを向けて来る

なんか子供みたいだな

「えーと……」

一夏が先に言うのか

「まあ、なんというか、がんばります」

まあ、一夏らしいな

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～。　例えば、俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

一夏になにかを期待しない方がいいよ

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

「……。」

「じゃあまあ、適当にねつ造しとくから……はい、さっきから黙ってる凰君も！」

今度は俺にボイスレコーダーを向けてきた

「……。」

「……凰君？」

バシ

「いた！　誰だよ気持ちよく寝てたのに」

「だと、思った」

「鈴姉、ものすごく眠いのだが」

まぶたが重い

「しっかり、感想言いなさい」

「はーい、えーと。……鈴姉と織斑先生を越えるようにがんばりたいです」

「おーいいね、鈴ちゃんそして、セシリアちゃん、エイミーちゃんもコメントちょうだい」

鈴たちに話が移ったな

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

結局するのか

「こほん。ではます、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかといと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう。　じゃ次はエイミーちゃんどうぞ」

セシリアさんは、なっ、な、ななっ……！？」て紅くなってる　図星だったのか

「じゃ次は鈴ちゃんね　弟がＩＳを動かした時の心境は」

俺もしりたい

「うー、そうねー、とにかくびっくりしたって感想かな」

「そうだよねー、じゃ五人とも並んで写真撮るから」

「「「えっ？」」」

俺と一夏以外なんか嬉しいそうな声を上げた

「注目の専用機持ちだからねー。」

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「私も――」

セシリアさんとエイミーが走り去る前に黛先輩が捕まえる

「時間がかかるからダメ、さっさと並ぶ」

俺は一夏の隣俺の隣に鈴とエイミー、一夏の隣にセシリアさん

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「え？　えっと……２？」

「７４・３７５だよ一夏」

「はい、凰君正解ー！」

なんだそりゃ。　なぜ２じゃないんだよ

パシャとデジカメのシャッターが切られる

「おー」

「なんで全員入ってるんだ？」

凄いな、その行動力は箒さんも入ってるしちゃっかり一夏の隣に

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー！」

丸め込まれたセシリアさんだった

それから『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は１０時過ぎまで続いた。　俺たち三人は飛び入りゲストとして入れられた

「紫苑、今日は楽しかった」

鈴がニコニコしながら聞いてきた

「いや、眠くてそれどころではなかったよ」

「いつでも、どこでも寝られるのはいい事ね」

鈴は布団に潜り込む

「じゃ、おやすみ鈴姉」

「ええ、おやすみ紫苑」

その日も鈴の布団に潜り込んだ

クラス代表決定戦！（後書き）

どうでしたか
少し原作の引用がありましたがー、これからもすると思いますので、多めにみてください！

では次回にお会いしましょう

転校生は幼なじみ（前書き）

高校生のシスコンはキモイと感じました、だけどこのまま行くつもりです
あと転校生は紫苑の元カノ設定にしましたシスコンの事を少しでも和らげるために

では、本文どうぞ

転校生は幼なじみ

「凰さん、紫苑くん、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

「……すーすー」

「また、寝てるし、今の時期に転校生ねー」

プニプニ

私は紫苑のほっぺをつつく

「紫苑くんの寝顔可愛い」

プニプニ

「あ、私も」

プニプニ

皆してほっぺをつつき、始めた

「あ、そうそう、なんだか、韓国代表候補生みたいよ」

プニプニ

「そうなだ、このクラスに転校してくるの？」

プニプニ

「そうみたい」

プニプニ

プニプニ

プニプニ

「そろそろ、やめくれない？」

プニプニ

「なんだ、起きたの」

プニプニ

やめてほっぺをつつくのは

男なのに、ほっぺが柔らかくて女の子に間違えられることが多いのだ

「起きるだろ、ほっぺをつつきながら近くで話させたら」

元々、深く寝てないからな

「はーい、ＳＨＲ始めるよ～」

皆、はーいと言って席に座る

プニプニ

「鈴、やめてくれない？」

俺が起き上がってもほっぺをつついてくる、たまに握る

正直、握ると痛い

「やだ、柔らかくて気持ちいいんだもん」

柔らかい言うな！

「私語は慎みましょううね、では、転校生を紹介します。入ってきてー」

皆ドアの方に顔を向ける俺は鈴の攻撃を（ほっぺをつつくの）かわす為机に伏せる

「失礼します」

クラス入ってきた転校生をみて鈴が息を詰まらせる

「えっ！？」

ゆさゆさ

鈴が俺の体を揺すってくる

「なんだよ鈴」

「名鈴が」

なんであいつの名前が出てくるんだよ

「名鈴がここにいるわけ……？」

俺は確かめる為に顔を上げる

「よし、夢だ」

確かに名鈴がいたなんでだ？　夢だ、夢なんだ！

「えーと、李・名鈴です。韓国と中国のハーフです韓国代表候補生として、ここに来ました。そして鈴音と紫苑の幼なじみです。よろしくお願いします」

「なんなんだよ、これは夢だよな！鈴姉夢と言ってくれ！！」

バシ

「いて！」

「うるさいわよ　これでわかったでしょ夢じゃないって事が」

「う、わかった」

「ふふ、相変わらずね紫苑も鈴も」

名鈴が教壇に上で笑っている

「……。」

ギイー

俺は席を立ち教室からでる

「え、凰くん！」

「紫苑！？」

「鈴、私が見てくるわ」

私が立ち上がったのをみて名鈴が言う

「なら、頼むわ」

名鈴は教室を出た

「なんなんだよチクショ！　何故あいつが！」

屋上にいる

「悪かったわね」

「なにしにここにきた？」

「なにしにって、あなたの追っかけ？」

疑問系で返しやがって

「じゃあな」

俺は金網の向こう側に行き飛び降りる

「え、ちょっと！！」

名鈴が金網に近づく

「紫苑は本当化け物みたいね」

紫苑は地上に立っていた

「あんた、どこ行ってたのよ」

俺は昼休みまで学園をふらついてた

「いや、名鈴に追いかけられたから逃げてた」

「嘘はダメよ紫苑」

後ろから名鈴が腕を絡ませる

「やめろ、もう終わっただろうが」

名鈴は幼なじみで元カノだ

まあ、鈴がシスコンを治す為に無理やりくっつけたんだけどな

「私の中では終わってないのよ」

性格は鈴とは性格正反対の几帳面で綺麗好きだ
俺と似てるところがいくつか重なってる

「あーもう、鬱陶しいな！離れろよ」

ただ一つ
こいつはものすごく鬱陶しくて、暇さえあればくっいてくる
俺が1番嫌いなタイプだ
「ひどいなー」

「ひどくない！」

俺は名鈴を引き剥がし食券を買い、食堂のおばちゃんに渡す

「スキンシップしょ！」

「うるさい黙れ！　俺はくっつかれるのが嫌いだ！」

「紫苑くんが、いつもより喋ってる」

「本当だ！」

「鈴？　紫苑とあの人の関係はなんなの？」

エイミーだけだ不機嫌だ、なんでだ？

「名鈴は紫苑の元カノよ」

「へー元カノなんだって、えええ！！」

エイミー以外も驚いたみたいだ

「あのシスコンの紫苑くんに彼女いたんだ」

「彼女じゃねー！」

全力否定

そこに

「はい、日替わり定食お待ち！」

「ありがとう、おばちゃん」

「あんたも、隅に置けないね」

「ははは、違いますからね」

乾いた笑いしか出ないよ

1人で食べよ

ちょうど空いたテーブルに座り合掌してから食べる

「くそ、鈴と名鈴のせいで視線が痛い！」

鈴が変なこと口走るから嫌なんだよな、そういう恋愛関係で目立つのわ

「紫苑、隣いいか？なんだ、視線が凄いが」

「ああ、いいぞあと、気にするな、俺に向けた視線だ」
「またなにかしたのか？」
一夏は俺の隣に座り合掌しながら言う
俺はお前と違うぞ
「転校生の話は知ってるだろ」
「ああ、韓国の代表候補生だろ？」
「花がないわね私たちも入れてくれない？」
でたよ、問題児たちが、鈴に名鈴、エイミーだ
「おお、いいぜ　紫苑もいいだろ」
「知らん、勝手にしろ」
「なに、怒ってんだよ」
「いや、こいつらがこの視線の原因なんだよ」
「そうなのか、てかこの人誰？」
一夏は名鈴を見る
「そいつが噂の転校生だよ」

「李・名鈴よ、織斑一夏君私は紫苑の彼女なの」

「へー紫苑、彼女いたのか」

「彼女じゃねー！　こいつはただの幼なじみだ！」

「えー、あんなことまでしたのにー、責任を取らないなんて」

なんの話だ

「え、紫苑と噂の転校生ってそんな関係だったの／／／」

なんか、誤解されてる

「名鈴」

「なに？」

「少し黙れ！　話が変な方向に飛んでいくから」

「えー、なんで本当の話じゃない」

鈴のやつ、ほとんど事情知ってるから、笑いを堪えるのに必死だ

「どこがだよ、俺がいつあんなことした！」

「うっ！」

言えないだろ、だってしたことないし

「名鈴が黙ったところですべてを説明しよう」

俺は食堂のみんなに聞こえるように大きい声で話す
みんなが耳を傾けるのを感じてから

「まず、名鈴と俺との関係は元恋人だ、今はなにもない。そして、あんなことも一度もない、ましてやキスもない。付き合った期間は2年ちょっとかな?全ての目論見を考えたのは、そこで笑いを堪えてる鈴だ。後は鈴に聞いてくれ。あ、無理やりくっつけたのも鈴だからじゃ!」

俺はトレーを置いてとっとと、教室に戻る
鈴が質問攻めになってるが今日は無視だ

「紫苑、やってくれたわね」

「なんの話だ?」

俺は教室に帰ってきてすぐに息を切らして帰ってきた

「後の話は私に聞けとか、私は詳しく知らないわよ!いつ別れたかも知らないのに!」

言ってなかったっけっか？

「あれ？　てっきり知ってると、思ってたよ」

「あんたたちの事なんて知るはずないでしょ！」

「鈴が無理やりくっつけたんだろが！」

「なんなのこれ？」
そこに名鈴が教室に入ってきた

「あったまきた。私とＩＳで戦いなさい！　どっちが上かはっきりさせてあげる！」

「いいよ、鈴に喧嘩で負けたこと一度もないから。返り討ちにあっても知らないぞ　バカ鈴」

「姉に向かってバカとはなによ！　このシスコン！　ロリコン！　朴念仁！　唐変木！」

「勝手に言ってろよ。否定はしねえから」

「なに、透かしてんのよ！」

ガシャーン

俺の机が壊れる
犯人は右腕の指先から肩までＩＳの装甲を部分展開している鈴だ

プチ
今俺の頭の中で何かが切れる音がした
「このアマ！舐めてんのか！」
鈴の胸ぐらを掴む
「ねぇ、あれとめなくていいの李さん！？」
「ああなったら、とめに入っても無駄よ　不法いに手を出したら自分が怪我するわよ」
名鈴は自分の席でポテチを食べている
「やめんか！！」
千冬さんが駆けつけた
バシバシ
「……。」
「……。」
俺は鈴を離し一番後ろ今日たまたま休んだ子の机に座る
「わすれんじゃないわよ。放課後第４アリーナだかんね！」
鈴も自分の席に座る

千冬さんは珍しくなにも言ってこない姉弟喧嘩に水を差さないつもりみたいだ

「誰でもいいから机の申請しておけよ。」

そう、言い残し千冬さんは自分のクラスに戻った

放課後第４アリーナ
居るのは俺と鈴だけ
みんなは説得して出て行ってもった

「ぼこぼこにしてあげる」

「逆だろ、ぼこられてあげるだろ？」

「ねぇ、こうしましょう、私が勝ったら名鈴と寄りを戻しなさい！」

「なんでだよ」

「いいから、約束しなさい！　負けたら寄りを戻すって！」

「ああ、いいぜ負けないから」

「3、2、1、0！」

俺と鈴はカウントが零になった瞬間飛び出す
あらかじめ武装は展開してあった、俺が想龍、鈴が双天牙月を展開していた
ガギィンッ！！
俺の想龍と双天牙月がぶつかる

「やるわね！」

「舐めるなよ！」

一度離れて鈴は連結するのをやめて、青竜刀にする
それを両手に持ちバトンの用に自在に角度を変えながら切り込んでくる。
（ち、さすが鈴だな。つい最近ＩＳを動かした　俺とは違うか）
俺を想龍を開きガードする

（距離んとるか、それとも近距離で攻撃するか）

すると鈴の肩アーマーがスライドする

（来る！）

俺も肩アーマーをスライドさせて同時発射して相殺する　その反動で２人は離れる

「へー、衝撃砲を衝撃砲で相殺、やるわね」

「だてに、鈴と同じ武装で戦ってる訳じゃないからね」

「なら、本気で行くわよ」

「本気でこないと、負けるよ」

「上等！」

ガギィンッ！

双天牙月を、連結して、投げる

「鈴、やっぱりバカだったか双天牙月を投げたら手元には龍砲しか残らないぞ　いくら戻ってくるからってね」

俺は交わしながら言う

「それがわからないなら、まだまだね！」

返ってくる双天牙月を交わそうとすると、俺のルートに龍砲を撃ってくる

「そういう事か」

俺がどっちに逃げようとも、ルートを先読みされて撃たれる

「なら、避けなきゃいいだ」

「なに？　自殺行為でもするつもり？」

俺は想龍を閉じて舞の構えをする

「叩き落とす！　風の舞　旋風（つむじかぜ）」

俺は斜めに身体を回転しながら想龍を開き双天牙月にぶつける

ガキッ！

双天牙月が折れて地面に刺さる

「やべえ、折っちゃったよ」

「食らえ！」

鈴が龍砲を連射してくるそれをまともに食らう

「ぐうう！　なーんてね」

「え？　きゃ！」

後ろから想龍が飛んで来る

鈴が龍砲を放った時に鈴の横に気づかないように投げたのだ

この前やってみたら出来たのだ

「後ろがおろそかになってるよ」

俺は想龍を回収してクローズする

「嘘でしょう、扇子が飛ぶなんて！」

「飛ぶんだから、しょうがないでしょ？　それに想龍にはまだなにかあるみたいだけとね　さてと、とっとと、終わらせますか」

「そうね、もうそろそろアリーナの使用時間も終わるしね」

「鈴に合わせて、龍砲だけにしてやるよ」

「それはありがとう！」

パシュ、パシュ、パシュ

鈴が龍砲を連射俺はそれを交わす

（あの時、まともに受けたのが悪かったな）

シールドエネルギー２２０％　機体損傷３２％

鈴の方が龍砲の出力は高い

一発食らうとかなり持って行かれる

「避けてるだけじゃ、終わらないわよ」

「わかってるよ」

龍砲の射程圏内はほぼ無制限だしかも鈴の技術力が高い為弱点が見えない、だが無いわけじゃない

「あれ、どこ行った！」

ここだ！

俺は瞬間加速（イクニッションブースト）で、間合い詰めて、基本装備（プリセット）の指先から肩までの両手の装甲の拳龍（けんりゅう）両足の指先から踵（かかと）までの装甲を苑龍（えんりゅう）の拳龍で鈴を殴る

「きゃ！」

「お！なんか、出た！」

ゴット●ィン●ーみたいに

「くそ、負けた！！」

「え！？　勝っちゃったよ！　てか、拳龍いくつかパターンがあるのか」

俺は拳龍のコンソールを呼び出しデータを眺めながら頷く

「あんた、姉に気遣いの言葉も無いわけ？」

鈴が俺の隣でジト目でみてくる

「姉ちゃんは、俺より強いから気遣い無用でしょ？」

「強くなんかないわよ、全く帰るわよ」

「はーい」

ピットに戻りアリーナをでるとそこに見慣れた人影がな合った

「姉弟喧嘩は気が済んだか馬鹿者共」

千冬さんだった

「ええ、ご迷惑かけました織斑先生」

鈴が代表して言う

「全くだ、まあいい。さっさと部屋に戻れ」

「「はい」」

俺と鈴は千冬さんに一礼してからその場を後にした

「姉弟喧嘩は、人の迷惑のかからないところでやれよ全く」

千冬さんはため息をつきその場を後にした

「鈴姉、今日はごめんね」

「私こそ、ごめん」

2人は自分たちの部屋のベッドに向かい合わせに腰掛けている

「あ、思い出した！　双天牙月折っちゃったけど大丈夫？」

「大丈夫に決まってるでしょ」

「それならいいけど」

ボフ

俺はベッドに寝そべる

「久しぶりに喧嘩したわね」

「ああ、そうたねたく、名鈴の疫病神め！」

「彼女にそんな言い方したら、ダメよ！」

鈴が身を乗り出して人差し指をだしもう片方の手を腰に当てて、め！のポーズをする

「か　彼女じゃない／／／！」

ううん、可愛いてか、弟にその攻撃はダメでしょ

「な～に紅くなってるのよ　あ、わかった。照れてるでしょ」

「うっさい／／／」

くそ、それは一夏にやれよ

「ふふ、可愛いやつ　やっぱりシスコンね」

「シスコンじゃなくても、今のは照れるだろ？　その～、ギャップで」

「そんなにギャップないと思うけどな～」

嘘つきがいる

「嘘つき、普段は暴力女だろうだ」

「おりゃー！」

ドス

「ぐは！」

鈴が飛び込んで俺の腹にラリアットをした

「まだ言う？」

「げほげほ、鈴俺を殺すきか！」

俺はうずくまる

マジで痛いからね！不意打ち禁止だ

「あんたが、悪い」

鈴はベッドに腰掛ける

「本当の事だろ？　まあ、いい寝る」

「リボーンはや！　てか、もう寝るの！」

「起きててもやることないしな」

「ご飯は！？」

「あ、食べたい！」

ガバッと起きる

そういえば腹減ってたな

「はい、どうぞ」

鈴がタッパーを渡してくる

「酢豚だ！」

「まだ、開けてもないによくわかるわね」

「匂いでわかるよ！」

タッパーを開ける

「どんだけ、好きなのよ全く」

「好きなんだから仕方ないだろ？　では、いただきます！」

「まあ、いいけど」

鈴も自分のタッパーを開ける

「あれ？」

「なによ」

「鈴姉、料理の腕上がった？」

「あ　当たり前でしょ！　一応、花嫁修行もしてるのよ」

「へー、それはそれはがんばってください」

「なによ、その言い方は！」

「なんでもない」

鈴を目で見て黙々と食べ始める

「こら、話しなさいよ」

「おっと、危ない」

「あんな言い方するあんたには、あげない」

「なら、取られる前に全部食べる」

酢豚をかき込む

ゴックン

「この！」

とっさに鈴の攻撃を交わす

「なんだよ、そんなに食べたかったのか？」

「あんたと一緒にしないでくれる！」

ズル

鈴が俺の腕を掴んだ時シーツに足を取られてベッドから落ちる

「鈴！危ない！」

俺も手を掴まれてるので身動きとれないが頭をぶつけないようにもう片方の手を鈴の頭に入れる

「紫苑大丈夫？」

「こんちわ！？……なにこの状況は？　と　とうとう、し　紫苑がり　鈴にて　手をだ　出してしまったの！」

名鈴が入って来て、途切れ途切れ話す

「「ちがーう！！」」

俺と鈴の声がこだまする

えーと、状況を確認しょうまず、　鈴がシーツに足を取られるてベッドから落ちる、それを助けようとした俺は腕を鈴のあたまの下に入れる

うん、そうだ！

だ　だが、はたからみたら俺が襲ったように見えるだって鈴と俺の洋服は少しはだけているしかも鈴はへそが出ている、そして鈴が掴

んでいたはずの俺の腕は離れていて、あろう事か鈴の胸を掴んでいるのだ

俺、終わったな

「紫苑、死ね！」

名鈴は、ＩＳの両腕を指先から肩まで部分展開して両手には、細長い鉄の箸みたいのを持っている、それを俺になげた

「あぶね！」

俺は頭の毛を掠ったがなんにもなかった

「ふん！」

そのまま名鈴は出て行った

「鈴大丈夫か」

鈴を起こしてやる

「し　紫苑／／？」

「なんだ？」

「変態、スケベ／／／」

なんだよ急に、胸を掴んだ事か？　それは事故だ！

「事故だろうが！」

「でも触ったしかも、も　揉んだ／／／」

「うぐ！」

「ふ、まあ許してあげるわ、じゃおやすみ」

鈴は自分のベッドに潜る

「鈴姉一緒に寝ようよ」

「いやよ、襲われちゃうから」

鈴が笑いながらこっちをみてる

「ならいいもん」

シーツを直しベッドに入る

「なんで拗ねるのよ　今から練習よ私と寝ない練習ね」

「寝れるもん」

「嘘つき、いつも私のベッドに潜り込んでるくせに」

「なんで！」

いつも、早く起きて自分のベッドに寝てるふりをしてたのに、まあ、

何回は鈴より後に起きたけど

「今、自白したよ」

ぐは、やられた

「……おやすみ」

「はい、おやすみ」

鈴は笑いながら布団をかぶった

次の日の朝は名鈴は俺を見るなり威嚇して蹴飛ばしてくる

そしてクラス対抗戦の相手は一夏だった

転校生は幼なじみ（後書き）

原作にそってやってくことにします
多少はしょったり、付け足したりしますけど
では、次回にお会いしましょう

クラス対抗戦！？（前書き）

対抗戦を決着つけて、しかもゴーレムを出してみました

では、本編どうぞ

クラス対抗戦！？

あれから数週間だった
名鈴には数週間かけて誤解を解いた、鈴にも手伝ってもらい
だが今度は鈴が不機嫌になった理由は一夏が小学校の頃の約束を間違えて覚えたみたいだ
鈴の約束の意味は、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を食べてくれる？だ　一夏は、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚をおごってくれるだったてか、鈴その告白はないと思うぞって突っ込みたかったが泣きそうだったのでやめた
鈴の泣き顔はみたくないあの時で懲り懲りだ

「来週から対抗戦か、めんどくさいな」

「あんたね、やるからには勝ちなさいよ」

「はいはい、でどこ行くの」

第３アリーナのＡピットの近くだ

「第３アリーナのＡピットよ」

鈴がドアセンサーに触り開放許可が下りてバシュッと音を立てて開いて中に入る

「ここで待つわよ」

「一夏をか？」

「そうよ」

「あいつを許すのか？」

「謝らせるのよ」

そうだと思ったよ

バシュッとドアが開く

「来たわよ。待つわよ、一夏！」

ドアが開いて入って一夏の後ろに箒とセシリアがいた

俺たちは名前で呼び合うまでのなかになった

「貴様、どうやってここに――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

鈴は「はんっ」と挑発的な笑い、自信満々に言い切る。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

俺も一応関係者なんだが

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

「盗っ人猛々しいとはまさにこのことですわね！」

また、箒の台詞が切られた

「……おかしなこと考えてるだろう、一夏」

「いえ、なにも。人切り包丁に対する警報を発令しただけです」

「はあー」

「お、お前というやつはっ――！」

「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっこんでてよ」

「わ、脇役やっ――！？」

「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

「おう」

「同じく」

放って欲しいなら無理に構う必要なじゃんまあ、そんなやつ俺はまだ会ってないけど

「おう、紫苑はわかってくれるのか！てかなんでここに？」

今、気づいてなかったのかよ

「俺は鈴の片割れだから、どこ行くのも2人一緒なんだよ」

「紫苑は少し黙ってなさい」

お姉様からのお叱りだ

「はいはい」

「一夏！謝りなさいよ！」

鈴、その一方的な要求はないと思うけどな

「だから、なんだよ！約束覚えてただろうが！」

「あっきれた。まだそんな寝言いってんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！」

「くだらないこと考えてるでしょ！？」

「一夏今、お前が考えてたこと当ててやろうか？」

「おう」

「意味が？豚を使った沖縄料理か？それはミミガー！だろ」

「おー、すげーさすが紫苑だ」

一夏の後ろからため息が聞こえたのは気のせいではない

「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

はあーまた、ため息が鈴も鈴だが一夏も一夏だな

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも1つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！？」

なんでクラス対抗戦？　てか、鈴代表じゃないのにどうやって対抗戦勝つつもりだ？

まさか！

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

「せ、説明は、その……」

鈴は一夏を指したままのポーズのままでボッと赤くなる。

「ちょっと待った、一夏、2組の代表が誰だけわかってるのか？」

「へ？　鈴だろう？　じゃなかったらそんなこと言わないだろ」

「知らないのかよ、セシリアと箒は知ってるよな？」
俺は、一夏の後ろにいた２人に話を振る
「ああ、知っている」
「知ってますわよ」
「一夏、２組の代表は俺だぞ」
「ええ！　まじか」
「はあー、ほんと知らなかったんだな。で、鈴俺が変わりにやれって事か？」
「え、そうよ頼んだわよ！」
「また、無責任な一夏の百式は全ＩＳの中でもトップクラスなんだぞ」
一夏と箒も調べていたので教えてやった
そう、百式、暮桜に続く最強のＩＳの１つだ
「そうなの！」
「言っただろ、一夏の振るってる雪片は千冬さんと同じだと、そしてワンオフアビリティーの零落白夜はバリア無効化を出来るふざけた能力を持っているってなこの前教えただろう？もう忘れたのか？」

「あ、そうね。思い出したわ」

絶対嘘だ

「なんだ？　やめるならやめてもいいぞ？」

一夏、親切で言ったみたいだが、それは鈴には逆効果だよ

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

はあーだから、戦うのは俺だって

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！　この朴念仁！　間抜け！　アホ！　馬鹿はアンタよ！」

はあーもう、知らん

「うるさい、貧乳」

プチ

あーあ言っちゃった

ドガァァン！！！

部屋全体がかすかに揺れた壁は大きなクレーターが出来ていた

やったのは右腕を指先から肩までＩＳを部分展開している鈴だ

「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」

ぴじじっとＩＳアーマーに紫電が走る。
少し離れとこっと
「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」
「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」
なんと理不尽な、まあ、今の鈴になに言っても無駄だ
「少し、手加減して貰うように言ってあげようと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてもらうわ。紫苑！」
「はぁー、なんですか姉さん？」
「全力で、叩きのめしなさい！　負けたら殺す！」
「誰に言ってんだよ、言われなくても負けないよ一夏ごときにな」
実際、零落白夜の弱点はわかってるからな
「なら、行くわよ！」
「はいはい」
鈴はもう一度一夏をひとにらみして、ピットを先に出て行った
「はあー、一夏」
「お、　おうなんだ？」

「鈴を泣かしたら殺すからな」

俺も鈴を追いかけてピットを後にする

「一夏、お前どうする気だ!?」

箒が、少し強い口調できく

「なにをだ?」

「なにをって、一夏さん!」

「紫苑は、噂では空手、他いろいろと千冬さんと互角の強さって話だぞ!」

「ああ、知っている。剣道もなかなかの腕だったよ。それがどうした?」

「どうしたじゃないですわ!紫苑さんのＩＳ(アイエスアウト・ログ)活動記録をみましたわ!」

「だから、それがなんだよ!」

「「一夏(さん)より強いって、事だ（ですわ）!!」

「ぐっ!」

なんとか、頑張らないとな、そして鈴には謝らないとな、絶対に

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせは俺と一夏。
噂の男子同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。　会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイルモニターで鑑賞するらしい。

（すごい観客な～）

呑気にアリーナ全体を見渡すと、目の前に白い機体百式を纏った一夏がいる

『それでは両者ら規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、俺と一夏は空中で向かい合う。その距離は5メートルぐらい。

（さて、俺は何を展開しょうかな～想龍、それとも蒼龍牙月かう～どうするかなー？……想龍にするか）

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に一夏は動いた

ドンッ！！

「ぐあっ！」

青龍の龍砲を使った続けざまに5、6発浴びせた

「早速使ってきましたわね」

「ああ、だがあれの対策は出来ている」

「ええ、後ろに回ればなんとですわ」

ピットでみていた箒とセシリアが話す

「甘いわよ！」

「どういう、事だ！鈴」

「鈴さん！？」

「龍砲は砲身斜角はほぼ無制限よ、それに紫苑は、あたしと違って龍砲の射程圏がないのよ。全くやんなっちゃうわよ」

「そんな！」

「一夏、よくよけるなこいつは砲身も砲弾も見えないのに」

「紫苑」

「なんだ？」

「本気で行くぞ」

「はんっ、本気で来いよ！　俺も本気で行ってやるからよ！」

俺は言い終わると、同時に想龍を展開そのまま突っ込む

ガキィンッ！！

俺の想龍と一夏の雪片弐型がぶつかる

「やるな、紫苑」

「おまえもな！」

一度離れる

「行くぞ！」

「来いよ、千冬さんと同じ武器を使ってるんだ俺に勝てよ」

「俺が勝ったら鈴に殺されるぞ」

「そうだったな、じゃ勝たなきゃな」

想龍を閉じる

「行くぞぉぉぉぉ！！」

「来い！」

「うおおおおっ！」

「はあああああっ！」

ガキィンッ！！

「龍の舞　龍神！」

両手の想龍で雪片弐型を止め雪片弐型巻き込むように回転する

「ぐっ！」

雪片弐型が地面に刺さる

「風の舞　旋風」

「ぐあっ！」

『試合終了。勝者――凰　紫苑』

ズドオオオオッ！！

「！？」

試合終了のアナウンスが入り、それが切れた直後突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

「な、なんだ？何が起こって……」

ＩＳスーツ姿の一夏が戸惑った声が聞こえる

「一夏、早くピットに戻れ！」

「お前はどうするんだよ！？」

「俺が時間を稼ぐ、その間にピットに戻れ！」

「戻れって……友を置いて逃げられるかよ！」

「ＩＳのないお前がどうやって戦うんだよ！」

「ぐっ！」

「いいから、戻れ俺も最後までやり合う気はないよ」

「だけどよ」

バシュ

俺は一夏の足元に衝撃砲を撃つ

「いいから、戻れって言ってんだろうが！！　邪魔なだよ！」

「っ！　紫苑！」

「なんだよ」

「死ぬなよ」

「は、誰に言ってんだ馬鹿いいから戻れ」

「ああ」

一夏は走ってピットに戻る

「さて、やろうか？　お尋ね者さん」

ビューン

「チッ」

俺の言葉を合図に相手は俺にビームを撃ってくるそれを上に飛んで交わす

「ビーム兵器か、セシリアのＩＳより上だな。おい、お前なにが目的だ！　せっかくの試合が台無しだろ？」

相手は俺の問いかけを無視してビームを連射してくる
それを左右に交わし交わしきれないものは想龍でガードする

「無視かよ」

（どーすっかなー両腕にビーム砲口は左右４つあるみたいだな、どう考えても龍砲であいつのシールドは突破出来そうにないしなー）

『凰くん！　今すぐアリーナから脱出してください！　すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！』

俺が考え事しながら交わしていると山田先生が割り込んできた。

「先生たちが来るまで俺が食い止める。あ、後一夏にエネルギーの補給してあげてください」

『え、だ　ダメです！　あ、ちょっと！　紫苑！！』

「鈴姉！？」

『紫苑！！　今すぐピットに戻りなさい！」

「ごめん、それは出来ないな」

ＩＳのプライベート・チャンネルを切り想龍をクローズして蒼龍牙月を展開して飛び出す

「紫苑！？　凰くん！？　聞こえてますか！　聞いてるの！」

ＩＳのプライベート・チャンネルは声を出さなくてもいいのだが、そんな事を忘れるぐらい鈴と山田先生は焦っていた
ちなみに、周囲から見たらただの危ない人であることは間違いない。

「本人がやると言ってるなら、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「そうよ、千冬さん！」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……千冬さん、それ塩ですよ……」

「……」

鈴の声でぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容疑に戻す。

「なぜ塩がここにあるんだ山田先生？」

「さ、さあ……。でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……」

「あっ！やっぱり凰くんのことが心配なんですね！？　だからそんなミスを―」

「……」

後ろで鈴のため息が聞こえた

「あ、あのですねっ――」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？　あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

ずずいっと押し付けられるコーヒー（微塩）。山田先生は涙目でそれを受け取る

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔がいた。

「千冬さん！あたしにＩＳの使用許可を！」

「私にも使用許可を」

鈴とエイミーが千冬さんに迫る

「そうしたいところだが、――ころを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値はこの第２アリーナのステータスチェックだった

「遮断シールドレベル４に設定……？　しかも、扉がすべてロックされて―あのＩＳの仕業ですの！？」

端末をみたセシリアが言う

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かうことも出来ない

な」

「千冬姉！！」

「一夏！？」

一夏が息を切らせてピットに入ってきた

「千冬姉、エネルギー補給をしてくれ！俺もすぐにでる！」

「無理だ、扉はすべてロックされているんだぞ！どうする気だ……まさか！」

「ああ、零落白夜でシールドを切り裂く」

「わかった、一夏、鈴音、そしてエドワード、すぐに準備しろ！山田先生、一夏にエネルギー補給をしてやってくれ」

「「「はい」」」

「ちょっと待ってください！　なぜ私は出撃部隊に入れないのですか！」

名前を呼ばれていないセシリアが驚く

「お前のＩＳの装備は一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことありませんわ！　このわたくしが邪魔だなどと――」

「では連携訓練はしたか？その時のお前の役割は？ビットをどうい

う風に使う？味方の構成は？　敵をどのくらいを想定してある？
連続稼働時間――」

「わ、わかりました！　もう結構です！」

「ふん。わかればいい」

放っておいたらそれこそ一時間でも続きそうな千冬さんの指導を、セシリアは両手を揺らして止める。『降参』のポーズであった。

「はぁ……。言い返せない自分が悔しいですわ……」

「くっ……！」

俺の攻撃がすべて交わされる

「さて、戦略尽きたな、どうするか」

シールドエネルギーは１５０％機体損傷率８２％
シールドの割には機体損傷が激しいなどういうことだ？

「なんとかなるか」

突然オープン・チャンネルが入る

「待たせたな！紫苑！」

「一夏！」

「今から行くぜ！」

「わかった！」

オープン・チャンネルを切る

「さて、一夏来る前に少しでも削っとくか」

蒼龍牙月を連結して左手に持ち、右手に想龍を2つ展開する

「剣と扇子の舞、1の型乱気流」

俺が作った舞の1つだ剣と扇子の舞だ

「これを避けられるか？」

乱回転して、相手に迫るその時蒼龍牙月も回転させる

「チッ、よく交わすなだが！」

頭を脚で挟みそのまま地面にぶつける

「どうだ、俺を舐めるなよ！」

（やっぱりこいつの動き機会じみてるな）

パリーン！

「紫苑！大丈夫か？」

アリーナのシールドバリアを破って一夏と鈴、エイミーが入ってきた

「誰に言ってんだ一夏？」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょう！」

「そうよ、馬鹿紫苑！無駄に戦ってた訳じゃないでしょう？なんか、対策あるんでしょね」

エイミーに続き鈴が聞く

「鈴、エイミー、はっきり言うぞ！」

「な　な　何よ！」

「索全くない」

「紫苑、あんたなんのために残って戦ってたの！」

「エイミー、怒るなだが収穫はあったぞ」

「なによ」

「あいつは無人機だ！」

「やっぱりか」

一夏も気づいてたか

「無人機なんてあり得ない。」

「ＩＳは人が乗らないと絶対に動かないのよ。そういうように出来てるのよ」

「そんなことは知っているよ、今現在最先端の研究でそれが不可能かどうかはわからないだろ。黙っていればいいだけなだからな。てか、一夏よくあいつが無人機だってわかったな……ってあぶね！」

話をしていた俺の頭をかすめる

「さて、話はあとだ！一夏零落白夜は使えるよな」

「ああ、使えるぞ」

「ならいい、俺が合図したら突っ込め」

「わかった」

「鈴、エイミー手伝えよ俺がけっこう削ってあるからな」

「なに、私に指示してんのよまあ、たまには弟の言うことも聞いてあげるけどね！」

「了解よ」

「じゃ、行くぞ」

アイコンタクトで移動場所を教えながら攻撃していく

「く、当たらない」

「なんて、無理な動きをするんのよ」

「だから言っただろ？無人機だって、それと当てなくても良いぞ」

「なんでよ！当たらなかったら倒せないでしょ！」

「だから、一夏にまかせるんだよ！」

「じゃなんで、こんなことしてる訳よ！」

「隙を作るためだよ」

「隙？」

「一夏の攻撃を確実に当てる為のな」

「まあ、いいわ」

俺は鈴たちから離脱して一夏の隣に移動する

「一夏、全力で攻撃しろよでないと負けるぞ」

「あ、ああわかってる」

俺はプライベート・チャンネルで一夏と話す一夏はずっとオープン・チャンネルで話していたのに急にプライベート・チャンネルに切り

替わったので焦りながらプライベート・チャンネルに切り替えたみたいだ

「『瞬間加速』の原理は覚えているな？」

「ああ、確か後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その時得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。だったよな？」

「ああ、そうだ。だが外部からのエネルギーでもいいってことだわかるか？」

「なんとなく」

「なんとなくって、しっかり聞け通常の瞬間加速は自分のエネルギーを一度放出そして取り込みだが、自分のエネルギーを放出しなくても外部からのエネルギーでも瞬間加速は出来るんだよしかも瞬間加速の速さは使用するエネルギー量に比例する」

「わかったぞ！つまり、瞬間加速に使うエネルギーを零落白夜に使えってことか、だが、外部エネルギーはどうするんだ？」

「今から説明するから待て」

「おう」

「俺の龍砲の最大出力じゃ足りないから鈴にも手伝ってもらい、俺と鈴で龍砲を最大出力でお前に撃つその時絶対防御をカットしろ、その龍砲のエネルギーを『瞬間加速』のチャージしろ。加速したら最大出力で零落白夜を発動してあいつをぶった切れ！」

「わかった」

一夏は強く頷いた

「鈴手伝ってくれ」

「わかったわで、なにするの？」

「龍砲を最大出力で一夏の背中に撃つ」

「は？　あんたなに考えてんの！」

「鈴、今は言い争ってる場合じゃないだろ」

「わかったわよ一夏どうなっても知らないわよ」

鈴が龍砲を最大出力でチャージを始めたので俺もチャージを始める

「一夏！撃つわよ！」

一夏はあいつを向きながら答える

「いつでもこい！」

鈴と俺はアイコンタクトして同時に撃つ

「ぐつ！　――ォォォ！」

一夏は加速した。右手の雪片弐型は零落白夜を発動している

一夏は敵ＩＳの右腕を切り落としたがモロに左手の拳を食らう
そして零距離でビームを撃つきだ

「エイミー、セシリア、やれ！」

「了解ですわ」

「了解！」

観客から青いビットが４機同時狙撃そして、お取り役をしていたエイミーのビームライフルで狙撃そして、打ち抜いた

「これで終了だ。一夏無事か？」

「ああ、なんとかな」

俺は一夏に近づき手を貸してやる

「そうか、それはよかった――」

敵ＩＳの再起動確認！警告！ロックされています！

「一夏！俺がガードするから突っ込め！」

残った左手の砲身をバースト・モードに変形させて、地上から俺たちを狙った

それを俺は想龍でガードして後は一夏に任せた

「オオオ！」

一夏が敵ＩＳの装甲を切り裂いて敵ＩＳは完全に機能停止した

「やったな、一……夏……」

ドサ

「おい、紫苑！」

遠くで一夏の声を聞きながら意識を失った

「っ……？」

全身の痛みに特に両腕が痛い、それで目を覚ます

「そのまま一夏にキスでもする気か鈴？」

「っ！？」

「てか、なんで一夏居るわけ？」

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「すまん、邪魔したな。俺は先に部屋に戻るからファーストキスすませろよ」

「っ！？ファーストキス！？」

いちいち驚きすぎだろ

「っ！！」

足に体重をかけたとたん激しい痛みが走った

「大丈夫！？」

「大丈夫に決まってんだろう！？」

正直大丈夫じゃない

「嘘つき、大丈夫ないでしょ？なんでそんなに強がるのよ！？」

鈴が、肩を貸してくれる

「男ってのはな、好きな人の前では、強がりたいんだよ。なあ紫苑？」

「そうだな、だけど一夏？俺はまだ一夏が強がったところみたことないぞ？」

ベッドに腰掛ける

「っ！お、俺はいいんだよ！？」

「一夏、いいこと教えてやるよ、男ってのは好きな人の前だと、何倍にも何万倍にも強くなれるんだぜ知ってたか？」

「知ってるよ！」

「紫苑」

「なんだよ」

「シスコン！」

ぐあ、まあ、そうだけどなぜ今？

ピキーン

今俺の頭の中にいくつか思いついた

「一夏、もう1ついいこと教えてやるよ」

俺は鈴を見てニヤリと笑う

「一夏、今さっき鈴がき――」

「チェストー／／／！」

「ぐはっ！」

思いっきりラリアットしやがったぞ！

「お、おい、紫苑大丈夫か？」

「問題ない、鈴ごときのラリアットなど、すぐに復活できる。」

俺はベッドに腰掛け直す

「あたしごときってなによ！」

「鈴、あの約束の本当の意味教えていいか？」

「本当の意味？」

「だ、だ、ダメ！」

「あ、もしかして、あの約束の本当の意味って、『毎日味噌汁を～』とかじゃないよな？」

「……」

「……」

「鈴？紫苑？」

「へえっ！？」

「なんだ、俺は一夏を甘く見てたぜ」

「なんでだよ！」

「一夏、あの約束は、そういう意味だ――」

「天誅！（てんちゅう）」

「食らうかよ」

鈴の手刀を左腕で止める

「――っ！！――」

そうだった、俺怪我してたんだ、絶対腕骨折してるよな

「紫苑大丈夫か！」

「大丈夫……じゃない……マジ痛い！」

俺は腕を抱えてうずくまる

「じ、事項自得よ馬鹿紫苑／／／！」

「なあ、こっちに戻ってきたってことは、またお店やるのか？　鈴たちの親父さんの料理、うまいもんな。また食べたいぜ」

「あ……。その、お店は……しないんだ」

「え？　なんで？」

「察しろ馬鹿一夏！　両親は離婚したんだよ」

俺は、別に興味もないし関係ないが鈴はそうじゃない。鈴は母さんと父さんが好きだっただけど突然離婚したんだ
訳がわからない内に国に戻ってた

「俺たちが国に戻ってたのも、それが原因なんだよ」

そうか、そうだったのか、紫苑は変わりなかったが鈴がどことなく不安定だったな、それを隠すように明るく振る舞うことが多かった、それを紫苑がいつも心配そうに見ていたな、俺も妙に気になったし

「一応、母さんの方の親権なのよ。ほら、今ってどこでも女の方が立場上だし、待遇もいいしね。だから……」

あんな鈴見てられないな

「父さんとは1年会ってないの。たぶん、元気だと思うけど」

「俺は、中国にたつまえに会ったよ」

「え!?　なんで教えてくれなかったのよ!」

「あいつが言ったんだよ、鈴には言うなってな」

「なんで、なんで……よ」

「泣くなよ、お前の涙はもう見たくない。鈴これを」

俺は制服から1枚の写真を取り出す

「これ……って」

「ああ、家族で撮った最後の記念写真だよ。親父が鈴にって、俺は鈴に会えないから変わりに渡してくれってさ」

「うん、ありがとう」

本当は手紙もあるのだがまだ、渡さない。だって鈴が泣いてしまうからだ

「さて、俺は部屋に戻るよ。騒がしくなりそうだから」

「騒がしくってなんでだよ？」

「時期にわかるよ。じゃあな」

俺は痛む体を引きずりながら保健室のドアノブに手をかける

その時突然ドアが開く

「一夏さん、具合いかがですか？　わたくしが看病に来て――あら？」

「――っーー！」

鼻と、額とその他もろもろを突然開いたドアにぶつけた

「どうしてあなたが……？　一夏さんは1組の人間、2組の人にお見舞いされる筋合いはなくってよ」

「……何言ってんの？　あたしは幼なじみなんだからいいに決まってるでしょ。　あんたこそただの他人じゃん」

鈴は俺をチラッとみて、みて見ぬ振りをする

（あとで、絶対いじめてやる）

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！それに、今は一夏さんの特別コーチでしてよ！」

俺は、再びドアノブに手をかける
またしても突然ドアが開き同じところをぶつける

「貴様たち何をしている！」

今度は箒入ってくる

「な　な　なにも！」

「そ　そ　そうですわ！」

「そうかそうか、抜け駆けはなしと言ったはずだろ？どういうつもりだ！」

今のうちに外に
再びドアノブに手をかけただまた、突然開く

「紫苑！大丈夫……？」

「紫苑！無茶をして……。」

突然ドアを開けたのは名鈴とエイミーだ
２人はドアのところでうずくまっている俺を見る

「お前ら……ぜってーわざと……だろ！？」

俺はドスの利いた声を出す

「「「「「「「「「ひっ！」」」」」」」」」

俺はゆらゆら立ち上がる

「し　紫苑！　お、落ち着きなさい！」

鈴が震える声で言う

「そ　そうよ、紫苑あんたはけが人なの！」

名鈴も後ずさりしながら言う

「よく……言うぜ……。」

ゆらゆらと歩き鈴たちに近づく

「こ、来ないで！」

エイミーは震えている

「おい、紫苑！」

「なんだよ」

バシ

「いた」

この叩き方は

「教員には、敬語を使え馬鹿者」

やっぱり千冬さんだった

「はい、わかりました」

「紫苑、お前は当分安静だぞ」

「マジで！」

「両腕にひびが入ってるからな。あと、篠ノ之と紫苑は部屋を移動しろ紫苑が一夏の部屋だ篠ノ之は、新しい部屋だ。凰は当分ひとりだ。わかったなら！では、全員解散しろ！」

「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」

俺は行動開始してすぐに荷物をまとめる

「じゃ、鈴姉寂しかったら、俺の部屋に来て布団に潜り込んでもいいぞ」

「それは、あんたでしょう」

「そうだよ！」

「少しは否定しなさいよ全く」

「はいはい、じゃ行くよ」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみ、鈴姉」

俺は部屋を出て、一夏の部屋に向かう

コンコン

「はい、どちらさまですか？」

「俺だよ」

「紫苑か、入れよ」

「入れよって、今日から俺もこの部屋に住むのだがな」

「そうだったな」

俺は一夏と共に部屋に入る

「てか、紫苑大丈夫なのか？」

「なにが？」

窓際のベッドに腰掛けたところで一夏に聞かれる

「両腕でひび入ってるんだろ？　なのに荷物持ってるけど」

「ああ、鈴に手伝って貰うのは、あれだったからな、自分でどうにかしたよ」

「そうか、お茶でもって飲むか？」

「貰うよ、その間に俺は片付けをするよ」

「わかった」

俺は一夏がお茶を入れに行ってる間に荷物を片付ける

「ほい、紫苑」

「サンキュ、一夏」

片付け終わると同時に一夏がお茶をくれる

コンコン

「はい、どちらさまで――」

「……一夏どうした？」

俺が一夏の方に行くと箒がいた

「……」

「なんだ？　忘れ物か？」

「……」

箒は、依然と無口だ

「？」

俺も頭を傾げる

「どうかしたのか？まあ、とりあえず部屋入れよ」

「いや、ここでいい」

「そうか」

「そうだ」

「……」

「……」

なんなんだ？こいつら

「俺、向こうに行ってるよ」

ガシ

「紫苑、友を見捨てるのか？」

見捨てるって

「わかったよ」

「……」

「……」

またかよ！

「……箒、用がないなら俺たち寝るぞ」

「よ、用ならある！」

大声出すなよ、骨に響く！

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

確か6月末にやるクラス対抗戦とは違い完全に自主参加の個人戦か、学年別に区切られてる以外は特に制限もないそうだ。まあ、専用機持ちが圧倒的に有利なのは変わらない。

「わ、私が優勝したら――」

頬を赤くしている

「つ、付き合ってもらう！」

びしっと指を差す

「……はい？」

「……は？」

どっちに言ってんだ？と、言う前に箒は早足で行ってしまった

「……なあ、紫苑？」

「なんだ？一夏？」

「俺たち、なにを付き合えばいいんだ？」

「それがわからないのは、おまえだけだ唐変木！」

俺はそのまま、ベッドに横になって寝た

クラス対抗戦！？（後書き）

次は暴走してみようかな？
てか、暴走ってなに？
誰か教えてください

ボーイ・ミーツ・ボーイ（前書き）

なんとか書き上げられた
リアルが忙しくて、時間がかかりましたが、読んでください

ボーイ・ミーツ・ボーイ

6月頭、日曜日。

俺たちは久々にＩＳ学園の外――というか、五反田の家にいた。

「で？」

「で？　って、何がだよ？」

一夏と弾、格げー俺、ベッドで携帯をいじってる

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？一夏、紫苑」

「してねえっつの。」

「そうでもねぇーよ」

「嘘をつくな嘘を。おまえらのメール見てるだけでも楽園じゃねえか。なにそのヘヴン。招待券ねぇの？」

ちなみにこいつが五反田弾だ、俺と一夏、そして鈴の中学からの友達入学式当日に知り合って以降やたらと馬があって3年間鈴と揃って同じクラスだった。そのこともあって中学時代はよく4人でつるんでいた

「ねえよバカ。」

「あってもお前にはやらんよ」

「なに～紫苑！お前だけいい思いしていいと思ってんのか！　このシスコン野郎！」

「うるせーてか、負けるぞ」

現在俺と一夏が通っているのは国が管理運営している特殊国立高等学校『ＩＳ学園』。

ＩＳ――正式名称インフィニット・ストラトスと言う。『本来は女性にしか扱えない』ものであるが俺と一夏は動かせてしまったので、半ば強制的に入学させられたら。

「それにしても、紫苑と鈴が居てくれてよかったよ」

「ああ、鈴か。鈴ねぇ……どうよ紫苑」

「あ？　変わるわけねえーだろ？」

「やっぱりか」

一夏は首を傾げてる

「よっしゃ、また俺の勝ち！」

「おわ！きたねえ！　最後ハイパーモードで削り殺すのナシだろ～」

こいつらがやってる対戦しているゲームは『ＩＳ／Ｖ　Ｓ』。発売月だけで百万本セールスを記録した超名作。ちなみにデータは第２回ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』のものを使われている。

……千冬さんのデータは諸事情によって入ってない

「一夏が、弱すぎるんだよ、一夏代われ」

「お、おう」

「ぐおお！　負けた～！」

「俺の勝ちだな弾」

「くそ～なんなんだよ、あの動きは！」

「裏技だよ」

「俺に今度教えてく――」

「お兄！　さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！　さっさと食べに――」

どかんとドアを蹴り開けて入ってきたのは弾の妹、五反田蘭。歳は1個下で今中3。

確か有名私立女子校に通っている優等生。家ではこんな感じだけどな、もっとも兄とは違うな、うん。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「邪魔してるぞ蘭」

「いっ、一夏……さん！？　それにし　紫苑！？」

確か蘭も一夏に惚れてたな、それにしても蘭にまでフラグを立てるとわな～

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……？　全寮制の学園に通っているって聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見に来たついでに寄ってみた」

「俺は、暇だったから、それにしても蘭、発育してないな～」

「っ！　この変態紫苑！」

欄が枕を投げて来たそれを

「弾ガード！」

「俺を盾にす――べふ」

「セクハラで、訴えますますよ紫苑！」

「すまんな、訴えてもって無駄だぞ？」

俺はＩＳ生徒手帳を見せる

「ぐっ、なんで紫苑までＩＳ動かしてるのよ」

「それ俺に聞くな、蘭も鈴も似たり寄ったりな体つきだな、性格も似てるな」

「おまえらほんと仲いいな」

「紫苑はお兄が、ダメなので出来のいい兄みたいな存在です」

「こいつは、ただ出来のいい妹みたいな存在だよ」

「……そうなのか…。」

なんだよ一夏の反応は！　あとでしばく

「とにかく、一夏さんもお昼どうぞ紫苑もね」

「ああ、このバカを起こしたら行くよ」

弾を差して言う

「わかりました」

そして、蘭はドアを閉じた

「おい、弾起きろ！」

「……」

返事がない、ただの屍のようだ。

「一夏、弾の起こし方教えてやるよ」

「お、おう」

「みてろ。弾、美少女がお前を呼んでるぞ」

俺はそう言ってすばやく離れると

「なに！　美少女はどこだ！」

「作戦成功だろ一夏？」

「あ、ああ」

「ほら、昼行くぞ」

俺たちは部屋を出て1階に降りるための階段にさしかかる

「しかし、アレだな。蘭ともかれこれ3年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれてないのかねぇ」

「「は？」」

階段を降りきって裏口から外に出る

そこで、止まる

「いや、ほら、だってよそよそしいだろ。今もさっさと部屋から出て行ったし」

「「はあー」」

俺と弾は同時にため息をだす

「……なんだよ？」

「いやー、なんというか、お前はわざとやっているのかと思うときがあるぜ」

「わざとじゃなくて、天然で、やってるんだよ」

「？」

「まあ、わからなければいいんだよ。俺もこんな歳の近い弟はいらん」

「はあー、この、フラ立て男が！」

「まあ、いいや。とりあえず飯食ってから街にでも出るか」

「おう、そうだな。昼ゴチになる。サンキュ」

「任せるぜ、昼、いただきます」

「なあに気にするな。どうせ売れ残った定食だろう」

あの、甘いカボチャ煮定食か、大好きなんだよな

正面の食堂入り口に戻る

「うげ」

「ん？」

「なんだ？」

「……」

露骨にイヤそうな声を出す弾を、後ろから覗く俺たち

「なに？　何か問題でもあるの？　あるならお兄ひとり外で食べてもいいよ」

「聞いたか2人とも。今の優しさ溢れた言葉。今泣けてきちまうぜ」

先客は蘭だった。

「ほら、ハンカチやるよ。　それ鈴姉に貰ったものなんだぞ全く、洗って返せよ」

「ありがたい」

俺からハンカチを奪い鼻までかみやがった

「弾、やっぱりお前外で1人で食べろ！！」

「別に4人で食べればいいだろ。それより他のお客さんもいるし、さっさと座ろうぜ」

「そうよバカ兄。さっさと座れ」

「その前にハンカチ洗ってくる」

弾が帰ってきてから一夏、弾、俺、蘭の順に座る

「蘭ちゃん、着替えた？」

「え、はいそうですけど？」

「紫苑、よく女の子をちゃんづけ出来るよな」

「なんで？　俺は誰でもちゃんづけできるぞ？まあ、蘭にもごくたまにしか付けないけどな」

「そうなのか、蘭今から出かける予定か？」

「あっ、いえ、これは、その、ですねっ」

「……はっきり言わないとわからないぞ……」

俺は蘭に耳打ちする

「……わ、わかってます！……」

蘭も耳打ちで返してくる

「ああ！」

一夏はなにか、ひらめいたみたいだ

「紫苑とデート！？」

ダンッ！

「違いますっ！」

「違うっ！」

ここに名鈴がいたら、ＩＳの白棒が飛んでくるなマジで

「ご、ごめん」

「一夏、帰ったら組み手やろうか？」

「え、遠慮しておくよ。空手世界大会優勝者のお前とやったら死ぬ」

「違うっうーか、兄としては違って欲しくもないんだがな。」

「お前は、俺が弟でいいのか？」

「いや、それも嫌だな」

「俺も嫌だな、こんな出来の悪いのは、兄弟だけで充分だ、それにお前が兄だったらぶちのめしてるよ」

「紫苑てめーまた口悪くなったな、そんなんじゃ彼女に嫌われるぞ！」

彼女居ねーし！？まさか弾、名鈴の事を！？

それを聞く前に割り込んで声が聞こえる

「食わねえんなら下げるぞガキども」

「く、食います食います」

ぬっと現れたのは８０を過ぎてなおも健在、五反田食堂の大将にして一家の頂点、五反田厳その人だった。長袖の調理服を肩までまくり上げ、剥き出しになっている腕は筋肉隆々。中華鍋を一度に２つ振るその豪腕は、熱気に焼けて年中浅黒い。サロンに行くより百倍健康な焼け方をしている。

俺は食らった事は無いがあの人の拳骨は千冬さんに勝るとも劣らない威力だそうだ

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます」

「いただきます……」

俺、蘭、一夏、弾の順番。

「おう。食え」

厳さんは満足げに頷いて次の料理を始める。　二重の意味で五反田食堂鉄板メニュー『業火野菜炒め』の注文が入ったらしく、　タタタタタッと軽く鋭い包丁の音が響く

ジュウジュウと野菜を炒める音をバックに俺は一夏たちの雑談を聞く

「でよう一夏。鈴と紫苑、えーと、誰だっけ？ファースト幼なじみ？と再会したって？」

「ああ、箒な」

「ホウキ……？誰ですか？」

「ん？　俺のファースト幼なじみ」

「ちなみにセカンドは鈴と紫苑な」

「ああ、あの……」

蘭と鈴は確かライバル視してたな

「そうそう、その箒と同じ部屋だったんだよ。まあ今は――」

あ～あ、いつもやるんだよな一夏は

蘭が突拍子もなく立ち上がる。後ろでワンテンポ遅れて椅子が床に転がった

「ど、どうした？　落ち着け」

「そうだぞ落ち着け」

ギンッ！と弾を睨み弾わ小さくなる。

ちなみに厳さんは蘭には甘いのだ。俺たちが同じように椅子を転が

そうものなら高速のおたまが飛んでくる。

「い、一夏さん？　同じ部屋っていうのは、つまり、寝食をともに……？」

「ごちそうさま」

俺は合掌して食器を下げてまた席に戻る

「紫苑は、相変わらず食べるの早いな」

「おまえらが遅いだけだ」

俺はお茶を啜りながら言う

今日はのんびり食べたつもりだったんだがな

「……。決めました」

俺は目だけで蘭を見る

蘭ちゃんなにを決めたんだい？

「私、来年ＩＳ学園を受験します」

がたたっ！

「お、お前、何言って――」

ビュッ――ガン！

俺の横を通り過ぎて弾の顔面におたまが直撃する床では申し訳なさそうに椅子が倒れて反動で揺れていた。

「え？　受験するって……なんで？　蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで出れて、しかも超ネームバリューのあるところなんだろ？」

一夏、その価値ある名前を失念してるのはお前だぞ

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「ＩＳ学園は推薦ないぞ……」

弾がよろよろと立ち上がる

「ああ、ないよ、実技試験しかないと思ったぞ」

「……」

無言でポケットからなにやら紙を取り出す蘭。それを俺に渡してくる

「ＩＳ簡易適性試験……判定Ａか、俺と同じか確か一夏はＢだったな」

「問題はすでに解決済みです」

「それって希望者が受けるやつだっけ？　たしか政府がＩＳ操縦者を募集する一環でやってるていう」

「はい。タダです」

タダはいい。　タダであればあるほどいい。そう言って頷いているのは厳さんだ
本当、蘭に甘いなー厳さんは

こほん、と咳払い。戻したばかりの椅子にちょこんとかける蘭

「い、一夏さんにはぜひ先輩としてご指導を……」

「一夏を先輩ねぇー、しかも指導か～蘭の能力が半減するな」

「なんだと紫苑！」

「ほんとの話だろ？　1年生専用機持ちのランキングで一番下だろ？　言っとくが俺が一番上な」

潜在能力的には一夏は高いみたいだ

「ぐっ！」

「まあ、2年になれば変わるだろ、蘭一夏に指導してもらえよ」

「い、一夏さん。いいですか？」

「ああ、いいぜ。受かったらな」

蘭が食いついた

「や、約束しましたよ！？　絶対、絶対ですからね！」

「お、おう」

勢いに少し引いたのか一夏は二回うなずいた。

「蘭、俺も指導してあるよ。」

「よろしくです」

「お、おい蘭！　お前何勝手に学校変えることを決めてんだよ！
なあ母さん！」

「あら、いいじゃない別に。一夏くん、紫苑くん、蘭のことよろしくね」

「あ、はい」

「え、はい」

五反田食堂の自称看板娘、五反田蓮さん。実年齢は永遠の２８歳だそうだ。いつもニコニコ笑顔で愛嬌があると実質以上に人を美しく見せると言うが本当だな。

「はい、じゃねえ！」

兄も大変だな、弟でよかったぜ

「ああもう、親父はいねえし！　いいのか、じーちゃん！」

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言う筋合いじゃねえわな」

「いやだって――」

「なんだ弾、お前文句があるのか？」

「……ないです」

「お前弱いなあ。　俺だったら相手が身内でもびしっと言うぞ。言うときは。」

「お前、千冬さんに勝てるのか？」

ジト目でみる

「すみません、前言撤回させていただきます。」

「だろうな」

「では、ごちそうさまでした」

合掌して、席を立つ。自分が使った食器は自分で片付ける。

「一夏」

ずずいっと顔を一夏に近づける　そして、俺たちに聞こえるような声で一夏に話しかける

「お前、すぐに彼女作れ。すぐ！」

「はあ！？」

「はあじゃねえ！　すぐ作れ！　今年――いや、今月中に！」

「弾、無理な事を言うな」

「無理じゃねえ！　いっぱい居るんだろ！」

「今はそういうのに興味ねえよ」

「相変わらずお前は…枯れた老人かっつーの。そんなんだから鈴が――」

ギンッ！と俺が弾を睨む

「？　鈴がどうした？」

「鈴は誰にもやらん！　特に弾には！」

「なんで、俺なんだよこの、シスコン野郎！」

「誤魔化すなよ、わかってるんだから。弾、鈴が好きなんだろ？」

「だからなんでだよ！！」

「弾、お前鈴が好きだったのか頑張れよ」

「ちげーよ」

「冗談はさて置き、おまえら早く食べろよ」

「冗談だったのかよ」

「当たり前だ、弾をお兄なんて、呼びたくねーよ」

「そうだな」

「……んで……えが……」

また、騒ぎ始めるぞ弾が

「うん？」

「何でおまえらばっかりモテるんだよ！？　ええい、この顔か！？　この顔がモテスリムか！？　スリム分はやるからモテ分をよこせ！」

また、訳の分からないことを！　それに俺はモテねーよ

「うるせえぞ弾！」

「はいっ。　すみませんでしたっ」

厳さんの一喝を受け、弾は流れるような動きで椅子の上に正座＆敬礼。教育のたまものだ。あるいは調教かもな。

「一夏、紫苑、あとで勝負しろ」

「いいけど。なにで？」

「仕方ない、やってやろう。それで、なにで？」

「エアーホッケー」

！？　あえて全敗のものを選んできた。

「中学のままの俺だと思うなよ、一夏、紫苑！」

俺は激戦の予感がした

「あー……手がだるい……」

「……同じく」

俺の予感が外れた。　またしても全勝は続いた。　てか弾、半分以上自殺点ってよ……。

「……」

時刻は６時過ぎ。俺たちは帰ってきた寮の自室でベッドに寝転がっていた。

「うーん……」

「どうした？　一夏」

「いや、箒のことなんだよ」

「あー、箒か箒ねえ……突然あんなこと言ったからなー」

「そんなんだよ、問題の学年別個人トーナメントか今月なんだよな」

壁にかけたカレンダーを見ながら言う一夏

「今月の末か、そこそこ行けるように頑張るか」

「俺も、千冬姉が恥をかかないくらいには活躍しないとな」

「そうだな」

「……」

「……」

しばらく無言になってしまった

「……紫苑、夕飯行くか」

「……そうだな、行くか」

一夏がベッドに弾みを付けて起き上がり、ドアまで向かうと

俺も起き上がり一夏の後ろを追う

一夏がノブに手をかけたところでノックが響いた。

「一夏、いる」

「おう」

ガチャリとドアを開けると、そこにいたのは鈴だった。

「い、いきなり開けないでよ！　びっくりするでしょうが」

凰　鈴音。俺の姉で中国代表候補生。ＩＳ『甲龍』の専属操縦者だ

「鈴姉、俺も居るんだがまあ仕方ないか」

俺はうんうんと頷く

「ちょ！紫苑！」

「紫苑、なんの話だ？」

「気にするな、こっちの話だ」

「そうなのか、ところで俺今から夕飯に行くんだが鈴はどういう用があったんだ？」

「ふふん。まさにそうじゃないかと思って誘いに来てあげたのよ。雨の日に捨てられている犬をかわいそうと思うくらいの優しさは、持ち合わせがあったからね」

俺たちは犬かよ

一夏も同じことを考えたみたいだ

「そりゃどうも。じゃあ食堂に行こうぜ」

「ええ」

「ああ」

3人並んで歩き出す。ちょうど夕飯の時間だからか、所々ドアが開いて寮生が出てくる。

「……」

相変わらずラフな格好だな、気にしないけど

「お。　織斑君と凰君だ。やっほー」

「ええっ!?　お、織斑君!?凰君!?」

誰だ?

あのぶかぶかのナイトキャプを着ている女の子はしかも袖があまってるし

「やー、おりむー。そして、初めまして紫苑君」

「その愛称は決定なのか?」

「……?」

「決定なのたよー。それよりさあ、私とかなりんと一緒に夕飯しようよ～」

「残念、一夏はあたしと夕飯するの」

「一夏、この子誰？」

「あー、ごめんごめん、私は～布仏　本音。のほほんさんと呼んでね。しおしお　あ、りんりんだー。勇気が出そうだね～」

ピク

「よ、よろしく本音さん」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

俺と鈴は軽くトラウマを刺激された

小学校の頃、鈴は名前のせいでクラスの男子からよくからかわれていた。中国人ということもあって、『リンリンってパンダの名前だよなー。双子の紫苑はしおしおで双子のパンダだな、笹食えよ笹』という具合に。

ちなみにその日俺と一夏で１０人を相手に大立ち回りをして、千冬さんにこっぴどく怒られた。

「まあ、鈴。落ち着けって。別に５人で食べてもいいだろ？」

「よくないけど……いいわよ」

うん？『ないアルよ』ってやつだろうか？　いかん、これも禁句なので口を滑らさないようにしなくては。

『中国人の口調が『アルよ』とかおかしいでしょうが！　考えたやつ誰よ！』

ていう風にキレられたし、紫苑には

『一夏、中国人でそんな口調したやつみたことないぞ？　一夏、知ってるなら今すぐ連れてきてよ？』

そんな風に冷たい目で睨まれたので、気をつけなくてはなら。

「ところで、そのかなりんって子はどこかに行っちゃったぞ？」

「おわー。ほんとだーいないー」

ラフラフな格好を見られて恥ずかしかったのか、さきほど自分の腕で体を抱くように隠しながら廊下の先へと消えていった。

「あー……待って～」

そしてのほほんさんもどこかにペタペタたと走っていく。うわ、遅い

「……」

「何だよ？」

「なに、鈴姉？」

鈴姉の視線に気づいた俺と一夏が聞く

「一夏と紫苑ってさあ、何？　モテてんの？」

「はあ？　どこをどう見てそう思うんだよ。男が2人しかいないから、珍しいってだけだろ」

「知らんな、興味ないし。それに恋愛系での、話で目立つのは嫌だからな」

「ふーん……。ま、いいけどね」

ほんとにいいのか鈴姉？

鈴姉が早足で食堂を目指すのであとを追う。

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑君と紫苑君の話よ」

「いい話？　悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？　絶対にこれは女子にしか教えちゃダメよ？　女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで――」

いつもながら、思春期女子で埋め尽くされた食堂はかしましい。

「ん？　なんだあそこのテーブル。えらい人だかりだな」

「トランプでもやってんじゃないの？　それか占いとかさ」

ほんと、かしましいな。

「えええっ！？　そ、それ、マジで！？」

「マジで！」

「うそー！　きゃー、どうしよう！」

「一夏」

「おう」

ちなみに俺の夕飯のメニューはチキンの香草焼きと山芋と野菜の煮物、だし巻き卵、それにほうれん草の赤だし味噌汁だ。カツオ節が最高にいい味を出していてうまい。
鈴も紫苑もほとんど同じメニューだったが、鈴はアサリの白味噌汁を選んで、紫苑はシジミの赤だし味噌汁を選んだ。　それを口に運びながら鈴が一言告げてくる。

「なんか年寄り臭いこと考えてんてしょ」

「考えてるな」

失礼な。

「いや、絶対そうだって。なんか一夏ってそういうこと考えているとき目細めてるじゃん。　なにあれ？　思い馳せちゃってんの？」

「ついでに、ぼーっとするな」

「う、うるさいな……」

なんでこいつらんなにジロジロ見てんだよ。まったく。

「箸で人を指すなよ。育ちが悪いって思われるぞ」

「まあ、実際大して良くないけどね」

「そうだな」

「そういう問題じゃねえって。おかしなクセは自覚的に直さないと

ダメだ。　大体お前ら昔それで千冬姉に怒られただろうが」

「う、うるさいわね……」

「……そうだっけ？」

「――一夏ってさあ」

「ん？」

「……。やっぱりなんでもない」

鈴姉ほんとにいいの？
いいって言うならいいけど

「……」

「……」

「……」

会話が切れたな

「ふぁー、眠い」

「お茶取ってくる。番茶いいよね？」

「お、おう。サンキュ」

「……うん…」

あまり、機嫌よくないな何故だろう？

「あ――っ！　織斑君だ！」

「「し～お～ん～」」

う？　この声は名鈴とエイミーだ

「えっ、うそ！？　どこ！？」

「紫苑、あの噂ってほんとな――――もがっ！」

「ねえねえ、あの噂ってほんと――もがっ！」

奥の方で十数名でスクラムを組んでいた一団が一夏に食堂に入ってきた名鈴とエイミーが雪崩れ込んでくる。　――噂って何だ？　すぐに取り押さえられたが、確かに今そう言ったような……。

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」

「――バカ！　秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人たちだし……」

1人が俺たちの前で大の字になってしまった通せんぼ、その陰でなにやら4人が小声でぼそぼそと喋っている。

「噂って？」

「なんだ？噂って？」

「う、うん！？　なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も３６５日って言うよね！」

う？　違うような

「な、何言ってるのよミヨは！四十九日だってば！」

うーん、それも違うような

「何か隠してない？」

一夏が聞いた

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ！？」

連携技を決めて即撤退。わずか二秒。一夏はぽかんと俺は首を傾げる

「なに？　またなんかやらかしたの？　特に紫苑」

鈴姉が戻ってきた。手には湯飲みが3つ持っていた

「何で俺が問題児扱いなんだよ」

「誰が問題児だ」

「問題児じゃないつもりなの？」

……。

……。

「ああ、お茶がうまい」

「だなー」

「逃げたわね」

失礼だの、少しは弟を信用しろよ。まったく

「ふー……やっぱり食後のお茶は落ち着く落ち着く」

「まったくだなー」

「……。ま、いいけどね」

しばらく、沈黙が続いたその沈黙を破ったは一夏だ。今日あった五反田のことをあれやこれやと話していたが、蘭の話になると次第に表情が曇り出した。

「……なに、あの子ＩＳ学園に入学するつもりなの？」

「そうらしいな」

「そんなこと言ってたよ。弾が反対してたけど」

「ふうん……」

「で、入学したときは俺が面倒見ることになったんだよ」

「ふーん……って、なんでよ！？」

バンッとテーブルを叩いて立ち上がる鈴。おっと、お茶が

「あんたねえ、いい加減女の子と軽く約束するのやめなさいよ！

責任も取れないのに安請け合いして、バカじゃないの！？　つうか

バカよ！　バカ！」

「うん、まったくだ」

「紫苑だって、約束したじゃねえかよ」

「俺は、責任取れるもん」

「うっ、その、だな？鈴、すまん」

「謝るくらいなら約束を――」

「あ」

「あ」

「あってなによ、あって。――あ」

「う？」

三人揃って『あ』って……。芸がないな。　ちなみに最初が一夏、次が箒、その次が鈴、俺だけ『う？』だ

「……」

あの箒なのだ。夕飯をとりにきたんだろうな、時間からして俺たちと鉢合わせしないように遅く来たみたいだが、俺たちがのんびりしすぎだみたいだ

「よ、よお、箒」

「な、なんだ一夏か」

「……」

「……」

ずっずず

俺はお茶を啜る

「何、あんたたち何かあったわけ？」

「「「いや！　別になにも！」」」

――しまった。　つい反応してしまった！

「なにその『明らかに何かありました』って反応。わざとやってんの？　しかも紫苑まで反応してるし」

「鈴姉、なんでもないよ」

ジト目でみてくる鈴を愛想笑いで返す

「そ、そうだぞ」

一夏も似たような返し方をしたら箒が不機嫌な顔になって、ぷいっと顔を逸らしてそのまま歩いていってしまった。

「あー……」

「じゃ、あたし部屋に帰るから」

「ん？　おう。誘ってくれてありがとな」

「……たまにはアンタから誘いなさいよ。まったく……」

はっきり言えよまったく。

俺ははあーとため息をつく

「うん？」

「なんでもない。じゃあね」

「じゃ、俺も先に部屋に帰る」

俺も鈴に並び、部屋に戻る

まさか、次の日あんな事になるなんて、思いもよらなかった。

「うーんよくね……た……？」

あたしが起き上がり背伸びをしたら、紫苑がいたしかも、あたしのベッドの中に

「紫苑、起きなさい」

「う～？　あ、姉ちゃんおはよー」

背伸びをして、あたしに朝の挨拶をする

「お、おはよー、じゃないの！　なんで此処にいるのよ／／／！」

「？、なんで赤くなってるの？……あ、わかった！　裸だからか！？」

向かいあっていたため、紫苑があたしを見てくるしかも、胸を

バシガン

「いて！」

殴って蹴ってきた

「なにするんだよ！」

「アンタが裸を見たからよ／／／！

鈴が布団を纏う

「別に、姉弟なんだからいいだろ？　見られて困る体してないんだからよ」

バシバシガン

「ぐはっ！」

「どの口言うの？」

「ごめんなさい」

土下座で謝る

「わかったなら、さっさと出て行きなさいよ！」

「はいはい、あ、あと鈴姉、胸成長してないね」

「まだ、言うか／／／！」

枕を投げる前に部屋から脱出する

俺が出たあと、枕がドアに当たった音が聞こえた

「おい、紫苑。鈴になにしたんだよ」

「う？　お前には絶対出来ないこと、姉弟だから出来ることをした。」

食堂、俺を挟んで鈴が右隣一夏が左隣に並んでいる

正直左利きの俺は左手と右手が当たるからこの並び方は嫌なんだよ。

まあ、慣れてるからいいけど。

「だから、具体的になにをしたんだよ！」

「簡単に説明しよう、鈴の裸を見た、それだけだ」

「は？」

「わからないなら、わからないでいい。じゃあ、先に行くわ」

トレーを持ち立ち上がる

「ああ、今日は合同でＩＳ模擬戦闘があるからな」

「あ、そうか。じゃ、あとでな。　鈴姉先行くよ」
「あとでな」
「……」
鈴姉は俺をチラっと見るだけ
（まだ怒ってるし、あとでなにか奢るか）
俺はトレーを下げてそのまま食堂をあとにした

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」
「え？　そう？　ハヅキ社製のってデザインだけって感じしない？」
「そのデザインがいいの！」
「そうか、今日はＩＳスーツの注文開始日か」
「そうよ、まあ私たちには関係ないけどね」
「そうね」
俺の右隣に名鈴左隣にエイミーがいる
「確かにな、持ってるし」
「そういえば紫苑君のＩＳスーツってどこのやつなの？　織斑君と

は違う型だけど」

「特注品だって。鈴姉と同じラボが作ってる」

「そんなんだー。」

また、しばらく騒ぎ始める

「……」

ムスっとして、俺の右隣の席に座っている鈴が俺を睨む

「紫苑、鈴になにかしたの？」

「姉弟だけの秘密だ」

名鈴がため息混じりに言う

「まあ、いいけど。さて、そろそろ席に戻るね」

「ああ」

「じゃ、私も戻る」

そういって、名鈴とエイミーは自分の席に戻る

「鈴姉、機嫌なおしてくれよ」

「……」

「@クルーズの一番高いパフェ奢るから」

ピク

反応有りだな

「いいなら、いいけど。蘭に奢ってやるから」

「わ、わかったわよ。許してあげるわ」

「そうか、じゃ今週の土日どっちかね」

「わかったわ、空けとく」

「はーい、ＳＨＲ始めるよ～」

ピク

俺はなんか嫌な予感がしたためクラスを出る

「凰くん！」

「トイレだそうです」

念のため鈴にトイレと、言っといて貰い１組、一夏のクラスに向かうそこには、２人の転校生がいた銀髪の眼帯の女の子問題は、もう１人の金髪子が男だった

あ、入ってたぞ

俺は駆け寄り見つからないように隠れる
千冬さんにはばれたが、見逃してくれるみたいだ

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことが多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の1人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する

「お、男……」

誰かがつぶやいた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が2人いると聞いて本国より転入を――」

その、シャルルってやつが、教室をキョロキョロする

「もう1人は二組だ」

「そうですか。」

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ラウラ？　確かドイツの軍黒ウサギの隊長の名前だよな？なぜここに

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

一夏と目があったぞ

「！　貴様が――」

あいつ、一夏を殴る気だな

ガシ！

「一夏をやるのは、この俺だぞ。ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長！」

俺は、ラウラの右腕を掴め

「っ！　　貴様も！」

「逆恨みも、いい加減にしろよ」

左ストレートをもう一つの腕でとめる

「私は認めない。絶対に！　認めない」

「貴様に認められたくねぇよ」

「紫苑！　そいつと知り合いなのか？」

「あの日のことでちょっとな」

「あの日のことか」

「貴様、離せ！」

ラウラは両腕を振り払いナイフを出してくる

「貴様はここで殺す！」

俺は、両腕の袖口に入れてある鉄の扇子をだす、バトルファンだ
それでナイフをとめる

ガキィッン

「まだまだ、青春をおおかしたいんでね。ここで死ぬ訳にはいかないんだよね。俺は！」

「やめんか！　貴様ら！」

千冬さんの声でラウラはナイフをしまう、それを見て俺も扇子を袖口に戻す

「……ふ、覚悟していろよ凰　紫苑！」

「それはこっちのセリフがラウラ・ボーデヴィッヒ！」

すたすたと空いている席に座り腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。それをみて俺は1組を出る

「……ゴホン。シャルル君、物理の問題です」

「なんでいきなり君付け……？」

「いいから。高速下での運動における物体ａが受ける対抗力は？」

「えっと、物体ａの速度に二乗――」

「そういうことだ」

「無駄話なんかしてないで、とっとと行けよ」

俺が第2アリーナの更衣室に入ると無駄話が聞こえなのでため息混じりに言う

「あ、紫苑。さっきはありがとな」

「あ？　気にするな」

俺は服を脱ぎロッカーにしまう

「お前、なんでそんなに持ってるわけ？」
俺が扇子やらヌウチャクやらいろいろとはいっているのをロッカーにしまっていると一夏きかれた

「気にするな、行くぞ」

「あ、僕シャルル・デュノアです。シャルルと呼んでください」

シャルルが手をだして来たが無視した

「一夏、こいつにあまり関わるなよ」

「なんでだよ！　いい奴じゃねぇかよ」

「こいつは女だぞ？」

「…っ！」

「そんなバカな！」

シャルルは息を詰まらせる

「わからないならいい。先に行くぞ」

俺は更衣室を出てグラウンドに向かう　その後ろから一夏とシャルルがついて来た

「おい、紫苑。冗談はやめろよ、シャルルが女なんてあり得ないだろ」

一夏が後ろから言うがすべて無視

「おい、紫苑！　聞いてんのかよ！」

「うっさいなー聞いてねぇよ」

一夏とあーだこーだ言ってる間にみんなが待つところについてしまった

無事には着かなかったけど

「遅い！」

鬼が腕を組んで待っている

「くだらんことを考えてる暇があったらとっとと列に並べ！」

ばしーん！　と俺と一夏の頭に主席簿が振り落とされた

「……なぜ？俺まで！」

一夏のせいだ！

ぶつぶつ言いながら列に並ぶ

「アンタ、なにやってたのよ！」

隣は鈴だったそして前は一夏だ

「一夏に突っ込みいれてたら時間がかかった」

「アンタバカね、こんなバカほっときなさいよ」

「そうですわ。紫苑さんまでバカになる必要ないですわよ」

なんと、一夏の隣はセシリアだった。

「――安心しろ。バカは私の目の前にもいる」

バシーン！

蒼天の下で今日もまた主席簿アタックが響くのだった。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

「くうっ……。何かというとすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

「……なんで俺まで……」

どかっ！

「なんとなく何考えているかわかるわよ……」

鈴が一夏を蹴った

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活気の溢れんばかりのやつもいることだしな――鈴音！紫苑！」

「なんで！また俺が！？」

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだそれに双子ならコンビネーションもいいだろ。いいから前に出ろ」

「双子だからってコンビネーションがいいわけじゃないんだけど」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「鈴音すこしはやる気を出せ。――アイツにいいところを見せられるぞ？」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」

「……はあー、単純バカ」

「なによー！　このバカ紫苑！」

「ふあー、本当の話だろ？　で、織斑先生、対戦相手は？」

「もうすぐ来る」

キイィィン……。

ん？　なんの音？　空気を裂く音にすごく似ているんだが？

「あああああーっ！　ど、どいてください～っ！」

え？　一夏のところに

ドカーン！

もう遅かった、謎の飛行物体の突撃に、一夏は数メートル吹っ飛ばされた後ゴロゴロと地面を転がった。

「ふう……。百式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事――」

「う？」

「あ、あのう、織斑くん……ひゃんっ！」

「……織斑先生？」

「なんだ？」

「大丈夫なんですか？」

「……」

無言ですか！

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！　場所だけじゃなくてですね！　私と織斑君は仮にも教師と生徒でですね！　……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはとても魅力的な――」

「――ハッ！？」

一夏が山田先生から体を離す。刹那、一秒前まで一夏の頭があったら場所にレーザー光が貫いた

「ホホホホホ……。　残念です。　外してしまいましたわ……」

いつの間にかブルーティアーズを展開していたセシリアが笑うだが額には血管が浮き出ている
セシリア・オルコット（大逆鱗バージョン）だ

ガシーンと音が隣からしたので振り向くと鈴が双天牙月を連結して、投擲した

「一夏ぁー！」

「うおおおっ！？」

ためらいなく一夏の首を狙った

あー怖い怖い

一夏は間一髪のけぞってかわした、だがそのまま仰向けに倒れた。
双天牙月は帰ってくるのだ

終わったな

「はっ！」

ドンッドンッ！

短く二発、火薬銃の音が響く。　弾丸は的確に双天牙月の両端を叩き、その軌道を変えた

キンッキンッと地面に薬莢が跳ねる　撃ったのはなんと山田先生だ

「……」

みんな驚いたみたいだ

ＩＳ学園の教師は各国の代表もしくは候補生がやっている

でも、山田先生がね～あのバタバタした子犬みたいな人がね～

「山田先生はああ見えて元代表候補だからな。　今ぐらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。　それに候補生止まりでしたし……」

ぱっといつもの雰囲気に戻る山田先生

「さて、双子の候補生。さっさとはじめるぞ」

「はいはい」

俺は青龍を展開する

「二対一は、さすがにそれは……」

「安心しろ。すぐに負ける」

負ける、と言われたのか気に障ったのか、鈴は再びその瞳に闘志を

たぎらせる。
なんか嫌な予感がするんだけど

「では、はじめ！」

号令と同時に鈴は飛翔する。俺は鈴を一度目で見て、山田先生と同時に空中へと躍り出た。

「足を引っ張らないでよ鈴姉」

「それは、こっちの台詞よ。それにさっきのは本気じゃなかったしね！」

「さて、双子のコンビネーションをみせてやるか」

「い、行きます！」

目つきがさっきと同じく鋭く冷静なものへと変わっている。先制攻撃をしたのは鈴だったが、それは簡単に回避される。

鈴姉、これじゃコンビネーションとれねえじゃかよまったく

俺は遠くから龍砲で鈴の援護射撃をする

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみろ」

「あっ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明を始めた。

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用機、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち七カ国でライセンス生産、１２カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え『マルチロード・チェンジ』を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことで知られています」

「ああ、いったんそこまででいい。……終わるぞ」

地面に落下して煙の中からふたつの影が現れる

「鈴姉！　なんでそんなに突っ込むんだよ！　しかもばかすかと衝撃砲撃つんだよ！」

「アンタこそ！　なんですぐに蒼龍牙月を投擲するのよ！」

「鈴姉が突っ込むからだよ！」

「突っ込まなかったら、意味ないでしょうが！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

なんというか、どっちの主張もそこそこあっているので余計にみっともない感じだった。

専用機持ちと代表候補生のブランド株価がぎゅんぎゅん落ちていっている音が聞こえた気がする。しかし無情にもストップ安はないらしい。

結局ふたりのいがみ合いは一組二組の女子のくすくす笑いが起こるまで続いた。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以降は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんがみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰姉弟、李、エドワードだな。では８人のグループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

千冬さんが言い終わるや否や、俺、一夏、シャルルに一気に二クラ

ス分の女子が詰め寄ってくる。

「紫苑君、一緒にがんばろう！」

「織斑君も、一緒にがんばろう！」

「わかんないところ教えて～」

「デュノア君の操縦技術をみたいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？　同じグループにいれて！」

なんていうか、予想以上に繁盛ぶりだな

「この馬鹿者どもが……。　出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！　順番はさっき言った通り。　次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド百周させるからな！」

千冬さんの声で蜘蛛の子を散らすごとく移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからず出来上がった。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふうっとため息を漏らす千冬さん。それにバレないようにしながら、各班の女子はぼそぼそとおしゃべりをしていた。

「……やったぁ。織斑君の班っ。名字のおかげねっ……」

「……紫苑君の班っ。やったぁね。あとで織斑君の話聞かせてよっ
ちなみに私フリーだよ！……」

「……凰さん、よろしくね。あとで織斑君の話聞かせてよっ……」

「……デュノア君！わからないところがあったら何でも聞いてね！
ちなみに私はフリーだよ！……」

「…李さん、よろしく、あとで紫苑君の話いろいろ聞かせてね……」

多いので以下省略

「……」

唯一おしゃべりがないのはラウラの班だ
張り詰めた雰囲気。人とのコミュニケーションを拒むオーラ
俺はつい、ラウラたちの班に近づいてしまった。

「おい、ラウラ！　なんだその態度は、お前が嫌いなのは俺と一夏
だろ、他の奴らは関係ない！普通に接しろよ！」

ラウラは俺をチラリと見てその重い口を開く

「貴様には関係ないだろ、私がどんな態度でいようとな」

「そうだな、だがな、あんまりにも他の子が可哀想だからな」

「貴様が他人の心配をしているほど、暇なのか？この雑魚が」

「……ふっ、力が全てだと思ってる貴様よりは、俺は、はるかに強

いよ。いや、俺だけじゃない、ここにいるみんな貴様よりはるかに強いよ」

「ならば試してみるか」

「ああ、いいぜ。織斑先生、やっていいですか？」

俺は千冬さんをみずに聞く

「ダメだ、と言ってもやるだろ」

千冬さんは、はぁとため息を漏らす

「ああ、こいつとは、ここで決着を付けなきゃ気が済まない」

「だだし！　なにかあれば私がすぐに止めに入るわ。わかったな」

「ああ、わかった。　ラウラ、大好きな教官から許可が下りたぞ。遣るか！？」

「ああ、無論だ」

俺とラウラはＩＳを展開して空中に飛翔する

「先手はくれてやろう、どこからでもかかってこい」

「そんじゃ、遠慮なくいかせてもらうよ！」

俺は龍砲を撃ちながらラウラに近づく手には蒼龍牙月を二刀流状態で展開してある

「ふ、雑魚が」

ラウラが手を突き出すと俺の身体は動かなくなる

「チッ、ＡＩＣか」

「ふ、無能ではなかったみたいだな、だが死ね！」

左肩についているレールガンを俺に向ける

「チッ！」

ニヤリと口元を釣り上げる

「グウウ！」

ラウラの後ろから蒼龍牙月が連結してない状態でラウラの左肩のレールガンと右肩を切り裂く右肩はシールドエネルギーで阻まれるが左肩のレールガンは切り裂かれ爆発する

「後ろがおろそかになってるぞ？」

俺は蒼龍牙月を回収して連結する

「チッ小癪な」

「カウンターを狙ったんだかな少しズレたな」

「貴様！」

ラウラがワイヤーブレードを六本出して攻撃して来る

「そのワイヤーブレードは予想外だな、それに数も多いだけど！」

蒼龍牙月を連結を外して二刀流にする。そして、ワイヤーブレードを一本一本見切りながら切り裂いていく

「チッ、貴様！」

「そんだけか？　あ、言い忘れたが俺は生身で千冬さんと張り合えるんだぞ？まあ、まだまだだけどな」

「だから何だって言うんだ、今はＩＳを装備している」

「そうだな、だけど！」

瞬間加速を使ってラウラの前に行く

「っ！　速い！」

「俺のＩＳ青龍はスピード重視と安定性を兼ね備えたＩＳだ、一夏のＩＳと互角いや、それ以上のスピードが出せるんだよ。まあ、そんなことするとすごく燃費悪くなるけどな。じゃ、死ぬ！」

俺は蒼龍牙月二本を振り下ろす

「やはり、無能だったな」
ラウラが手を突き出しＡＩＣを発動して俺の動きをとめる
「いや、そうでもないぞ」
（こいつ、俺の腕だけをピンポイントでＡＩＣを使ってやがる、龍砲は使えるか？）
俺は両肩のアーマーがスライドさせた
（よし、使えるな、両方同時はいくらなんでもとめられないだろ）
「「これで終わりだ！」」
ラウラがプラズマ手刀を展開
俺は龍砲撃つラウラはプラズマ手刀を振り下ろす
ドンッと音が鳴り煙が上がる
煙が晴れると俺の首筋にラウラの右手のプラズマ手刀、ラウラの首筋に俺の蒼龍牙月が触れていた
「そこまでだ！　さっさと降りてこい！」
「ふん」
ラウラはプラズマ手刀をクローズして地上に戻る俺も蒼龍牙月をク

ローズしてラウラに続き地上に戻る

「この決着は学年別個人トーナメントで付けるんだな。では午前の実習はここまでだ。　午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

俺とラウラがやり合ってる間に本来の授業をやっていたらしい

「くっ、強いよ、あれほど強いとはな」

想龍は使わずに戦ったが互角いや、それ以上にラウラは上だ

「シャルル、紫苑、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてから、先に行って着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

「……あ、行くか」

「ん？　いや、別に待ってても平気だぞ？　俺は待つのには慣れ――」

「い、いいからいいから！僕が平気じゃないから！　ね？　先に教室に戻っててね？」

「お、おう。わかった」

俺は青龍のコンソールを見ながら一夏たちの話を聞く
一夏が動き出したのを見て俺も動き更衣室へ向かった。

「さて、今日は1人だからな～どうするかな～」

一夏は箒と約束があると言ってたから箒と昼を食べるみたいだ、鈴は邪魔しに行ったみたいだ、なので今日は1人で昼を食べることになった

「あ、紫苑。こんなところにいた」

「あ？」

俺が廊下を歩いてると名鈴に呼び止められた

「紫苑の分のお弁当作ってきたの、一緒に食べよ？」

「ああ、食べるか。お前の料理は美味いからな」

「へへ／／／　ありがとう紫苑。そういう紫苑だって料理うまいでしょう？」

名鈴は掃除、洗濯、料理、すべて完璧だ。鈴姉とはまったく違うまあ、鈴姉もそこそこ出来るけどな

「そこそこな、屋上にでも行くか」

「そうだね」

名鈴がひっついてきたが今日は特別だな

俺は名鈴を連れて屋上に向かう途中で今度はエイミーに捕まった。
しかもエイミーも俺の分の弁当を作ってきたみたいだ

「こら、名鈴！　紫苑にくっつくな！」

「エイミーだってくっついてるでしょ！」

「両サイドで喧嘩するな！　まったく」

俺は両サイドに女の子を付けながら屋上に行く

「お、紫苑！なんか凄いことになってるな」

屋上のドアを開けると目の前に一夏たちがいた、一夏、箒、鈴、セシリア、シャルルだ

「お前ら、ここにいたのかてっきり教室かと思ったぜ……てか、名鈴、エイミーいい加減離れてくれないか？」

「えー、いいじゃん！寄り戻したんだし」

そうだっけ？

「戻した記憶ないぞ」

「そうだっけ？」

「アンタら寄り戻したのね」

鈴姉が酢豚を食べながらこちらを見る

「戻してねえよ。　鈴姉、少し酢豚くれよ」

「たく、しょうがないな～はい　あーん」

「あーん」

「紫苑、なにやってるのよ！」

「なにって食べさせて貰った」

俺は名鈴をジト目でみる

「そんなこと、みればわかるよ！　して欲しいなら私がしてあげるから来なさい！」

「紫苑に食べさせるのは、私よ！」

「おい、引っ張るなよ！」

俺は2人に引っ張られて、屋上の一番隅のテーブルに座らされるその、両サイドには名鈴とエイミーがいる

「はい紫苑お弁当」

「紫苑私のお弁当も食べて！」

右から名鈴左からエイミーが弁当を渡してくる

「ありがとう、じゃまずエイミーからな」

俺はエイミーの弁当の蓋をあける

「お～」

アメリカだから、ハンバーガーとかが入ってるかと思ったけど、普通の弁当だった。

「す、少し失敗しちゃったの」

「そうなのか、いただきます」

「どうぞ」

合掌して卵焼きを食べる

「どう？」

「いいんじゃない、美味しいよ」

「そう、ありがとう！」

「ほら、私のも食べなさいよ！」

名鈴がミートボールを箸でつまみ俺の口に突き出す

「自分で食べられる」

「いいから！はいあーん」

「あーん」

「美味しい？」

「ああ、美味しいよ」

「あー、ずるい！私もする！」

エイミーがタコさんウィンナーを箸でつまみ口に突き出してくる

「はい、あーん」

「自分で食べられるのだが、あーん」

「美味しいでしょ？」

「ああ、てか、俺ばっか食べてるからおまえらも食べろよ」

「う、うんその紫苑……／／／」

「ん？」

なんだ名鈴のやつ

「食べさせて……くれない／／／？」

「ずるい！私も！」

「2人、わかったから。一回だけな」

「うん」

「わかってるわよ」

「じゃ名鈴からな、はい、あーん」

俺は名鈴の弁当から唐揚げを一口サイズに切り口元まで持ち上げてやる

「あ、あーん／／／」

「美味しいだろ？」

「う、うん／／／」

「じゃ次はエイミーな」

「え、あ、うん」

今度はエイミーの弁当から卵焼きを一口サイズに切り口元まで持ち上げてやる

「はい、あーん」

「あ、あーん／／／」

「これで、満足かな？」

「う、うん／／／」

「は、はい／／／」

2人は頬を紅くしながら答える

「さて、さっさと食べようか」

「そ、そうだね／／／」

「早くしないと授業始まっちゃうしね」

名鈴まだ照れてるし

そんなことを考えながら、雑談を混ぜながら楽しく昼を終えた

「じゃあ、改めてよろしくな」

「うん。よろしく、一夏」

「さて、まとめ終わったか」

夜。夕飯を終えてシャルルが一夏の部屋になったので俺は自分の荷物をまとめていて今終わったところだ

「お疲れ様。はい、お茶」

シャルルがくれたお茶をありがたく貰い椅子に座る

「それにしてもごめんね。僕がきたから、引っ越すことになっちって」

「別に」

「シャルル、大丈夫だよ。紫苑はシスコンだか――」

ザク

一夏の前に扇子が通かして、壁に刺さる

「すまん、すべった」

俺は扇子を回収して再び椅子に座る

「あぶねぇな！」

「悪い。さて、そろそろ行くわ」

「おう。明日な」

「明日ね紫苑君」

「ああ、明日」

俺は荷物を持って部屋を出て、鈴が待つ部屋に戻った

ボーイ・ミーツ・ボーイ（後書き）

まとめて書いたので、次はブルーディイズ・レッドスイッチです。
では、次回にお会いしましょう

番外編、もしも。原作と同じようにセカンド幼なじみとして、鈴と紫音が転校し

気分転換です

紫苑の設定は変わりませんのでご了承ください

番外編、もしも。原作と同じようにセカンド幼なじみとして、鈴と紫音が転校し

「ふうん、ここがそうなんだ・・・・・」

「ここ以外にどこにあんのよ」

「うっさいわね。わかってるわよ」

夜。ＩＳ学園の正面ゲート前に小柄な体に不釣り合いなボストンバックを持った少女その隣に少女より少し大きい体に同じボストンバックを持った少年が立っていた。
まだ暖かな４月の夜風になびく髪は、左右それぞれ高い位置で結んである。肩にかかるかかからないくらいの髪は、金色の留め金がよく似合う艶やかな黒色をしていた。そしてその隣の少年は長い髪をただ流している

「てか、髪、留めなさいよ」

「留めるのねぇもん」

「仕方ないわね・・・・これ使いなさい」

少女がしている物と同じ色の留め金を２つ渡してくる

「何個ストックあるわけ」

「６個かな」

「そんなに、あ、あと一つでいいよ。」

少年は後ろ髪を一つにたばねて留め金を低い位置で留めたポニーテールだ
留め金を返す

「あたしと、被るのは少し困ると、思ったけど、よかったわ」

「本当は被せたかったんだけどね……てか、受付は？」

「えーと、受付ね。どこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。そのくしゃくしゃになった紙を見た隣の少年はうわ、って顔をする

「一階総合事務受付……って、どこにあんのよ」

文句を言って紙を上着のポケットにねじ込む。また中でぐしゃっと言う音が聞こえたが、もちろん少女は気にしない。　隣の少年はまたうわ、って顔をする。

「自分たちで探せばいいんでしょ、探せばさぁ……行くわよ」

「はいはい」

ぶつくさ言いながらも、その足はとにかく動いている。思考より行動。そういう少女なのだ。隣の少年な、やれやれと感じであとをつ

いていく

「ったく、出迎えがないとは聞いてたけど、ちょっと不親切過ぎるんじゃない？　政府の連中にしたって、異国に15歳を放り込むとか、なんか思うところあるわけ？」

「知らん、俺に聞くな。それに異国って言うのか？まあ、いいけどね」

二人は、日本人に似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。とはいえ、二人にとっては日本は第二の故郷であり、思い出の地であり、因縁の場所でもある。

「だから……でだな……」

ふと、声が聞こえた。

「ちょうどいいや。場所聞こっと。　行くわよ」

少女が小走りしたので少年も追いかける

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

「この声、一夏じゃん」

少年は足を止めた少女に追い付き言う

「いち――」

「一夏、いつになったらイメージ掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特過ぎるんだよ。なんだよ『くいって感じ』って」

「……くいって感じだ」

「だからそれがわからないって――おい、待てって箒！」

「誰？　あの女の子。なんで親しそうなの？　ってなんで名前で呼んでんの？」

「……」

少年は少女から少し離れるそれからすぐ、総合事務受付は見つかった。アリーナの後ろにあるのが、本校舎だったからだ。灯りがついていたので、そこだとわかった。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、凰鈴音『ファン・リンイン』さん、そして二人目の男の子の凰紫苑『ファン・シオン』さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあって意識は届かない。少女――鈴音は、見るからに不機嫌ですとばかりに唇を尖らせながら聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？　一組よ。凰さんたちは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。　やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

噂好きは女性の性。その体現のような事務員の姿を冷ややかに見ながら、紫苑は呟き鈴音は質問を続ける。

「あいつがクラス代表ねぇー」

「二組のクラス代表って、もう決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？　ええと……聞いてどうするの？」

鈴音の態度に少しおかしなところを感じたのか、事務員はすこし戸惑ったように聞き返す。

「お願いをしようかと思って。　代表、あたしに譲ってて――」

にっこりとした笑顔には、ばっちり血管マークがついていた。

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？　しかも二人」

朝。席に着くなりクラスメインに話しかけられた。　入学からの数週間で、それなりに女子とも話せるようになったのは大きな前進と言えるだろう。クラスでひとりぼっちとか、普通に寂しいからな。

「転校生？　今の時期に？」

今はまだ４月だ。なんで入学じゃなくて、転入なのだろう。しかもこのＩＳ学園、転入はかなり条件が厳しかったはずだ。試験はもちろん、国の推薦がないとできないようになっている。ということはつまり――

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん、それって二人とも？」

「そう」

候補生といえば。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合う。イギリス人ってもしかして全員このポーズが似合うように出来てるのか？

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？　騒ぐほどのことでもあるまい」

あれ、さっき自分の席（窓側の最前列）に行ったはずの箒が、気がつけば側にいた。さすがに箒も女子、噂に敏感ということなのだろうか。

「どんなやつらなんだろうな」

代表候補生っていうからには強いんだろう。　それにやっぱりセシリアみたいなやつらなんだろうか。あまり気位が強いやつらだと、正直疲れる。　まあ、他のクラスだから関係ないか。

「む……気になるのか？」

「ん？　ああ、少しは」

「ふん……」

聞かれたことに素直に答えたら、なぜか箒の機嫌が悪くなった。むすっという擬音がよく似合う表情をしている。なんだろう、最近やたらと機嫌が悪かったり良かったり、忙しいやつだ。情緒不安定なのか？

「今のお前に女子を気にしてる余裕があるのか？　来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そう！　そうですわ、一夏さん。　クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持

っているのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから」

『だけ』という部分をえらい強調された。……でもまあ、確かにそうか。他のクラスメインじゃ、訓練機の申請と許可、整備に丸1日かかってしまうから、手っ取り早く模擬対戦するならセシリアに頼むのが早い。ちなみに、クラス対抗戦とは読んでそのまま、クラス代表同士によるリーグマッチだ。

本格的なＩＳ学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためにやるらしい。また、クラス単位での交流およびクラスの団結のためのイベントだそうだ。やる気をださせるために、1位には優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られる。なるほど、女子が燃えるわけだ。

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

セシリア、箒、クラスメインと口々に好きなことを言ってくれる。そうは言っても、ここ最近はＩＳの基本操作でつまずいていて、とてもじゃないが自信に満ちた返事はできない。（最初に動かしたときはすごく馴染んだんだなぁ……）

あのとき感じた一体感、まるで世界が生まれ変わったような感覚は今のところない。それでも動かしただけ操縦になれていくのは、百式が俺の個性に対して最適化をしてくれているから……らしい。

俺の周りはひとりふたりと集まって、あっという間に女子で埋め尽

くされた。これもそろそろいつものパターンなので、慣れた。
しかし、女子というのは本当に噂好きだな。俺にはついて行けん

「織斑くん、がんばってねー」

「フリーパスのためにもねー」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

やいのやいのと楽しそうな女子一同に気概をそぐわけにもいかないので、俺は「おう」とだけ返事をする

「――その情報、古いよ」

ん？　教室の入り口からふと声が聞こえた。なんか、すげえ聞いたことのあるような声だが……。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは――

「鈴……？　お前鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く左右に揺れた。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「そうだぞ、鈴姉。似合わねえぞ。　あと俺も中国代表候補生ね」

俺が鈴の後ろから現れると一組の皆さんは『え？』って顔をする

「んなっ……！？　なんてこと言うのよ、アンタたちは！」

「え？、もうひとりの子って男？」

「俺が女に見えるか？　見えるなら眼科に行くことをおすすめするよ」

「きゃ……」

「……」

「きゃあああああ――――っ！」

どうして、そんなに騒ぐかな？

「男子！　二人目の男子」

「クール系！　いじめられたくなるタイプ！」

「紫苑、なんでお前がここにいるんだよ」

「あ？　そんなのお前が聞くのかよ」

「じゃあ、お前もＩＳを動かしかのか？」

「ああ、鈴姉を向かえに行った施設で動かしてしまったよ」

「じゃあ、なんで中国代表候補生なんだ？」

「こっちの事情だ気にするな。ついでに俺も専用機持ちな」

俺は左手の手首のＩＳ（青龍）を見せる

「てか、なんであたしを無視するのよ！」

鈴姉が俺の前で切れた

「おい」

「あ？」

「なによ！？」

バシンッ！

聞き返した鈴と紫苑に強烈な出席簿打撃が入った。――鬼教官登場である。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「ち、千冬さん」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すいません……」

「へいへい、わかってますよ」

バシンッ！

「いって！　すぐに殴るなよな！」

「お前が悪いだろ、それになぜ正体をばらしている」

「隠すのがめんどいから」

「正体？紫苑ってなんだ？」

「それもこっちの事情だ気にするな」

「またあとで来るからね！　逃げないでよ、一夏！」

「行くぞ鈴姉！織斑先生がにらんでる」

「わかってるわよ」

俺と鈴は二組へ向かって猛ダッシュ。した

「待ってたわよ、一夏！」

「全然待ってないが、遅いぞ一夏」

鈴が一夏の前でどーんと立ちふさがってる

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！　大体、アンタを待ってたんでしょうが！なんで早く来ないのよ！」

「たく、自分勝手だな鈴はそれに食券買って待ってればいいのに。あ、一夏俺の食券もついでに出してくれ」

俺は食券を一夏に渡す

「おう、わかった」

一夏はそれを受け取り自分のと一緒に食券をおばちゃんに渡す。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「そこそこにな」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

「鈴姉、俺には看病してくれないくせに」

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！　一夏さん？　注文の品、できましてよ？」

やけに、大袈裟に割り込んできたな……わかった一夏のやつ後ろの二人にもフラグを立てたのか、まったく、やれやれだ

「紫苑、お前の」

「ああ、サンキュ」

一夏から鈴と同じラーメンを受けとる

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

俺、鈴も含めた全員が一夏のあとをついてテーブルまで行く十人近いので移動だけで時間がかかる

なんか、金魚のフンみたいだな……おっと、食事中だったなスマン

「鈴、紫苑、いつ日本に帰って来たんだ？　おばさん元気か？　鈴はいつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「そうだぞ　なんで使ってんだよ」

人のこと言えねえか

「私はアンタの方がびっくりしたわよ。目の前で起動させたしね」

「でも、鈴姉と同じ学校にこれて、よかった」

鈴に引っ付く

「こら、引っ付くな！」

「いいじゃん、姉弟なんだし……あ、もしかして弟に感じてるの？嬉しいな～」

「な／／／　そんなわけないでしょう！」

「おまえら相変わらずだな。」

「一夏も鈴に抱きつきたいのか？　でも。鈴は俺専用だから駄目だよ」

「ちげぇーよ。　お前のシスコンぶりが、かわらねぇなっておもってな」

「誰が専用よ。ばか紫苑」

「えー、鈴姉のいけずー」

ぎゅーっと鈴を抱きしめる

「だから、やめなさい／／／」

「えー、やだ」

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！　一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

あ、さっきの人たちだ

さっきの人たちがテーブルを叩いて、多少棘のある声で一夏に訊いてくる。他の一夏のクラスメイトも、興味深々とばかりに頷いた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

やっぱり、鈍感か

「はぁー」

俺はため息をもらしながら、鈴から離れる

「……」

「？　何睨んでるんだ？　そして、紫苑は何ため息もらしてんだ？」

「なんでもないわよっ！」

「なんでもねぇよ」

「幼なじみ……？」

怪訝そうな声で聞き返したのは俺と同じようにポニーテールの女の子だ

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだったろ？　鈴と紫苑が転校してきたのは小五の頭だよ。　で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

じゃ、入れ違いに引っ越しきたのか

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？　小学校からの幼なじみで、俺が通ってた剣術道場の娘」

「へー」

「ふうん、そうなんだ」

鈴がじろじろと箒と呼ばれた女子を見る。箒も負けじと鈴を見返す。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

うわ。火花が！　俺に害がないといいけど

「ンンンッ！　わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん、凰紫苑さん？」

「「……誰？」」

「なっ！？　わ、わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットでしてよ！？　まさかご存じないのいの？」

「うん。　あたし他の国とか興味ないし」

「同じく」

「な、な、なっ……！？」

金髪縦ロールの女子セシリアが顔を真っ赤にして怒ってる

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわよ」

「そ、でも戦ったらあたし勝つよ。悪いけど強いもん」

あーあー鈴の悪い癖でたよ、素で言ってるからたちが悪いんだよな

「……」

「……」

「い、言ってくれますわね……」

俺と鈴は何食わぬ顔でラーメンをすすり。箒は箸を止めた。セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめている。

「一夏」

「おう」

「アンタ、クラス代表になんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……」

俺はどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む鈴。も同時にどんぶりを持ってスープを飲む。鈴はレンゲを使わない。「女々しいからイヤ」らしい。　鈴らしいなと思うな

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？　紫苑に教えるついでだし」

え？　教えるって？　あれは教えてたのか？

「俺はいい。１人でできる」

「そりゃ助か――」

ダンッ！　テーブルが叩かれ×2。箒とセシリアがその勢いのまま立ち上がる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは二組でしょう！？　敵の施しはうけませんわ」

「あたし一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」

なんか、めんどくさいことになりそうだな

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことをー」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合い長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！　それに、一夏は何度もうちで食事をしてる間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？　それならあたしもそうだけど？」

俺たちの家は中華料理屋だった。　千冬さんはもうＩＳ操縦者として活躍してて、あまり家に戻らなかったみたいで、一夏は家から近かったうちによくきていた

「いっ、一夏っ！　どういうことだ！？　聞いてないぞ私は！」

「わたくしもですわ！　一夏さん、納得のいく説明を要求します！」

「説明ものにも……幼なじみで、よく鈴たちの実家の中華料理屋に行った関係だ」

一夏は嘘偽りなく説明しただけどな、まあ一夏に期待するのがバカか鈴はむすっとふてくされた

「な、何？　店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然なことは何一つありませんわね」

「親父さん、元気にしてるか？　まあ、あの人こそ病気と無縁だよな」

「あ……。うん、元気――だと思う」

「……」

「う？」

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？　あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

「まじでか」

「おう、なんか経済破綻したみたいだぞ」

「う〜、あそこ鈴姉とのデートスポットだったのに〜」

「あれがデートスポットなのなら甲斐性なしね　じゃ、一夏学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

うっ、鈴姉は他のデートスポットいやがるじゃん……なんだよ。一夏ばっかり

「――あいにくだが、一夏は私とＩＳの特訓がをするのだ。放課後は埋まっている」

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特にわたくしは専用機持ちですから？　ええ、一夏さんの訓練には欠かせない存在でかなのです」

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

鈴はラーメンのスープを飲み干して、一夏の答えを聞かずに片付けに行った。もちろん、テーブルに戻ってくることはない。そのまま学食を出ていった。

「なあ、紫苑。」

「知らん、じゃあな」

俺はむすっとして片付けに行ってそのまま学食を出ていった

「なんであいつ怒ってるんだ？」

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、わたくしたちの有意義な時間を使っているという事実をお忘れなく」

「アンタなに怒ってるのよ」

「……」

紫苑は昼休みからずっとむすっとしてて口も聞いてくれないあたしなにかしたかな？

「ねぇ、紫苑聞いてるの？」

「……」

今度はそっぽ向かれた

今、あたしたちが歩いている場所はアリーナに向かう道

さっきから紫苑に話しかけても返事をしてくれない

「紫苑！」

「……」

今度はチラッとあたしを見てまた、そっぽ向く

「いい加減教えてよ。あたしなにかしたの？」

「したよ」

やっと口を訊いてくれた。それにしても、あたしなにかしたの？

紫苑が足を止めたのであたしも止める

「なにをしたのよ？」

「……自覚ないんだね。はぁー」

「だからなにをしたのよ」

「鈴姉はいつも、一夏一夏って、好きなのはわかるけど、鈴姉のことを一番知ってるのは僕なんだよ。それに一番近くにいるのも、僕なのに。でも鈴姉は僕のことなんてどうでもいいみたいに……ふんだ」

また、そっぽ向いてしまったわ。それにしても

「なに、やきもち？　可愛いわね」

あたしは紫苑の頭を撫でてやる

「……。」

紫苑のことを一番知ってるのもあたしよ。紫苑がしてほしいことや

一番好きなことだって知ってるのわあたしなの

「やきもちやき」

「……」

あたしは撫でるのをやめない

「……うっ、鈴姉……」

ほら、効果あったでしょ

「なに？」

それでも撫でるのをやめない

「もう……いいよ」

「ほんとにいいのかしら？」

「……」

「素直になりなさいよ」

「……鈴には言われたくない……」

「はいはい、そろそろ行くわよ」

撫でるのをやめて手を離すと

「……あっ」
紫苑がなんか、可愛い声をあげた
「なに～」
「なに～」
あたしの顔が笑っているのは確かだ
「うっ、なんでもない」
そっぽ向いて、そのまま先に行ってしまった。それを追いかけながら紫苑を弄る
「……」
（……っ！　撫でるのダメ！）
鈴姉突然頭を撫でるなよな
「やきもちやき」
「……うっ、鈴姉……」
「なに？」

「もう……いいよ」

「ほんとにいいのかしら？」

「……」

（気持ちいい、このまま寝たいな」

「素直になりなさいよ」

（む、鈴姉には言われたくないな）

「……鈴には言われたくない……」

「はいはい、そろそろ行くわよ」

鈴姉は撫でるのをやめて手をはなしてしまった。そしてついて、声が出てしまった

「……あっ」

「なに～」

（っ！　聞かれた！）

鈴がニヤニヤしながらこっちを見てくる

「うっ、なんでもない」

そのままそっぽ向いて、先に行く
後ろから、鈴がニヤニヤしながら追いかけてくるのが見えた

「一夏っ！」

バシッとスライドドアを開けてアリーナの更衣室に入る俺たち

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

「サンキュ。あー、生き返る……」

タオルで顔を拭き、水分補給をした一夏が唸る

「変わってないね、一夏。若いくせに体のことばっかり気にしてるとこ」

「あのなあ、若いうちから不摂生してたらいかんのだぞ。クセになるからな。あとで泣くのは自分と自分の家族だ。それにこれを言い出したの紫苑だし」

（俺に振るなよ）

（ごめん）

俺と一夏はアイコンで会話する

さすが幼なじみだな

「紫苑が一夏に似てきたんじゃなくて、一夏が紫苑に似ていたのね。まったく、二人してジジくさいよ」

「う、うっせーな……」

「ほっとけ……」

「一夏さぁ、やっぱ私がいないと寂しかった？」

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

「そうじゃなくってさぁ」

「俺は一夏いなくても寂しくなかったぞ。鈴姉が居たからね」

鈴に抱きつく

「だから、引っ付くな！」

「いいじゃん。さっきいじめた、お返し」

「いじめてないわよ！」

「あー、ゴホンゴホン！」

わざとらしい咳払いがが入ってきた

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っていいぞ」

「おお、そりゃありがたい」

「では、また後でな。一夏」

『また後で』を強調したな、鈴に対抗心燃やしてるのか

「……一夏、今のどういうこと？」

箒がピットを出て行ってから、さっきまでの上機嫌は消えていた。
しかも不機嫌面を隠すために引きつった笑みを浮かべて鈴は一夏に聞く。その声は、さっきより2トーン低い

俺は鈴から離れる

「ん？　いや、いつもはシャワーは箒が先なんだが、今日は汗だくだから順番を変わってくれって頼んで――」

「しゃ、しゃ、シャワー！？『いつも』！？　い、一夏、アンタあの子とどういう関係なのよ！？」

「どうって……前に言っただろ。幼なじみだよ」

「お、お、幼なじみとシャワーの順番と何の関係があんのよ！？」

おい、今の流れで気づいてなかったのか

「俺、今箒と同じ部屋なんだよ」

「……は？」

「俺は知ってた」

「いや、俺の入学ってかなり特殊なことだったから、別の部屋を用意できなかったんだと。だから、今はふたり部屋で――てか、紫苑の部屋は？」

「鈴と同じ部屋だよ」

「一夏！」

「お、　なんだよ」

「幼なじみがもう1人いることを、覚えておきなさいよ」

「別に言われなくても忘れないが……『もう1人』って紫苑を忘れてるぞ」

「いつものことだ慣れたよ」

「いつものことって？」

「紫苑行くわよ」

「はいはい。じゃあ、後で部屋に遊びに行くわ」

「おう」

一夏の返事を聞きながらピットを出た俺たち。

「というわけだから、部屋変わって」

「ふ、ふざけるなっ！　なぜ私がそのようなことをしなくてはならない」

俺が一夏の部屋に着くと鈴で箒が言い争ってた

（つい隠れてしまったが……てか、鈴いないと思ったらここにいたのか。それに、あの二人相性最悪だな）

「いやぁ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？を気を遣うし。のんびりできないし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってさ」

「べ、別にイヤとは言ってない……。それにだ！　これは私と一夏の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくはない！」

「大丈夫。あたしも幼なじみだから」

（いや、それは関係ないかと思うが）

「鈴」

「うん」

「それ、荷物全部か？」

「そうだよ。あたしはボストンバックひとつあればどこでも行けるからね」

（ほんとフットワークは軽いな鈴は、俺より少ないぞ）

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

（む、鈴は俺と暮らすのイヤなのか）

「ふ、ふざけるなっ！　出て行け！　ここは私の部屋だ！」

「『一夏』の部屋でもあるでしょ？　じゃあ問題ないじゃん」

鈴はそう言って一夏を見る。箒も一夏を見る

「俺に振るなよ……」

「とにかく！　部屋は代わらない！　出て行くのはそちらだ！　自分の部屋に戻れ！」

「ところでさ、一夏。約束覚えてる？」

「む、無視するな！　ええい、こうなったら力づくで……」

箒はベッドの横に立てかけてあった竹刀を握る

「あ、馬鹿……」

俺はとっさに鈴の前に飛び出た

「鈴大丈夫か……って紫苑！」

「鈴を傷つけたら殺すぞ。次やったら命無いと思えよ」

俺は左腕で竹刀を止めて右手で箒の首筋にナイフを当てている

「……！」

一夏も鈴も驚いている。だが一番驚いているのは箒だ

箒は尻餅をついて座る

「てか、今の普通の人間だったら危ないぞ？」

俺はナイフを袖にしまい言う

「う……」

「別にいいけどな。実際今のだったら鈴でも止められたしの」

チラリと鈴の右腕を見るそこにはＩＳを部分展開していた

「え、えーと……」

「なんだ？　一夏」

「イヤ、鈴約束っていうのは」

「う、うん。覚えてる……よね？」

鈴は顔を伏せて、上目遣いで一夏を見る。

「えーと、あれか？　鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

「そ、そうっ。それ！」

「――おごってくれるってやつか？」

「……はい？」

「はぁ、やっぱり」

俺は聞こえないように言う」

「だから、鈴が料理出来るようになったら、俺にメシをごちそうしてくれるって約束だろ？」

そんな約束じゃねぇーよって言いたがったがぐっと我慢した

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心――」

パァンッ！

「……へ？」

鈴が一夏の頬をひっぱたいた。

まあ、やられて当然だな

「え、えーと……」

「……」

鈴は肩を小刻みに震わせて、泣いていた

「あ、あの、だな、鈴……」

「最っっっっ低！　女の子の約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！　犬に噛まれて死ね！」

鈴は床に置いてあったバックをひったくってドアを蹴破って出て行く

「……まずい。怒らせちまったな」

一夏は俺をチラリと見る俺はそっぽ向く

「一夏」

「お、おう、なんだ箒」

「馬に蹴られて死ね」

「いや、虎に噛まれて死ね」

箒、俺の連続攻撃をくらう一夏は『はあ』とため息をついてベットに潜った

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

表題は『クラス対抗戦日程表』。

一回戦の相手は一組――一夏だった。

番外編、もしも。原作と同じようにセカンド幼なじみとして、鈴と紫音が転校し

続きは……考え中です。本編の方もあるので……次こそは本編書きます！

ブルー・ディズ／レッド・スイッチ（前書き）

お待たせしました。
やっと書き終えました

見てみるとわかりますが多少違う作品のあれやこれが混じっています。それを考えながら読んでみるのも楽しいと思います。
少し恋愛ようそが無かったので入れてみました何故か自分の理想の愛が混じってしまった……。そこは触れないでくださいね

では本編どうぞ

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応わかってるつもりだったんだが……」

シャルルが転校してきてから5日経って、今日は土曜日だ。ＩＳ学園では土曜日の午前は理倫学習、午後は完全に自由時間になっている。とはいえ土曜日はアリーナが全開放なのでほとんどの生徒が実習に使う。それは俺も一夏も同じで、一夏とシャルルの模擬戦をみた後、一夏はシャルルにＩＳ戦闘に関するレクチャーを受けていて、俺はアリーナの縁でＰＩＣで浮かんで寝っ転がっている
だって、すごい人の数だしまあ、なんでかはわかるけどな、男性が三人ここにいるからだろう。いや、それ以外考えられないな

「紫苑、なに寝てるのよ」

「別に寝てねえよ。転がってるだけだ」

名鈴が話しかけてきたのを軽くあしらって想龍で扇ぐ

「あ、そういえば紫苑の青龍もイコライザが無いんでしょ？」

「ああ、無いみたいだな。別に気にしないけど」

鈴の『甲龍』は龍砲がプリセットに対して俺の『青龍』は後々わか

ったことだが全部がプリセットみたいでイコライザが元々無いらしい。
イコライザがない機体なんて前代未聞だな。一夏の『百式』はともかくとしてね

「まあ、そんだけの武装があれば紫苑なら充分でしょう」

今度は鈴が話しかけてきた

「まあーな。でも、もう少し防御型にして燃費もよくしてくれたら有り難かったかな」

鈴の『甲龍』は燃費と安定性に対して俺の『青龍』はスピード重視の安定性型。一夏の『百式』に続き燃費が悪い。『百式』程ではないけど。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど……」

急にアリーナ内がざわめきはじめた。
俺は気にせずＰＩＣでプカプカ浮かぶ

「おい」

ＩＳのオープン・チャンスで声が飛んでくる。一夏を見て

「……なんだよ」

返事しなければいいのに、まあ一夏らしいか。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても私にはある」

まだ、ひっぱるのかよあの時のことを

「貴様たちがいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様たちを――貴様たちの存在を認めない」

あいにく、俺の存在は気づかないらしいな、キョロキョロしてるし。かっこわる

「また今度な」

「ふん。ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「！」

ゴガギンッ！

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「……まったくだ」

俺はラウラの後ろから蒼龍牙月を首筋に当てる

「貴様ら……」

横合いから割り込んできたシャルルと俺の蒼龍牙月を見ながら唸るラウラ

「フランスのアンティークと中国のおまけごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「そのおまけに引き分けたのはどこのどいつだよ」

ドイツだけに

「貴様！」

睨まれちゃった

「未だに量産化の目処が立たないドイツのルーキーよりは動けるだろうからね」

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

「……ふん。今日は引こう」

「……チッ、つまらねぇな」

俺は蒼龍牙月をひき一夏の元に下りる

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ。シャルル、紫苑」

「ラウラには色々とあるからな。」

「そっか」

「一夏さん！あの方となにがあったんですか？」

「「紫苑！あいつと、なにがあったのよ！」」

セシリアそして名鈴といつの間にかいたエミリーが問いつめてくる

「……いつか……話すだから今はなにも聞かないでくれ」

「紫苑……」

鈴が駆け寄ってくる

あの時のことは、俺は今でも思い出してうなされることがある。
そして、そのときから狭く暗い場所には入れない入ったら、身体が動かなくなり。ついには泣いてしまう
２人で入るのは少しは大丈夫なんだけどね

「紫苑、あれは俺が不甲斐なかったからだ」

「俺の未熟さが悪いんだよ」

「紫苑、行こ。」

「う、うん」

鈴に手を引かれてアリーナに戻る

「あのー、織斑君とデュノア君と凰君居ますかー？」

「　凰姉弟だけ居ます」

ドア越しから呼んでいる声が聞こえる。声の主はどうやら一組の副担任の山田先生のようだ。

今はあまり人と話したくないだけど。

「姉弟って凰さんもですか！？」

「はい、いますけど？」

「姉弟ならいいですか。入っても大丈夫ですかー？　まだ着替え中だったりしますかー？」

「大丈夫だよね紫苑」

「うん」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

バシュッとドアが開いて山田先生が入ってくる。

「織斑君たちと一緒ではないんですか？　今日は織斑君たちと実習してるって聞いていましたけど」

「まだ、アリーナの方にいると思いまー―」

バシュッとピット側のドアが開いた

「紫苑、先に帰ってなかったのか」

一夏は俺の顔を見て言った

「お前を待っててあげようかなって思ってな」

「お、そうだったのか。早く来ればよかったな。あれ山田先生それに鈴どうしてここに？」

「あたしがここに居たらなんか都合悪いわけ？」

「いや、そんなんじゃねえよ」

「あ、忘れるところでした。今月下旬から大浴場が使えることになります。結局時間帯別にすると色々と問題がおきたそうだったので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！」

一夏は山田先生の手を取って言葉を続ける

「嬉しいです。助かります。ありがとうございます、山田先生！紫苑やったな」

「別に」

「い、いえ、仕事ですから……」

おい、一夏山田先生引いてるぞ。そして鈴が切れかけてるぞ

「……一夏？なにしてるの？紫苑までいるし」

ドキィッ！

一夏は肩を震わせる

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生の手を握って何してるかの？」

「あ、いや。なんでもない」

ぱっと握っていた手を離す。山田先生はシャルルに言われて急に恥ずかしくなったのか、一夏から解放されると同時にくるんと回転して背中を向ける

それにしてもシャルルの言葉はトゲトゲしいな。

「一夏、先に戻ってって言ったよね」

「お、おう。すまん」

「喜べシャルル。今月下旬から大浴場がつかえるらしいぞ！」

「そう」

グイグイ

「？」

突然鈴に裾を引っ張られたので振り返ると鈴がマバタキ信号（ウィンキング）で話しかけてきた。よく覚えられたなと感心しながら解読すると

『なんでシャルル怒ってるのよ』

『俺が知るか』

マバタキ信号（ウィンキング）で返す

『知るかってあんたたち男同士でしょ、それぐらいわかりなさいよ！』

『俺のカンだとシャルルは女だ』

『は？』

『まだ、証拠がないからわからない。今名鈴にシャルルと実家のデュノア社の事を調べてもらってるが、ほぼ確実にシャルルは女だよ。一度も一緒に着替えしたことないし。世界が騒いでないことを考えるとね』

名鈴はいろんな情報元を持っている。
なんでそんなに持っているのかは不明だ、唯一俺が名鈴の知らないところだ

『確かに世界が騒がないわね』『だろ？　俺のことは凄かったのにな』

『そうね、うんざりしたわ』

ここで視線に気づき振り返ると山田先生は赤くなっていた

「なに、見つめあってんだよ姉弟」

「なんでもねえよ」

「そうか、そういば山田先生、紫苑と俺に話があるんでしたよね」

「え、ああ。そういば織斑君と紫苑君にはもう一件用事があるんです。ちょっと書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらうますか？百式と青龍の正式な登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いんですけど」

「わかりました。――じゃあシャルル、ちょっと長くなりそいだから今日は先にシャワーを使っててくれよ」

「鈴姉、少し行ってくるよ。」

「うん、わかった」

「行ってらっしゃい」

「じゃ山田先生、紫苑、行きましょうか」

「……。はぁっ……」

ドアを閉め、寮の自室に自分一人だけになったところでシャルルははき出すようにため息を漏らした。それまで我慢していたせいだろうか、無意識に出たそれは思ったより深く、シャルル本人が驚くくらいだった。

（何をイライラしているんだか……）

さっきの更衣室での自分の態度が今になって恥ずかしい。きっと一夏も紫苑も面食らっていたに違い無いと思うと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

（……。シャワーでもして気分を変えよう）

シャルルはクローゼットから着替えを取り出しシャワールームへ向かった。

「はー、終わった終わった」

「疲れた……。一夏、お茶淹れてくれないか？」

「ああ、いいよ」

書類の枚数自体は多かったのだが、実際は名前を書くだけのものばかりで思ったより時間は取られなかった。

「ただいまー。って、あれ？　シャルルがいないな」

「シャワーだろ　水の音するし」

「あ、ほんとだ。――そういえば、確か昨日ボディーソープ切れてたんだっけ」

一夏はクローゼットから予備のボディーソープを取り出してシャワールームに入る

ガチャ。

――ガチャ？

「ああ、ちょうどよかった。これ、替えの――」

「い、い、いち……か……？」

「へ……？」

「どうした一夏？」

シャワールームを覗くとそこにはシャルルの面影をもつ『女子』がいた

――どうして女子だとわかったのか。簡単だ。胸がある。

「え、えっとだな、えーと……紫苑？」

「なぜ俺に降る？」

「きゃあっ！？」

ガチャ！

我に返った女子（シャルル）が慌てて胸を隠しながらシャワールームに逃げ込む。

「……。　えーと……」

「……」

ドア向こうから言葉はない。たぶん、一夏と同じように絶句してるのだろう

「ぼ、ボディーソープ、ここに置いとくから……」

「う、うん……」

一夏はシャワールームのドア前にボトルを置くと俺と一緒に脱衣場を出た。

「……紫苑、お前驚いてないな……」

「言っただろ。シャルルは女だって」

「……あれ、本当だったんだな」

ベッドに座る一夏だ言った

「世界が騒いでないだろ」

壁にもたれ掛かる

「確かに」

ガチャ……」

「!?」

「あ、上がったよ……」

「お、おう」

「やっぱり、女だったがシャルルいや、シャルロット・デュノア。」

「っ!?」

「失礼ながら少し調べさせてもらったよ」

何枚かの紙をポケットから取り出しシャルルに渡す

「やっぱり、疑ってたんだ」

「疑いたくはなかったがな。あまりにも世界が騒がないのでな」

分かったことは、シャルルの本名とシャルルが愛人の子って事だけだ

「だが、どうして男のフリして学園に来たのかがわからない。どうしてだ？」

「それは、その……実家の方からそうしろって言われて」

「うん？　実家っていうと、デュノア社の――」

「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」

今度は一夏がシャルロットに聞く

「命令って……親だろう？　なんでそんな――」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

「シャルル、すまん。俺は知ってる」

「うん、さっきの紙に書いてあったよ。でも、どうして僕の事調べられたの？」

「企業秘密で頼むよ。名鈴に殺されるからな」

「ふふ、わかった」

シャルルは笑った。綺麗な笑顔で

「僕が引き取られたのは二年前。ちょうどお母さんがなくなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でＩＳ適正が高いことがわかって、非公式ではあったけどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

俺も一夏も頷く

「父にあったのは二回くらいで。会話は数回くらいかな。」

デュノア社の社長はシャルルの事をひた隠しにしてたからな、あまり関わりたくないだろな。なんて自分勝手な親だ。

俺はいつのまにか握っていた拳を隠す

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「今は第三世代型の開発が主だからな」

「うん、リヴィヴは第二世代型だから」

「うちの国の第三世代型もまだ完成してないからな」

「そう、まだ第三世代型は完成してない。だからイギリスのオルコットさんとドイツのボーデヴィッヒさんそして中国の凰さんと紫苑君が来たのはそのためなの」

一番開発が進んでるのは日本だ

「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに――」

シャルルは顔を伏せて、どこか苛立ちを含んだ声で続けた。

「同じ男子なら日本そして中国に登場した特異ケースと接触しやすい。可能があればその使用機体と本人データを取れるだろう……ってね」

「それは、つまり――」

「ああ、俺たちのデータそして、俺たちの使用機体のデータを盗んでこいってことだろ？」

「うん、僕は、あの人に言われてる」

ダンッ！

「「！？」」

「許せねぇ。そういう自分勝手な大人が一番許せねえ」

壁を叩き怒りを露わにする俺

「……紫苑」

「一夏もそうだろっ！」

「ど、どうしたの？」

「俺は親の勝手な離婚で家庭は崩壊。一夏と千冬さんは親に捨てたれ」

「あ……」

「俺は元々親は知らないし今さら会いたいとも思わない。だが紫苑は」

一夏は俺をみた

「俺は一時期両方に捨てられたよ。その後母親に拾われた」

「そんなにすごかったのか。」

「親父は俺を引き取るつもりだったが、今女の方が待遇いいだろだから」

母親にすれば俺なんてかわいくない子供だもんな

「その……ゴメン」

「気にしなくていい。俺は親には興味ない鈴がいれば充分だだけど、親の勝手で離婚して鈴を泣かした。それが許せないだけだ。で、シャルルお前はどうする」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙ってないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

一夏が聞く

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」

「……だったら、ここにいろ」

「だな。俺たちが黙っていればいいだけの話だ」

「え？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

一夏は特記事項をすらすらと読む。

「つまり、この学園に行っていれば、すくなくとも三年間は大丈夫だろ？　それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろ」

「一夏」

「ん？　なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるのに」

「……勤勉なんだよ、俺は」

「冗談はそのフラグ立てるだけにしろよ」

「紫苑、　意味分からないこと言うな」

「そうだね。ふふっ」

「シャルルまで」

コンコン

「「「!?」」」

「一夏さん、いらっしゃいますか？　夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのノックと呼び声に俺に一夏にシャルルは三人揃って身をすくませる。

「一夏さん？　入りますわよ？」

まずいぞ。

「ど、どうしよう？」

「とりあえずシャルル布団に隠れろ」

「わ、わかったよ。」

「そして一夏はシャルルに布団を掛けて看病してるフリをしろ」

「わ、わかった」

ばたばたとあわただしく動く一夏&シャルルに適切なアドバイスを入れる俺。――ガチャ。ドアが開く音が響いた。

「よ、よおセシリア！なんだ？　どうした？」

「あら、紫苑さん」

「ああ、セシリア。どうした？」

壁にもたれ掛かる俺に驚くセシリア

「一夏さんと夕食を。それよりデュノアさんはどうしたんですか？」

「い、いや、シャルルがなんだか風邪っぽいっていうから、夕食いらないっていうからベッドに寝かしてるんだよ。」

「そんなんですの。」

「そ、そうそう」

もう少し具合悪そうな声をだしてくれ！

「ご、ごほっごほっ」

この大根役者が　すごくわざとらしいぞ！

「あ、あ、そうですの？　では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ。珍しい偶然もあったものです」

え？　あれで誤魔化せたのか？　まあ、なんとしてもいいことだ

「俺が看てるから行ってこい」

「お、おう」

「デュノアさん、お大事に。さあ一夏さん、参りましょう」

「ごほっごほっ。そ、それじゃあごゆっくり」

ガチャとドアを開けてセシリアと一夏は部屋をでた

「もういいぞ」

「う、うん」

ごそごそとシャルルが布団から出てくる

「シャルルお前、役者の才能ないな」

はあとため息を漏らしながら一夏のベッドに座る

「ご、ゴメン」

「別にいいけどな、騙せたから」

「うん」

「……」

「……」

数分の沈黙

「そうだ、言っておかなきゃならないことがある」

「なに？」

「シャルルが女だって知ってるのは俺と一夏を抜いて三人だ」

「え、そんなに！？」

「確実に知ってるのは名鈴だまだ疑ってる段階が鈴と千冬さんだ」

まあ、千冬さんは確実に知ってると思うがな。直接デュノア社の社長に聞いただろ。

初代『ブリュンヒルデ』の言葉は強いからな

「わかった、ありがとう」

「……」

「紫苑と話すことなんてないね」

「そうだな」

「……」

「お茶でも飲むか？」

「うん。もらおうかな」

俺は電気ケルトンでお茶を沸かし急須に注ぐ

「一夏のよりは美味しくないが」

「ありがとう、いただきます」

シャルルがお茶を飲んだのをみてから俺も喉を潤す

「美味しいよ」

「そうか、それはよかったよ」

シャルルの笑顔を見ながらお茶を啜る

「ねぇ、紫苑って李さんと付き合ってるの？」

ぶー

「げほっげほっ」

「だ、大丈夫！？」

「急に変なこと言うな」

「ご、ゴメン。でも気になって」

「あいつとはもう終わってるよ」

吹いたお茶をシャルルと拭きながら話す

「そうなの？」

「そうだよ。」

「じゃ、一夏は彼女とか付き合ってた女の子いるの」

「あの、唐変木がいるわけねえだろ。あのに鈍さは、死んでも治らないな。言っとくがシャルル一夏を振り向かせるのは難しいぞそれにライバルもたくさんいるぞ学園だけでもな」

「そ、そんなんじゃないよ！」

「どうだか……よしこれで終わりかな」

「そうだね」

「そういうシャルルはいないのか？」

「なにが？」

「なにが？　じゃなくて彼氏とかいないのか？」

「い、い、いるわけないじゃん！」

「そうなのか？　お前可愛いし美人なのにか？」

もう一度言います紫苑も一夏に並びフラグを立ててフラグを折るタイプです

「か、か、可愛い！　僕が！」

「ああ、少なくとも俺はそう思う」

「そ、そっか……僕可愛いのか……そっか、そっか」

「？」

ぶつぶつシャルルが言ってるな、どうしたんだ？

「ふぁぁ、眠い」

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫。」

今日は早起きし過ぎたなむちゃくちゃ眠いぞ。なにか話してないと寝ちゃうな。でも、もうネタがない

「あ、そういえば紫苑？」

「なんだ？」

眠りに落ちる前にシャルルが助けてくれた

「夕食どうするの？　僕のせいで行けなかったけど」

「あ、夕食か…部屋に戻れば多少食いもんあるだろ。無かったら名鈴のところに行けばいいし」

「む、李さんとは終わったんじゃなかったの？」

なんだ急に不機嫌になったな……まあいいか

「終わってるよ。でも、なんか鈴とあいつところは心が落ち着くし飯もあるし」

「ふーん」

なんだ、ますます不機嫌になったぞ？

「なんで怒ってるんだ？」

「別に怒ってないよ」

「そうか？」

ジー

「な、なに！？」

「……」

ジー

「だから、な、なに？」

「いや、なんでもない」

シャルルから目を離す

心なしかシャルルの顔は赤い、照れてるのだろうそこに

「た、ただいま……」

「あ、一夏おかえり。――ってどうしたの？　なんだかふらふらしているけど」

「ああ、いや、気にしないでくれ。大丈夫だ。それよりお腹すいただろ。焼き魚定食をもらってきたんだが、食べられるか？　紫苑の分もあるぞ」

「うん、ありがとう。いただくよ」

「俺のは持ってこなくてよかったんだが、いただくよ」

一夏からトレイを受け取りシャルルをみると

「？　どうした？」

「え、えーと……」

「食べないと冷めるぞ。せっかく作ってもらった料理なんだから、暖かいうちに食べないともったいない」

「いただきます。一夏、シャルルに食べさせてやったら？」

「な、なんでだよ！」

「ほら」

一夏にシャルルを見るように促す

「あっ……」

ぽろっ。

「あっ、あっ……」

ぽろっぽろっ。

おかずを落とすシャルルをみて、一夏はしまったと顔をする

「箸、苦手なのか？」

「う、うん。練習してはいるんだけどね。あっ……」

一夏たちの会話を聞きながら食事をする俺

「悪い。スプーンでももらってくる」

「ええっ？　い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」

「そうは言ってもなあ。難儀だろ。遠慮するなって」

「で、でも……」

「シャルルはあれだな。もうちょっと他人に甘えることを覚えた方がいいぞ、そんなに遠慮ばかしてたら損するって」

「ううう……」

「まあ、いきなりは難しいかもしれないから、最初は俺や紫苑を頼ることからはじめてみたらどうだ？……ちょっと話がずれるかもしれないが、家庭の事情も含めて俺や紫苑はシャルルの味方をするぞ。だから、存分に頼ってくれ」

「俺も入るのかよ」

「当たり前だろ。それとも味方にならないつもりか？」

「そんなんじゃねえよ」

ずずずっとお茶を啜り続ける

「家庭事情はあまり俺も一夏も関与はしない。というか出来ない、最終的にけりを付けるのはシャルルお前なんだからな」

「……わかってる」

「まあ、できる配意で助けてあげるよ」

「あ、ありがとう」

「さて、シャルルどうするスプーン持ってくるか？」

「だから一夏、食べさせてやれよ」

「だからなんでだよ！」

「シャルル、食べさせて欲しいんだろ？」

俺はシャルルをみる一夏もシャルルをみる

「う、うん。一夏その……食べさせて」

もじもじと一夏に言う

一夏は惚けてしまう。そこに追い討ちをかけるようにシャルルはアゴを引いた上目遣いで言葉を重ねてきた。

「あ、甘えてもいいって言ったから……」

「そ、そうだな。男に二言はない。よし、じゃあそうしよう」

「さて、食べ終わったし邪魔者は退散するか」

「あ、待って紫苑」

立ち上がった俺を呼び止めるシャルル

「なんだ？」

シャルルをみて聞く

「な、なんでもない」

「そっか、じゃあ」

トレイを食堂に片付けて自分の部屋に戻って寝た

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……早く着きすぎちまったな」

呟いて、携帯を開いたとき、待ち人の声がした

「ごめん、おまたせっ」

携帯を閉じポケットにしまって顔を上げるとそこには……俺の彼女がいた――――

バシ

頭を叩かれた

「いって」

「あんた今変なこと考えたでしょ」

「気のせいだよ」

「そう、さて今日は食べまくるわよ」

「@クルーズの一番高いパフェだけだよ」

はあとため息を漏らす俺

日曜日午前9時半駅前で鈴と待ち合わせをしこの前約束した@クルーズの一番高いパフェを奢る為に

「なんで待ち合わせなんてしたんだ？　普通に学園から行けばよかったんじゃないか？」

「なんでって、その方がデートぽいじゃない」

「え、鈴姉もしかして――」

「そんなわけないでしょ、さて奢ってもらう前に買い物しましょう。」

「……はい」

肩を落として鈴の横に並び駅ビルに向かう為に歩き出すと鈴が自然と腕を絡めてくる。

「り、鈴姉！」

「い、言ったでしょデートぽいと。それに学園に帰るまでは私の事は鈴と呼びなさいっ！」

鈴がアゴを引いた上目遣いで俺をみる

「呼ぶのはいいけど、急にどうしたの鈴？」

（上目遣いは反則だよ）

「ど、どうもしないわよっ！」

「なら、い、行こっか」

俺たちは再び歩き始めた

「最初どこ行く鈴？」

「そうね――。じゃあ服を見に行きましょ」

「じゃあ先に七階フロアだな」

「よくわかってるじゃない」

「二年間も名鈴に引っ張り回されたからね」

はあとため息を漏らす

「名鈴は買い物好きだからね」

「いつも疲れる」

「でも、名鈴の事好きだったんでしょ」

「な！　そんなわけあるか！　好きなのは鈴だけだ！」

「わ、わかったから。声デカいわよ！」

鈴に指摘されて周りを見るとこっちをみて、クスクス笑っている人達やぼそぼそ言ってる人達がいる

「ご、ごめん」

（恥ずかしいしかも腕を絡ませてるし……でも、いい気分だな鈴姉とデートしてるんだもん）

「い、いいわよ別に」

鈴は頬を赤く染めてそっぽ向く

「照れてる」

「て、照れてなんかないわよ！」

「ふーん」

ツンツン

俺は鈴の頬を突っつく

「っ！　なにしてんのよ！」

横腹に肘鉄を食らった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「痛い」

「あんたが悪いのよ」

予想以上の打撃だったのでその場で俺はうずくまってしまったなので買い物を後回しにして先に@クルーズに来ている

「お待たせしました。コーヒーのお客様は？」

「はい」

メイドさんが注文の物を持ってきてお店の『とあるサービス』の要不要を尋ねた。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？　よろしければ、こちらで入れさせていただきますが」

「お願いします。ミルクだけで」

「私もミルクだけ、お願いします」

「かしこまりました。　それでは、失礼します」

メイドさんはミルクを加えてスプーンでカップの中を静かにかき混ぜる。

「どうぞ」

「ありがとう」

俺はそれを受け取り一口飲む
次に鈴も紅茶を混ぜてもらう

「それでは、また何かありましたらお呼びください。」

お辞儀をしてメイドは立ち去る

「ほんとに頼まなくてよかったの？」

「いいわよ。さっきのでお互い様で」

「ふーん」

結局鈴は約束したパフェを頼まなかった

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はい、これ着てみて」

「いいけどなんで俺なの？」

「あんたセンス悪いじゃない。だからあたしが選んであげるわ」

「それはどうも」

「あ、男って試着できないじゃん」

「え、そうなの？」

そうなのって

「ほら、あれみてよ」

試着室の横の看板を指差す

鈴は指を差した方を見る

「ほんとだ」

看板にはこう書いてある『女性のみ試着ＯＫ』

世界は女尊男卑が引かれているそのため男の立場は圧倒的に低い

まあ、いいけど

「だろ？　だから俺のはいいから自分のを見繕いなよ」

「そうするわ」

そう言いながら俺の為に見繕った服を戻そうとする

「ちょっと待った」

「なによ」

「その服は買うから片付けなくていい」

「そう、じゃあはい」

鈴から服を受け取りレジにの方に歩いていく。その後ろから鈴がつ

いて来る

「なんでついて来るだ？」

「ついて来ちゃ悪いわけ？」

「いや、そんなんじゃないけど自分の見繕わないの？」

「あんたに選んでもらおうかなっておもってね」

「センスの悪い俺にか？」

「そこのあなた」

「鈴呼んだ？」

「なんで、呼ぶのよ」

振り返って鈴に聞く

「あなたに言ってるのよ。男のあなたに、そこの服片付けておいて」

名前も知らない相手からいきなり言われる。ＩＳが普及してから十年で女尊男卑の風潮はあっという間に浸透した。どの国でも女性優遇制度が設けられ、男はこうして街を歩いているだけで見ず知らずの相手から命令される始末である

「ちょっとあんた――」

「鈴いいよ。こっちにも考えがあるから」

鈴が食ってかかろうとするのを手を前に出して止める

「ふうん、考えね。自分の立場がわかってないみたいね」
そう言って女性客は警備員を呼ぶ
「ちょっと紫苑！」
「なに？」
「考えあるってなによ」
「まあみてなって」
「ちょっとそこの君、少しいいかな？」
あの女が連れてきた警備員が俺に話かける
「なんです？　俺なにもしてないですよ」
「こちらの女性はあなたに殴られたと言ってますが？」
さっきの女性をみると頬を撫でている
自作自演ですか。
「証拠があって言ってるんですか？」
「でも、実際こちらの女性は殴られたと言ってますので」
「これを見ても言いますか？」

ポケットから身分証明書をだす

「俺はＩＳ学園所属の凰紫苑です。」

「その手があったわね」

鈴もポケットから身分証明書をだす

「私もＩＳ学園所属の凰鈴音です。私は一部始終を見ていました、
それでも拘束するなら国を通してもらえますか？」

ＩＳ学園は国が管理している無論生徒もだ
それを知っていながら拘束すれば犯罪となるしかも無罪での拘束は
国際沙汰になる
それに希少種の男ならなおさらだ

さっきの女性はさっさと逃げてしまった

「あのーお客様ー少し話をーっていないし」

「じゃもういいですか？　忙しいので」

「え、ええ。すみませんでした」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「なんなのよ。あの女は！」

「いつものことだろ」

カフェテラスで、ずずずっとストローでコーラを飲む

「だからってなによ！　自分がやった事は自分で片づけるのが当たり前でしょう。なのに人にやらせるとか。腹立つわ」

「ははは。」

「なによ、愛想笑いなんてしかも似合わないわよ」

うっさい、似合わなくって悪かったな

「服も買ったし昼も食ったし、次どこ行く？」

「城址公園に行ってクレープ屋探しましょう」

「なんで？」

「さっきの警備員から聞いたんだけどそこのクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれるおまじないがあるんだって」

なんか話してると思ったらそんなことを話してたのか

「そういうのは一夏と行きたいんじゃないの鈴は」

「そ、そうだけど……紫苑も幸せになって欲しいし」

なんか調子狂うなー

「わかったよ。鈴行こ」
俺は左手に荷物を持って立ち右手を鈴にだす
「ええ、行こっか」
鈴は右手の袖口を持って立つ
「確か紫苑は、手を繋いだり腕を絡ませるよりこれが好きだったわよね」
「よく、ご存知で」
駅ビルを出て城址公園に向かう
「あ、あれじゃない？」
「あれだね」
「行くわよ」
「ちょ、引っ張るなって」
城址公園についてクレープ屋を探そうと思って周りを見るとすぐに見つかった。
カップルや友達連れの女子高生が並んでいたからだ
俺たちはさっそく並ぶ

「すみません、クレープ二つください。ミックスベリーで」

そう言うと、お店の主であろう二十代後半の男性が、無精ヒゲにバンダナという風体でありながら人懐っこい顔で頭を下げる。

なんかシャルルに似てるな

「あぁー、ごめんなさい。今日、ミックスベリーは終わっちゃったんですよ」

「え、嘘　じゃあ紫苑どうする？」

「じゃあ、イチゴとブドウを一つずつくれ」

ついでに料金も払う

「紫苑、私が払うつもりだったのに」

「パフェの代わりだよ。」

「いいのに別に」

「はいはい」

俺は出来上がったクレープを受け取る

「どっちがいい？」

「じゃあ、イチゴで」

鈴は受け取り少し店から離れてベンチに並んでかけると鈴はクレー

プをはむっかじった。

「これ、美味しいわよ」

「ふーん」

はむっクレープをかじる

「確かに美味いな」

「紫苑、今度は名鈴と来なさいよ」

「なんでだよ」

「好きなんでしょう？」

「いつまで引っ張るんだよ」

「一生かな」

「鈴」

「ん？　なに――」

ぺろっと。俺は口元についたソースを舐める

「なっ、なぁっ、なななっ！？」

「なにそんなに慌ててるんだ？　ソースがついていたからだよ」
「だ、だだっ、だっだらい、言え！？」
なにそんなに騒いでるんだ？
「まあ、そう怒るなよ。俺のを一口やるから」
「そ、そういう問題じゃないんだけど……い、いただきます」
「？」
鈴はぶつぶつ言いながら俺のクレープをかじる
「鈴もしかして――ファーストキスがどうとか言ってるのか？」
「っ！」
「鈴キスってのはこう言うんだよ」
鈴のアゴを右手で引いて上を向かせる
そして顔を近づける
「ちょ、ちょっと！」
「なに？」
鼻と鼻がつくがつかないかまで近づける鈴は目をつぶっている
「なーんてね」

バシッとでこぴんをいれる

「……」

「？　どうした鈴」

鈴の顔を覗きこむ

「し、し、紫苑のバカー！そして死ぬー！」

「べふ」

鈴は俺の顔を思いっきりぶん殴ってきた

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「いたた」

俺は鼻を撫でながら隣の鈴を見る

「……」

鈴は頬を赤くしてムスっとした擬音語が似合うような顔で隣をている

「なあ、いつまで怒ってるんだよ」

「……」

「なあってば」

「お、怒ってなん！――ないわよ」

なんだ、急に声が小さくなったけど

「いや、怒ってるだろ」

てか、なにに怒ってるんだ？双子でもわからねえぞ

「怒ってないって言ってるでしょ！」

「まあ、怒ってないならいいや。あ、それとミックスベリーは食べれただろ？」

「……は？　なに言ってんの？　食べたのはイチゴとブドウでしょう？」

「わからないのか、ならいいよ。さて、帰るか」

俺が荷物を持って立ち上がるのを見て鈴は慌てて俺を捕まえる

「ちょっと待ちなさいよ！」

「なんだよ」

「説明しなさいよ」

「自分で考えろよ……と言いたいが教えてやるよブドウを英語で？」

「ブルーベリーよ。なにあたしをバカにしてるわけ！？」

キラーンと拳を握り見せつける

「その拳はおろせ。てか、ここまで言って気づかないのかよ」

「は？　ブルーベリーがなんだって言うのよ……」

鈴は少し考えてからピーンとひらめいた。

「ああっ！　ストロベリーとブルーベリー！？」

「当たり。さっき俺のブドウのクレープ食べただろそして自分のクレープがイチゴ、それを英語にするとストロベリーとブルーベリーだそれを合わせてミックスベリーってわけだ。わかったか？」

「うん。だからカップルにオススメなのね」

「それでも代表候補生だろ、頭使えよ」

「アンタってほんと一言多いわね……あれ？」

「どうした？」

鈴が急に首を傾げた

「ミックスベリーって私しか食べてないわよね？」

「いや、鈴の口元のソース舐めたから俺も食べたよ一応ね」

「それじゃ、味なんてわかんないでしょ」

「じゃあ、キスしてよ？」

「な、なんでよ」

「まだ鈴の口の中に味が残ってるかなって思ってね……あ、冗談だから気にするなよ」

「あ、あったり前でしょ！」

「さて、帰りますか。お姫様」

鈴の前で跪き右手を鈴の前にだす

「誰が姫よ……まあ、付き合ってあげるわよ」

鈴は俺の手を取り立ちあがる

あ、照れてる顔だ

ほんと鈴はかわいいな～いじめたくなるな～いじめないけど

俺は鈴の手をひき学園に帰った

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……なにこれ」

「着ぐるみパジャマ」

「そんなもん見ればわかるわ！」

「じゃあ、なににキレてるのよ？」
「いや、キレてないが……なぜ俺が着てるんだ？」

街から帰って来て夕飯も済ませてシャワーを浴びて出てきたらパジャマがこれに変わっていた
しかも青猫のネコミミ肉球パジャマだ

「アンタの為に買ったんだもん」

なんかドラ〇もんみたいなんだけど

「やほー、紫苑いるー！？」

一番みられたくない人に見つかってしまった

「紫苑！」

「な、なんだよ」

「かわいい！」

部屋のドアを閉めたと同時に俺に飛びつく

「こら、名鈴抱きつくな！」

「イヤ！　かわいいからイヤ！」

「離れろ～」

肉球の右手で名鈴腕を掴もうとするが掴めない

「とうとう私の趣味に合わせてくれたのね★　着せ替えするわよ」

「ぎゃー、やめろ！」

名鈴はコスプレ着せ替えが大好きだけど自分ではあまりしないだいたい俺か鈴後は家族の誰かが生け贄になる

「ほらほら、脱ぎ脱ぎしまょう」

「言葉があやふやだぞ！　てか、鈴助けろ！」

「頑張れ」

あのアマ！ティーンズファッション雑誌見てこっちはみて見ぬ振りか！

色気付きやがって生板が！

「！」

やば睨まれた

「了解であります」

くそ、完全に興奮してやがる

名鈴は興奮すると言語がおかしくなる

「名鈴、思う存分やっていいわよ」

「ほらほら、脱ぎ脱ぎしましょう」

「やめろ～」

「うりゃあー」

「うわぁぁぁ

コクン

鈴は無言で頷いた

「……神は今死んだ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

紫苑が名鈴に着せ替えさせられている時アリーナでは微動だにしない少女がいた

「……」

少女の名はラウラ・ボーデヴィッヒ。

闘う為に造られた試験管ベイビーだ

誰にも心を開かなかった少女にただ1人心を開き同時に尊敬した者。

教官――織斑千冬

「織斑一夏そして鳳紫苑――。教官に汚点を残した張本人……」

「排除する。どのような手段を使ってでも……」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「もう……死にたい」

「まあ、そうだろうな」

朝起きて制服に着替えようとクローゼットを開けたら俺の制服が全部……女子の制服に変わっていた。しかも名鈴服のデザインと鈴の

服のデザインを合わせた物だった。なのでパジャマのまま一夏の部屋に飛び込み制服を借りて今に至るってわけだしかもパジャマ姿を数人に見られて鈴と名鈴は後で一発ずつ殴る。

「そ、それは本当ですの!?」

「そ、それはまじなの!?」

「え、ほんとなの!?」

「う、ウソついてないでしょうね!?」

月曜の朝、俺が一夏に制服を借りて一夏とシャルル（男装バージョン）と共に教室に向かっていた俺たちは廊下にまで聞こえる声に目をしばたたかせた。

「なんだ?」

「さあ?」

「なんでもいいがあの二人をとっちめる」

血管を浮かびあがられている俺をシャルルがなだめる

「本当だってば！　この噂、学園で持ちきりなのよ?　月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と紫苑君と交際でき――」

「俺たちがどうしたって?」

「「「きゃああっ!?」」」

な、なんだ!?　一夏が普通に声をかけたつもりなのに返ってきたのは悲鳴だぞ

「あれ、紫苑あの制服で来なかったの？」

「そ、そうよ。せっかく作ってあげたのに」

「俺に女装をしろと言ってるのかお前らは」

「うん」

「実際したでしょう？」

ぐっ、き、昨日の夜のことかだけど証拠はない

「なんの話だ？」

「これが証拠よ」

鈴はポケットから携帯をだして操作して俺に見せつける

「な！」

背筋が凍りついた

だって、俺の女装姿の写真だったからだ

「え、見せて見せて！」

「いいわよ」

「やめろ鈴！？」

携帯を取ろうと手を伸ばす

「おっと、渡さないわよ」

「やめろ！？」

右へ左へそしてあっちこっちに逃げ回る鈴を追いかける俺

「追いつめたぞ鈴携帯をよこせ」

「いやよ、この画像もあるのよ」

ぴっと携帯を操作して俺に見せる

「いいからよこせ！」

今度の画像は俺のパジャマ姿だった

あの青猫ネコミミ肉球のパジャマだ

「いやよ。」

「なら力ずくで！」

鈴の携帯を掴む

「離しなさい」

「いやだ！」

「離せ」

「いや」

「「あ」」

携帯がつるっと滑ってみんなの前に落ちる
そしてあろうことか、俺の女装姿の画像がでていた

「「「「こ、これは」」」」

「お、終わった……」

「「「「かわいい！！」」」」

「グスン、鈴と名鈴のバカあああああ！」

だだだだと一組をダッシュで出て行った

「あーあ、鈴泣かしちゃったよ」

「え！？　あたしのせい？」

「「「「「当然！」」」」」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

屋上の片隅

「グスン……僕の趣味じゃないんだよ。鈴と名鈴が無理やり着せ替えたんだよ。　僕の趣味じゃないんだあああああ！」

「お前誰に言ってんだよ、そしてらしくないぞ紫苑」

「グスン……一夏か……なに笑いに……来たの？」

「そんなわけねえだろ」

「どうだか」

俺は涙をふき立ちあがる

「少しは俺を信用しろよな」

「信用は一応してるが期待はしてない」

「ぐっ、それでこそ紫苑だ」

「ありがとよ」

「どういたしまして」

「そろそろ教室戻るか」

「そうだな」

2人は歩き出して階段を降りきる前に一夏が言う

「それにしても紫苑。お前女装するとほんとに女みたいだな」

「鈴と双子だから顔立ちが女寄りなんだよ。」

「今度あの制服で登校してみたら？」

「一度死ぬか？」

拳を見せつける

「遠慮しておくよ」

廊下の曲がり角にさしかかると声が聞こえた

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ……」

「……この声千冬姉とラウラだよな」

「……ああ、そうだな」

俺たちはつい隠れてしまった

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

ラウラは千冬さんの現在の仕事に不満があるみたいだな

「お願いです！　教官。　我がドイツで再びご指導を。ここではあ

なたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど」

「――そこまでにしておけよ、小娘」

「っ……！」

凄味のある千冬さんの声。さすがのラウラも、その声に含まれる覇気にすくんでしまったらしい。言葉は途切れたまま、続きが出てこない。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

その声が震えてるのがここからでもわかる。恐怖、なのだろう。圧倒的な力の前に感じる恐怖と、かけがえのない相手に嫌われるという恐怖。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「……」

ぱっと声色を戻した千冬さんがせかして、ラウラは黙したまま早足で去っていった。

（さすがに切り替えが速いな」

「そこの男子2人。盗み聞きか？　異常性癖は感心しないぞ」

「チッ、気配も消して気も隠してたのに見つかったか」

「な、なんでそうなるんだよ！　千冬ね――」

ばしーん！　一夏は叩かれた

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……」

いいな、モグラ叩きいや、一夏叩き俺もやってみたいな一夏叩き

「今度やってみよ」

「なにをだよ」

「一夏叩き」

「おい！　やめろよ」

「そら、走れ劣等生ども。このままじゃお前たちは月末のトーナメント初戦敗退だぞ。特に織斑」
「わかってるって……」
「そうだな……」
「そうか。ならいい」
ニヤリと笑みを見せる千冬さんは、今だけは俺には幼なじみとして一夏には姉として言ってくれているようだった。
「じゃあ、俺たち教室に戻ります」
「おう。急げよ。――ああ、それと紫苑」
「はい？」
「女装するのはいいが見つからないようにしろよ」
「……」
「行くぞ紫苑」
「死にたい」
一夏に引きずられて教室まで戻る
◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「そんなに食べないの」

「うるさい……」

「シャルル、ほっとけもうこうなったら手が着けられないから」

俺は放課後教室でやけ食いをしていた
それこにシャルルと一夏が特訓の誘いに来ていた

「第三アリーナで代表候補生三人が模擬戦してるって」

廊下からそんな声が聞こえた

「行ってみよう」

「ああ」

「そうだね」

俺たちは第三アリーナの観客席へのゲートに向かった。そこには

「箒」

「名鈴」

「ああ」

「はろー」

ドゴォンッ！

「「「「！？」」」」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくる。

「鈴！」

「セシリア！」

「戦闘相手はあの子みたいよ」

名鈴の声で相手を探すと

「ラウラっ！」

『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラの姿だった。

「くらえっ！！」

ジャカッ！と鈴は《龍砲》を最大出力で撃つ

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

「ＡＩＣ」

「そうだね」

「ＡＩＣ？」

「教科書に乗ってるから自分で調べろ」

鈴は何度か龍砲を放つが全て止められる

「くっ！　まさかこうまで相性が悪いだなんて……」

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のためか射撃を行うセシリア。同時にビットを射出、ラウラへと向かわせる。

「ふん……。この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

ラウラが腕を突き出してビットの動きを止める

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙い澄ました狙撃は、けれどラウラの大型カノンによる砲撃で相殺される。

すぐさま連続射撃の状態に移行しようとするセシリアを、ラウラは先刻捕まえた鈴をぶつけて阻害する。ワイヤーによる振り子の原理、単純ではあるが効果的な攻撃だった。

「きゃああっ！」

ぶつかり、空中で一瞬姿勢を崩したふたりへ突撃を仕掛ける。その

速度は弾丸並みで、間合いをわずか一秒で埋めた。

「『瞬間加速』」

見間違えるはずがない。それは一夏のを目の前でいつもみているからだ

けれど格闘戦なら鈴にも分があると思ったが理由はわかったラウラはプラズマ手刀を展開していたからだ

鈴は県道のセンス無かったからな

俺とは違って

「このっ……」

前進し続けるラウラに後退で距離を置きながら鈴は刃を幾度となく凌ぐ。うまくアリーナの形状に合わせた機動で追いつめられないようにしている鈴だったが、再びラウラのワイヤーブレードが襲いかかってきた。しかも今度は両肩だけではなく腰部左右に取り付けられたらものも合わせて計六つ、それを三次元躍動で接近してくると同時にプラズマ手刀の猛攻なのだ。

いくら格闘戦に慣れている鈴でもそれらを全て捌くには難度が高い。

「くっ！」

再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその弾丸を射出する寸前にラウラの実弾砲撃によって爆散した。

「もらった」

「！」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鈴に、ラウラがプラズマ手刀を懐へと突き刺す。

「させませんわ！」

間一髪のところで鈴とラウラの間に割って入ったセシリアは、ライフル（名前は教えてくれたが忘れた）を盾に使って必殺の一撃を逸らす。同時にウェイト・アーマーに装着されたミサイルビットをラウラへ向けて射出させた。

ドガァァァンッ！

半ば自殺行為ですらある接近戦でのミサイル攻撃は、その爆発は鈴とセシリアも巻き込み、ふたりは床へとたたきつけられる。

「無茶するわね、アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

「……」

煙が晴れ、そこに佇んでいるのはラウラだった。ほどゼロ距離で浴びた大爆発ですら、ダメージはほとんど無かったかのように宙に浮いている。

「終わりか？　ならば――私の番だ」

言うと同時に瞬間加速で地上へ移動、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃を当てる。
さらにワイヤーブレードが飛ばされたふたりの体を捕まえてラウラの元にとたぐり寄せる。そこからはただただ一方的な暴虐が始まった。

「あああああっ！」

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳がたたき込まれる。シールドエネルギーはあっという間に減ってレッドゾーンを超え、デッドゾーンへと到達する。これ以上ダメージが増加しＩＳが強制解除されることがあれば、その時は冗談ではなく生命に関わる。
しかしラウラは攻撃の手を止めない。ただ淡々と鈴にセシリアを殴り、蹴り、ＩＳアーマーを破壊していく。

普段と変わらないラウラの無表情が確かな愉悦に口元をゆがめたのを見た瞬間、俺と一夏の頭の中の何かのゲージが振り切れた。

「おおおおおっ！」

「一夏待て！」

「なんだよ紫苑止める気か！」

百式を展開、同時に雪片弐型を展開したところで止める

「そんな訳ねえだろ。このシールドは俺が壊す」

俺は拳を握り思いっ切りアリーナの遮断シールドを殴って壊すその

まま袖口の中にある日本刀を両手に出して飛び込む
その後ろから一夏が飛び出す

「「その手を離せ！！！」」

ふたりで叫び一夏がラウラに刀を振り下ろす手前でステップを踏んで左に飛ぶそして前に飛んで鈴とセシリアについているワイヤーブレードを切る
隣では一夏の動きが止まるのを無視して鈴とセシリアを抱え離脱する

「紫苑！ふたりは！？」
「う……紫苑？　アンタバカでしょうＩＳ展開しないで飛び込んでくるなんて……」

「まったく……ですわ」

「喋るな苦情は後で聞く！……一夏、大丈夫が無駄口を叩けるほど元気だ」

「よかった」

一夏の安堵した声で答えた

「いってくる」

俺は再び日本刀を出してラウラに飛び込む

「ＩＳ展開しないでこの私とシュヴァルツェア・レーゲンに挑むとはやはり敵ではないな――死ね」

「一夏、下がれ！死ぬのはお前だラウラ！手を出してはいけない人に手を出したんだかな！」

ラウラのＡＩＣを交わしわき腹に蹴りを入れて体勢を崩したラウラに数回蹴りと入れて日本刀で刺す
ガギンッ！

金属同士が激しくぶつかり合う音が響いた

「なんのつもりだ名鈴」

俺の刀はラウラに届かず俺の目の前にいる千冬さんに止められ首筋には名鈴のＩＳの近接ブレード《昇汞》（しょうこう）そして名鈴の首筋には俺の日本刀がある

「もう、終わりよ」

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

一夏が驚く。まあそうだろうな生身でＩＳ用近接ブレードを持っている
俺は驚かないけどな

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ラウラはＩＳの装着状態を解除する。アーマーが光の粒子へと変換され弾けて消えた。

「織斑、凰、お前たちもそれでいいな？」

「あ、ああ……」

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい！」

「……」

「で、お前はどうする凰」

千冬さんは俺を見る

「知らねえな」

ビシュと日本刀を振り袖口にしまういながら続ける

「だか、今は鈴の方が心配だ。だから決着はトーナメントでいいです」

そのまま俺は鈴に駆け寄る

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

バンッ！　と千冬さんが強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

バシーンッ

場所は保健室。時間は第三アリーナの一件から一時間が経過している。ベッドの上では打撲の治療を終えたて包帯を巻いた鈴とセシリアがいる
その鈴を俺はひっぱたいた

「いったなにすんのよ！」

「なにすんのよじゃねえ」

「「ひっ」」

俺の凄味のある声に怯える鈴聞いていたセシリアも怯える

「お前らは死にたいのか……一夏、少し席をはずしてくれ」

「あ、ああ」

一夏はなにがなんだかわからないと顔をしながら保健室をでた

「お前らが何で切れたかは一夏以外だいたいわかっている」

シャルルと名鈴俺の隣にいる

「どうせ一夏の事を侮辱したんだろう」

「「！」」

「鈴あの時の事は知ってるだろ」

声が震えてるのがわかる

「え、ええ」

「名鈴、少し頼みたいことがあるんだがいいか？」

「ええ、いいわよなに？」

「一夏とエイミーを呼んできてくれ」

「わかったわ。少し待ってて」

そう言って名鈴は保健室をでた

「鈴、セシリア」

「な、なによ」

「な、なんですの」

「俺たちがいなかったら下手したら死んでたんだぞ。一夏のことが好きなら自分のことも考えろ、死んだら好きだの嫌いだの言えねえんだからな」

「わ、わかってわよ」

「ご、ごもっともですわ」

「それにしてもすごいね紫苑」

「なにが？」

ぱっと俺は声色を戻してシャルルに聞く

「ＩＳを展開しないであのボーデヴィッヒさんとやり合うなんて、しかもアリーナの遮断シールドまで生身で破るなんて」

「なんだ……そんなことか……」

「ん？　どうしたの」

「いや、なんでもない。無我夢中だったからリミッターが外れたんだろ」

「リミッターが外れたからって破れるは――」

「どうしたシャルル？」

途中で言葉を切ったので気になりシャルルを見る

「紫苑凄い血だよ！」

「あ？　どこに？」

「右手だよ！　ほら手当てするから見せて」
俺はシャルルに言われて右手を見る
「こんなのかすり傷だよ。ほっとけば治る」
ポタポタと床に血が流れているどうみてもかすり傷ではないしかも
制服に染み出している
一夏から借りた制服が
「どうみてもかすり傷じゃあないよいいから見せて！」
「紫苑、見せときなさい！」
「わかったよ」
俺はとりあえず椅子に座る
「捲ってくれるかな？」
「ああ」
俺は右手を捲るが傷は見えない
「脱いだ方が早いな」
ガシャン
服を脱いだら袖口に入れていた日本刀が落ちた

「おっと、危ない危ない」

「ちょ、ちょっと紫苑！」

慌てた声で鈴は俺を呼ぶ

「なんだよ」

「アンタその腕重傷じゃない！」

鈴が俺の右腕の肩のへんを指さすので見ると

「うわ、肉がはぜてるよ」

俺は日本刀を2振り広い立てかけてその上に一夏から借りた制服をかける

「どどどどうしょう！　と、とにかく座って！」

「そんなに慌てるなって」

椅子に座りながら慌てるシャルルをなだめる

「いや、慌てないアンタの方が異常だから」

「そうですわ。それにしても痛くないのですか？」

「全然痛くないと言ったら嘘になるかな実際ヒリヒリするよ」

こんな大怪我だとは思わなかったけど
「とにかく手当てするからじっとしてて」
救急箱を持ってきたシャルルが前の椅子に座り手当てを始める
「……いった」
「ご、ごめん」
「気にするな」
「う、うん」
保健室には医療器具の音だけが響く
「……なんかいい感じじゃない？」
「……そうですわね」
ジーと視線を感じる
「なんだよふたりとも」
「なんでもないわよ」
「なんでもないですわ」
「はい、終わり」

バシンとお約束の傷口にピンタをしたシャルル

「いった！」

「はあはあ、ごめん」

「今わざとだろ！」

「どうだ――――」

「はろー、呼んできたよ！」

『か』と言い終わる前に乱入者もとい名鈴と一夏そしてエイミーが来た

「名鈴サンキュ」

俺はシャルルの後ろから手をだす

「ちょっと紫苑怪我してるじゃない！」

「かすり傷だから気にするな」

俺の包帯姿をみて騒ぐ名鈴

「嘘つき包帯巻いてるじゃない！」

「大丈夫だ！シャルルに手当てしてもらったから！　だから近づくな！」

「いいから見せなさい」

「お願いだから近づかないでくれ！」

「なんでそんなに必死なんだ紫苑？」

「そうですわよ。心配してくれているのに近づかないでくれだなんてかわいそうすぎるですわ」

「そうよ、怪我ぐらい見せてあげなさいよ」

「見せてあげたら紫苑？」

「おまえらは知らないから言えるんだ！　名鈴は――」

「ほらほら見せて！」

「やめろ！う、うわあああああああああああああああああああああ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「これでよしっと」

「どこがヨシなのよ紫苑気絶してるでしょうが！」

「違うよ鈴気絶じゃなくて寝てるのよ」

「どこどう見たら寝てるになるの！」

エイミーが怒鳴る

「あー、忘れてた。　名鈴は家事スキル以外ダメだったのを」

私は頭を抱える

そうだ前に紫苑が言ってたのを忘れてたわ

「鈴失礼ね。しっかり出来てるじゃない今日はうまく出来たのよ」

そうか、うまく気絶させられたのかとはさすがに言えない

て言うかみんな思ってるだろうな

「……うっ！」

「気づいた紫苑？」

「あ、ああ」

「おはよー紫苑」

「名鈴……お前は昨日からなんなんだ！？　そんに俺をいじめてるのか？」

着せ替えやら制服すり替えやらさっきの手当てやマジでいじめだろ

「そんなことないよ。私の未来の旦那様なのにいじめわけないじゃん」

「あっそ」

「素っ気ない返事はいやよ」

名鈴は俺に抱きつく
今日は抵抗する気になれなかったのでそのまま放置

「あら、無抵抗ね」

「たまにはいいと思っただけだ」

「ふふ、紫苑大好きよー」

「退きなさいよ！」

エイミー現る
てか俺に抱きつくなよ

「紫苑も大変だな……まあ、それはいいとしてなん呼び出したんだ全員いるみたいだが」

「あ、ああ。あの時の事を離そうと思ってな」

「そうだな……あんなとこも合ったしな」

「ちょっと待ちなさいよ！」

「なんだよ鈴」

「なに鈴姉」

「ほんとにあの時の事話すの！？」

「ああ」

「そろそろ話す時だろ」

「わかったわなにもいわないわ」

「そうか、ありがとう鈴」

「話したくないが、みんなには知る権利があるしな」

俺と一夏一度お互いをみてあの時の事を話した

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「以上だ」

「これが知りたかった事だよ……そして名鈴にエイミー、そろそろ離れてくれ」

「うん、わかった。それと話してくれてありがとう」

名鈴はニコッと笑って俺から離れるそしてエイミーも

「そんな過去が合ったのね無理に話をさせてごめんねそしてありがとう」

エイミーも離れる

「さて、そろそろ帰る――――」

ドドドドドドッ……！

「な、なんだ？　何の音だ？」

「知るか」

地鳴りに聞こえるそれは、どうやら廊下から響いてきている。しかもなんだか近づいてるように聞こえるのだが、だぶんきのせいでは――なかった！？

どかーん！　と保健室のドアが吹き飛んだ……いや、マジで吹き飛んだ。俺は久々にドアが吹き飛ぶのみたぞ。……え？　みたことあるのかって……ありますよ。鈴と名鈴がやりますもん。　残念ながら日常茶飯事です。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「紫苑君！」

俺たち囲まれたぞ！　なんか人数的には俺の方が少ないような気がするが……気のせいだな。……べ、別に少ないからどうとかじゃないからね！……なぜツンデレになったんだ？　まあ、それはいいとして

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょ、ちょっと落ち着いて」

「人口密度が高いな。なんのようだよ」

「「「これ！」」」

状況が飲み込めない俺たちに、バン！　と女子生徒一同がだしてきたのは学内の緊急告知分が書かれた申込書だった。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまでいいから！　とにかくっ！」

一夏が読み終わると同時に手が伸びる

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君」

「私と組んでください、紫苑君」

どうしていきなり学年別トーナメントの仕様変更があったかはわからないが、ともかく今はこうしてやってきているのは女子は学園内で3人しかいない男子ととにかく組もうと、先手必勝とばかりに勇み迫ってきているのだろう。しかし――

「え、えっと……」

そうか、シャルルは女だったなしかし俺と一夏はラウラに因縁があるから仕方ない

「一夏俺と組んでくれ」

「え、いや、シャルルが」

「シャルルは大丈夫」

俺は名鈴に目で合図しる

「シャルルは私と組むのよ」

名鈴は目で了解と言うかマバタキ信号で合図してシャルルの腕を組む

「え、李さん」

シャルルが戸惑っているが名鈴が耳元で話すと何か納得したように俺をチラリとみて続ける

「じゃあ、名鈴さんよろしくね」

「なんだ……仕方ない帰ろ」

「あーあ……」

とりあえず納得したみたいで女子達は各々が仕方ないかと口にしながら、一人また一人と保健室を去っていく。

「ふう……」

「死ぬかと思った……」

「セシリア！」

「な、なんですの鈴さん！」

「あたしと組みなさい！」

「いいですわよ」

みんなは俺と一夏がラウラに因縁があるのを知ってるのでなにも言わない

「ダメですよ」

いきなり登場！　山田先生

「くそ、気配を感じなかった。」

みんな驚いているぞ

「……あ！　そうでした。おふたりのＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを越えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ＩＳを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「これで、強敵はふたり減ったか」

俺が頷くと

「ベフ」

枕×2が俺の顔面に飛んできた

「腹立つわ」

「そうですわ」

「「ISが直ったらボコる（ボコりますわ）」」

「そんだけ元気があれば大丈夫だな。さて、帰ろっと」

「そうだね。紫苑、少し話があるから一緒に来て」

「ああ、わかった。じゃあお先に」

俺は名鈴連れて保健室を出た

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ここならいいだろ？」

「うん」

「で、何の話だ？」

保健室を出てそのまま屋上に来た

「シャルルの事に決まってるじゃない」
「別に決まってないが……なんだ？」
「シャルルは全部話したの？」
「ああ、全部話したよ」
「どうだった？」
「全部あってたよ。ありがとな」
名鈴の頭に手を乗せてナデナデしてやる
「ふふ、どう致しまして。　それにしても今日は珍しいね」
ナデナデ
「どこがだよ」
「そういうところがだよ」
ナデナデ
「そういうところって頭撫でるところか？」
「うん！？　さっきは抱きついてもなにも言わなかったし」

「なんとなくだな」

ナデナデをやめる

「ふーん、紫苑の変なの」

「おまえには言われたくないな」

「ひどいな～」

「ひどくない」

「いや、ひどいよー」

「おっと」

抱きつく名鈴のおでこを左手で押さえてとめる

「むむむ。」

「なんだ?」

「ぎゅーっとしたいてかして」

「……」

「なに……このままの体勢でシカトするの?」

「あ、悪い」

俺は名鈴から手を離してやる

「なによ、やっぱり紫苑変よ」

「そうかもな」

名鈴を抱きしめてやる

「え、ええ!?」

「なんだよ……いやだったのかよ」

離れようとするのを名鈴は服を掴んでとめる

「イヤじゃない、もう少しこのままでいて」

「今日は特別だぞ」

「最近多いその特別って」

「そうだな……俺どうしたんだろうな?」

「それ私に聞くこと?」

俺の胸の中で見上げる名鈴角度的に上目遣いになる

(俺ほんとにどうしたんだ……すごく名鈴が愛おしく見える……うん、気のせいだな)

「自分の事は自分がよく知ってるか」

「そうよ、紫苑のことは鈴や私よりも自分がよく知ってるわよ」

「だな。さて、戻るか」

ポンと名鈴の頭に手を乗せる

「ふーん、紫苑は焦らすんだ」

「意味分からん」

俺の胸から離れてクルンと一回転してこちらを向いて言う

「なんでもない、乙女心がわからないなって言っただけよ」

「そうかよ」

頭を掻いて名鈴と共に屋上を後にする。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「おかえり」

「あ、ただいま」

部屋についてドアを開けたら鈴がいた……当たり前か鈴の部屋でもあるしな

「名鈴とうまくいったの？」
「は？　なんの話だよ」
ボスとベッドに掛ける
「名鈴と話してたんでしょう？」
「話したけど？」
「一体なんの話をしたの？」
鈴は髪をとかし始める
「秘密。それより鈴こんなこと知ってる？」
「どんなことよ」
「女は男の前で髪をとかしちゃいけないってこと」
「なんでよ」
顔だけをこちらに向ける
「知らないのか……そんなことじゃあ襲われちゃうぞ」
「は？　意味分からないわよ」
「もーダメだな……女は男の前で髪をとかしちゃいけないのはね……男を誘ってると同じなんだよ。ようするに、えっちＯＫってこ

とわかった？」

「な！」

鈴はそれを聞いた瞬間身体を抱くように窓際まで逃げるしかもブラシ持ったまま

「なんで逃げるの？」

「うっさいバカ！」

「逃げるってことは少なからず俺のことを男として見てくれてるって解釈でいいのかな？」

「そ、そんなわけないでしょうバカ！」

ブラシが飛んでくるのをキャッチする

「危ないなー　別に襲わねえよ。ったく信用ないな俺」

ブラシをサイドテーブルに置きそのまま布団に潜った

「じゃあ、おやすみ」

「さっさと寝ろ。えろ紫苑！」

「へいへい」

それかは数分して紫苑の寝息が聞こえた

それに心なしか安心している鈴

「私は一応アンタを男として認識はしてるわよ」

薄く赤くなっている顔を冷ます為か手をうちわ代わりにパタパタと扇いでいる

「いつも先に寝ちゃうから寝顔見てなかったけど、やっぱり可愛いわねどことなく私に似てるし……って当たり前か双子だもんね。もし紫苑と姉弟じゃあ無かったらあたしたち会えてたかな？」

寝ている紫苑は当たり前のことだが答えないただスースーと寝息を立てるだけだ

「もし姉弟なかったら紫苑はあたしを好きになってくれてたかな？」

そう言って鈴は自分のベッドではなく紫苑のベッドに潜った

「たまにはあたしから。さっきは言えなかったけど、おやすみ紫苑」

火照ったほっぺを抱きながら紫苑の胸の中で長い夜を過ごした。

ブルー・ディズ／レッド・スイッチ（後書き）

さてさて、本編はどうでしたか？
結構長くなりましたが最後まで読んでくれてありがたいです。
感謝感謝です。

ではあとがきは、短めにさせていただきます。

次回で会えることを祈ります

ファインド・アウト・マイ・マインド（前書き）

現在テスト週間なのですがさあ、勉強しょうと思うとなぜかこっちがはかどってしまいました……。

そんな事より紫苑のワンオフ・アビリティーでますよ！
色々考えてこれになりました。
では、本編どうぞ

ファインド・アウト・マイ・マインド

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は月曜から学年別トーナメント一色にと変わる。その慌ただしさは予想より遙かにすごく、今もこうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。
それらからやっと開放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室へと走る。ちなみに男子組は例によってこのただっ広い更衣室を三人で占めて……

「はろー」

四人でした

「ってなんで名鈴がここにいるんだ！　女子は反対側だろ！」

「だってシャルルのパートナーだし」

「いや、そういう問題じゃないのだけど……みんな着替えてあるからいいか」

ここにいる全員の服装はＩＳを展開する時の服装ＩＳスーツを纏っている

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

「ああ」

（使うときが来たな俺のワンオフアビィリティー……氷花（ひょうか）を）

「一年の部、Ａブロック一回戦一組なんて運がいいな紫苑」
考え事をしてるときに話されたのでビクッとさせられる
「え？　あ、ああそうだな」
「どうした？」
「作戦を考えてたんだよ」
「そうか、それで作戦決まったのか？」
「ラウラのパートナーか誰かによって変わるしどっちのＩＳかによっても変わるからわからない」
「そうだな」
「あ、対戦相手が決まったみたい」
シャルルの声に残り三人はモニターを見るとちょうどトーナメント表に切り替わるそこで一旦思考が停止して、そこに表示される文字を食い入るように見つめた一夏も同じように
「「「「――え？」」」」
出ていた文字を見て、四人ともぽかんとした声をあげた
一回戦対戦相手はラウラ、そして箒ペアだったのだ。
◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……」

「……」

一夏たちが使っているのとは反対側の更衣室。人口過密のそこにあってなお、冷気を放つ一角があった。

ひとりラウラ・ボーデヴィッヒ。もうひとりは篠ノ之箒である。

ふたりの放つ異様な気配に、すし詰めで生まれた粗熱も二の足踏んでいるかのようだ。

（初戦の相手が一夏だと!?　なんという組み合わせだ……）

箒は静かにまぶたを閉じながら、その心中は穏やかではなかった。

ペア参加への変更が決まった日、どう言って一夏を誘うかを考えていたら夜はどっぷりと更けていた。

せめて日付が変わる前にと部屋に訪れると、待っていたのは「もう紫苑と組んじまったぞ」という返事だった。

それからどいしたものかと考えているうちに締め切り当日になってしまい、ペアが抽選で決まってしまった。

それがよりによってラウラであった。一年で抽選ペアになったのは箒とラウラだけだったらしい。

（私は何が何でも優勝しなくてはならないというのに!）

――最悪。最悪である。

確かに戦力としては五分と五分いやこちらの方が少し上かもしれないだろうが、箒はラウラとはまったく意見が合わない。何せ向こうはこっちの話を聞く気などハナからなく、一度口を開いたのも「邪

魔をしなければそれでいい」という不遜に充ち満ちた言葉だけである。

そりが合わないのである。

しかし、それ以上に箒が抱いているのは――近親憎悪だった。

力が全てだと思っている姿は、かつての自分そのものに見えた。

まるで過去の醜悪な姿を見せつけられているかのようで、箒はイヤでイヤでたまらなくなる。

（……いや、今は考えないでおこう）

そうしなければ戦えない。――そうしなければ、一夏とは、戦えない。

箒は組んだ腕をわずかに力をこめて、静かに意識を集中させていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「一戦目で貴様たちと当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃあなによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

「ああ、そうだな」

試合開始まであと五秒。四、三、ニ、一――開始。

「「「叩きのめす」」」

箒を覗いた三人の言葉は奇しくも同じだった。
試合開始と同時に一夏は瞬間加速を行う。その一撃が入れば戦況はこっちが有利になるが

「おおおっ！」

「ふん……」

ラウラは右手を突き出し。

一夏とのプライベートチャンネルを開く

『バカか一夏。真っ正面から突っ込む奴が何処にいる！』

『ここにいるだろ紫苑』

『まったくだ』

一夏とのプライベートチャンネルを切る

「くっ」

一夏はラウラのＡＩＣに捕まる

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。　以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかわかるだろう」

「おい、なにか忘れてないか？」

ラウラのわき腹に瞬間加速での加速を合わせた蒼く光る拳が入る

「ちっ……」

「逃がすかよ！」

俺は即座に龍砲を展開して何発か当てる

「私を忘れてもらっては困る」

俺の攻撃の隙を見て斬りかかってきた。

「それじゃあ俺も忘れなれないようにしないとな！」

ラウラのＡＩＣから開放された一夏はすぐさま俺の背中へと瞬間加速。ぶつかる瞬間、くるりと俺は肩で　回り一夏の背中に隠れる。

ガギンッ！

一夏と箒の近接ブレードがぶつかり合って、火花を散らす。

一夏は箒の刀を何回となく打ち合いながら、一夏はスラスターの推力をあげるその斬撃は徐々に箒は後方へと押されていく。

「くっ！　この……！」

押し返すために箒は大きく刀を頭上に振りかぶる。

「紫苑！」

「ああ。」

一夏の合図とともに龍砲を展開チャージとともに少し飛び上がり龍砲を放つ

「！？」

ふっと目の前の箒が消える。俺の龍砲はアリーナの床にクレーターを作っただけだった

「邪魔だ」

入れ替わりにラウラが急接近してくる。そのワイヤーブレードのひとつが箒の脚へと伸びていって、アリーナ脇まで遠心力で投げ飛ばす。どうやらさっきの緊急回避はこのワイヤーによる牽引だったらしい。

「なっ、何をする！」

しかし、味方を助けたにはほど遠いラウラの行動は、本当にただ邪魔だからどかしたというだけだったようだ。床にたたきつけられた箒が怒声を発する。

しかし、当の本人は聞く耳持たず。すでに俺たちへの攻撃を始めている。プラズマ手刀を展開したラウラが左右から連続で一夏に斬りかかっている

「数の差で私が有利だな」

「たかが二倍じゃねえか！」

「一夏、冷静さを忘れるなよ」

俺はラウラのワイヤーブレードを交わしながら一夏に言う

『紫苑、そろそろ行くか』

『わかった。俺が戻るまで落とされるなよ』

『わかってるって』

プライベートチャンネルで短くやり取りをして俺は箒の元に向かうどちらかと言うとものすごく箒が邪魔なのでアリーナにでる前に先に箒を倒すことに決めたのだ

「相手が一夏じゃなくてすまんな」

「なっ……！？　バカにするなっ！」

俺はラウラの射程圏内から離脱して蒼龍牙月を二刀流で展開して箒へと間合いを詰める。しかも、挑発が予想通りの効き目で箒は頭に血が上ってた。

ガギィンッ！と俺と箒の近接ブレードガぶつかり合って、火花を散らす。何回となく打ち合ったときいきなり俺の目の前にウィンドが開く

『戦闘経験が一定時間を超えました。想龍及び蒼龍牙月の新しいモ

ードが使用可能です。確認ボタンを押してください』

「……なんなんだ？　てか、手が放せないのにボタン押せとかあり得ねえだろ！」

ひとまずそのウィンドを無視して箒と戦う

ガギンッ！

「はあああああっ！」

「ちっ……ウィンドが邪魔だ！」

蒼龍牙月を連結し箒の攻撃を防ぎながら空いた手で確認ボタンを押す。すると蒼龍牙月が蒼く光る

『蒼龍牙月・真打ち使用可能』

そのウィンドが出た刹那蒼龍牙月は細く日本刀より長く太刀みたいな蒼と黄色の太刀だ色は変わっても模様は変わらないみたいだ

「なんだが知らんが、さっさと終わらせ――」

「とどめだ」

ドンッ――！

「一夏！」

ラウラの大型レールカノンの発砲音が聞こえるか聞こえないかの瞬間に蒼龍牙月・真打ち一振りをを大型レールカノンに投げる。そして刺さる

ドガァァンッ

「ちっ……」

凄い音を立てて大型レールカノンは爆発した

『一夏、無事か？』

『なんとかな、そっちは』

『今すぐかたをつけるからもう少し待っててくれ』

『わかった。』

プライベートチャンネルで短く会話して再び戦いに集中する

「さて、本気で行きますか」

蒼龍牙月・真打ちを左手に持ち替え右手に想龍一枚を瞬時展開してそのまま箒と間合いを詰める

「想龍の新しいモードはなんなんだよ」

想龍を開き箒と交戦しながら調べる

ガギンッ！

「くっ……」

「これか？」

想龍を閉じて握ると想龍の先端から蒼白い光が伸びて小太刀ぐらいの長さで止まる

「なんか《雪片弐型》に似てるな……今は考えるのは止めるかさっさと倒して一夏を助けに行かないとな」

一気にかたをつけるつもりで瞬間加速で箒に近づい近距離での龍砲を浴びせて箒を倒して一夏の元に行く

「一夏お待たせ」

「箒は？」

「少しせこいことして倒しちゃったぜ」

「訓練機相手に時間がかかり過ぎだな」

「いろいろあったんでな」

蒼龍牙月・真打ちを床に刺して想龍を展開して同じように握る

（一夏気づいてくれるかこの二段攻撃を）

蒼龍牙月は特訓の時に一夏に許可申請は出してあることは伝えてある。それに気づいてくれれば勝てる

「さて、ここからが本番だ」

「ああ。見せてやるとしようぜ、俺たち幼なじみの息の合ったコンビネーションをな」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふあー、すごいですねぇ。二週間ちょっとの訓練であそこまでの連携が取れるなんて」

教師だけだ入ることを許されている観察室で、モニターに映し出されている戦闘映像を眺めながら真耶は感心したようにつぶやく。

「やっぱり織斑君ってすごいですね。才能ありますよね」

「あいつらは元々コンビネーションが良かった。まあ紫苑が合わせているから成り立つんだ。あいつ自体は大して連携の役には立っていない」

身内には相変わらず辛口評価しかしない千冬に、真耶はやや苦笑気味に言う

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ……そうかもしれないな」

ぶすっとした感じで告げる千冬だったが、真耶はそれが照れ隠しなんだと最近わかったので、別段気にしない。それどころか『やっぱり弟さん想いだなぁ』としみじみ思う

「それにしても学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件のせいですか？」

先月の事件――黒い全身装甲ＩＳの襲撃は、一般的には反政府組織の仕業ということになっている。　ＩＳ学園を襲撃したというだけでも重大なことなのに、それが無人機だとわかればますます事態が危うい方向へと向かってしまう。今でも各国が敵対国の仕業ではないのかと互いを疑っている状態なのだ。

「詳しくは聞いてないが、おそらくそうだろう。より実戦的な戦闘経験を積ませる目的で、ツーマンセルになったんだろうな」

「でも一年生は入学してまだ三ヶ月ですよ？　戦争が起きるわけでもないのに、今の状況で実戦的な戦闘訓練は必要ない気がしますが……」

真耶の言うこともっともだ。けれど、その疑問を投げかけてくるのはわかっていたので、千冬の表情は変わらない。

「そこで先月の事件が出てくるのさ。特に今年の新入生には第三世代型兵器のテストモデルが多い。そこへ謎の敵対者が現れたら、何を心配するべきだ？」

「――――あ！　つまり、自衛のため、ですね」

「そうだ。操縦者はもちろん、第三世代型兵器を積んだＩＳを守らなくてはいけない。しかし教師の数が有限である以上、それらは原則自分で守るしかない。そのための実戦的な戦闘経験なのさ」

「ははぁ、なるほどなるほど」

真耶は疑問氷解とばかりにうなずく。

なお、原則としてＩＳに使われる技術は開示しなくてはならないのが決まりであるりしかし、新しい技術を作ってすぐに開示したのでは、他国に簡単に盗まれてしまう。それではあまりメリットがない。少なくとも技術の応用ノウハウやＩＳ操縦者の練度を高めなくては、開発した国が損するだけなのである。

そこで、このＩＳ学園なのだ。

ＩＳ学園はその成り立ちの特性上、『あらゆる法の適応外』という側面を持っている。もちろんすべての法に対して無効化力があるわけではないが、重要なのは『ＩＳ技術における試行』という項目である。

『新技術に必要とされる試行活動を許可し、またそれらのデータの提出は自主性に委ねるものとして、義務は発生しない』つまり、ＩＳの新技術きおいて『データの開示をせずに実戦データを集められる』のは世界中でもただひとつ、このＩＳ学園だけなのだ。そのため、中国、イギリス、ドイツと第三世代型兵器搭載ＩＳを送り込んできている。

そして、真の狙いはワンオフ・アビリティーとの融合である。三年という間にうまく第二形態に移行し、第三世代型兵器を使った『ワンオフ・アビリティーは絶対に真似できない』からである。

もちろん、それが天文学的な確率であることには違いないが、どちらにしても三年間の稼働経験値、蓄積データというアドバンテージを持ってるのは大きい。

このことから、ＩＳ学園の生徒はまだ代表候補生の段階でありながら、最新型の専用機を与えられているのである。

専用機持ちが選りすぐりのエリートであることは間違いないが、何もそれが一人であるとは限らない。極端な話、ＩＳ学園に入学できる年齢であるなら誰だっていいのだ。そのくらい、候補生時点での

実力には大きな差がない。

「それにしても篠ノ之さん、あっさり負けましたね」

「専用機がなければあんなものだろう。特に篠ノ之はデュノアと相性が悪い」

じゃんけんのようなものだ。と付け加えて、千冬はモニターに視線を戻す。

そこでは一対二でありながら、互角に渡り合うラウラの姿があった。

「強いですねぇ、ボーデヴィッヒさん」

「ふん……」

しみじみという真耶に対し、千冬は心底つまらなそうな声を漏らす。

「変わらないな。強さを攻撃力同一だと思っている。だがそれでは――」

紫苑そして一夏にも勝てないだろう。

しかし、その言葉はけして口にはしない。言ったが最後、真耶にどんなことを言われるかわかったものではない。

ワアアアッ！

会場が一気に湧いた。その歓声が観察室まで直に響いてくる。

「あ！　凰君がなにか仕掛けますよ」

「さて、そう上手く行くかな」

「大丈夫ですよ、織斑先生が一目置いるんですから」

「……ふん。さて、試合の続きだ。どう転がるか見物だぞ」

「はいっ！」

◇◇◇

「貴様は殺す！」

「今のおまえでは無理だよ」

バシュ

「！？」

いきなりあらぬ方向から蒼龍牙月・真打ちが飛んできてラウラは交わす

ラウラは視線を巡らせ。そして一夏と目が合う

（気づいてくれたか）

「すきあり！」

ラウラの懐に入りラウラの目の前に手をかざす

「発動、ワンオフ・アビリティー氷花」

「なっ……そんなものデータになかったぞ！」

「奥の手は最後の最期に出すものだよ……すべて凍らせろ氷の花……氷花」

俺の手のひらが蒼白い光そしてラウラのＩＳが氷ついていき紫電が走る。ＩＳ強制解除の余候を見せ始める。

――だが次の瞬間、異変が起きた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

（こんな……こんなところで負けるのか、私は……）

確かに相手の力量を見誤った。それは間違えようのないミスだ。しかし、それでも――

（私は負けられない！　負けるわけにはいかない……！）

ラウラ・ボーデヴィッヒ。それが私の名前。識別上の記号。

一番最初につけられた記号は――遺伝子強化試験体Ｃ－００３７。

人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

――暗い。暗い闇の中に私はいた。

ただ戦いのためだけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。

知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。

格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。

私は優秀であった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。

それがある時、世界最強の兵器――ＩＳが現れたことで世界は一変した。その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれたのだ

『ヴォーダン・オージェ』――疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号伝達の爆発的な高速向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことを指す。そしてまた、その処置を施した目のことを『越界の目』と呼ぶ。

危険性はまったくない。理論の上では、不適合も起きない――はず、だった。

しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った。

この『事故』により私は部隊の中でもＩＳ訓練において後れを取ることとなる。

そしていつしかトップの座から転落して私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして『出来損ない』の烙印だった。
世界は一変した。――私は闇からより深い闇へと、止まることなく転げ落ちていった。
そんな私が、初めて目にした光。それが教官との……織斑千冬との出会いだった。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。１ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなかった。特別私だけに訓練を課したということはなかったが、あの人の教えを忠実に実行するだけで、私はＩＳ専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨した。
しかし、安堵はなかった。自分を疎んでいた部隊員も、もう気にもならない。
それよりもずっと、強烈に、深く、あの人に――憧れた。
――ああ、こうなりたい。この人のようになりたい。
そう思ってからの私は、教官が帰国するまでの半年間に時間を見つけては話しにいった。
いや、話などできなくてもよかった。ただ側にいるだけで、その姿を見つめるだけで、私は体の深い場所からふつふつと力が湧いてくるのが感じられた。
それは、『勇気』という感情に近いらしい。
そんな力があったからだろうか。私はある日訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？　どうすれば強くなれますか？」

その時――ああ、その時だ。あの人が、鬼のような厳しさを持つ教官が、わずかに優しい笑みを浮かべた。

私は、その表情になぜだか心がちくりとしたのを覚えている。

「私には弟がいる」

「弟……ですか」

「そして、幼なじみの男がいる」

「幼なじみ……ですか」

「あいつらを見ていると、わかるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「……よくわかりません」

「今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるなら会ってみるといい。……ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつらに――」

優しい笑み、どこか気恥ずかしそうな表情、それは――

（それは、違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに）

だから――許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟と幼なじみ、それは認められない。

認めるわけにはいかない。

だから――

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男たちを、私の力で、完

虐無きまでに叩き伏せると！）

ならば――こんなところで負けるわけにはいかない。あの男たちは、あれは、まだ動いているのだ。動かなくなるまで、徹底的に破壊しなくてはならない。そうだ。そのためには――

（力が、欲しい）

ドクン……と、私の奥底で何かがうごめく。

そして、そいつは言った。

『――願うか……？　汝、自らの変革を望むか……？　より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの渡しなど、何から何までくれてやる！

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あああああああっ！！！！」

突然、ラウラが身が裂かんばかりの絶叫を発する。同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、俺は吹き飛ばされた。

「ぐっ！　一体何が……。――！？」

「なっ！？」

俺も一夏も目を疑った。その視線の先では、ラウラが……そのＩＳが変形していた。
いや、変形などという生やさしいものではない。装甲をかたどっていた線はすべてぐにゃりと溶け、どろどろのものになってラウラの全身を包み込んでいく。

「なんだよ、あれは……」

「そんなことは……どうでもいい。ラウラを助けないと！」

俺はとっさにラウラに飛び込んだ

「ぐはっ！」

再び電撃が放たれ俺は吹っ飛ばされる

「大丈夫、紫苑！」

「ああ……っ！」

一夏が駆け寄り一夏に返事をしながらラウラを見ると言葉がつまってしまった……だってラウラの持つ武器は――

「どうし……《雪片》……」

そう、千冬さんがかつて振るった刀。それに酷似していた。
似ているというレベルではない、まるで複写（トレース）だ。

一夏は《雪片弐型》を握りしめ、中段に構える

「一夏！　まて――――！」

「――――！」

俺が止めると同時に黒いＩＳが一夏の懐に飛び込んでくる。居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれた必殺の一閃。それは紛れもなく千冬さんの太刀筋だった。

「ぐうっ！」

構えていた《雪片弐型》が弾かれ、そして敵はそのまま上段の構えへと移る。これは――――まずい！

「！」

「一夏！」

一夏を庇うように飛び出して

「ぐっ！」

一夏は『後方退避』して百式は粒子となって消えた

俺はシールドバリアで防がれたからなんとかたったが

「一夏、大丈夫か」

「……がどうした……」

「は？」

「それがどうしたあああっ！」

「おい！　バカ！」

「うおおおおっ！！」

一夏は拳で黒いＩＳに殴ろうして飛び込んだ。拳が触れる寸前で、打鉄装備の箒によって引き戻される

「馬鹿者！　なにをしている！死ぬ気か！？」

「離せ！　あいつ、ふざけやがって！　ぶっ飛ばしてやる！」

「……っ！　思い出したぞ」

「なにがだよ」

「あの剣技習ったことがあるぞしかも千冬さんから……だが、どこで習ったか思い出せない……」

「なに言ってんだよ、箒の道場で習ったじゃねえか」

「私の道場で……紫苑お前あの時の男か！」

箒は驚いてるが俺はさっぱりなんだけど

「さっぱりわからないが……一夏、頼みたい事がある。」

「なんだよ」

「お前はラウラとそのＩＳをぶん殴りたい、俺はラウラを助けたい。だから《雪片弐型》を貸してくれないか？」

「エネルギーがないから無理だ」

「出来る、《雪片弐型》を一極限定モードで再構成すれば展開できる」

「わかったやってみる」

一夏はガントレットに触れて

「百式を一極限定モードで《雪片弐型》だけを再構成する」

そう言うと右手に《雪片弐型》だけが展開される

「サンキュな一夏そしたら俺をアンロックしてくれそして零落白夜も許可してくれよ」

「ワンオフ・アビリティーは無理じゃないのか？」

「《雪片弐型》事態がワンオフ・アビリティーなんだよ。いいから早く」

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルＤと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！　来賓、生徒はすぐに避難すること！　繰り返す！』

「ああ、わかった。雪片弐型および零落白夜を紫苑に許可申請」

アンロックが完了して一夏は俺に雪片弐型渡す

「じゃあ借りるぜ」

「負けんなよ」

「負けたらあの制服で登校してやるよ」

「ああ」

「行くぜ、偽物野郎」

「発動――零落白夜」

ヴン……と反応するがエネルギーの刃は出なかった

「やっぱりか、だが答えてくれ、雪片ぁぁぁ！」

再びヴンと反応してエネルギーの刃が出る

「いい子だ。行くぞ」

「……」

黒いＩＳが刀を振り下ろす。それは千冬さんがするのと同じ、早く鋭い袈裟斬り。

「こんなのはただの真似事だ」

ギンッ！　腰から抜き放って横一閃、相手の刀を弾く。

そしてすぐさま頭上に構え、縦に真っ直ぐ相手を断ち切る
その時雪片のエネルギーの刃から雪が散った
（ふん……氷花も出てきたかった……これがほんとの雪片か）

「これが、心がある、剣技だ！」

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いＩＳが真っ二つに割れる。そして、気を失うまでの一瞬であろう間に俺とラウラの目があった。　眼帯が外れ、あらわになった金色の左目と。それはなんだかひどく弱っている、捨てられた子犬のような眼差しに俺には見えた。助けて欲しいと、言っているように見えたのだ。

「……ああ、助けてやるよ。だからいつでも俺を呼べよ……飛んでいってやるからよ」

力を失って崩れるラウラを抱きかかえて、俺はひとりつぶやいた。それが果たして聞こえたかどうかは、ラウラだけが知ってるだろう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「一つ忠告しておくぞ。あいつらに会うことがあれば、心を強く持て。あいつらは未熟者のくせにどうしてか、妙に女を刺激するのだ。特に幼なじみの方だな、油断していると惚れてしまうぞ？」

そんな風に言う教官はひどく嬉しそうで、それでいてどこか照れくさそうでなんだか見ているこっちがモヤモヤとした。
だから、――今ならわかる。あれはそう、ちょっとしたヤキモチだ

ったのだ。それでつい、あんなことを訊いてしまった。

「教官も幼なじみに惚れているんですか？」

「年下には興味はない。ただ心配なだけだ」

ニヤリとした顔で言われて、私はますます落ち着かなくなる。教官にこんな顔をさせる、その男が羨ましい。

そして、出会ってわかった。戦って、理解した。強さとは――なんなのか。

その答えは無数にあるのだろう。

けれど、その答えの一つに強烈に出会ってしまった。

『強さは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと、俺は思ってる』

……そう、なのか？

『そうだろ。　自分がどうしたいかもわからねえやつは、強い弱い以前に歩き方を知らないもんだろ』

……歩き、方……。

『どこへ向かうか。どうして向かうか、』

……どうして向かうか……。

『まあ簡単に言うと、やりたいことはやったもん勝ち。つまんない、遠慮とか我慢とか、損するぞ？』

そして、そいつは――その男は――私の頭を撫でて言った。

『やりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえし、つまらねえぞ』

――では、お前は……？　お前はなぜ強くあろうとする？　どうして強い？

『俺は強くない。俺は、まったく、強くない』

断言。その言葉にぽかんとしてしまう。

あれほどまでの力を持ってなお、強くないと言う。それが理解できない。

『けれど、もし俺が強いっていうのなら、それは――』

――それは……？

『強くなりたいからかもな、だから強いんだと思う』

――。

『それに、強くなったら、やってみたいことがある』

――やってみたいこと……？

『大切な人を守りたい。自分の命をかけて、ただ誰かのために戦ってみたい。人を助けてみたい。』

――それは、少し危なっかしいけどまるで……あの人のようだ。

『そうだな。　だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィ

ッヒ』

言われて、私の胸は初めての衝撃に強く揺さぶられる。

『守ってやるよ。そして、助けてやるよ』

そう言われて、私は――ああ、そうか。これが……そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

そして、早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では、私はただの十五歳なのだと、ただの『女』なのだと。

――凰、紫苑。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「う、ぁ……」

ぼやっとした光から降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

「気づいたか」

その声に聞き覚えがある。聞き覚えがあるどころではない。どこで聞こうと一瞬で判断できる、自らが敬愛してやまない教官こと織斑千冬だ。

「私……は……？」

「全身にに無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理はするな」

千冬はそれとなくはぐらかしたつもりだったが、そこはさすがにかつての教え子。簡単に誘導はされてはくれなかった。

「何が……起きたのですか……？」

無理して上半身を起こすラウラは、全身に走る痛みにその顔を歪める。けれど、瞳だけはまっすぐ千冬を見つめていた。治療のため眼帯が外されている左目は、右目の赤色とは全く違う金色をしている。そのオッドアイが、ただまっすぐに問いかける。

「ふう……。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」

しかし、そう言って引き下がる相手ではないこともわかっている。千冬はここだけの話であることを沈黙で伝えると、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「ＶＴシステムは知っているな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そう、ＩＳ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがお前のＩＳに積まれていた」

「……」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながら、ラウラはぎゅっとシーツを握りしめた。その視線はいつの間にかうつむき、眼下の虚空をさまよっていた。

「私が……望んだからですね」

あなたに、なることを。

その言葉は口にはしなかったが、千冬には伝わった。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれ、ラウラは驚きも合わせて顔を上げる。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……私……は、……」

その言葉の続きが出てこない。自分がラウラデあると、どうしても今の状態では言えなかった。

「誰でもないなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデ

ヴィッヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

千冬の言葉は意外だった。まさか、自分を励ましてくれるとは思ってもみなかったラウラは、何を言うべきかがわからない。わからないまま、ただぽかんと口を開けていた。

そんなラウラに、千冬は席を立ってベッドから離れる。もう言うべきことは言ったのだろう。教師の仕事に戻るようだった。

「ああ、それから」

そして、ドアに手をかけたところで、振り向くことなく再度言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ。　アイツの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ……それに、アイツの幼なじみはもっとな」

きっと、ニヤリと笑って言ったのだろう。それがどうしてかラウラにはわかった。

そして、千冬が部屋を去ってから数分経って、急におかしくなった。

「ふ、ふふ……ははっ」

私はどのくらい笑ったのだろう。こんなに笑ったのは初めてだ

「は、はは……体が痛い」

「よぉ、結構笑ったな。気が済んだか？」

「っ！」

「そんなに驚くなよ、はい見舞いだ」

俺はスーパー袋を机に置く

「紫苑、これは？」

「やっと俺を名前で呼んだな」

椅子に座りスーパー袋からももまんを２つだす

「ほら、今日はこれしか無かったから買い占めてきた」

最初は疑うラウラだったが渋々俺からももまんを受け取る

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして。じゃあ俺も１ついただきます」

パクッとももまんたぶりつく

「ぷっ……ははっ」

急にラウラが笑い始めた

「？」

ゴクンと口の中のももまんを飲み込みラウラに訊ねる

「どうした？　なんで笑ってるんだよ」

「見舞いと言いながら自分が食べているからだ」

「これはお約束だぞ。友達の見舞いに行くって見舞い品を食べるのはな」

「そうなのか、私には友もいなければ家族もいない。こ、恋人だっていない。空っぽの私だからな」

いつの間にかうつむいていたラウラの頭にぽんと手を置き撫でて言う

「空っぽなのは良いことだぞ。だって、なんでも詰め込められるからな。」

「そ、そうか」

「ああ、それに友は出来ただろう？」

「……？」

「俺と一夏だよ。まあ、いいか、ももまんは温かい内に食べろよ」

「う、うむ」

ハムっとももまんを食べる

「美味しいだろう？　この店のももまんとかは本場の物と似てて俺

の行き着けなんだよ……あ、今度一緒に行くか」

「うん」

「約束だぞ」

俺の拳とラウラの拳をぶつけてラウラは続けた

「無論だ！」

「じゃあ、俺はそろそろ行くわ」

席を立ちベッドから離れる

「あと、それから」

ドアに手をかけたところで、思い出して振り向く

「それ、全部食べとけよ。見つかったら怒られるぞ。じゃあ、お大事に」

俺はドアをピシッと閉めて寮に向かって歩き出す

「相互意識干渉（クロッシング・アクセス）か……」

ぼそっと呟き暗くなり始めた夜空を見ながら歩いていると後ろから話しかけられた

「あ、こんなところにいましたか。凰君」

「あ、山田先生なにかご用ですか？」

声の方に振り向き答える

「ええ、今日から大浴場が使えるようになりましたので知らせに来ました。着替えを持って脱衣場まできてくださいね。織斑君たちも来てますので」

「……わかりました」

「では」

ささささっと山田先生は行ってしまった

「シャルルは大丈夫なのか？　まあ、どうにかなるか」

俺は考えるのをやめ自分の着替えを取りに戻って着替えを取り出して脱衣場に向かった。部屋は鈴はいなかったので難なく着替えを取り出せた

いたら氷花のことで質問責めに合うだけだからな

「あ、来ましたね。それじゃあどうぞ！　一番風呂ですよ！」

「ど、どうも……」

テンション高めの山田先生の「ごゆっくり～」という言葉に見送られて脱衣場のドアを閉める

「仕方ない……みんなで入るか」

「え、ええ！」

「お、おい紫苑本気か？」

「言っただろう？　俺は鈴とあと名鈴以外の裸には興味はないと。別に入らないならいいぞ、俺1人ではいるし。てか、日本にいて風呂入らないとかあり得ないだろう」

「そりゃあそうだが……シャルルが」

「ぼ、僕は気にしないからいいよ」

俺は少し考えて名案を思いついた

「……わかったよ」

「なにがだよ」

「仕方ないからタオル巻いて入るか。やってはいけないことだがしょうがない」

そして、俺は服を脱ぎ始める

「わ、急に脱がないでよ」

「おっと、悪い向こう側に回る」

「うん、ごめんね」

「行くぞ一夏」

「あ、ああ」

向こう側に回った俺と一夏

「……おい、紫苑」

「……なんだよ」

一夏はシャルルに聞こえないようになのか知らないが小さい声で話しかけてきた

「……本気なのか？」

「……だからなにがだよ」

「……いや、やっぱりなんでもない」

「あっそ、変なん一夏」

カラカラカラ……。

「うおー」

「騒ぐな、慌てるな、転ぶぞ一夏」

「子供じゃあないんだ――」

つるんズゴン

一夏は転けた

「……わざとだろお前」

「い、一夏大丈夫!?」

「いてて、大丈夫だシャルル！」

「どうしたの一夏そんなに焦って？」

「……はぁ」

シャルルって天然だなと思いながら言葉を続ける

「シャルル、自分がどんな格好かわかってるか？」

「え……っ！」

「気づいたか。そして、一夏体を張ったぼけありがとう。面白くはなかったがな」

「ぼけじゃあねえよ……いてて」

「はいはいわかったからささっと体洗うぞ」

「わかったよ」

シャルルからかなり離れたところで全身を洗い
俺たちは風呂に入る

「ふうううぅ〜〜……」

「はぁ～～……久々の風呂だ～～」

「これがお風呂なんだ～」

三人とも呟きながら身を沈めた。

ああ、疲労や体の凝りが解けていく

「あー……生き返る～……」

る～……る～……る～……。

と、一夏の声がエコーで響くてか一夏

「「じじくさいよ」」

シャルルも同じことを思ったらしくハモった

「な、紫苑には言われたくないな」

「悪かった……な！」

バシャと一夏にお湯をかける

「うわ、やりやがったな」

バシャ

「ほう、この俺にケンカを売りのかそうか買ってやろう」

バシャバシャバシャバシャ……。

「はぁはぁ……。」

「なんで、僕まで……」

「1人逃げるのはなしだぞシャルル」

「そうだぞ、シャルル」

「さて、そろそろ上がるわ」

「俺も」

「ま、待って！」
急に大声で呼び止められた

「そ、その、話があるんだ。大事なことだから、2人にも聞いて欲しい……」

「わ、わかった……」

「お、おう……」
大事な話と言われれば、聞かないわけにはいかない。　俺と一夏は一度浮かした腰を再び湯船に沈める。

一応シャルルを見ないように2人して回れ右してシャルルの言葉に耳を傾ける

「その……前に言ったこと、なんだけど」

「前って言うと……もしかして、学園に残るって話か？」

「それしかないよ一夏」

「うん、そ、それ。僕ね、ここにいようと思う。僕はまだここだって思える居場所を見つけられていないし、それに……」

「そ、それに？」

「な、なんだ？」

「……」

なぜか、返ってきたのは沈黙だった。急に会話が止まったことで、浴場全体がしーんとなってしまった

ぴちゃーん。

「きゃあっ！？」

「どど、どうした！？」

「びっくりしたー」

いきなりのかわいらしい叫び声に俺はびっくりした

「ご、ごめん。す、水滴が落ちてきて……びっくりしただけ」

「そ、そうか……」

「な、なんだ……」

「……」

「……」

「……」

そしてまた沈黙が続く。時折天井が落ちる雫が、妙に大きく感じられた。

ちゃぷ……。

「？　シャルル？」

湯船の動く水音が聞こえた、一夏は反射的に発生源へと顔を向けた。

「こ、こっち見ちゃダメ！　あっち向いてて！」

「わ、悪い！」

（やばいな……のぼせてきた……）

ぴとっ……と、俺と一夏の背中にシャルルの手が触れてきた。

「しゃ、シャルル――」

「何をするき――――」

そのまま、手で後ろから抱きしめられる

「2人が、ここにいろって言ってくれたから。そんな2人がいるから、僕はここにいたいと思えるんだよ」

「そ、そうか……」

「そうなのか」

俺は周囲の人たちがしてきたことを、他の人に返してるだけなのだが

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ……？」

「なに……？」

「そう。僕のあり方。2人が教えてくれたんだよ？」

「そ、そうだっけか？」

「覚えてないな」

「そうだよ。ふふっ、2人とも自分に関することはどこまでも鈍感だね。憎たらしいくらい」

「そ、それは……すまん」

「ご、ごめん」

「いいよ。許してあげる。だだし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？紫苑は知ってると思うけど。三人の時だけでいいから」

「お母さんがくれた、本当の名前」

「わかった――シャルロット」

「ん」

嬉しいそうにシャルロットは一夏に聞く

「と、と、とこで、だな。あの、いつまでもこの体勢でいられると、正直色々とまずい事態が起こりうるんだが……」

なにを考えているんだ？俺はいつも鈴にしてるし名鈴にされてるけどなにもまずい事態は起きないぞ？

「あ、ああっ、うんっ！　そうだねっ！　ぼ、僕、先に出るね！」」

シャルロットはバシャバシャと湯船を出て行き

シャルロットの許しが出てから俺たちは風呂場からでた。

「さて、戻るか」

「そうだな」

「うん」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ただいま……ってまだいないし。あいつどこ行ったんだよ」

一夏たちと別れて自分の部屋に戻ったが鈴はまだ戻っていなかった

「……」

なにげなくクローゼットを開けるその中には男子用の制服と女子用にされた俺の制服がある。

バサッ

「せっかく造ってくれたんだ着てみるか」

女子用にされた制服に袖を通す

「なんか、なんか下がすーすーする。でも意外と活けるかも」

くるっとターンをしてみる

「……、なんだろう。鈴と似た顔なのに女らしくない……」

少し考えて思いつく

「胸が無いからだ。いくら小さくても鈴だってあるもんな。うん、わかったから着替えよう……待てよ。このまま外に出てみたらどうなるかな?……よし、やってみよう。その前に」

鈴のバックから小さい小物入れみたいのを取り出す

「勝手使うのは悪い気がするが大丈夫だろう」

小物入れの中身は化粧品が入っている
それを順番に使って化粧をする

「鈴と名鈴の見よう見まねだがこんなもんで良いだろ」

鏡を見て頷く俺
その顔は薄くファンデーションを塗って口紅をしただけの簡単な物だ

「さて、やってみるか」

ガチャとドアを開けて廊下出る

「のど乾いたから自販機行くか」

自販機に向かって歩き出す

「……」

そしてすぐに自販機に着いてしまいコーラを買って部屋に戻る

「紫苑！　あんななにやってんの！」

「あ、鈴姉こんなところにいたんだ」

プシュッとコーラの蓋を空けて一口飲む

「あんた、嫌がってたのにそれ着たんだ～。それに薄く化粧してるわねあたしのやつでしょ」

「なんとなく着てみた。でも女らしくないから化粧してみた」

「まあ、いいわ。ささささっと帰るわよ。消灯になるし……少し頂戴」

鈴は俺からコーラを貰い飲み干す

「だね、帰ろうか」

空になった缶を捨てて戻ってくる鈴と一緒に部屋に戻りしっかりと着替えて化粧を落としてすぐに寝た

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

翌日。

「眠い……」

「紫苑！」

「なんだよ……」

「あの氷花ってなによ」

名鈴が俺の机をたたき聞いてくる

「ワンオフ・アビリティーだよ……」

「なんでか――」

「はーい。席に座って、今日は重大なお知らせがあります」

「また、後でね！紫苑」

スタスタと名鈴は自分の席に戻る。
それにしても重大なお知らせってなんだ？

「一組のシャルル・デュノア君は本当はシャルロット・デュノアさんでした」

それが重大なお知らせか、そんなことかよ

「ねえ、昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ざわざわと教室が騒ぎ始める
？、俺やばくない？一夏も

ダーン！

鈴が突然机を叩き教室を後にした。それに便乗して俺も教室を出る

バシーン！

「一夏ぁっ！！！」

「紫苑ぉっ！！！」

「「「死ね！！！」」」

俺は名鈴とエイミーのアサルトライフルで一夏は鈴の龍砲が襲いかかった

「っ！　なんだ!?　浮いてるぞ」

「「「ふーっ、ふーっ、ふーっ！」」」

三人とも猫みたいだな

そんなこと言ってる場合じゃないな

「ら、ラウラ！　助かったよ、ついでに一夏かも助けたのか」

「ああ、嫁の友だからな」

「嫁って、だ――むぐっ!?」

ラウラのワイヤーブレードで助けられたのだが。そのまま手繰り寄せられて胸ぐらを掴まれて、引き寄せられ、そしてあろうことか――唇を奪われた。

「!?!?!?」

なにが起きたんだ、まったく理解できないぞ、てかこういうのは一夏担当だろなぜ俺なんだ?

「お、お前は私の嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

「……えーと、なぜ?　こういうのは一夏担当なのだけれど」

なんだかものすごい嫌な感じなんだけど……はっ俺のファーストキスが！

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故にお前は私の嫁にする」

「日本だろてかそれデタラメだ！　オタクの習慣だ！　そして俺は中国人だ！　そして俺ってモテてるのか？」

「ああ、そうだぞ紫苑お前はモテている」

「おまえにはいわれたないは一夏！」

「あ、あっ、あ……」

「とにかく俺は逃げる。だからラウラ離してくる」

「わかった」

シュタっと降りてそのまま窓の方にダッシュした

「「「待ちなさい！紫苑！」」」

鈴、名鈴、エイミーが追いかけてくる

ビシュンッ――！

鼻先をレーザーがかすめた

ダンッ！

そして目の前に日本刀が突きつけられた

「えーと、セシリアに箒さん？」

「なんですの？」

「なんだ？」

「なぜ、お怒りでしょうか？」

ふたりの額には血管マークがひいひうみいやよ……少なくとも五つはあるぞ

しかもセシリアはＩＳは展開済みと言うわけだ

「自分でお考えてくださいな！」

「自分で考えるんだな！」

同時に刀とレーザーが飛んでくる

「おっと、あぶねえな！　当たったら死ぬぞ！」

バシュ！

「あー、めんどくさい！　行くぞ青龍！　ワンオフ・アビリティー、氷花発動」

青龍を展開そしてそのまま氷花を発動して壁を作る

（全員を氷らせるのはちょっとな）

ダンッ！
バシュ！
ビシュンッ！
ジャキン！
ダダダダ！

上から箒、名鈴、セシリア、鈴、エイミーだ

「無駄だよ。この氷は絶対に壊せない。だからワンオフ・アビリティーなんだよ。シールドエネルギーを消費するのが痛いがね」

ダンッ！
バシュ！
ビシュンッ！
ジャキン！
ダダダダ！

パリーン

「嘘だろ～」

またしても逃亡開始
あれなんか違うような
ぼすっ。

「う？」

誰かに当たったと思った俺は半ば自動的な動きで、顔を上げている

「……」

シャルロットだった。

「にこっ」

「は、はは」

ああ、これが地獄の中の仏と言うのか。エンジェルシャルロット

「紫苑って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

「えーと……シャルロット？　俺はしてはいない、されたんだ。俺だってショックだよ。ファーストキスをあんな形で奪わるのわな……なぜＩＳを起動してるんだ？」

「なんでだろうね」

「もしかして……その左腕の盾にしまってある『盾殺し』（シールド・ピアース）で俺を撃つとかしないよな？」

「そのまさかだよ」

ドガアアアアアンッ！！！

その日のホームルームは轟音と爆音、そして絶え間ない衝撃でクラスが文字通り揺れた。

ファインド・アウト・マイ・マインド（後書き）

ラウラは紫苑にフラグを立ててみました
シャルロットにはこれから考えますが、一応立てるつもりでいます

たててほしくない人
立てるなら一夏にして欲しいと言う人はコメントください

おまけ「深なる紅達のまどろみより」（前書き）

書くか書かないか迷った結果書きました
これといってなにもないのであとがきは書きませんよ
では本編どうぞ

おまけ「深なる紅達のまどろみより」

「むーん……」

そこは奇妙な部屋であった。

部屋の至る所には機械の備品がちりばめられ、ケーブルがさながら樹海のように広がっている。

その金属（てつ）の根の上を歩いているのは、機会仕掛けのリスだ。時折床に転がっているボルトを、ドングリよろしくかじっている。

カリカリカリカリカリ……と響くその音は、昔一般的に使われていた磁気式記憶装置（ハードディスク）の書き込み音によく似ていた。

不要な部品を識別、その構成素材を分解して吸収、別の形状へと再構成するリスなど、世界中を探してもここにしかいない。

そう、ここは――篠ノ之束、その秘密ラボである。

「おー、おー」

ちきり、ちきり……。ちきちきちきちきちき……。

「お～……」

篠ノ之束、その姿はこれまた異色そのものであった。

空のように真っ青なブルーのワンピース。それはさながら童話『不思議の国のアリス』のアリスである。エプソンと背中の大きなリボンが目を引く。

顔立ちは、やはり箒の実姉というとこで似通っている。ただし、大きくかけ離れているのは、箒は剣術鍛錬から来る厳しくも凛々し

いツリ目なのに対して、束な寝不足から来る不健全に淀んだツリ目である。その目の下には、もう何年もずっとクマがついたままだ。

いわく、『天才は思考から解放されない』ということらしい。夢の中はそれまでの理倫を試行する場であり、安らぎのある眠りはずっと経験がない。眠りというのが果たして本来どのようなものであったか、それすら束は思い出せない。

妹とは違い剣術さおろかほとんどスポーツなどしない、したこともない束であるが、その体はすらっと伸び、均整が取れたしなやかな曲線を描いている。

そして何より目立つのは、その豊満な胸の膨らみであった。サイズが会っていないのか、バストを留めるボタンはギリギリまで引っ張られ、その白いブラウスの隙間から妖艶な大人の肌色が覗いている。

それに加えて頭のカチューシャも問題といえば問題だろう。なにせ、それには白ウサギの耳が付いている。言うなれば1人『不思議の国のアリス』状態だ。

アリスも白ウサギも同居している。そのミスマッチな格好。しかしそれこそが束の趣味であり、また好きな格好でもある。先月は1人『ヘンゼルとグレーテル』だった。意味不明な格好であったことは言うまでもない。

そしてそんな束は、奇妙な椅子の中にいた。

椅子の中にいる――という表現は奇天烈きわまりないが、現にそうとしかいいようがないので仕方がない。

シルバーの輝きを放つ、銀色の椅子。それはぐにゃりと大きく歪んで広がり、束の体をさらながら檻のように取り囲んでいた。それね見た目は、まるで恐竜の骨格に見えなくもない。

そして束が指先を動かすたび、繋がれた糸が作動してカラクリを動かす。

ちきり、ちきり……。　ちきちきちきちきち……。

指先のわずかな動きは椅子の各パーツをまるで生きているように動かせ、その先の小さなハンドツールへと伝わる。動きを受け取ったハンドツールはすぐさまピンセットでなにやら小さなパーツを組み合わせはじめた。
それはさらなる小さな椅子、そしてハンドツールへと繋がっている。
それが十数回繰り返されて、やっと動作が終わりへとたどり着く。
そこでは、ナノ単位のＩＳのプラモデルが組み立てられていた。

異常なまでの無駄。そして、馬鹿馬鹿しいほどぶっ飛んだ――『暇つぶし』であった。

「あー、終わっちゃった」
出来てしまった。それも塗装から表面保護、磨きがしと完璧である。
束はつまらなそうに言って椅子から出る。
がっちりと組み合って、まったく外れる様子のない椅子だったが、束がある一部分を触っただけで一瞬にして瓦解、がらくたの山へと変わった。
「んー……、暇、暇ぁ」

ちゃらら～♪　ちゃらら～♪　あんたら全員、覚悟しいや、バキューンバキューン！　ぐあああっ！　ああっ、　兄貴っ兄貴ぃ！　おっだらぁ、タマぁとったらんかぁ！

突然携帯がなった。
それにしてもすごい着信音だ

「こ、この着信音はぁ！　トゥッ！」

携帯の方にダイブした束

「も、もすもす？　終日（ひねもす）？」

「……」

ぶつっ。――切れた。二重の意味で。

「わー、待って待って！」

「――。……姉さん」

「うんうん。用件はわかってるよ。欲しいんだよね？君だけのオンリーワン、代用無きもの（オルタナティヴ・ゼロ）、箒の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能（ハイエンド）にして規格外仕様（オーバースペック）。そして、白と蒼の横に並び立つもの。その機体の名前は

『紅椿』（あかつばき）――」

乙女の心は晴れのち曇り（レイン・メーカー）（前書き）

若干強引にしたためなんか違和感があるかもしれませんが気にしないでください。
大まか合っていますから
では本編どうぞ

乙女の心は晴れのち曇り（レイン・メーカー）

チュンチュン……。

「ん……」

窓の外では早く入ろうとばかりに朝日が差している。同じく、目覚めをうながすかのようにスズメが鳴いている

（もう少し寝たいのだが）

もそもそと動くと

ふに。

（……？）

ふにふに。

（なんだ、　この感触は？　名鈴にも鈴にもある感触だな……）

「はっ！」

何、予感がしてがばっ！　と布団をめくる。と、そこには――

「やっぱり、ラウラか」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィッヒ。先月転校してきていきなり俺と一夏に宣戦布告。その後色々あって、――色々あった。

しかし、問題はそこではない。問題は、なぜ衣服を纏っていないのかということだ。つまり、全裸なのだ。身につけているのは左目の眼帯と待機形態のＩＳ――右太ももの黒いレッグバンドのみ。長い銀髪が腰のラインを撫でている。

「ん……。なんだ……？　朝か……？」

「ああ、もう朝だよ。とにかく服を着ろよ」

俺は例のネコミミパジャマでベッドから降りて肉球バンドでクローゼットからＴシャツを出してラウラに投げる

「いいのか？」

「いいから、それを着て鈴が起きる前に部屋をでてくれ」

「よいではないか、夫婦なのだから」

服を着終わりラウラは俺をジト目で見てくる

「……。はぁ、好きにしろ」

「うむ、だから好きにしている」

「はいはい。おい、鈴起きろ朝だぞ」

ゆさゆさ

「ん……うるさい」

お約束のグーパンチを交わし布団を剥がす

「ラウラカーテン開けてくれ」

「了解した」

シャーとラウラがカーテンを開けると朝日が部屋に入り鈴の顔を照らす

「うわ、眩しい！」

鈴は手で顔を覆い悶え苦しむ。それもいつもの事なので別段気にしない

「さっさと顔洗って着替えて、朝ご飯行くよ」

「お前たちどっちが上だかわからないな」

「よく、言われるよ。って鈴姉！　二度寝ダメ！」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

時間は過ぎ、場所は変わって、一年寮食堂である。俺の隣にラウラ。正面に鈴が座っている。

メニューは俺は焼き魚定食。ラウラはパンとコーンスープ、それにチキンのサラダ。鈴は朝からラーメンだ。胃がもたれそうだ

俺は魚をほぐしながら少し目移りしてしまう。

「ん、欲しいのか？」

俺の視線に気づいたラウラが「わけてやろう」といって自分の口に

パンを持って行く。

「……。はぁ」

ラウラのくわえはパンをかじる

「これで気が済んだか？」

「う、うむ……」

頬を赤くして俯くラウラ
照れるならやるなよな

「し、紫苑！　あ、あんたねぇ！」

「なんだよ鈴、ラウラのお遊びに付き合ってるだけだろ？　本命は――」

「私でしょう？　紫苑？」

言葉を言い終わる前に名鈴に言葉を遮られた

「名鈴おはよう、今日は早いな」

「私はお遊びでやっているわけではない！　本気なんだぞ！」

「おはよう、今日は目覚めがよかったからね」

ラウラが噛みつく勢いで身を乗り出してくるのを手で押さえつつ空いているもう片方の隣に座った名鈴と軽く挨拶をする

「今日は雨でも降るかな」

「ちょっとどういう意味よそれ！」

「そのままの意味だ」

「いつまでこうしてる気だ！」

押さえられていたラウラが切れた

「あ、悪い」

ぱっと手を離す。

すると体重をかけていたのかラウラはそのまま俺の方に倒れてくる

「あぶね！」

ラウラを胸で抱き止める

「大丈夫かラウラ？　すまんな急に手を離して」

「わ、私は大丈夫だ！」

ラウラはさっと席に座りパクパクと食べ始める

よく見ると顔が赤い

もしかして熱でもあるのか？

「ラウラ」

「な、なんだ？」

ラウラのおでこと俺のおでこをくっつけて熱を計る

「うん、熱はないな」

「……」

頷き俺は席に座った

「いてえっ！」

いきなり足にかかと落とし&頬をつねられた。

「紫苑の彼女は私でしょ！」

「あんたは私の弟でしょ！」

えっと、名鈴俺はヨリを戻したつもりはないぞ。そして鈴、意味分からん

と、心でツッコミを入れながら2人とフリーズしている1人を無視して食事をする

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「今日は通常授業の日ですね。ＩＳ学園生といえみんなは高校生ですから、赤点は取らないようにね」

そう、授業数自体は少ないが、一般教科も当然ＩＳ学園では履修する。中間テストはないけど、期末テストがある。ここで赤点を取ると夏休みは連日補習となる。それだけは何が何でも避けなければ。

「あ、それと、来週から始まる校外特別実習期間で、全員忘れ物はしないようにね。3日間、学園を離れることになるから。自由時間では羽目を外しすぎないようにね」

7月の頭に臨海学校がある。3日間の日程で、初日は丸々自由時間。

女子たちは先週からずっとテンションが上がっている

一夏は水着を買うのがめんどくさいと言っていたそれに俺も同意したら、セシリア、鈴その他多数にマシンガンのごとき猛注意を受けたので、買わないわけにはいかない。うーん、今週末に買いにいくか。着衣水泳でもいいんだけどはあー。

それにしても、なぜ俺だけあんなに言われたんだ？　まったくわからないな

「じゃあ、ＳＨＲを終わるよ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぁぁ、眠い……」

週末の日曜。天気は快晴だが、俺はものすごく眠い。

来週からはじまる臨海学校の準備もあって、俺はある女子とふたりで街に繰り出した。

その女子というのが――

「せっかく、いいお天気なのに欠伸ばっかりしてまったく。」

俺の腕を抱いて隣を歩いている名鈴だ

「お前のせいだろうが……ふぁぁ。」

昨日の夜名鈴に買い物に誘ったら。名鈴が俺の部屋に来て俺をずっと抱きしめていた。そのためほとんど寝ていない

鈴はニヤニヤしていたけど

「だって、紫苑からデートのお誘いしてくれるなんてうれしすぎるんだもん」

「デートじゃねえよ。それとあまりくっ付くな。」

「いや、一生離れない」

「それはそれで困るのだが――ん?」

「どうしたの紫苑?」

「いや、あれ鈴とセシリアじゃねえ?」

「え?　あ、本当だ」

「なにやってんだ?」

「さーあ。知らない」

まあ、鈴たちがいる方は俺たちも行く方なのでなんとなく近づいた

「……あのさあ」

「……なんですの？」

「……あれ、手ぇ握ってない？」

「……握ってますわね」

えーと誰をみて言ってるんだ？

鈴たちがみている方を見ると一夏とシャルロットがいた。

「そっか、やっぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢（はくちゅうむ）でもなく、やっぱりそっか。――よし、殺そう」

握りしめた鈴の拳は、すでにＩＳアーマーが部分展開していて準戦闘モードに入っていた。衝撃砲発射までのタイムラグはおよそ二秒といったところだ。

「なにやら、物騒だな」

「だねー」

「「！？」」

いきなり背後からかけられたら声に、驚いて振り返るふたり

「なっ！？　あ、あんたらいつの間に！」

「そんなに驚くことか？」

「そうよ。失礼よ」

「「ごめんなさい」」

「それじゃあ、またねー」

そのまま名鈴に引っ張られて連れて行かれた

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「えーっと、水着売り場はここだな」

俺たちはいつも来る駅前のショッピングモールにいる

実際、休日は俺ひとりでぶらぶらしているだけなんだけとな

「お前水着買うのか？」

「うん。せっかくだから買う！　紫苑を悩殺しようかなと思ってね」

「それは、楽しみだな」

ポンと名鈴の頭の上に手を置く

「じゃあ、俺は水着は買わないし、少しみてきたいものがあるから三十分後にまたここでな」

「了解！　それまでに悩殺水着選んどくね」

こくんと頷いて、名鈴は女水着売り場に向かう

「さて、俺も行くか」

俺は近くに合った雑貨屋に入る

「いらっしゃいませー。彼女への贈り物ですか？」

店に入ると二十代前半の女性店員がこちらによってくる

「そんなようなものですね」

「そうですか、でしたら、こちらなんてどうでしょうか？」

店員がひょいと俺の前に指輪を出してくる。
しかもちょうどあいつに入りそうに指輪だ
男用と女用の

「うーん、じゃあ、それと、あっちのとあっちと後あれもください。」

「はい、ありがとうございます。」

「あ、それは包んでください」

「はい、わかりました」

俺は金を払って商品を受け取り名鈴との待ち合わせの場所に向かうと名鈴が立っていた。
買い物は終わったのか手には袋がぶらさがっている

「お、早いな」

「あ、紫苑おかえり」

「ただいま」

すっと、名鈴は腕を絡ませる

「うん、ある程度決めてあったの。だから後は実物を見て決めるだけだったの。そういう紫苑は何を買ってきたの？」

「まだ秘密」

「えー、教えてよー」

「やだよーだ」

「で、一夏。どっちの水着がいいと思う？」

俺と名鈴がいちゃいちゃしていたら（別にしてるわけではないが百人聞いたら百人ともいちゃいちゃしてると思う）水着売り場から千冬さんが一夏を呼ぶ声が聞こえたので覗いてみた

（なんだ千冬さんも水着を買いに来たのか）

「――白の方」

「俺は黒の方ってか一夏も黒だろう？」

「っ！　紫苑に名鈴！」

「今日は驚かれることが多いな」

「だねー」

「二対一で黒い水着にするか」

「なんでだよ俺は白――」

「一夏は気に入った方を注意深く見るからな、すぐにわかるよ。ですよね千冬さん」

「ああ、ばればれだぞ」

最後にニヤリとした笑みを残して千冬さんはレジの方に歩いていく

「それにしても紫苑、なんだその袋は？」

「それを聞くのか？」

「いや、気になっただけだよ」

「そうかよ、じゃあな」

「おう」

「ねえ、紫苑。聞きたいことがあるんだけどいい？」

「なに？」

名鈴が一夏から離れたところで質問してきた

「ラウラのことどう思ってるの？」

「どうってなー。可愛いとは思うよ」

「そう」

なんか不機嫌になった気がするが……気のせいかな

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ドイツ国内軍施設。

そこではＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』――通称『黒ウサギ隊』が訓練を行っていた。

ドイツ国内の総ＩＳ数は十機なのだが、そのうち三機を持っているのがこの部隊である。

そして、それは名実ともに最強の部隊であることの証明でもあった。

この部隊の副隊長、クラリッサ・ハルフォーフである。年齢は二十二。部隊の中では最高齢であり、十代が多い隊員たちを厳しくも面倒見よく牽引する『頼れるお姉様』。その専用機『シュヴァルツェア・ツヴァイク』（黒い枝）に緊急暗号通信と同義のプライベート・チャンネルが届いた。

「――受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です」

『わ、私だ……』

「ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長、なにか問題が起きたのですか？」

『あ、ああ……。とても、重大な問題が発生している……』

その様子からただごとではないと思ったクラリッサは、訓練中の隊

員へとハンドサインで『訓練中止・緊急召集』を伝える。

「――部隊を向かわせますか？」

『い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない……』

「では？」

『クラリッサ。その、だな。わ、わ、私は、可愛い……らしい、ぞ』

……。

「はい？」

それまでの規律整然としたクラリッサの声が半オクターブほど高くなる。ついでに、きりりっとした口調は突然の意味不明な事態に対して若干間の抜けたものへと変わっていった。

『し、し、紫苑が、そう、言っていて、だな……』

と、そこまで聞いてクラリッサはピンときた。

「ああ、織斑教官の幼なじみで、隊長が好意を寄せているという彼ですか」

『う、うむ……。　ど、どうしたらいい、クラリッサ？　こういう場合は、どうすべきなのだ？』

「そうですね……。まず状況把握を。直接言われたのですか？」

『い、いや、向こうには私がつけているとは思っていないが、彼女みたいな存在と一緒にいる』

「――最高ですね」

『そ、そうなのか？』

「はい。本人のいない場所しかも彼女てき存在がいる場でされる褒め言葉にウソはありません」

『そ、そうか……！』

さっきまで動揺十割だったラウラの声が、クラリッサの言葉でぱぁっと花開くように明るいものへと変わる。ちなみに、現在集めた隊員たちには、クラリッサがプライベート・チャンネルをしながら筆談で状況を伝えている。

【隊長の片思いの相手に脈アリ】

「おおおお～！」と十数人の乙女が盛り上がっている

――ちなみに、この部隊でラウラは人間関係に多大な問題を抱えていたのだが、先月のＶＴ事件の直後に『好きな男ができた』という相談をクラリッサに持ちかけたときから全てのわだかまりが解けて消えた

『そ、それで、だな、今、ちょうど、み、水着売り場なのだが……』

「ほう、水着！　そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？」

『う、うん？　学園指定の水着だが――』

「何を馬鹿なことを！」

『！？』

「たしか、ＩＳ学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くはない。悪くはないでしょう。男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう。だがしかし、それでは――」

『そ、それでは……？』

ごくり、ラウラがつばを飲む。

「色物の域を出ない！」

『なっ……！？』

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡というタイプではありません。ですが、そこで際物に逃げるようでは『気になるアイツ』から前に進まないのです！」

『な、ならば……どうする？』

「フッ。私に秘策があります」

言葉に熱が入り出すクラリッサ。そして、その目がキュピーンと光った。

乙女の心は晴れのち曇り（レイン・メーカー）（後書き）

次の本編ではラウラの水着の色にするか考えて中です。
あえてのスクール水着でもいいのですが……。なんとなくやめました。
では次回にお会いしましょう

海に着いたら十一時！（オーシャンズ・イレブン）（前書き）

皆さんお久しぶりですね字の間違えがありました
氷花じゃなくて→氷華です

間違えと言うかただこっちの方が格好いいからなおします！

ではでは本編どうぞ！

海に着いたら十一時！（オーシャンズ・イレブン）

「海っ！　見えたぁっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。
臨海学校初日、天候にも恵まれて無事快晴。陽光を反射したする海面は穏やかで、心地よさそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

「海だ。みんなテンション上がるねぇ」

「え、うん。そうだねぇ」

バスで隣の席になったのは名鈴だ。話かけでもって上の空でずっと手元をみている

「お前、そんなに気に入ったのかよ」

「うん！　だって紫苑がくれたエンゲージリンクなんだもんっ！」

「エンゲージじゃねぇよ。買い物つき合ってくれた礼だよ」

「そういいながらも、自分だってつけてんじゃん」

後ろの席からひょっこり顔を出す鈴。その鈴も頭の留め金の色が違う。いつもは金色だが今日は緑色だ

「うっせえ、ほっとけ！」

俺と名鈴の左薬指リングが光る

「照れちゃって」

「……」

そっぽむく俺

「もー、可愛いな紫苑は」

「だねー」

「そうだね」

通路を挟んで向こう側、エイミーもニコニコしている。そのエイミーも耳にイヤーリングをしている

「そういう鈴やエイミーだってしてんじゃねえかよ」

「そ、それはー、せっかく貰ったんだから付けてあげないと可哀想かなーと思ってね」

「そ、そうよ！」

「はいはい。鈴姉のはやっぱり、他の色がよかったな」

緑以外に赤と白と青があった

なんとなく鈴に合いそうな緑を選んだんだけど違和感が

「そう？　あたし緑好きよ」

「ならいいけど」

また、俺は窓の外に目をやる

（……思い出せない。）

あのＶＴ事件の後俺は一夏と箒に聞いてみたそしたら俺は一夏が通っていた剣術道場にいたということがわかった。だけど俺は覚えていない。いや、記憶がないと言った方がいい。確認のため鈴にも聞いたら鈴も一夏たちと同じことを言っていた。まったく記憶ない

「どういう事なんだ？」

「なにが？」

気づかないうちに言葉に出していた

「いや、なんでもない」

名鈴ををごまかして窓の外を眺める

「そろそろ目的地に着くから全員ちゃんと席に座ってね」

担任の言葉で珍しくさっと従う。

言葉通りほどなくしてバスは目的地である旅館前に到着。四台のバスからＩＳ学園一年生がわらわらと出てきて整列。

「それでは、今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

千冬さんの言葉の後、全員で挨拶をする。この旅館には毎年お世話になってるらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

歳は三十代くらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆にすごく若々しく見えた。

「あら、こちらが噂の……？」

俺と隣の一夏に気づき女将が千冬さんに尋ねる。

「鳳紫苑ですよろしくお願いします。」

ぺこりと頭を下げる

「あら、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

「挨拶しろ、馬鹿者」

俺の横で一夏がぐいっと千冬さんに押される

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

一夏も肩身の狭い思いをしているな

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はーいと返事をするとすぐさま旅館の中へと向かう。とりあえず荷物を置いて、そこからなんだろう。

ちなみに初日は終日自由時間。食事は旅館の食堂にて各自とるようにと言われている。

「ね、ね、ねー。おりも～、しおしお～」

この呼び方は間違いなくのほほんさんだな。一夏と同時に振り向くと、例によって異様に遅い移動速度でこっちに向かってきた。眠たそうにしている顔は、たぶん素。

「おりむーとしおしおって部屋どこ～？　一覧に書いてなかったー。遊びに行くから教えて～」

その言葉に周りにいた女子が一斉に聞き耳を立てたのは気のせいではない。

「いや、俺も知らない。廊下で寝るんじゃねえの？」

「俺も知らない。俺は廊下より屋根の上がいいな。夜空を楽しめるからな」

「わー、しおしおロマンチック～」

「ほっとけ」

「織斑、凰、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬さんのお呼びだ。待たせたら、殺されるなのほほんさんに一夏が「またあとで」を言ったのでそのままのほほんさんと別れて千冬さんの元に行く。

「えーっと、織斑先生。俺と紫苑の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

一夏の言葉を封殺された。ちなみに旅館の中はかなり広くキレイだった。一学年丸々収容できる規模の旅館というだけでもすごいが、その内装は歴史のある装飾と最新設備が見事に融合したものになっていた。適度に効いているエアコンが素晴らしい。廊下でも快適だ。

「ここだ」

「え？　ここって……」

「教員室って書いてありますが？」

ドアに『教員室』と書かれた張り紙がしてある。

「最初はお前たち2人部屋にする話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はぁ、とため息をついて千冬さんは続ける

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づけないだろう」

「そりゃまあ、そうだろうけど……」

「だな……」

「一応言っておくが、あくまでも私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「わかってます、織斑先生」

「それでいい」

そして部屋の中に入る許可が下りた。

外側の壁が一面窓になっている。そこから見える風景は素晴らしくて、海が見渡せる。東向きの部屋だから、きっと日の出も抜群に綺麗なんだろうな。

「おおー、すげー」

「いや、ほんとすげーなトイレにバスはセパレートだし、洗面所は個室だし」

「さて、今日は1日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「えっと、織斑先生は？」

「私は他の先生との連なり確認なり色々とある。しかしまあ――」

ごほん、と咳払いをする千冬さん。

「軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの幼なじみと弟がわざわざ選んでくれたものだしな」

「そうですか」

一夏も千冬さんに習ってかさらりと答える。それにしても千冬さんの顔照れてる顔だな。やっぱりブラコンだな。

う？　ちらっと俺をみた気がするがうーん、気のせいか……。

コンコン。思考がノックで遮られる。

「織斑先生、ちょっとよろしいですかー？」

この声は一組の副担任の山田先生に間違いないな。

「ええ、どうぞ」

その返事を聞いて山田先生はドアを開ける。そうすると、ちょうど入り口から直線上に立っている俺たちと目があった。

「わあっ、織斑君に凰君！」

「いや、そんなに驚かなくても……」

「なんか、最近驚かれてばっかりだな……」

どうも教員同士の確認のまために来たようだった。ドアを開けるときもなにやら書類に目を通していて、そのまま入室。顔を上げたら

俺たちだった、と

「ご、ごめんなさい。ついつい忘れていました。織斑君と凰君は織斑先生のお部屋でしたね」

「山田先生。確かこれはあなたが提案したことだったはずだが？」

「は、はいぃっ。そうです、はいっ。ごめんなさい！」

千冬さんのじろりとした視線を受けた山田先生はあわれ蛇に睨まれたなんとやらである。

「さて織斑、凰、私たちはこれから仕事だ。どこへでも遊びに行ってこい」

「仕方ない、名鈴がうるさいから行くから」

「はい。それじゃあさっそく海にでも」

「羽目を外し過ぎんようにな」

千冬さんの注意にもう一度ちゃんと返事をして、俺たちは部屋を出る。

一夏も俺も小さめのリュックサックを持っていて、中には水着とタオル、そして着替えの下着を入れてある。

俺は着衣水泳だが水着は一夏と同じ物が入っている

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……」

「……」

「……」

俺と一夏は更衣室のある別館に向かう途中で箒とばったり出くわした。それはまあいいんだが、問題は目の前の珍奇な光景だ。

道ばたに、ウサギの耳が生えているのだ。ちなみにウサギの耳といっても生のやつじゃなくて『ウサミミ』というやつだ。名鈴が前に付けていた事がある。ちなみ目の前ウサミミは白色だしかも『引っ張ってください』と張り紙がしてある。

「なあ、これって――」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

「嫌な予感は的中かよ」

このウサミミは篠ノ之束に間違いない。

「えーと……抜くぞ？」

「好きにしろ。私には関係ない」

そう言ってすたすた歩き去ってしまう。

残された俺と一夏。

「抜いとけ」

「ああ」

すぽっ。

「のわっ！？」

てっきり地中に束さんがいると思ったのか一夏は勢いよく引っ張って、一夏は力余って盛大にすっころんだ。

「いてて……」

「何をしていますの？」

「お、セシリアか。いや、今このウサミミを――あ」

一夏はセシリアのスカートの中を覗いてしまった

俺は頭を抱える

「！？　い、一夏さんっ！」

一夏の視線に気づいたセシリアは、ばばっとスカートを押さえて後ずさり。

「す、すまん。その、だな。ウサミミが生えていて、それで……」

「は、はい？」

セシリアは素っ頓狂な声で聞き返す。まあ、当たり前だ。俺だって、人からそんな説明されたらそんな声はでるわな

「いや、束さんが――――」

キィィィィン……。

嫌な予感がバリバリあるのだが……。

ドカ――――――ン！

「に、にんじん……？」

一夏とセシリアがダブルでそう漏らす。

「あっはっはっ！　引っかかったね、いっくんにしーくん！」

ばかっと真っ二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのは件の天才・篠ノ之束さんだった。……まったく、この人は普通に登場は出来ないのか？

「やー、前にほら、ミサイルで飛んでいたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

格好は、不思議の国のアリスでそのアリスが着ているような青と白のワンピース。一夏の手からウサミミを受け取って、すぐ装着。１人不思議の国のアリスかなんかだろうか。この人のファッションテーマは相変わらずだ。

そしてなんで束さんのことを知ってるのかは、何故かそこだけ覚えているのだ……不思議だ

「お、お久しぶりです、束さん」

「久しぶりですね束さん」

「うんうん。おひさだね。本当にひさしいねー。ところでいっくんとしーくん。箒ちゃんはどこかな？　さっきまで一緒だったよね？　トイレ？」

「えーと……」

「……」

束さんを避けてどっか行ったなんて、言えない。どう答えようか

「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくんしーくん。また後でね！」

また後って、またくるのかよ

「い、一夏さん？　今の方は一体……」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……？　えええええっ！？　い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？　現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そうあんな格好だけど、その篠ノ之束さん」

一応この臨海学校は部外者は参加できない決まりなんだけと、さす

が束さん。思いっきり規則無視して入り込んで来た。何が目的なんだ。

「まあ、いいや。箒に用があるみたいだし、今のところ関係なさげだし。ところで俺たちは海に行くけど、セシリアは？」

いやいや、ここにいる時点で海に行くでしょう？一夏さん

「え、ええ、わたくしも海へ。そ、そこでですね」

こほんこほんと咳払いをするセシリア

「せ、背中はサンオイルが塗れませんから、一夏さんにお願いしたいのですけど……よろしくて？」

「ん？友達に塗ってもらえばいいじゃないか」

「え、ええまあ、そうなんですけど、できてば……その、一夏さんに……」

「うーん、思い切って塗らないてかどうだ？」

「却下です！」

どん、と即断された一夏俺ははぁとため息をつく

「冗談冗談。まあ、それぐらいならおやすいご用だ」

「ほ、本当ですか！？　後からやっぱりナシは認めませんわよ！？」

「わかった。じゃあ、また後でな」

「ええっ。また後で！」

こくんこくんと二回頷きセシリアは別館の方へ向かって走り出す。

「さて、俺たちも行くか」

「そうだな」

当然だが男子である俺たちは別館の更衣室でも一番奥を使用するように言われている。

「わ、ミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの～？」

「きゃあっ！　も、揉まないでよぉっ！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね～」

「そう？　アメリカでは普通だと思うけど」

一番奥の更衣室なので当然女子の更衣室の前を横切るわけで、女子高生的のりで会話がされている俺は気にしないが一応早足で男子更衣室へ。身支度を済ませて、海へ出る。

「あ、織斑君に紫苑君だ！」

「う、うそっ！　わ、私の水着変じゃないよね！？　大丈夫だよね！？」

「わ、わ～。織斑くんの体かっこい～。鍛えてるね～」

「なんで紫苑君は水着じゃないの～残念」

「織斑くーん、あとでビーチバレーしようよ～」

「おー、時間があればいいぜ。紫苑もいいよな」

「まあ、いいけど」

更衣室から浜辺に出てすぐ、ちょうど隣の更衣室から出てきた女子数人隣出会う。

「あちちちっ」

「お前バカだろ、サンダルぐらい用意しとけよ」

「それじゃあ、感覚が味わうないだろう？」

「そうだな、でも脱がんよ」

「そうか、よっと……」

一夏が準備体操を始める。それを見て俺も始める

「い、ち、か～～～～っ！」

「し、お、ん～～～～っ！」

この声は――――って、のわ！？

「あんたら真面目ねぇ。一生懸命体操したゃって。」

「そうよ、そうよ。」

一夏に飛び乗ってきたのは鈴。俺に飛び乗ってきたは名鈴だった。
何故かヒートアップしているぞ
鈴が着ているのはスポーティーなタンキニタイプで、名鈴は黒のビキニタイプで胸元が大胆にもかなり露出しているだが、俺を悩殺までには行かないな

「降りろ名鈴！」

「いやよーだ」

しゅるりと駆け上がって肩車の体勢になる。

「鈴、お前もちゃんと準備運動しろって。溺れてもしらねえぞ」

「あたしが溺れたことなんかないわよ前世は人魚ね、たぶん」

鈴もしゅるりと駆け上がって肩車の体勢になる

「じゃあ、一夏俺はあっちの方で泳ぐよ」

「おう、じゃあな。」

俺は名鈴を肩車状態であまり人がいないところに行く

「あれー？　なんで人気のないところに？　……あ、もしかして……」

もじもじする名鈴

てか、肩車状態でもじもじするな

「そんなわけあるか！　いいから降りろ！」

「もう、怒らないでよ降りるから」

ひらりと飛び降りて着地する

「それでなんでここにきたの？」

「ん？　ああ、この木が一番でかいから登ったらいい景色かなって思ってね……よっと」

俺はジャンプして枝に捕まりそのままぐるりと回転してその枝の上に登るそしてまた次の枝に登るそれを繰り返して一番上まで登る

「おお、いい景色だ～。名鈴も来いよ～！」

下にいる名鈴を呼ぶ

「私はあんたと違うからそこまで行くのは無理よ！」

「じゃあ途中まで来い、俺が連れて行ってやるよ」

そういって、半分近くまで降りる

「よっと」

「きゃあっ！」

お姫様抱っこしたらいきなり名鈴が変な声をだす

「変な声出すなよ」

「だ、だってー紫苑が珍しく強引なんだもん」

「じゃあ、行かないのか？」

「い、行くよ！」

「じゃあ、しっかり掴まってろよ」

「う、うん」

ひょいとジャンプして枝へ枝へと飛び移り一番上まで登る

「到着」

「え、きゃあっ！」

名鈴は叫び声と共に俺に抱き付く

「おい、そんなに抱きついたら景色が見れないだろう？　下ろすぞ？」

「い、い、いや。お、下ろさないで、恐いから」

ギュッと俺を服を掴む

「名鈴もしかして、高いところ駄目なのか？」

「う、うん……」

「ふふーん。そうか」

「な、なにする気よ！」

「こうする気だ」

名鈴を無理やり下を向かせる

「い、いや！　やめて！」

「名鈴の弱点みーっけ」

「紫苑の意地悪ー」

「ありがとう、ほめ言葉として受け取っておこう」

「むー、紫苑のバカ」

「冗談だよ、さて名鈴が恐いんじゃあ仕方ない下りるか」

と、そこに下から声がかけられたら

「あ、紫苑。ここにいたんだ！」

呼ばれて下を見るとそこにはシャルロットと――

「えーと、シャルロット、なんだそのバスタオルおばけは」

なんだか奇天烈な存在がいた。バスタオル数枚で全身を頭から膝下まで覆い隠している。

そして、おばけはと言った瞬間名鈴がぴくりと体を震わせる

「まあ、そこではなんだし。下りてきてよ」

「ああ、わかった。」

そして、名鈴を抱えたまま飛び降りる

「きゃあああああっ！」

「はい。到着」

名鈴を下ろす

「もう、紫苑死ね！」

「ごめんごめん」

ポンポンと名鈴の頭を撫でる

「今日という今日は許さない」

「そうか、それは残念だ。なにをしたら許してくれるのかな？」

「き、き、き……」

「き？」

き、って植林のあの木……いや、それはないか

「やっぱり、なんでない！」

顔を真っ赤にしてそっぽむく名鈴

はて、なにかしかのか俺？

「変なの」

「ほら、出て来なってば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

「その声はラウラか？」

しかし、いつもの自信に満ちたラウラじゃあないな、ずいぶんと弱々しい声だし。シャルロットはシャルロットでなにやら説得を試みているし、まったく状況がわからん

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、紫苑に見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな……」

「もー。そんなこと言ってさっきから全然出てこないじゃない。一

応僕も手伝ったんだし、見る権利はあるとおもうけどなぁ」

「私もみたいなぁ」

そういえばラウラとシャルロットは同室になったらしい。先月の一件ではお互いライバルとして戦ったのだが、今は普通にルームメイトとして仲がいいらしい。うん、ラウラは相変わらず人付き合いが悪いみたいだし、シャルロットのような愛想のいい女子と一緒にいれば色々と心境の変化もあるだろう。

「うーん、ラウラが出てこないんなら僕も紫苑と遊びに行こうかなぁ」

「な、なに？」

「うん、そうしよ。紫苑、名鈴、行こっ」

しゅるりと俺の腕に腕を絡ませる

「そうだね、行こっ」

名鈴もしゅるりと俺の腕に腕を絡ませる

「ま、待てっ。　私も行こう」

「その格好のままで？」

「そうだよ」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

ばばばっとバスタオル数枚を投げ捨て、水着姿のラウラが陽光の下に現れる。しかもその水着というのが――

「わ、笑いたければ笑うがいい……！」

ピンクの水着、しかもレースをふんだんにあしらったもので、ラウラの肌の色と水着の色が合っていてなんか色っぽい。さらにいつも飾りっ気のない伸ばしたままの髪は左右で一対のアップテールになっている。ちょっと鈴とかぶっている気がしないでもないが、正直この姿というのは――可愛い。もじもじと落ち着かなそうにしているラウラがより強くそう思わせていた。

「おかしなところなんてないよね、紫苑？」

「う、うん。ちょっと驚いたけど、似合ってると思うぞ」

「ラウラちゃん可愛い！」

ラウラを見た名鈴がラウラに抱き付く
ちゃん付けをしている時点でもうお手上げだな

「なっ……！　や、やめろ抱き付くな」

「いいじゃん、いいじゃん」

「あ、」

「なに紫苑？」

「いや、忘れるところだった」

俺はポケットからネックレスをだす。
しっかり保護コートはしてある

「ラウラ、これやるよ」

ラウラに付けてやる

「う、うむ。……あ、ありがとう……」

「紫苑、それあげていいの？」

「ああ、俺はもう大丈夫だから」

「そう、ならいいけど」

あれは小さい頃いつも1人ぼっちの時に鈴から貰ったネックレスだ
鈴はもう覚えてないけど。
あれがあったから名鈴や一夏に会えた。
今度はラウラにやる。大切な仲間や友が見つかるようにね

「それのネックレスになにがあるの？」

「俺の思い出」

「へ～思い出か～」

「シャルロット、それ一夏からか？」

俺はシャルロットの左手首に光るブレスレットを見つける

「うん、えへへ」

いつものシャルロットじゃあない

「そろそろ――」

「おーい！　紫苑ビーチバレーしようぜ！」

「ああ、わかった今いく」

「よし、じゃあ一夏ところまで競争だ」

「おー、勝ったら1日紫苑と一緒に居られる権利を獲るでどう？」

「望むところだ！」

名鈴めまた変なことを

「なんだよその権利。じゃあ俺が勝ったらなにを獲るだ？」

「この中から一緒いたい人を決める」

「わかったよ、よーい、どん！」

「あ、ちょっと。卑怯よ！」

「そうだぞ！　嫁としてなってないぞ」

「あ、ちょっと待って！」

「知るか！　ぼーっとしてるのが悪い！」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁはぁ俺の勝ちだ」

「で、誰と一夜を共にするの？　もちろん私よね」

「なにを言う私だ」

「何故一夜を共にしなくてはならないだよ」

「だってそういう話しでしょう？」

はて？

そうだっけ？

「じゃあ一夏、ビーチバレーやるか」

「お、おう」

「無視をするな！」

「早く決めろ」

「両方とも部屋に来るのはいいが俺と一夏の部屋は織斑先生の部屋だぞ」

聞き耳を立てていた女子もぴしっと凍り付いた。
「それでもいいなら来いよ」
「い、いや。遠慮しておく」
「同じく」
「さて、ビーチバレーやるか」
「そうだ」
「わー、おりむーとしおしおと対決～。ばきゅんばきゅーん」
「腕が鳴るな」
「お前中学の時はバレーのエースだったよな」
「幽霊部員だったがな」
部活に行かずに一夏たちと遊んでいた。
だけど、エースになってしまった
「そうなんだー。紫苑くんにパース」
ぺしんと叩いたサーブで俺にビーチボールを投げてくる。それを受け取って、俺はすぐ側にいたメンツを確認する。
「俺と一夏とあとどうすっかなー」
「はい！　私がやる！」

名鈴が元気よく手をあげる

「じゃあ名鈴で――――」

「私がやる！」

ラウラも元気よく手をあげる

「じゃあ、僕もやろうかな」

シャルロットまで……。

「じゃあジャンケンで決めてくれ」

「「「ジャンケン、ポイっ」」」

って、言う前にジャンケンしてるし

「よっしゃー勝ったー！」

大声を出してガッツポーズしたのは……。

「やったよ紫苑！」

名鈴だった。ほんとこいつ興奮するとキャラ変わるよな。

そこが面白いし、可愛いんだよな……はっ！　俺としたことが！

「んじゃ、お遊びルールでいいよね。タッチは三回まで、スパイク連発禁止、キリのいい十点先取で一セットねー」

「ああ、じゃ、そっちのサーブでいいよ」

ポーンとビーチボールを放って渡す。受け取った女子（クラス違うからわからん）の目がキランと光った。

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を…見よ！」

いきなりのジャンプサーブ！　角度、スピードはいいがしょせん女子の力、重さはそんなにないだろう

「甘いな」

ボールの落下地点に潜り込みレシーブする

「名鈴！」

「お任せを！」

またキャラが
おっと、名鈴のパスだないっちょ、スパイク撃って見るか

「先制点はいただくよ！」

バシンといい音を立てて相手のコートに撃ったつもりだったのだが

――――

「ぼふ」

「……お、俺逃げる」

当たったのは千冬さんの顔

「おい、こら待て紫苑！」

「待てと言って待つ人はいませんよ！」

それから千冬さんと三十分近く追いかけっこをした

「はぁはぁはぁ。　現役引退してもあんなに体力があるとは……」

「そういうあんたもあの織斑先生を巻くほどの体力あるじゃない」

俺は波打ち際で仰向けに倒れていると、俺の顔を覗き込み感じで鈴が顔をだす

「現役高校生なめるなよ。体力だけは自信があるからな」

「まあ、あんたは生まれた時から力も体力もずば抜けてたもんね」

鈴は俺の横に座る

「……まあな」

体を起こしながら鈴に答える

「ねぇ、紫苑」

「なに？」

パシャパシャと海の水で遊ぶ俺に問いかける鈴

「私と名鈴と、どっちが好き？」

「は？」

遊ぶ手を止めて鈴を見る

「やっぱりなんでもない、今のは忘れて。じゃああたし行くわ」

すたっと立って鈴そのまま別館の方に走っていなくなる

「えーと……なんだったんだ？」

問いかけるが帰ってくるのは波の音だけ

「うーん……わからないな鈴が急にあんな事を言ったのか。」

そして今の俺はどっちが好きなのかもわからない

「結局、俺はどっちが好きなんだ」

実姉で双子の鈴か幼なじみで元カノの名鈴か……。

「わからないだらけだな……記憶といい自分の心といい」

ざぶーんと波の音が聞こえる

「今はわからないでいいと思うぞ。私はな」

突然後ろから声がかけられた

「織斑先生」

「おう」

「どこから聞いていました？」

「さーな」

「そうですか。そろそろ戻りますね」

「ああ」

俺は立ち上がって千冬さんに一礼して別館の男子用更衣室に戻る

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

時間はあっという間に過ぎ、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺たちは夕食を取っていた。

「はぁー」

「ん？　どうしたの紫苑ため息なんかついて珍しいわね」

そう言って訊ねてくるのは俺の右隣に座っている浴衣姿の名鈴

「なんでない」

「そう、はい。あーん」

名鈴は刺身を箸つまんで俺に近づけてくる

「やるかバカ」

名鈴を無視して自分の食事を進める

「んもー、紫苑。さっきは優しかったのに今は冷たい」

「してやってもよかったが、こんなに人がいたら見つかったらうるさいぞ」

「そうね」

名鈴は箸の刺身を食べて食事を始める

「私は見てたんだけど」

今度は俺の左隣のエイミーがジト目で睨む

「してないんだから睨むなよ」

「ふん」

機嫌を悪くしてしまったな。

まあ、すぐによくなるだろ

クラスメートと話しながら食べていたらいつの間にか満腹になっていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふ〜、さっぱりした」

「だな」

食後に温泉。贅沢すぎる。

海を一望できる露天風呂を2人で使った俺たちは、かなり上機嫌で部屋にってきた。

（千冬さんも温泉かな？）

――と、ちょうど千冬さんが帰ってきた。やっぱり、温泉に行ってきたみたいで、その髪はしっとり濡れている。艶のかかった黒髪は、少しドキドキしてしまう。

「ん？　お前らだけか？　女の1人も連れ込まんとは詰まらんやつだ」

「だから……はあ、もういいよ。それは」

「別に、連れ込んでもいいけど来る人がいないだけだよ」

まあ、当たり前かここは『織斑先生』の部屋なのだからな。

「なあ、千冬姉」

ごすっ。鋭いチョップが一夏に飛んだ。

「織斑先生と呼べ」

「まあ、それはいいじゃん。三人だけなんだし、風呂上がりだし、久しぶりに――」

「～♪」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

食事の後風呂を一回、シャワー一回浴びたセシリアは、上機嫌で着替えていた。

身に纏うのは旅館の浴衣だが、素肌につけているのはさっきまでとは違う下着である

（ああっ、もしかしたら……もしかしたらと、用意していた甲斐がありましたわ）

そのことを考えると、ついついほわんと表情がゆるんでしまう。

「セシリア、何かいいことあったの？」

「いえ、何も♪」

「……。何もって顔じゃないじゃない」

「あら、そうですの？　うふふ」

「はぁ……まあいいわ。あーあ、せっかく織斑君たちと遊ぼうと思って色々用意してきたのに、織斑先生の部屋じゃあねぇ……」

さすがに遊びにいけないと、他の女子もうんうんとうなずく。

ちなみに、用意したものはトランプにウノに花札、人生ゲーム、そして男子の（あるいは女子の）憧れことツイスターゲームである。

二十一世紀になってもなお不動の地位とは素晴らしい。

（うふふ、今のわたくしはゲームに頼る必要などありませんもの）

鼻歌混じりにコロンを咲くセシリア。ふわっと揺れた髪は、いつもより豪華か二割り増しである。

「あ～～～。せっしーがえっちぃ下着つけてる～」

いつも半開きの目だが、なぜか観察力と洞察力ひ長けていたのほほんさんがそう告げる。その言葉を聞いて、さすがのセシリアもギクリとしてしまった。なぜなら……

「なにっ!?　脱がせ脱がせぇ～!」

「剥け～。身ぐるみ置いてけ～!」

「きゃあああっ!?　やっ、やめっ……引っ張らないで～!」

女三人集まれば姦しいとはよく言ったもので、だとすれば九人部屋のここは姦しい×3である。特に目当ての一夏と紫苑と遊べない分、暇エネルギーも持てあましている。そういう女子はちょっとのことで暴走するのを、セシリアは我が身と同じくわかっていた。

「わ。本当にエロい下着つけてる……」

「えろ～、えろ～」

「なになに、勝負下着?　織斑君たちのところ行けないのにそんなの着ちゃって」

「まぁまぁ～。セシリアったらおませさん★」

口々に好きなことを言いながら、最後に揃える女子一同。

「「「セシリアはエロいなぁ」」」

「え、エロくありません！　こ、これは、その、身だしなみ……そう、身だしなみですわ！」

セシリアはもみくちゃにされて乱れた浴衣を直しながら、真っ赤になって反論する。

「そういえばなんか念入りに体洗ってたわね」

ぎくっ。

「そのあとシャワーも浴びてたし、今もなんでかメイクしてるし」

ぎくぎくっ。

「なんか、あやしくない？」

「あ、あ、あやしくなどあるませんわ！これは女として当然の身だしなみ。わたくし、用がありますのでこれで失礼します！」

ちょっと気分を害した風に言って、立ち上がる。このまま部屋をでてしまえばわたくしの勝利ですわ！　と考えるセシリアだったが……。

「うーん、くんくん。セシリアがいつも使ってる香水じゃないよね。えと、この匂いはレリエルのナンバーシックス？　わー。、高級品

だ～」

のほほんさんの言葉に、女子ズの顔がこわばる。――しまった！　と思うがもう遅い。女子の執拗なまでの追及がはじまった。

「レリエルのナンバーシックス！？　一振り十万円って言われる、あの！？」

「しかも毎年百個しか生産されないシリアルナンバー入りよ、あれ！」

「実物持ってるの！？　ちょっと見せて！」

「え、ええ、見ても構いませんから、わたくしはこれで――」

「「「ダメ！！」」」

ええ～……と心の中で突っ込み＆落胆するセシリアだったが、女子ズはその腕をがっちりキープ。しっかりと掴んですぐには離してくれそうにはない。

「これ、どこで手に入れたの！？　お金を出してもそうそう買えないって話じゃない」

「実家の方がレリエル社と懇意にしていまして……」

「うわ！　そういえばセシリアって超お金持ちなんだった！」

「わたくしというか、わたくしの実家がですけれど……」

「匂いかがせて！」

「あ、あの、それでしたらこのコロンを使っても構えませんから、わたくしはこれで……」

「「「ダメ！！」」」

ええ～……と以下同文。

「もったいないじゃん！」

「セシリアがつけているなら、それをかけばＯＫ」

「かぐ～かぐ～」

両手を広げてにじり寄る女子ズ。嫌な予感がしてセシリアが後ずさると、すぐに壁に行き当たった。

「ふっふっふっ。逃がしはしないわよ」

「さあ、大人しくかがれなさい！」

「よいではないか～よいではないか～」

じりじり。近寄ってくる女子ズの目は、あやしく輝いている。

「い、い、いやあああああ～っ！！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「うっ、うっ……ひどい目に遭いましたわ……」

結局もみくちゃにされたセシリアは、未だ傷跡癒えずの様相で廊下を歩いていた。

（でも、これでやっと――！！）

一夏の部屋へと行ける！　そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛んだ。乱れた服装も、わずか十数秒で元に戻る。

（の、喉の調子も整えておきませんと。ん、んっ）

浮かれているのが歩調にも表れている。今にもスキップをしそうな足取りは、だんだんと早足になって目的の場所へと向かった。

――ところが。

「……」

「……」

「……」

部屋の前、その入り口のドアに張り付いている女子が三名。

「鈴さん、箒さん？　それに名鈴さんまで。一体そこで何を――」

「シッ！！」

鈴がそう言うなりセシリアの口を塞ぐ。

状況がわからずにもがいていると、ふとドアの向こうから声が聞こえた。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。――んっ！　す、少しは加減をしろ……』

『はいはい。んじゃあ、ここは……と』

『くあっ！　そ、そこは……やめっ、つぅっ！！』

『すぐに良くなるって。だいぶたまってるみたいだし、ね』

『あぁぁっ！』

……。

「こ、こ、これは、一体、何ですの……？」

ひくひくと口元を震わせ、引きつった笑みを浮かべながらそう尋ねるセシリア。しかし、返ってきたのはただただ沈黙だけだった。

「……」

「……」

「……」

鈴も箒もずーんと沈んだ表情をしている

名鈴はただただ聞いているだけ

『じゃあ次は――』

バンッ！！

「「「「へぶっ！！」」」」

思いっきり、ドアに殴られた。

打撃の刹那、反射的に漏れた声は十代女子にあるまじき響きをしていた。

「お前らなにやってんの？」

「は、はは……」

「へ、へへ……」

「こ、こんばんは」

「さ……さようなら、紫苑っ！！」

「捕まえろ紫苑！」

「了解」

脱兎のごとく逃走開始をする４人を俺は袖口にある鎖を投げて４人まとめて捕まえる

「なんでこんな所までそんなもの仕込んでるのよ！」

「ひ・み・つ。男の子にもいろいろあるの」

「可愛く言うな！」

「盗み聞きとは感心しないな」

ドーンと俺の後ろから千冬さんが出てくる

「まあ、ちょうどいい。入っていけ」

「「「「えっ？」」」」

予想外の言葉に目を丸くする４人。

「ああ、そうだ。他の三人――ボーデヴィッヒとデュノアそしてエドワードも呼んでこい」

「は、はいっ！」

鎖から開放した鈴と箒と名鈴は駆け足で三人を呼びに行く。
同じく開放されたセシリアは浴衣をなおしながら部屋へと入った。

「おお、セシリア。遅かったじゃないか。じゃあ始めようぜ」

ぽんぽんとベッドを叩いてセシリアを呼ぶ一夏。

「え、あの、織斑先生もいらっしゃいますし、その……」

「？　別にいいじゃないか。俺も体温まってるし、早く始めよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、雰囲気が……」

「……？」

いまいちセシリアの言葉の意図が掴めない一夏は不思議そうな顔をするだけで、またベッドをぽんぽんと叩いて開始を促す。

どうにも困ったセシリアがちらりと紫苑と千冬を見ると千冬は『私に構わずはじめろ』と言う紫苑は『勝手に』と告げる。

（か、構わないなんてできるわけないでしょうに……！）

しかし、埒があかない。しかも先ほど千冬はシャルロットとラウラとエイミーを呼んでくるように言ったので、このままだとますます大変な事態になってしまう。

（ううっ……！　お、女は度胸、ですわ……！）

そう心の中で叫んで、半ばヤケクソ気味にベッドに横たわる。

ドクッドクッと高鳴る胸は今にも張り切れそうで、セシリアは期待と不安とに踊らされたままぎゅっと目を閉じた。

「……」

けれど、何もはじまらない。

あれ……？　と思って右目を半分だけ開けると、一夏が口を開いた。

「セシリア、うつぶせじゃないとできないぞ」

「え、え、う、うつぶせで……しますの？」

「うん」

「そ、そうですか……」

本で読んだのと違うことに困惑しながらも、もしかしたら日本ではそうするのが一般的なのかもしれないと自分に納得させるセシリア。

「じゃあ、はじめるぞー」

「はっ、はいっ！」

思わず裏返ってしまった声を恥じらうような余裕はもうない。すぐに訪れるであろう手を感触を待って、セシリアの心臓はいよいよ破裂寸前にまで暴れはじめた。そして――

「ん、しょっ……」

ギュウウウゥゥゥ～～～～～ッ。

「！？　いたたっ、いたっ、い、い、いいっ、一夏さん！？　な、なななっ！な、なにをして――――あうぅぅっ！」

「何って、指圧」

「し……あつ……？」

「そう、腰の」

「腰の……」

きょとんとしたセシリアに紫苑は近づき耳元で言う

「……ふふ、なにを期待してたのかな？エッチなセシリアちゃん」

「な、なななっ！な、紫苑さん！？」

「おい、セシリアちゃんとしてないとできないだろ！？」

ちらりとセシリアは紫苑を見ると袖口で口元を隠してクスクス笑っている

（紫苑さん、あとで覚えておきなさい）

そのままセシリアはウトウトしてしまった。

一夏曰わく「良いマッサージは眠くなるもんだよ。そのまま寝ると最高。不思議と疲れが取れる」だそうだ。

ムニュッ！！

「！？！？！？」

いきなりお尻を鷲づかみにされて、完全に眠りかけていた意識が一瞬で覚醒する。

（い、い、い、一夏さん？　ま、マッサージとはいえ、そんな、大胆な……！）

ドキンッドキンッと高鳴る胸を右手で押さえ、おそるおそる振り向くと――

「おー、マセガキめ」

千冬が、遠慮無くセシリアのお尻を握っている。しかもその顔はイタズラが成功した顔で、けれどタチが悪いことも子供っぽさのかけらもない。ニヤリ、と豹の笑み。

「しかし、年不相応の下着だな。そのうえ黒か」

「ほんとだ勝負下着ってやつか？」

「え……きゃあああっ！？」

千冬がセシリアのお尻を下からすくい上げるように掴んだせいで、まくれ上がった浴衣の裾からふくよかなヒップがあらわになっていた。もちろん、そこにつけている下着も丸見えである。

豪奢なレースを編み込んだ、面積の少ない『特別な下着』。両サイドを紐で縛ってあるそれは、脱がされることを前提にしたものだった。

「……」

一夏が顔赤くして視線を逸らす。その様子にははっきりと「見られた！」ことを意識したセシリアは、恥ずかしいを通り越してもう隠れていまいたかった。

「せ、せっ、先生！　離してください！」

真っ赤になってそう叫ぶと、思いの外あっさりと千冬はどいた。

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、いっ、インコっ……！？」

「冗談だ。――おい、聞き耳を立てている六人。そろそろ入ってこい」

ぎくっぎくっぎくっぎくっぎくっぎくっ。

「「「「「「……」」」」」」

沈黙がわずかに数秒あって、それからドアがゆっくりと開いた。立っていたのは箒に鈴にシャルロットに名鈴にラウラにエイミー。全員が旅館の浴衣姿である。

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きなところに座れ」

ちょいちょいと手招きをされて、六人はおずおずと部屋に入る。そして言われたとおり、各人が好きな場所（といってもベッドとチェアの二択）に座った。

「ふー。さすがにふたり連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。すこしは要領よくやればいい」

「それが出来ないのが一夏の悪いところで良いところなんだけどね」

「愚直だな」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって」
「どうだかな」

「だな」

楽しそうに会話をする三人を見て、全員がやっと状況を飲み込む。
つまり、今しがた盗み聞きをしていたセシリアの声も、その前の千冬の声も、マッサージをしていただけだということに。

「は、はは……はぁ」

「ま、まぁ、あたしはわかってたけどね」

ずるりと脱力する箒と、妙に強がりを見せる鈴。

「「「……」」」

そして、何か色々『具体的な』想像をしていたらいしシャルロットとラウラとエイミーは、真っ赤になってうつむいた。

「？」

名鈴は紫苑の異変に気づいて首を傾げる

「紫苑どうしたの？」

「……っぷ……な、なんでもない。くふふ」
紫苑は笑いをこらえているらしい
なぜだろうと名鈴はまた首を傾げる

「まあ、お前はもう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くされては困る」

「ん。そうする」

千冬の言葉にうなずいた一夏は、タオルと着替えを持って部屋を出る。とりあえず「くつろいでってくれ。って、難しいかもしれないけど」と言い残して。

「……」

そしてその言葉通り、どうしていいのかわからない女子が七人と未だに笑いをこらえている男子1人、言われるまま座ったところで止まってしまっている。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり名前を呼ばれて、箒はびくっと肩をすくませる。言葉がすぐに出てこずに、困ってしまった。

そうこうしていると千冬は旅館の備え付けの冷蔵庫を開け、中から

七人分の飲料水を取り出していく。

「ほれ、ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、コーラ、カルピスに紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人交換しろ」

そう言われたものの、順番に箒、シャルロット、鈴、ラウラ、エイミー、名鈴、セシリアと受け取った全員が渡されたもので満足だったために交換会は開かれなかった。

「い、いただきます」

全員が同じ言葉を口にして、そして次に飲み物を口にする。
女子が喉がごくりと動いたのを見て、千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの！？」

「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言って千冬が新たに冷蔵庫から取り出したのは、星のマークがキラリと光る缶ビールとチュウハイだった。

「ほれ、紫苑」

「俺に！？　しかもお酒を！？」

「今更なにを言う教師を嘗めるなよ隠れて飲んでる事くらい承知だ」

プシュッ！と景気のいい音を立てて飛沫と泡が飛び出す。それを唇で受け取って、そのまま千冬はゴクゴクと喉を鳴らした。

「ぐっ……い、いただきます」

同じく紫苑もプシュッ！と缶を開けて飲む

「……」

全員が唖然としている中、千冬は上機嫌な様子でベッドにかける。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

「ありますよ。つまみなら」

と、言い自分のバックからタッパーと割り箸を取り出す

「準備がいいな紫苑」

「気のせいですよ」

パカッとタッパーを開けてる千冬

「酢豚か」

「ええ、まあ」

「では、いただくとしょう」

千冬はパキッと割り箸を割り酢豚を食べる

「美味いな、また、腕上げたな紫苑」

「別に」

「褒められたんだからすこしは喜べ」

「……」

そっぽ向く紫苑に千冬は肘でこずく

「誰に食べてもらうつもりだったんだ？」

「誰でもいいでしょ。そんなこと」

チュウハイの缶を空けて冷蔵庫からもう一本取り出す

「よく飲むな」

「酔いたい気分なんでね」

「未成年、あまり飲むなよ。今日は黙認してやるがな」

「どうも」

プシュッと開けて飲み干す

「おやすみ～」

紫苑はバタリと床に倒れて寝息を立てる

「寝ちゃったわよ」

「寝ちゃったね」

紫苑が寝てからやっと口を開いたのは鈴と名鈴だ。

「さて、紫苑も寝たし。そろそろ肝心の話をするか」

二本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける。

「篠ノ之、凰、デュノア、オルコット、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、と言ってはいるが全員が誰を指しているかわかっている。

この４人には、一夏しかいない。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちてるのが腹立たしいだけですので」

と、ラムネを傾けながら箒。

「あたしは、腐れ縁だし……」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もごもごと言う鈴。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

さっきの行動の反発か、ツンとした態度で答えるセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれっとそんなことを言う千冬に、三人はぎょっとしてから一斉に詰め寄った。

「「「言わなくていいです！」」」

その様子をはっはっはっと笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける。

「僕――あの、私は……やさしいところ、です……」

ぽつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹にそこには真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでもやさしいぞ。やさしいというなら紫苑だってやさしいぞ」

「そ、そうですね……私もまだわからないんです……」

「そうだな……少し昔話をしてやろう」

「「「「「「「えっ？」」」」」」」

予想外の言葉に目を丸くする七人。

「いいから聞け、紫苑のことだ、ここには姉弟も幼なじみもいることだしな。ちょうどいい」

千冬は缶ビールを飲み干してから続ける

「凰、お前も知っていると思うがお前と紫苑は幼稚園のときまで離れ離れだったな」

「はい。確かそのとき日本にいたって聞きましたが」

鈴も詳しくは知らないがなにかの原因で離れ離れだった。
幼稚園に入ってから紫苑の事を知った。

「ああ。私が預かっていた」

「へ？」

鈴の気の抜けた返事をする

「こいつは虐待を受けていたな、私が引き取ったんだその後両親に返した」

「ぎゃ虐待ですか！？」

全員信じられない顔をしている
それなのに、明るく振る舞っていたのかと、全員が思ってることだ

「その後もちょくちょくこっちに来ていることも知っているだろ？」

「はい、確か箒が転校生するまでちょくちょく行ってましたね」

「ああ、でも、紫苑には記憶がない。なぜだかわかるか？」

「わかりません」

「そのときのショックで記憶が欠落したらしい。そのため、そのときのことも覚えているものと覚えていないものがあるだろ？」

と、千冬は篠ノ之を見る

確かに千冬と一夏以外にもう1人いた。それが紫苑だ。だが紫苑本人は覚えていない。

「それにしてもあの紫苑が彼女を作っていたとはな」

今度は名鈴を見る

自分の殻にこもり心を開かなかったあの紫苑が久しぶりに会って千冬は驚きと感動を感じていた

「言っておくが紫苑はもの凄く繊細で傷つきやすく壊れやすい。その上、親の愛情を知らない」

今度はラウラを見る

「ボーデヴィッヒ」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれて、ラウラはびくっと肩をすくませるて返事をした。

「お前と紫苑は似た者同士だな孤独と闇を知っているかなら。」

千冬はふぅーと息を吐いて続けた

「まあ、紫苑も一夏も役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、一夏に関してはマッサージもうまい」

そうだろ、オルコット、凰、李？　と、話を振られたセシリアは、赤い顔をしてうつむき・うなずく。鈴も名鈴もうなずく

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

え！？　と全員が顔を上げる。それからおずおずと、ラウラとシャルロットが尋ねた。

「「く、くれるんですか？」」

「やるかバカ」

ええ～……と名鈴以外心の中で突っ込む女子一同。

名鈴は（だって、紫苑は私を選んでくれたし）と心の中で呟き左薬指の指輪を見てにははとする

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

三本目のビールを口にする千冬は、実に楽しそうな表情でそう言った。

海に着いたら十一時！（オーシャンズ・イレブン）（後書き）

次は束さんの登場です
あれ、もう登場してるか……じゃあ、福音が登場です

では、次回に会いましょう

その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）（前書き）

誤字脱字が合ったら報告お願いします。

更新遅れてすいません。当分遅くなるかもしれません。
文化祭近いのでそちらを手伝わないといけないので……しかも生徒会なのでさぼるわけにもいかないし。
企画書の再チェックもあるし……。
あぁ、やることがたくさんある！
しかも、企画のリーダーやってるから企画の紹介文書かないといけないし。

とにかく、更新遅れます

長々とすいません。では本編どうぞ。

合宿二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ＩＳの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

「ようやく全員集まったか。――おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬さんに呼ばれて身をすくませたのは、意外や意外ラウラだった。あのラウラが珍しく寝坊したようで、集合時間に五分遅れてやってきたのだ。

「そうだな、ＩＳのコア・ネットワークについて説明してみろ」

「は、はい。ＩＳのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられたもので、現在はオープン・チャンネルとプライベート・チャンネルによる操縦者会話など、通信に使われています。それ以外にも『非限定情報共有』（シェアリング）をコア同士が各自に行うことで、様々な情報を自己進化の糧として吸収しているということが近年の研究でわかりました。これらは制作者の篠ノ之博士が自己発達の一環として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないのことです」

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

そう言われて、ふうと息を吐くラウラ。心なしか、胸をなで下ろしているようにも見える。……まあ、おそらくドイツ教官時代にイヤというほど恐ろしさを味わったのだろうな。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたＩＳの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はーい、と一同が返事をする。さすがに一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ。ちなみに現在位置はＩＳ試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。ちょっとした秘密のビーチみたいだ。ドーム状なのが、学園のアリーナを連想させる。大海原に出るには一度水面下に潜って、水中のトンネルから行くらしい。本当映画みたいなロケーションだ。

ここに搬入されたＩＳと新型装備のテストが今回の合宿の目的。当然ＩＳの稼働を行うので、全員がＩＳスーツ着用姿だ。海だとますます水着に見える。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた箒は、千冬さんに呼ばれてそちらへと向かう。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ～～～～～～～～～ん！！！」

ずどどど……！と砂煙を上げながら人影が走ってくる。無茶苦茶速い。たぶん、ＩＳっぽい何かをつけているからだろうと思うんだ

が、問題はその人影が――

「……束」

と、いうことだ。立ち入り禁止もなんのその、稀代の天才・篠ノ之束さんは堂々と臨海学校に乱入してきた。

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！も愛を確かめ――ぶへっ」

飛びかかってきた束さんを片手で掴む。しかも顔面。思いっきり指が食い込んでいる。手加減なしの千冬さん。

「うるさいぞ、束」

「くぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そしてそこ拘束から抜け出す束さんもただ者ではない。

よっ、と着地をした束さんは、今度は箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おおきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！　ひどい！　箒ちゃんひどい！　そう思うよね！　いっくんにしーくん！」

「え、ええ。まあ……」

「知りませんよ」

「えー、しーくんもひどい！」

今度は俺に飛びかかって来るのを回し蹴りで跳ね返す

「ぐへっ……。しーくんも容赦ないね」

「千冬さん譲りですから。」

「えー、昔はもっと可愛かったのにな～～～」

「それはいいから束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

割り込んできたのは千冬さんだ

なんた、やたらと焦った割り込み方だな。昔のことは覚えてないからわからないけど。

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

そう言ってくるりんと回ってみせる。ぽかんとしていた一同も、やっとそこでこの目の前の人物がＩＳの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気づいたらしく、女子の間がにわかに騒がしくなる。

てか、めんどくさいと言いながらも自己紹介するんだな……。

「はぁ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら一年、手が止まってるぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなぁ、らぶりぃ束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

そんな旧知の間柄であるふたりのやりとりに、おずおずと割り込んだのは一組の副担任山田先生だった。

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさっきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじぇらしぃ。このおっぱい魔神め、たぶらかしたな～！」

言うなり、山田先生に飛びかかる束さん。その手はさっそく豊満な膨らみを鷲づかみにしている。

「きゃああっ！？　な、なんっ、　なんなんですかぁっ！」

「ええい、よいではないかよいではないかー」

うわぁ、数秒で趣旨が変わってるし……。ジェラシーはどこ行ったジェラシーは。

ちなみに束さんの胸は千冬さんよりちょっと上で、山田先生とたぶん同じくらい。巨乳ふたりが組んずほぐれつな光景は、なんなかどうしてか来るものがあった。

「やめろバカ。大体、胸ならお前も十分にあるだろうが」

「てへへ、ちーちゃんのえっち」

「死ね」

どかっと本気の蹴りを食らって砂浜に顔から突っ込む束さん。……何度もいうが、この人がたった一人でＩＳの基本理論と実証機を開発した稀代の天才である。

「それで、頼んでおいたものは……？」

ややためらいがちに箒がそう尋ねる。それを聞いた束さんの目がキラーンと光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしっと直上を指す束さん。その言葉に従って箒も、そして他の生徒たちも空を見上げる。

ズズーンッ！

「のわっ！？」

いきなりである。激しい衝撃を伴って、なにやら金属の塊が砂浜に落下してきた。

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がばたりと倒れてその中身を俺たちに見せる。

そこにあったのは――

「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製だよ！」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、束さんの言葉に応えるように動作アームによって外へと出てくる。あれ、さっき束さんとんでもないことをさらりと言わなかったけ？　確か全スペックが現行ＩＳを上回っているってとこはつまり最新鋭機にして最高性能機ってことか。

「さあ！　箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ～。実の姉妹なんだし、こうもっとキャッチーな呼び方で――」

「はやく、はじめましょう」

「ん～。まあ、そうだね。じゃあはじめようか」

ぴ、とリモコンのボタンを押す束さん。刹那、紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移る。しかも自動的に膝を落として、乗り込みやすい姿勢にと変わった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行していれてあるから、あとは最新データに更新するだけね。さて、ぴ、ぽ、ぱ♪」

コンソールを開いて指を滑らせる束さん。さらに空中投影のディスプレイを六枚ほど呼び出すと、膨大なデータに目配りをしていく。それと同時進行で、同じく六枚呼び出した空中投影のキーボードを叩いていった。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！　お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

相変わらず箒の態度は素っ気ない。正直、姉妹なんだしもうちょっと仲良くしてもいいのに、俺と鈴みたいに

「ん～、ふ、ふ、ふふ～♪　箒ちゃん、また剣の腕前があがったねえ。筋肉の付き方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなぁ」

「……」

「えへへ、無視されちった。――はい、フィッティング終了～。超速いね。さすが私」

無駄話をしながらも束さんの手は休むことなく動き続けている。それはもうキーボードを打つと言うよりもピアノを弾いているかのような滑らかかつ素早い動きで、数秒単位で、切り替わっていく画面にも全部しっかりと目を通している。

態度はふざけていても、やっぱり超がつくほどの天才だと、改めて実感させられる。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？　身内ってだけで」

「だよねぇ。なんかずるいよねぇ」

ふと、群衆の中からそんな声が聞こえた。それに素早く反応したのは、なんと意外なことに束さんだった。

「おやおや、歴史の勉強をしたことながないのかな？『有史以来世界が平等であったことなど一度もないよ』」

ピンポイントに指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻る。それを別段どうでもいいように流して、束さんは調整を続ける。――というか、発言の間もずっと手が止まっていない。相変わらずの天才ぶりだった。

そしてそれもすぐに終わって、束さんは並んだディスプレイを閉じていく。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、百式見せて。束さんは興味津々なのだよ。そのあとしーくんね」

「え、あ。はい」

「了解」

全部のディスプレイとキーボードを片付けて、束さんが俺たちの方を向く。ひらりとなびいたスカートが、子供っぽい性格とは正反対に淑女を連想させる。

一夏は右腕のガントレットに左を添えると意識を集中させる

強い光を放って、空中に光を粒子が発生して、それらが集まって輪の形なって光の輪が一夏の全身を幾重にも重なって、形を形成していく

一夏の専用機『百式』。近接戦闘に特化した機体で、武器は格闘ブレード《雪片弐型》が一本。後付装備できないＩＳだ。

「データ見せてね～。うりゃ」

言うなり、百式の装甲にぶすりとコードを刺す束さん。すると、またさっきと同じようにディスプレイが空中へと浮かび上がる

「しーくん、青龍だして」

「わかりました」

左手の腕輪に触れて念じる

（――行こ、青龍）

そう念じに応えるかのように強い光を放つ青龍。さらに空中に光の粒子が発生し、それらが集まって輪の形になる。そして光の輪が全身に幾重にも重なって、やがて形を成していく。

俺の専用機『青龍』。中距離格闘戦闘が主の機体で、武器は近接ブレード《蒼龍牙月》格闘装備のバトルファン《想龍》同じく格闘装備両手が《拳龍》両脚が《苑龍》空間圧兵器の《龍放》があるが後付装備ができない。

一夏の百式と同じの機体だ。「じゃあ、データ見るね～。うりゃ」

言うなり。百式と同じように青龍の装甲にコードを刺す束さん。すると、またさっきと同じようにディスプレイが空中へ浮かび上がる。

「ん～……ふたりとも不思議なフラグメントマップを構築してるね。なんでだろ？　見たことないパターン。やっぱり男の子だからかな？」

ちなみにフラグメントマップというのは、各ＩＳがパーソナライズによって独自に発展していくその道筋のことらしい。人間で言う遺伝子だそうだ。

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺たちがＩＳを使えるんですか？」

一夏が訊く

「ん？　ん～……どうしてだろうね。私にもさっぱりぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかるきがするんだけど、していい？」

ちなみに、きっとこの分解の対象には俺たちも含まれている。

「いい訳ないでしょ……」

「やめてくださいよ……」

「にゃはは、そう言うと思ったよん。んー、まあ、わからないならわかんないでいいけどねー。そもそもＩＳって自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ。あっはっはっ」

解決になってないし。

「ちなみに、後付装備ができないのはなんでですか？」

「同じくできない」

「紫苑のもか」

「ああ」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ！？　百式って束さんが作ったんですか！？」

「その言い方だと青龍も束さんが作ったことになるんですか？」

「うん、そーだよ。っていっても欠陥機としてポイされたのをもらって動くようにいじっただけどねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）が使えるでしょ？　超便利、やったぜブイ。でねー、なんかねー、元々百式はそういう機体らしいよ？　日本が開発し

たのは。　それでねー、青龍は紅椿と同じように私が1から作りましたー。」

「馬鹿たれ。機密事項をベラベラバラすな」

べしん！　と手加減オフの打撃が束さんの頭にヒットする。もちろん、手を出したのは我らの鬼教師こと千冬さんだ。

「いたた。は～、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」

「やかましい」

さらにもう一発べしん！　と束さんが叩かれる。

「えっと、じゃあなんで空間圧兵器を乗せたんですか。束さん？」

「しーくんが、鈴ちゃんのことが好きだって訊いたから、同じ装備を乗せてあげたの嫌だったー。」

「いえ、どうもです」

てか、束さんと鈴姉って面識あったんだあの束さんなのに、と、そこに1人の女子が束さんに声をかけた。

「あ、あのっ！　篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますっ。もしよろしければ私のＩＳを見ていただけないでしょうか！？」

誰かと思えば、その女子はセシリアだった。有名人であるところの束さんを前に興奮しているのか、その目は妙に輝いている。だが――

「はあ？　誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんとしーくんと鈴ちゃんと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て来てるのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」

突然の冷たい言葉。言葉だけでなく視線も、そして口調もかなり冷たい。

「え、あの……」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う……」

ここまで明確に拒絶を示されると、さすがのセシリアもしょんぼりとして引き下がった。

いきなりの態度の違いに驚いている間もなく追い返されて、ちょっと涙目になっている。

やっぱり、変わってなかったか。　この人は、昔からそうなんだよなぁ……。

いわく『人間の区別がつかないね。わかるのは箒ちゃんとちーちゃんといっくんとしーくんくらいだね。あと、まあ両親かねえ。うふふ、興味ないからね、他の人間なんて』とのこと。

というわけでこの束さん、とにかく俺たち以外の人間にはこんな感じである。

「ふー、へんな金髪だった。外国人は図々しくて嫌だよ。やっぱ日本人だよね。日本人さいこー。まあ、日本人でもどうでもいいんだけどね。箒ちゃんとちーちゃんといっくんとしーくんあと、鈴ちゃん以下は」

「束さん、鈴姉と面識合ったんですね」

俺が束さんに訊くと束さんではなく鈴姉が反応した

「あたしが中国の代表候補生になったとき突然携帯に電話があって、呼び出されたのよ。それが束さんとの面識よ」

「そうだよ。まさかしーくんのお姉ちゃんだとはあのときまで気づかなかったよー」

まあ、苗字が凰だしね。同じだし

「そうだったのか、知らなかったな」

「まあまあ、そんなことはどうでもいいじゃない。それよりさあ、いっくんとしーくんさー百式と青龍改造してあげようか？」

「お断りします」

「え。えーと……ちなみに、どんな改造ですか？」

頼むのか！？　束さんのことだからろくな改造じゃないぞ。

「うむ。いっくんが執事の格好でしーくんがメイドの格好。いっく

んは前々から燕尾服が似合うと思ってたんだよ。しーくんはメイド服が似合うと思ってたんだよ。」

やっぱり、ろくな改造じゃなかったか。
それになぜ俺だけメイド服なんだよ

「だから、お断りします」
「いいです」

「いいです！　おお、許可が下りたよ！　じゃあ早速――」

「だあっ！　わざと意味を間違えないでください！　ノーです、ノー！　ノーサンキュー！」

「なぜ俺の返答は無視なんだ！」

「束さん、紫苑のメイド服姿ならありますよ」

と、鈴が携帯を取り出した。
えーと……どこに入れてあったんだよ携帯を。

「おー、本当見せて鈴ちゃん」

「だあっ！　ダメだ！」

瞬間加速を使い鈴から携帯を没収

「ふっ、ふー、ふー。　そんなことするならこっちにも考えがあるぞ」

鈴の携帯を操作してある画像をだす

「これを見てみろ」

ずーんと鈴の前にある画像をだして携帯を突き出す

「なっ！」

「鈴にゃん」

「そんな呼び方するな！」

ある画像は名鈴が鈴に猫の格好をさせてニャアと言ってるところを俺が鈴の携帯で盗撮したものだ。
かわいいから俺の携帯にも入っている

「かわいいねー、それ私にもちょーだい」

「いいですよ」

「ちょ、ダメよ！」

鈴は携帯を奪い返そうとするのをするりと交わし空へ飛ぶ

「こら、待ちなさい！」

鈴は甲龍を展開して紫苑を追いかける

「待てと、言って待って人はいないよ」

と、そこに鈴が龍放を連射してくる

「おっと、危ない危ない」

「返せ！」

「やだと、言ったら？」

「力ずくで奪い返す！」

「来いよ」

「上等！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あーあ、始まっちゃったよ」

「仲いいよね鈴ちゃんとしーくんは」

「あー……ごほんごほん」

と、箒が咳払いをして話に入っている。

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい三分経った～。
あ、今の時間でカップラーメンできたね、惜しい」

いや、別に惜しくは……。あと、最近は三分じゃないカップラーメンも多いんですよ、束さん。

「んじゃ、試験運転もかねてふたりを止めてきてよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ、それでは行ってきます」

プシュッ、プシュッ、と音を建てて連結されたケーブル類が外れていく。それから箒がまぶたを閉じて意識を集中させると、次の瞬間に紅椿はもの凄い速度で飛翔した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『急接近するＩＳがあります』

鈴との格闘していると突然青龍のハイパーセンサーに送られてくる

「急になによ!?」

「鈴、旋回!?」

「わ、わかってるわよ!」

鈴は文句を言いながら旋回した
そこに、束さんの声が届く

「どうどう？　『箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？』」

「え、ええ、まぁ……」

どうやら俺たちの前を通り過ぎたのは箒みたいだ

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『雨月』（あまづき）で左のが『空裂』（からわれ）ね。武器特性のデータ送るよん」

「鈴、俺たちは戻るか」

「その前に携帯返して」

「わかったよ」

ポイッと鈴に投げ渡して俺たちは地上に戻る

しゅらんと二本同時に刀を抜き取る。

それを俺と鈴わＩＳのハイパーセンサーで地上から見る

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説つき～♪　雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃　部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！　する武器だよ～。　射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」

束さんの解説に合わせてかどうかはわからないが、箒が試しとばかりに突きを放つ。

そこから突きが放たれると同時に、周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、そして順番に光の弾丸となって漂っ

ていた雲を穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。それじゃこれ打ち落としてみてね、ほーいっと」

言うなり、束さんは十六連装ミサイルポッドを呼び出す（コール）。
光の粒子が集まって形を成すと、次の瞬間一斉射撃を行った。

「箒！」

隣で一夏が箒を呼ぶ

「――やれる！　この紅椿なら！」

その言葉通り、右脇下に構えた空裂を一回転するように振るう箒。
またあの赤いレーザーが、今度は束さんの言葉通り帯状になって広がり、十六発のミサイルを全弾撃墜した。

「すげえ……」

今度は隣で一夏が呟いた。　と、そこに

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

いつも慌てている山田先生だが、今回はその様子が尋常じゃない。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

渡された小型端末の、その画面を見て千冬さんの表情が曇る。

「特命任務レベルＡ、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた――」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

なにやら、千冬さんと山田先生は小さな声でやりとりをしている。

しかも、数人の生徒の視線に気づいてか、会話ではなく手話でやりとりをはじめた。

（なんか、見たことある気がする手話だな……）

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ）

「了解した。――全員、注目！」

山田先生が走り去った後、千冬さんはパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自

室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に、女子一同はざわざわと騒がしくなる。
しかしそれを、千冬さんの声が一喝した。

「とっとと戻れ！　以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな！！」

「「「はっ、はいっ！」」」

全員が慌てて動きはじめる。接続していたテスト装備を解除、ＩＳを起動終了させてカートに乗せる。その姿は今まで見たことのない怒号におびえているかのようでもあった。

「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、紫苑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、李、エドワード！――それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

（なんか、イヤな予感がするな。）

一夏もなにか、感じたらしい、そんな不安に駆られていた、俺たち。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、俺たち専用機持ち全員と教師陣が集められた。
証明を落とした薄暗い室内に、ぼうっと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

アメリカってエイミーの祖国だろ
気になり俺はエイミーをちらっと見るとエイミーはあまり驚いてはいなかった。
まあ、知っていたんだな、軍用機が作られていることがついでに俺は周囲を見渡すと一夏と箒以外は厳しい顔つきをしていた。
俺もそうだが正式な国家代表候補生なのだから、こういった事態に対しての訓練は受けている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

淡々と続ける千冬さん。次の言葉は予想通りだった。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

やっぱりか……。

「それでは作戦会議をはじめる。意見があるものは挙手するように」

「はい」

早速、手を挙げたのはエイミーだった。

「暴走した理由はわからないんですか」

「わからない」

「そうですか」

「はい」

次に手を挙げたのはセシリアだ

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするなよ。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

未だに状況が飲み込めない一夏を放置して俺は開示されたデータを元に相談をはじめる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動の両方に特化した期待ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「俺の青龍もみた感じ機動力なら最高トップスピードなら互角だが、エネルギーの消費が加速するし。俺の龍砲は鈴の龍砲より出力が低いからあまり期待できない」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員一夏を見る

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「「「「当然」」」」

四人の声が見事に重なった。

「一夏、嫌なら俺が行くぞ。氷華（ひょうか）で凍らせればすむ話だ。それに福音を倒さず捕獲出来るしな。一撃必殺が出来るのは一夏、お前だけじゃないんだよ」

「いや、俺がやる。みんなが俺を指名したんだからな。やってみせるさ」

「ふん、世話が焼けるぜ」

「なに、紫苑焼き餅？」

「さーな。」

「静かに！」

千冬さんの声で全員が静になる

「よし。　それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「俺の青龍も最高速度はでますが超高感度ハイパーセンサーがないだけです。でも、最高速度を出せば戦闘に加われません」

「そうか、ふたりとも、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二時間です」

「二〇時間です」

「ふむ……それならばオルコットが適任――」

だな、と言おうとした千冬さんを、いきなりの底抜けに明るい声が遮る。

「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

しかも、声の発生源はどこかというと、天井からだ。全員が見上げると、部屋のど真ん中の天井が束さんの首がさかさに生えていた。

「また、出たよ。ウサギさんが」

ぼそりと紫苑は呟いた

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ!?　は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ★」

くるりんと空中で一回転して着地。その軽やかさ身のこなしはサーカスのピエロも顔負けだ。どこまででたらめなんだよ。この人は……。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング!」

「……出て行け」

頭を押さえる千冬さん。山田先生は言われたとおり束さんを室外に連れて行こうとするが、するりとかわされてしまう。

「聞いて聞いて!　ここは断・然!　紅椿と青龍の出番なんだよっ!」

「なに?」

「なぜ俺なんだ!?」

俺の質問はスルーし。束さんは続ける

「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！」

束さんの言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬さんを囲むように現れる。

「紅椿と青龍の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスピードはばっちり！
少し青龍の方は調整は不安定だけどね」

一夏が首をひねっているのをみた、束さんは千冬さんの横に立って説明をはじめた。しかも、メインディスプレイも乗っ取ったらしく、さっきまで福音のスペックデータが映っていた画面は、今はもう紅椿と青龍のスペックデータへと切り替わっている。

「説明しましょ～そうしましょ～。展開装甲というのはだね、この束さんが作った第四世代型ＩＳの装備なんだよー」

えーと、束さんいま第四世代型って言ったよね!?

「はーい、ここで心優しい束さんの解説開始～。いっくんとしーくんのためにね。へへん、嬉しい？　まず、第一世代というのは『ＩＳの完成』を目標とした機体だね。次が『後付武装による多様化』――これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にＢＴ兵器、あとはＡＩＣとか色々だね。……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん、しーくん理解できました？　先生は優秀な子が大好きです」

「え、は、はい」

「は、はぁ……。え、いや、えーと……？」

一夏から何かを察知したのか束さんは続けた

「ちっちっちっ。束さんはそんじょそこらの天才じゃないんだよ。これくらいは3時のおやつ前なのさ！」

……。

この突っ込みは一夏に任せよう。

「具体的には百式の《雪片弐型》に使用されてまーす。試しに私が突っ込んだ～」

「「「「え！？」」」」

この言葉には、さすがに俺は一夏以外の専用機持ちも驚いていた。零落白夜発動時に開く《雪片弐型》の、あれがまさかそれだったとは。しかも、言葉通り受け取るなら『百式』自体も第四世代型ということになる。

あれ？　でも『青龍』には展開装甲なんてないぞ？

「それで、うまくいったのでなんとなんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてありまーす。システム最大稼働時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ★　そして青龍は両腕と両脚が展開装甲でーす。」

まさか『苑龍』『拳龍』がそうだとは。

「ちょっ、ちょっと、待ってください。え？　全身？　全身が、雪片弐型と同じ？　それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。　一言でいうと紅椿は最強だね。青龍もの」

全員がぽかんとしている。していないのは千冬さんくらいだ。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能で青龍は攻撃・機動が切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機ってやつだね。そして青龍のワンオフ・アビリティー『氷華』（ひょうか）も即時万能対応出来る唯一のＩＳでーす。操縦者の創造で自在に凍らせることがでいまーす。にゃはは、私が早くも作っちゃったよ。ワンオフ・アビリティーを超えたワンオフ・アビリティーを」

ワンオフ・アビリティーを超えたワンオフ・アビリティー！？

俺の氷華がそれだと言うのか！？

俺の創造で自在に凍らせることが出来る！？

わからないぞ！

しーんっと、場の一同が静かになったのがわかった。

「はにゃ？　あれ？　なんでみんなお通夜みたいな顔してるの？　誰か死んだ？　変なの」

変なのではない、ワンオフ・アビリティーを超えたワンオフ・アビリティーなんて聞いたことがない。それをさも当たり前に言えるあなたが変なのですよ。束さん！？

「――束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだっけ？　えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ～」

千冬さんに言われてやっと、束さんは俺たちが黙り込んでいる理由を理解したようだった。

「あ、でもほら、紅椿も青龍まだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくんにしーくんと鈴ちゃん。　そんなに暗いと束さんイタズラしたくなっちゃうよん」

えーと……ウインク、されても……。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦くらいは夕飯前だよ！」

もう知らん突っ込まないぞ。絶対に

「それにしてもアレだね～。海で暴走ってもいうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

白騎士事件？

「なにそれ？」

「「「「え！？」」」」

なんで驚かれたんだ？

驚いてないのは千冬さんだけだ

「えーと、なんで驚くの？」

「それは当たり前でしょ！？」

「白騎士事件を」

「知らない人は」

「いない」

「ですわよ」

「そうですよ！」

「まったくよ」

えーと、上から、鈴、ラウラ、シャルロット、箒、セシリア、エイミーそして名鈴だ

「そうなの？」

「「「当然」」」

「……」

そこに助け舟なのかわからないが千冬さんの声がかかる

「束、紅椿と青龍の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

驚いた声をあけたのはセシリアだった。専用機持ちの中でも高機動

パッケージを持っているのが自分だけだったため、当然作戦に参加できるものと思ったらしい。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功してみせますわ！」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

痛いところを突かれたのか、勢いを失ってもごもごと小声になってしまうセシリア。それと入れ替わるかのように束さんが天真爛漫（てんしんらんまん）な笑顔で口を開いた。

「ちなみに紅椿と青龍の調整時間は十分あれば余裕だね★」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之そして紫苑の三名による目標の追跡及び撃墜または捕獲を目的とする。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ」

ぱん、と千冬さんが手を叩く。それを皮切りに教師陣はバックアップに必要な機材の設営をはじめた。

「手が空いているものはそれぞれ運搬など手伝える範囲で行動しろ。作戦要員はＩＳの調整を行え。もたもたするな！」

いきなり、千冬さんが怒った。見ると一夏と俺以外のメンバーはそれぞれに手伝いに行っている。

「しーくんは、こっちだよ～」

束さんは俺に手招きをしている。
その隣では紅椿を展開している箒がむすっとしている

「さて、紅椿からいじっちゃおうか！」

「……」

「んあー。もっと笑ってよ。ほらほら、作戦メンバーにも選出されたし、いいことずくめでしょ？」

「この顔を生まれつきなので」

「んー、そっかなぁ。生まれたてときはもうちょっと可愛かったよ。それに、泣いてたよ」

「だ、誰だってそうでしょう！」

そうかもねー、と軽い調子で相づちながら、箒が呼び出した紅椿に触れる。

「束さん、青龍は調子にどのくらいかかりますか？」

俺は青龍を展開して束さんに訊く

「うーん、二分弱かな。青龍はほぼ終わってるから後は出力の調整かな～まあ、箒ちゃんが抱っこして目標まで行けばいいしね～」

それを聞いて箒が嫌な顔をする

そこまで嫌な顔しなくてもねえ～。

「束さん、もう一ついいですか？」

「んー？　なにかな～？」

束さんは移動形ラボの『吾が輩は猫である』（名前はまだない）を使い紅椿の調整をしながらしかも鼻歌交じりにやっている

「えーと、確か青龍のワンオフ・アビリティーの氷華は俺の創造通りに凍らせることができるといいましたけど具体的にどんなことが出来るんですか？」

「んーっとねえ。その前に氷華がどんなものが知らないとダメだね～」

「じゃあ、教えてくださいよ」

「それではつまらないから、自分考えてね★」

ウインクされても……まあ、教えてくれそうにないから……。

ため息交じりに不意に一夏の方を見ると一夏、その他多数で作戦会議をしていた。

（はぁ……。なんか気乗りしないな……。なにもないといいけど）

俺はそう心の中で呟いた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

時刻は十一時半。
七月の空はこれでもとばかりに入れ晴れ渡り、容赦ない陽光が降り注いでいる。
砂浜で俺と一夏、箒はわずかに距離を置いて並んで立ち、一度目を合わせてうなずいた。

「来い、百式」

「行くぞ、紅椿」

「行こ、青龍」

全身がぱぁっと光に包まれ、ＩＳアーマーが構成される。それと同時にＰＩＣによる浮遊感、パワーアシストによる力の充満感とで全身の感覚が変化した。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「まさか、束さんが言ったことがほんとになるとは……。　まあ、よろしく頼むぜ。箒」

「本来なら女の上に男が乗るのも女が男を抱っこするなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

束さんが言った通りほんとに目標まで箒に抱っこしてもらうことになった、鈴姉に抱っこしてほしかったな……。

（うーん、それにしても、大丈夫かな……すごく胸騒ぎがするんだが）

箒の専用機は、使い始めてまだ1日も経ってない。いくら束さんがパーソナライズとフィッティングをしたといっても、操縦者の方はそうもいかない。

（一夏のフォローもあるのに箒のフォローまでやらなくてはな……。）

そう思い、ため息を吐く

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏それに紫苑が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「……」

「ああ、そうだな。でも箒、先生たちも言っていたけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるかわからない。十分に注意をしてて――」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？　怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒――」

「ははっ、心配するな。お前らはちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……」

「……」

とにかく、さっきからこの調子なのだ。専用機が手に入って嬉しいのはわかるが、浮かれすぎてる気がする。俺と一夏は目を合わせて同時にため息をつきながら、一夏は紅椿の背中へ俺はよく紅椿の前へ移動した。

『織斑、篠ノ之、紫苑、聞こえるか？』

ＩＳのオープン・チャンネルから千冬さんの声が聞こえる。俺と一夏、箒はうなずいて返事をした。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「了解です」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏と紫苑のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使いはじめてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。できる範囲で支援します」

『――紫苑』

「なんですか？」

間が空いてからプライベート・チャンネルで千冬さんの声が届く。

『どうも篠ノ之は浮かれている。あんな状態ではなにかをし損じるやもしれん。いざというときはサポートを頼む』

「わかってますよ。なにもないように俺がサポートします。一夏のこともついでにね」

『すまんな、お前ばっかりに苦労をかけて』

「先生、気味が悪いからやめてください」

『ああ、すまん。では頼むぞ』

それからまた千冬さんの声がオープン・チャンネルに切り替わり、号令をかけた。

『では、はじめ！』

――作戦、開始。

箒は一夏を背に乗せ俺を抱っこしたまま、一気に上空三百メートルまで飛翔した。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。――一夏、紫苑、一気に行くぞ！」

「お、おう！」

「あ、ああ」

箒はそう言うなり紅椿を加速させる。脚部及び背部装甲が大きく開き、そこから強力なエネルギーを噴出させる。

（これだけのエネルギーは一体どこから――）

「一夏、紫苑、見えたぞ！」

「！！」

ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。『銀の福音』はその名にふさわしく全身が銀色をしている。

そして何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼だ。本体同様銀色に輝くそれは、資料によると大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。

「加速するぞ！　目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

スラスターと展開装甲の出力をさらに上げる箒。その速度はすさまじく、高速で飛翔する福音との距離をぐんぐんと縮めていく。

五、六、七、八、九……十！

「うおおおおっ！」

零落白夜を発動。それと同時に瞬間加速を行って間合いを一気に詰める一夏。

（行けるか――！？）

しかし、福音は、なんと最高速度のまま一夏へ反転、後退の姿となって身構えた。

「箒、離してくれ」

「わかった」

俺は箒から離れて《蒼龍牙月》を展開して左とに持ち構える。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》（シルバー・ベル）、稼働開始」

「！？」

「！？」

オープン・チャンネルから聞こえたのは抑揚のない機械音だった。けれど、そこに明らかな『敵意』を感じた。

「くっ……！　箒、紫苑！　援護を頼む！」

「任せろ！」

「言われなくても！」

俺は《蒼龍牙月》を投擲して一夏と、共に突っ込む

「チッ！……」

「くっ！　　このっ……！」

しかし、ひらりひらりと紙一重で交わされる《蒼龍牙月》の背後攻撃まで交わされてしまう。それはまるで泳いでいるかのような、踊っているなのような、そんな動きだった。

それに見事なまでに翻弄された俺たち。しかも一夏の零落白夜の残り時間が迫っていることもあって一夏はつい大振りの一太刀を浴びせようと腕を振り上げた。

そして、その隙を見逃す福音ではなかった。

「「！！」」

（やばい！　こいつは――）

砲口、だ。

「一夏！　離れろ！！」

俺は一夏前に体を滑り込ませて手のひらを突き出してワンオフ・アビリティーの氷華を発動して氷の壁を作る。

間に合わなかった羽の形をした弾はＩＳアーマーに突き刺さったかと思うと、次の瞬間には一斉に爆ぜた。

「ぐうっ！？」

「大丈夫か！？」

「問題ない」

爆発するエネルギー弾丸。どうやらこれが福音の主装備らしい。そして問題は――

（あの連射速度だ……）

その数と速度――すなわち連射が無茶苦茶速い。

狙いはそれほどではないが、なにせあの爆発弾だ。わずかでも触れれば、そこを爆発でえぐられる。

「箒、一夏左右から同時に攻めるぞ。一夏は右、箒は左。俺は正面だ」

「おう！」

「了解した！」

俺と一夏、箒は複雑な回避運動を行いながらも連射の手を休めない福音へと、三面攻撃を仕掛ける。

――けれど、俺と箒の攻撃はかすりもしない。福音はとにかく回避に特化した動きで、その上同時に反撃までしてくる。この特殊型ウィングスラスターは、その奇抜な外見とは裏腹に実用レベルが異常に高い代物だった。

「一夏、紫苑！　私が動きを止める！！」

「わかった！」

「龍砲で援護する」

「頼む、紫苑！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り出す。俺は福音の回避場所を先読みして龍砲を撃つ

箒の攻撃に合わせて紅椿の腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギーの刃が攻撃に合わせて自動で射出、福音を狙う。

さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。この猛攻には、さすがの福音も防御を使い始めた。

「はあああっ！！」

想龍を展開してエネルギー刃を出して福音に向かって投げるだが、そこに福音の全面反攻撃が待っていた。

「Ｌａ……♪」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウィングスラスターはその砲門全てを開いた。その数、三六、しかも全方位に向けての一斉射撃。

「箒、下がれ！」

「このまま、押し切る！！」

箒は光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃をする。――隙が、できた。

「！」

けれど一夏は福音とは真逆の、直下海面へと全速力で向かった。

「一夏！？」

「待て！」

「うおおおおっ！！」

「チッ。　《氷華》発生！」

瞬間加速と氷華で福音との間合いを詰める。

――だが既に福音は体勢を立て直しており俺は光弾の雨を浴びる。

「ぐあああっ！！」

光弾をまともに食らった俺は《青龍》の絶対防御を使ってＩＳスーツのまま海へと落ちていく

「紫苑！」

「俺のことは気にするな！！　福音を倒せ！！」

俺は最後の力を振り絞りそう言って海の中に落ちる

「　一夏何をしている！？　せっかくのチャンスに――」

「船がいるんだ！　海上は先生たちが封鎖したはずなのに――ああくそっ、密漁船か！」

けれど、だからといって見殺しにはできない。

キュゥゥゥン……。

俺の手の中で《雪片弐型》の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。……エネルギー切れ、だった。最大にして唯一のチャンスを失い、そして作戦の要の一つを今無くした。

「馬鹿者！　犯罪者などをかばったから……紫苑が……。」

「箒！！」

「っ――――！？」

「それを先に言え！」

動揺している箒。そしてその手からするりと落ちた刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりとした。

（今のは、具現維持限界（リミット・ダウン）だ……！　まずい――――！！　紫苑なら大丈夫だろう）

具現継続限界――つまりそれは、エネルギー切れということだ。そして今は、ＩＳ学園のアリーナではない。実戦だ。

「箒ぃぃぃっ！！」

俺は刀を捨てて一直線に箒へと向かう。最後のエネルギー全てを使っての瞬間加速。

（頼む！　間に合ってくれ！！）

視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、

今度は箒に照準を絞っている。

エネルギー切れのＩＳアーマーは恐ろしくもろい。それは第四世代型とはいえ変わりないはずだ。絶対防御分のエネルギーは確保していたとしても、あの連射攻撃を一度に受けたらひとたまりもない。

（頼む！　頼む、　百式！　頼むっ！！）

スローモーションの世界で、俺は、光弾が放たれるのを確実に視界に捉え、そして次の瞬間に福音と箒の間に割って入った。

「っ、ぐあああああっ！！」

箒をかばうように抱きしめた瞬間、あの爆発光弾が一斉に背中に降り注いだ。

エネルギーシールドで相殺し切れないほどの衝撃が何十発と続き、みしみしと骨があげる軋みが聞こえる。同様に悲鳴を上げる筋肉、アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

気が狂いそうなほどの激痛が無限のように続く中で、俺は一度だけ箒を見て目を疑った。

（氷……。　雪……？　なんで……だ？）

「最後の……エネルギーだ！！」

海の方から声が聞こえたその声は今し方海へと落ちた紫苑の声だった。

紫苑が放ったワンオフ・アビリティー《氷華》は俺の傷口を覆うように氷が広がるやがて広がり終わると紫苑は海の中に沈んでいった。

（紫苑を……助けないと……）

「一夏っ、一夏っ、一夏ぁっ！！」

「ぅ……ぁ……」

（あ、箒のリボン焼き切れちまってるな……。ふーん、髪を下ろしたのも悪くねえじゃん……）

ぐらりと世界が傾く。――ああ、違うのか。傾いてるのは俺か。

海へと真っ逆さま。そんな中、俺は最後の力を振り絞って箒の頭を守るように抱きしめる。

大きな水音と全身に伝播する衝撃。俺は海面越しに福音を見つめながら、気を失った

その境界線の上に立ち（シン・レッド・ライン）（後書き）

ついに、青龍と百式のセカンドシフトが出ます！
案はあるのでささっと書きたいのですが……前書きに書きましたが文化祭があるのでそうもいきません……。気長に待っていてください。
では次回にお会いしましょう。

雪羅と氷鈴（ドレッシィ・ホワイトとアイス・ベル）（前書き）

お待たせしました！
白式と青龍の第二形態をだしました！

白式は原作とは変わりませんが青龍はあのアニメが見え隠れしています。さあ、なんでしょうか？

では、本編どうぞ

雪羅と氷鈴（ドレッシィ・ホワイトとアイス・ベル）

それは一夏そして紫苑がまだ小学二年だった頃のことだ。
千冬に付き合わされる形で始めた剣道も一年が経ち、それなりに様になっていた。
紫苑はまだ、記憶の欠落する前。中国と日本を行き来しながら剣道をやっていた。

「ったくよー。あいつはー……」

道場の娘で同い年の女子とは、どうにも馬が合わない。今朝も朝練で衝突して試合に発展、胴薙ぎ一本で負けた日だった。

「すぐに、ぶつかるよな～お前らは～。はぁ」

「紫苑はいいよな、あいつに勝てたから。　あーくそー……勝てねえかなぁ……勝ちてえなぁ……」

「まぐれだよあんなの」

そんなことをふたりで話しながら教室の掃除をしていた。放課後の夕焼けが眩しい。自分以外のクラスメイトはサボって遊びに行っているのを知ってはいたが、別にどうとも思わない。誰かがやらなければいけないなら、自分がやるだけだ、と。

「おーい、男女～。今日は木刀持ってないのかよ～」

「……竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな～」

「……」

「しゃべり方も変だもんな～」

女子は、答えない。

三人の男子が取り囲んで1人の女子をからかっている。

そんな状況の中で、けれど少女は凛とした眼差しで相手を睨み、一歩も引こうとはしない。――その女子の名前は、箒といった。

「やーいやーい、男女～」

「……うっせーなぁ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

いい加減、無意味な攻撃に苛立ちを覚えていた一夏は、クラスの男子に向かってそう言い放つ。

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

「……はぁー。」

古今東西、子供のからかいというのは度し難い。そしてそれは、たとえ同い年であろうとも一夏、紫苑には不快きわまりなかった。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜえ」

「へっ。まじめに掃除なんかしてよー、バッカじゃねーの――おわっ！？」

いきなり、箒が男子の胸ぐらを掴んだ。その手は小学二年生とはいえ、日々の鍛錬で鋭く鍛えられている。本気で殴り合いをしたら、おそらく男子三人でも負けはしない。

けれど、何を言われても手を出さなかった箒が、その言葉にだけは反応した。

「まじめにすることの何がバカだ？　お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「やめとけ、箒。　こんなバカはほっと」

今まで黙っていた紫苑が箒の肩に手をかけて止めに入る。

「ああ、そうだな」

箒は男子を離してやる。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」

（うわ、出たよ。夫婦夫婦って、こいつらそういうの好きなんだよなー。）

「だよなー。この間なんか、こいつリボンしてたもんな！　男女のくせによー。　笑っちま――ぶこっ！？」

今度は、一夏が怒りをあらわにした。それだけでは済まず、一夏は顔面に拳を叩き込む。ぽかんとしている男子をよそに、一夏は倒れた相手に片腕で立たせて締め上げた。

「笑う？　何がおもしろかったって？　あいつがリボンしてたからおかしいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？　なんとか言えよボケナス」

「おい、　一夏もやめとけよ。はぁ……まったく、ふたりして短気なんだから。」

「お、お前っ――！！　先生に言うからな！」

「うっせーな。紫苑！　あんなこと言われて黙っていられるか！お前はなんとも思わないのか！？」

「俺は頭脳派なんだよ」

「俺を無視するな！」

一夏に片腕を締め付けられていた。
男子が片腕の拳が紫苑の頬を掠める

「「あ」」

箒と一夏が同時に漏らす

「……おい、クソガキ……。」

「紫苑、落ち着け」

「そうだ。」

「その前にこいつら全員をぼこる」

（どこが、頭脳派なんだよ）

それから三人を相手に大立ち回りいや、圧勝した。紫苑が、騒ぎを聞きつけてやってきた教師に取り押さえられて終わった。　紫苑は生まれつき力が強く、その上空手やその他いろいろな格闘技をやっているし日本にくれば剣道に千冬から体術も習っている。せいもあって、三人相手では歯が立つはずがない。それどころか流血問題にならなかったことの方が奇跡である。

しかし、それがまずかった。

馬鹿な子供の親は馬鹿というのは昔からの定説らしく、やれ警察だのやれ裁判だのと騒ぎを立てる馬鹿な生き物が三匹いた。

紫苑は気にもとめなかったが、親が日本にいない為に育ての親の千冬が無意味に頭を下げさせられていたのが許せなかった。

『問題を起こせば千冬さんに迷惑になる』

そのことを学んだ紫苑は、なるべく我慢と頭を使う事にした。

「……お前は馬鹿だな」

「そうかもな……。」

数日後、放課後の修行を終えて顔を洗う紫苑に、珍しく箒が声をかけてきた。

「あんなことをすれば、後で面倒になると考えないのか」

「俺、頭悪いからな。自分の感情だけで行動しちまう、まあ、良くないことはわかってるがつい手が出ちまうんだよ」

そのことでよく千冬に叱られるが治らないのだ、なるべく意識はしているのだが。

「まあ、大体、複数だったってことが気に入らないな。群れる女子をいじめるとか、男のクズだし」

「……」

「じゃあな、箒。今日は夕飯の当番なんで帰るわ」

スタスタと井戸から離れていく紫苑を見送りながら、変わったやつだなぁと思っていた。

季節は六月。もう夏はすぐそこまで来ていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……」

旅館の一室。壁の時計は四時を指している。

ベッドで横たわる一夏と紫苑は、もう三時間以上も目覚めないままだった。

その傍らに控えている箒は、もうずっとこうしてうなだれている。

リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちまでも表しているようだった。

（私のせいだ……）

不意に思い出した思い出の中でも、一夏も紫苑も笑っていた。
けれど、その笑顔は今はない。ただ力なく横たわっているだけだ。
ＩＳの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれ、一夏も紫苑も体の至る所に包帯が巻かれている。
しかも、紫苑の方はかなりの重傷であれを正面で受けたため失明の恐れもあった。

（私が、しっかりとしないから、一夏や紫苑がこんな目に――！！）

ぎゅうっとスカートを握りしめる。その拳が白く色を失うほどに強く、強く握りしめた。
自らを戒めるかのように、強く。ただただ強く。

『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ』

海から引き上げられ、どうにか旅館に戻った箒を待っていたのはその言葉だった。千冬は一夏と紫苑の手当てを指示して、すぐにまた作戦室へと向かう。箒は、責められないことがまた一層辛かった。

（私は……どうして、いつも……）

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう。
それを使いたくて仕方がない。
わき起こる暴力への衝動を、どうしてか抑えられない瞬間がある。
これは昔の紫苑にもあったものだ。

（なんのために修行をして……！）

箒にとって剣術は己を鍛えるものではなく、律するものだった。
――リミッター。

自らの暴力を押さえ込むための、抑止力。
けれど……それは非常に危うい境界線なのだと思い知る。
薄い氷の膜のように、ほんのわずかな重みで割れてしまう。

（私はもう……ＩＳには……）

一つの決心をつけようとしたときに、突然ドアが乱暴に開く。

バンッ！　という音に一瞬驚いた箒だったが、その方向に視線を向ける気力はない。

「あー、あー、わかりやすいわねぇ」

遠慮無く入ってきた女子は、うなだれたままの箒の隣までやってくる。

その声は――鈴だった。

「……」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、けれど箒は答えない。答え、られない。

「一夏と紫苑がこうなったのって、あんたのせいなんでしょ？」

ＩＳの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏と紫苑は昏睡状態になっている。

全てのエネルギーを防御に回すことで操縦者の命を守るこの状態は、同時にＩＳの補助を深く受けた状態になる。それ故に、ＩＳのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚ませなくなってしまうのだった。

だが、紫苑はその絶対防御機能に回すエネルギーをワンオフ・アビリティーに回したため重傷かしてしまった。

仲間――箒と一夏を守るために。

「……」

「で、落ち込んでますってポーズ？　――っざけんじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の胸ぐらをつかんで無理矢理に立たせる。

「やるべきことがあるでしょうが！　今！　戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうＩＳは……使わない……」

「ッ――！！」

バシンッ！

頬を打たれ、支えを失った箒は床に倒れる。

そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。　専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許させるような立場じゃないのよ。それともアンタは――」

鈴の瞳が、箒の瞳を直視する。

そこにあるのはまっすぐな闘志。怒りにも似た、赤い感情。

「戦うべきに戦えない。臆病者か」

その言葉で箒の瞳、その奥底の闘志に火がついた。

「――ど……」

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる

「どうしろと言うんだ！　もう敵の居所もわからない！　戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意志で立ち上がった箒を見て、鈴はふうっとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが――」

言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを、鈴はにやりとした顔で迎える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。それより他のみんなこそどうなのよ」

「私は元々攻撃特化だからパッケージインストールはしなくてオッケーよ」

名鈴がドアから顔をだす

「わたくしも、たった今完了しましたわ」

「僕も、準備オッケーだよ。いつでもいける」

「私もよ」

専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの？」

「私……私は――」

ぎゅうっと拳を握りしめる箒。それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった。

「戦う……戦って、勝つ！　今度こそ、負けなはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

さぁー……。　さぁー……。

（ここは……！？）

草原の草花が風でなびく音がする。そして、俺はここを知っている。

風がふくたびに草花がさぁー……っと、なびく。

「また、会ったな。青龍」

俺と対峙するように前にはＩＳを使ってすぐに会った青龍の擬人化した女性がいる年は俺と同じぐらいだ。

その女性は蒼い着物を纏っている。その着物には龍の刺繍が施されているそして扇子で顔を隠している
そして、俺は中国の民族衣装をきている色は蒼色だ。そして、それにも龍の刺繍がされている。
手には扇子がある。

「そうじゃぁのう～」

「今度はなんのようだ?」

「う～ん」

女性――青龍は扇子で顔を隠したまま、考え込んでしまった。
仕方ないので俺は考えがでるまで待つことにした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ざぁ……。ざぁ……。

（ここは……?）

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺はどこともつかぬ砂浜の上を1人歩いていた。

足を進めるたび、さく、さく、と足下の白砂が澄んだ音を立てる。
足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。
それに心地よい涼風と、じりじりと照りつける太陽。
（夏……なのか? 今は……）

ここがどこで、今がいつなのかわからない。

俺はなぜか制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。手には、いつ脱いだのか靴がある。

「――。　――♪　～♪」

ふと、歌声が聞こえた。とてもきれいで、とても元気な、その歌声。俺はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める。

さくさく。
さくさくと。

足下の砂が軽快に鳴る。

「ラ、ラ～♪　ララ♪」

少女は、そこにいた。

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る。

そのたびに揺れる白い髪。　輝き、眩いほどの白色。
それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った。

（ふむ……）

俺はなぜだか声をかけようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす。その木はずいぶん前に打ち上げられたのか、樹皮ははげ落ち、色も真っ白になっていた。

白いいびつなソファに座って、俺はぼーっと少女を見つめていた。
ざあざあと波の音が聞こえる。
時折吹く風は心地よくて、俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「……」

海上ニ〇〇メートル。そこで静止していた『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）は、まるで胎児のような格好でうずくまっている。
膝を抱くように丸めた体を、守るように頭部から伸びた翼が包む。

――？

不意に、福音が頭を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中、続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。
その姿は通常装備と大きく異なり、八〇口径レールカノン《ブリッツ》をニ門左右それぞれの肩に装備している。
さらに遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。

これが、砲戦パッケージ『パンツァー・カノニーア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンであった。

（敵機接近まで……四〇〇〇……三〇〇〇――くっ！　予想よりも速い！）

あっという間に距離が一〇〇〇メートルを切り、福音がラウラへと迫る。

その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を打ち落としながらラウラへ接近していた。

「ちいっ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。

対して、機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

――避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「――セシリア！！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。

青一色の機体――ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲だった。

六機のビットは普通と異なり、その全てがスカート状に腰部に接続されている。しかも、砲口は塞がれており、スラスターとして用いられている。

さらに手にしている大型ＢＴレーザーライフル《スターダスト・シューター》はその全長がニメートル以上もあり、ビットを機動力

に回している分の火力を補っていた。
強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備しているセシリアは、時速五〇〇キロを超える速度下での反応を補うため、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー《ブリリアント・クリアランス》を頭部に装着している。そこから送られてくる情報を元に最高速からいきなり反転、福音を捉えて撃った。

『敵機Ｂを認識。排除行動へと移る』

「遅いよ」

「だよね」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。
それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットとエイミーだった。
ショットガン二丁のシャルロットと福音と同じ《銀の鐘》試作壱号機・腕部装備砲（ハンドカノン）バージョン。を装備したエイミーの近接射撃で背中に浴び、福音は姿勢を崩す。
けれどそれも一瞬のことで、すぐさま四機目の敵機に対して《銀の鐘》による反撃を開始した。

「おっと、悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。そのシルエットはノーマルリヴァイヴにに近く、二枚の実体シールドと同じく二枚のエネルギーシールドがカーテンのように前面を遮っていた。

防御の間もシャルロットは得意の『高速切替』によってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。加えて、高速機動射撃を行うセシリアと、シャルロットの後ろで控えているエイミーと、距離を置いての砲撃を再開するラウラ。四方からの射撃に、福音はじわじわと消耗をはじめる。

「まさか、同じ武装を使うとはね……」

エイミーがエネルギー弾を放ちながら愚痴る。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全スラスターを開いて強行突破を計る。

「させるかぁっ！！」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出してきたのは真紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前にたたき落とす！」

福音へと突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴はら機能増幅パッケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口がその姿を現す。計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『！！』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。
しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っている。
しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。増幅された衝撃砲――言うなれば、熱殻拡散衝撃砲と呼ぶべきものだった。

「やりましたの！？」

「――まだよ！」

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能は停止させてはいなかった。

『《銀の鐘》最大稼働――開始』

両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。
――刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじまった。

「くっ！！」

「箒！　僕の後ろに！」

前回の失敗をふまえて、箒の紅椿は機能限定状態にある。展開装甲を多用したことから起きたエネルギー切れを防ぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定し直したのだった。
もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからこそである。
集団戦闘の利点を最大限に生かした役割分担であった。

「それにしても……これはちょっと、きついね」

「なら、私が行くわ」

上空で控えていた蒼と白が入ったＩＳを纏った名鈴がステルスモードで垂直で降りてきて白棒を福音の両方の翼に刺す、そして弾ける。

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。――狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター《銀の鐘》。

「もらったあああっ！！

エネルギー弾を全身に浴びながら、しかし鈴の斬撃は止まらない。同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ……！　どうよ――ぐっ！？」

片側だけの翼になりながら、それでも福音は一度崩した姿勢をすぐに立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩き込む。脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へと墜とす。

「鈴！　おのれっ――！！」

箒は両の手に刀を持ち、福音へ斬りかかる。

その急加速に一瞬反応を失った福音の、その右肩へと刃が食い込ん

だ。

（獲った――！！）

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手のひらで握りしめる。

「なっ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げる。

刀に引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。そしてそこに、残ったもう一つの翼が砲口が開放して待っていた。

「箒！　武器を捨てて緊急回避をしろ！」

しかし、箒は武器を手放さない。

（……ここで引いて、何のための……）

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

（何のための力かっ！！）

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転をする。その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に応えるように開き、エネルギー刃が発生させる。

「たあああああっ！！」

かかと落としのような格好で、エネルギー刃の斬撃が決まる。
ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はっ、はぁっ、はぁっ……！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は……大丈夫だ。　それより福音は――」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

「！？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）が自らを抱くかのようにうずくまっている。

「これは……！？　一体何が起きてるんだ……？」

「！？　まずい！　これは――『第二形態移行』（セカンド・シフト）だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。
無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。け

れど、そこに確かな敵意を感じて、各ＩＳは操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし――遅かった。

『キアアアアアア……！！』

まるで獣のほうこうのような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる。

「なにっ！？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。

そして、切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで蝶がサナギから孵るかのようにエイミーの翼が生えた。

「ラウラを離せぇっ！」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められて止まった。

「よせ！　逃げろ！　こいつは――」

その言葉は最後まで続かず、ラウラはその眩いほどの輝きと美しさを持ったエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距離で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海へと墜ちた。

「ラウラ！　よくもっ……！」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出す。　福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた。

ドンッ！！

しかし、その爆音は、ショットガンのものではなかった。

胸部から、腹部、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした。

「何なのよ！？　この性能は……エイミー、教えなさい！」

近接ブレード《無月》を両手に握っている名鈴がエイミーを呼ぶ。

「私だって知らな――きゃ！？」

名鈴と会話をしていたエイミーが福音の弾雨を浴びて海へと墜ちた。

「エイミー！　このっ……！」

無月を握りしめて、福音へ突撃する。

ガキッ！！

福音は左右両方の刃を手のひらで握りしめて止める

「チッ……、この……！」
そして、エネルギー翼に抱かれる。
「押してダメなら引いてみなってか！！」
その瞬間名鈴を思いっきり福音を刀ごと自分の方に引っ張り態勢を崩すした福音に蹴りをお見舞いして刀を捨て、『瞬間加速』（イグニッション・ブースト）で福音から離れる。
「危なかった……。っ！」
かなりの距離を離したつもりだったが一瞬で追いつかれ弾雨の餌食になって海へ墜ちていった。
「な、何ですの！？　この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な――」
再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。『瞬間加速』――それも、両手両足の計四ヵ所同時着火による爆発加速だった。
「くっ！？」
長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとするが、その銃身を真横に蹴られてしまう。
そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、セシリアは蒼海へと沈められた。
「私の仲間を――よくも！」

急加速によって接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。
展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる。

「うおおおっ！！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押されはじめる。

（いける！　これならっ――）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし――

キュウウウウン……

「なっ！　また、エネルギー切れだと！？　――ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいった。

（すまない、一夏、紫苑……！）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

さー、さぁー。

風が草花を撫でる。

その音を聞きながら前の女性からふと視線を外した。

「貴様は力を欲するか？」

「……。」

視線を離した瞬間、青龍が俺に問いかけた。

俺は振り向かず、黙り込む。

「力を欲するか？　何のために……」

「ふっ、　欲しい、力が欲しい。」

さあーっと、風が横切る。

「何のために……？」

「なんのためにか……。　そうだな……強く在りたいからかな、そして大切な人を……大切な仲間を守るためかな」

「そうか……」

「どうした？」

黙ってしまった青龍に問いかける。

「だったら、行くぞ」

「は？」

女性は扇子を閉じて俺の手を取る

「ほら、行くぞ」

「ああ」

とうなずいた。

すると、いきなり変化が訪れた。

「な、なんだ？」

――空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめたる。

その蒼白い光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉が頭に浮かんだ。

（ああ、そういえば……）

この女性は、誰かに似ている。

蒼い――着物の女性。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ざあ、ざあん……。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。

その歌は、その踊りは、なぜだか俺はひどく懐かしい気持ちにさせる。

（……あれ？）

ところが、ふと気づくと少女の歌は終わっていた。
　踊りもやめて、少女はじぃっと空を見つめている。
俺は不思議に思って、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう。
ざあ、ざあ、と。
波打ち際までやってきた俺は、涼しい水の調べが濡らす。

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はまだじぃっと空を見つめたまま動かない。
俺はなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。
――あれ？

きょろきょろと左右を見るが、もう人影は見あたらない。歌も、聞こえない。
ざあざあと、ざあざあ、と。波の音だけが。

「うーん……」

俺は仕方なく木のソファに戻ろうと体を反転させる。
すると――背中に声が投げかけられた。

「力を欲しますか……？」

「え……」

急いで振り向くと、波の中――膝下までを海に沈めた女性が立っていた。その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。

大きな剣を自らの前に立て、その上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？　何のために……」

「ん？　んー……難しいことを訊くなぁ」

ざあ、ざあん、と。

波だけが俺と女性の間にある。

「……そうだな。友達を――いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？　単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまっていないことなのに、妙に饒舌に喋っていた。

話しながら、「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚きつつ、言葉は続いていく。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けた

いと思う。この世界で一緒に戦う――仲間を」

「そう……」

女性は、静かに答えてうなずいた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声をかけられる。

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じぃっと俺を見つめている。

「ほら、ね？」

手を取られて、にこりと微笑みかけられる。

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、

「ああ」

とうなずいた。

すると、いきなり変化が訪れた。

「な、なんだ？」

――空が、世界が、眩いほどに輝きを放ちはじめたる。

その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉がふいに浮かんだ。

（ああ、そういえば……）

あの女性は、誰かに似ていた。

白い――騎士の女性。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ぐっ、うっ……」

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へと進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包み込んでいた。

（これまでか……。　情けない……）

ぼうっと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みがはじまる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

――会いたい。

――一夏に、会いたい。

――すぐに会いたい。今会いたい。

――ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

ピャキン……ガキッ！！

『！？』

突然、福音は掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは巨大な氷の柱によって吹き飛ばされた福音の姿だった。

（な、何が起きて――）

戸惑う箒の耳に届いた。

「一夏、一夏って、あーあ、ヒーローは遅れてやってくるって言うのに……。仕方ない、ヒーロー座は一夏にくれてやるよ」

「わけがわからないが……俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

箒の視線の先には、白く、輝きを放つその機体と蒼く、輝きを放つ機体がある。

「あ……あ、あっ……」

じわりと目尻に涙が浮かぶ

わずかに潤んだ視界に見えるのは、百式第二形態・雪羅を纏った一夏と青龍第二形態・氷鈴と左目にラウラの眼帯を纏った紫苑だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「一夏、紫苑！？　体は、傷はっ……！」

慌てて声を詰まらせる箒の元へ飛んで、俺たちは答える。

「おう。待たせたな」

「たく、お前は、せっかく俺が命がけで守ったってのに……。はぁ仕方ないか。」

「よかっ……よかった……本当に……」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「らしくねえな」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐしぐしと目元をぬぐう箒に、一夏は優しく頭を撫でた。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ……」

「くふふ、箒の強がりさん」

「なっ、紫苑！」

想龍で口元を隠しながら笑う俺

「なんだよ、箒ちゃん」

「お前、その笑い方……記憶が……戻ったのか！？」

「あ？　ああ、少しだが箒との剣道をしている場面とかな、色々となそんな話はあとでいいだろ」

「箒、ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え……？」

一夏は持っていたものを箒に渡す。

「り、リボン……？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ……」

そうか、なにかずっと引っかかっていたものが今外れた。
七月七日。今日は箒の誕生日か。
あの時何故か余分にプレゼントを買った。だが、余分じゃなかったな。

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる。――まだ、終わってないからな」

「そうだぞ。まったく」

「悪い悪い」

言うなり、一夏はこちらに向かってきていた福音へと急加速、正面からぶつかった。

「再戦と行くか！」

「だな！」

一夏に続き俺も福音へと迫る

一夏は左手の新兵器《雪羅》で福音を追う。

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まばしたが、その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった。

「俺を忘れては困るな」

俺は右手の刀、新兵器の《氷鈴》を使う

――氷鈴、スコルピオンテールへ切り替え。

刀から、鎌状に変化した氷鈴で福音の首にかける。

氷鈴は一夏の《雪片弐型》と同じ物だが、刀になっているそして《雪羅》と同じく状況に応じていくつかのタイプに変化する。

「一夏、シールドはあまり使うな、エネルギーがバカにならないだろ。」

「わかった！」

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、それまでしならせていた翼を自身へと巻き付けはじめる。　それはすぐに球状になって俺を巻き込む。

「チッ、《氷の鈴》（アイス・ベル）　そして氷華発動！」

「紫苑！？」

パッキンと、音を立てて福音のエネルギー翼が凍りつき、砕け散る。

「！？」

エネルギー翼が砕け散りそこにいたのは

「ふぅー、さすがに今のは危なかったな」

氷の翼を纏った紫苑だった。
大きくなったウィングスラスターがすべて展開装甲になり展開装甲のあいだから氷の翼が生えていた。その翼は龍のような大きく皮膜を広げ自身を守るように丸くなっていた

「大丈夫か紫苑！？」

後ろから一夏の慌てた声が届く

「誰に言ってんだよ。」

リリンと動くたびに鈴の音がなる
その音の発信元は右手の《氷鈴》からである。

「鈴の音……？　どこから？」

「ここからだよ」

俺は右手を上げて氷鈴の柄に付いている2つの鈴を見せる

「さっきまで、無かったぞ」

「ワンオフ・アビリティーを発動状態だとこの鈴が現れるらしい。どうやらこれがこいつの本当の姿らしいしな」

「そうなのか」

「ああ、さてちゃっちゃと終わらせるか！」

「だな！」

態勢を立て直した福音と俺は正面でぶつかりなんどか斬り合う。

「一夏、前線で頼む！」

「おう」

俺と一夏は入れ替わり一夏が福音と戦っている。

（氷華は俺のイメージで氷を具現化出来るなら……。　氷華――氷龍！）

「はぁっ！　行けっ氷龍（ひょうりゅう）！」

氷鈴を振り抜くと刃先から氷がでて、それが龍になり福音に迫る

『！？』

福音は機動力特化を利用しての離脱をした。それを俺は追いかける。
この状態の機動力は福音と同じくらい、いやそれ以上かもしれない
その反面エネルギーを膨大に消費するので使うところを考えないと危なくなるのだ。

「逃がさないよ。　墜ちな、龍砲！」

ガバッと両肩のアンロックユニットが開き不可視の弾を福音に浴びせる

「一夏、今だ！」

「うおおおぉぉぉっ！！」

強化され、大型四機をのウィングスラスターが備わった百式・雪羅は、二段階瞬間加速（ダブル・イグニッション）を可能にしている。
これで十分追いつける。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

（チッ、またかよ）

一夏は仲間の盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声に蹴飛ばされる。

「何やってんのよ！　あたしたちは腐っても代表候補生よ？　余計な心配しないで、さっさと片づけちゃいなさいよ！！」

「鈴、そこにつるぺたも入れとけよ……プッ。」

「紫苑！！　あとで殺す！」

「はいはい。　一夏みんなは俺に任せてお前は福音をやれよ。俺はもうそろそろエネルギーが切れるからな」

パッリンと翼を作っていた氷が割れて展開装甲が閉じる

「鈴、紫苑……わかった！」

一夏は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作り出して、再度福音へと飛び込んだ。

「さて、シールドを張るか……。」

両手の平を前に突き出す。

（氷華……発動！）

突き出した両手が光、氷の壁が生まれる。

「全員、この後ろにいてね」

「紫苑」

想龍を展開したところで名鈴に呼びとめられる。

「生きてたのか、名鈴」

「当たり前でしょ！！　失礼ね……じゃなくて！」

「なんだよ」

「あの……」

「ちょっと待ちなさい！」

エイミーが割って入ってくる

「じゃあ、行ってくる」

「あ―……。」

後ろで、名鈴の声が聞こえたがスルーする
そして想龍の第二モードのエネルギー刃を出して、一夏とともに福音へと飛び込んだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「エイミー、なんで邪魔するのよ！」

「なんの話かしら？」

「そんなことより名鈴、紫苑になにを言うとした？」

ラウラがジト目で睨む。

「な、なんでもいいでしょ！！」

「そんなのはどうでもいいのよ！」

「そうだよ」

「紫苑さんのＩＳのエネルギーが」

「「「え！」」」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

（一夏、紫苑が駆けつけてくれた……！）

それはもう、嬉しいを飛び越えていた。

心が躍動する。熱を持って、跳ねる。

そして戦う一夏のそして紫苑の姿を見て、何よりも強く願った。
（私は、ともに戦いたい。２人の背中を守りたい！）

強く、強く願った。
そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……！？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのがわかる。

――『絢爛舞踏』（けんらんぶとう）、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。
頂目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字だった。

（まだ、戦えるのだな？　ならば――）

一夏から渡されたリボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る。

（ならば、行くぞ！　紅椿！）

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮れの空を裂くように駆けた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ぜらあああっ！！」

零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ。

「はっ！」

想龍のエネルギー翼が交わされる。

そうこうしているうちに失った翼は再度構築されて、こちらへと強力無比な連続射撃を行ってきた。

「くっ！」

「チッ、エネルギーが」

――エネルギー残量一〇％　予測稼働時間　一分。

「一夏、エネルギー残量と予測稼働時間は！？」

「ニ〇％で　三分ってとこだ。　紫苑は！？」

「一〇％の一分だ」

「やばいな……」

「ああ」

リミッターなしの軍用ＩＳがどれほどのエネルギーを持ってるか、わからない、対して俺たちの機体は稼働限界が近づいている。

（どうするか、氷華は使えないし。氷鈴は氷華と同時に使わないと意味がないしな……）

「紫苑！　危ない！」

「っ！」

とっさに想龍を開きガードする。

「サンキュ、一夏！」

「集中しろよ」

「わかってる」

「一夏、紫苑！」

「箒！？　お前、ダメージは――」

「大丈夫だ！　それよりも、２人共これを受け取れ！」

箒の――紅椿の手が、俺の青龍と一夏の百式へと触れる。

その瞬間、全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走り、一度視界が大きく揺れた。

「な、なんだ……？　エネルギーが――回復！？　箒、これは――」

「本当だ、どういうことだ！？」

「今は考えるな！　行くぞ、一夏、紫苑！」

「お、おう！」

「あ、ああ！」

意識を集中させ、氷鈴を展開、そして氷華を発動その上、《氷の鈴》（アイス・ベル）も発動をする。

「俺が動きを止めるからあとは任せたぞ」

「おう」

「任せろ」

スラスターを開いて姿が消えるくらいのスピードを出して福音の後方に回る。

「千華（せんか）！」

福音の全身から氷の華（はな）が咲きはじめる。

「今だ！」

「おおおおおっ！！」

一夏は福音の胴体へと零落白夜の刃を突き立てた。

そして銀色のＩＳはやっと動きを停止した。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……！」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ――――!?」

「間に合うか!?」

「おまえらは、ツメが甘いぞ」

俺たちの横を横切って箒が海面接触ギリギリで操縦者をキャッチした。

「ナイスキャッチ！　箒！」

「ふん……」

俺はシールドとして張っていた氷を壊してみんなのところに行く。

「みんな、終わったよ」

「し、お～ん!!」

「おい、名鈴!?」

「よかった～よかったよ～」

飛びついてきた名鈴を撫でながら俺はみんなの顔を見る

「お疲れ、紫苑」

「お疲れ、みんな」

鈴、ラウラ、シャルロット、エイミー、セシリアを見ながら笑みをこぼした顔で笑う

「ラウラ、眼帯サンキュな」

「気にするな、だが、これでお前もうちの部隊の仲間入りだ」

「そうか、じゃあ、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長、これからよろしくお願いします。」

「う、うむ……」

「……クス、さて、帰るか」

スラスターの展開装甲を閉じる。すると氷が割れて粒子となって消えた。

「そうだね」

「そうですね」

「ええ」

「そうね」

「うむ」

「うん」

みんなで一夏たちの元に行った。

ふと、空を見ると、あれほどまでの青さを誇った空はもうすでになく、夕闇の朱色に世界は優しく包まれていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「作戦完了――と言いたいところだが、お前たちは独自行動による重大な違反を犯した。　帰ったらすぐに反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

戦士たちの帰還は、それはそれは冷たいものだった。

腕組みで待っていた千冬さんに俺たちはきつく言われ、勝利の感触さえおぼろげだ。今は大広間で全員正座。この状態でもう三〇分は過ぎた気がする。

セシリアの顔色が真っ赤から真っ青になっている。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の千冬さんに対して、山田先生はおろおろわたわたとしている。さっきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと忙しい。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。――あっ！　だ、男女別ですよ！　わかってますか、織斑君、凰君！？」

「わかってますよ……」

というか、『脱いで』のあたりで女子がそれてなく自分の体を隠したのが、軽く傷ついたんだけど。

「安心しろ、鈴と名鈴の裸しか興味が――――」

女子全員（1人覗く）に睨まれたので口を閉じる俺。
その1人とは名鈴だ
なぜか顔を真っ赤にしてもじもじしている。

「そ、それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ」

はーいと返事をして、俺たちはそれぞれにスポーツドリンクのパックを受け取る。もちろん体に考慮してぬるめの温度だ。

「あーくそ、腕が上がらん」

「ってて……。　うわ、口の中切れてるな」

一夏は一夏でぼやいている。

「……」

「な、なんですか？　織斑先生」

じーっとこっちを睨んでいた千冬さん。

「……しかしまあ、よくやった。　全員、よく無事に帰ってきたな」

「え？　あ……」

「くふふ、今も昔も変わらないね。千冬母さんも」

「っ！　紫苑!?」

照れくさそうに背中を向けていた千冬さんが俺の方を向く、しかも驚いてる顔だ。

「なんですか、織斑先生？」

「お前、記憶が戻ったのか？」

そのことか……。

「ええ、少しだけですが、千冬さんが俺の育ての親だってことぐらいは。てか、俺いつから記憶なかったんですか？」

「そ、そうか、それと、もう私はお前の親ではない。だから母さん

とか呼ぶなよ」

「わかりました。」

あれ？　ごまかされた気がするが……気のせいかうん

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

なんか、見られている気がするがだか……。

「あの、織斑君に凰君？　みんなの診察しますから、ええと――」

「「「「「「とっとと出ていけ！」」」」」」

七人の声に押されて、俺たちは慌てて廊下に脱出。

ぴしゃりと閉じた襖に、背中を預けて深く息をついた。

「「ふう……」」

俺と一夏の息が重なった。

「お疲れ、一夏」

「ああ、お疲れ紫苑」

「仲間は、守れたよな。俺たちは」

「ああ」

俺と――青龍、一夏と――百式は。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「くそ、視野が狭い。腕が上がらねえ」

左目が利き目の俺には左目に眼帯は結構つらい、その上左腕が腕が上がらない。左利きなのでこれはまたきつい。さっきよりは上がりようになったがまだ上がりにくい。

「食べさせてあげようか？」

右隣の鈴が訊く

「私が食べさせてあげる！」

今度は左隣の名鈴騒ぎがはじめる。

「ちょっと、２人とも！」

お膳を挟んで向かい側で、今度はエイミーが慌てる

「別に、自分で食べるからいい」

「そうなこと、言って全然進んでないじゃない。ほら、あーん」

「ちょっと、鈴！　紫苑！　あーん」

「じゃあ、私も！　あーん」

三方向から箸を突き出される。

「えーっと……はぁ」

三人の箸を無視して食事にかかる俺。

「放置プレイか！」

「じらさないで紫苑！」

「無視なの！？」

「ああ、わかったよ！」

鈴の箸から順に食べていく。

「ごちそうさま」

そして、そのまま大広間を出る。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ざあ……。ざあん……。

「ふうっ……」

食事後俺は旅館を抜け出して夜の海へと繰り出した。といっても泳いではいないがな。

満月の今日は、真夜中であっても明るい。穏やかな波の音と風の音を聞きながら大きな岩石に横になり夜空を眺めていた。

（俺、名鈴と付き合ったのいつだったけ？）

改めて記憶を探るが出て来ない。

そして、すぐに探るのをやめる。

（ま、いっか、終わったんだし）

俺と名鈴の関係は終わっている。今日七月七日に。作戦中は忘れていたが落ち着くと思い出したのだ。

「やっぱりここにいたんだ、紫苑」

突然名前を呼ばれて、俺は顔を上げる。

月明かりに照らされて姿が浮かんだのは、スク水姿の名鈴だった。

「名鈴……？　なんでスク水なんだよ」

「紫苑がスク水好きだから」

「だからって……。」

「言ったでしょ？　紫苑を悩殺するって」

「言われた……気がする」

（くそ、名鈴はつるぺたじゃないから大丈夫だと高をくくってたが……こいつかなり胸デカいよな……。じゃなくて！）

そして追い討ちをかけるように名鈴は俺の脇に座り顔を覗き込むように俺の体に触れる。

「ねえ、覚えている？」

透き通る用な声で俺に話しかける名鈴。

「な、なにが？」

「私たちが付き合いはじめた日のこと」

「……」

「もしかして、覚えてないの？」

「ご、ごめん」

「ふふ、仕方ない許してあげるわ」

「どうも」

「こんなふうな満月の夜だったんだよ、しかも紫苑から告ったのよ」

「そ、そだったんだ……」

「そして、別れた日もこんなふうな満月の夜だったんだよ。しかも今日、紫苑から切り出したのよ」

今度は悲しそうな声で俺に話しかける。

「そうだったな」

別れた日だけは覚えていた。

「ふふ、そこは覚えてるんだ」

さあーっと風が吹き抜ける

「紫苑って、自分勝手だよね。自分から告って、振るなんて」

「ごめん」

「許さないからね」

「……」

「そうやって、自分の都合が悪くなると黙りだし」

「ごめん」

「さっきから、謝ってばっかりよ……まったく、察しなさいよね」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかった。

「責任取ってよね、紫苑しかみれなくなったんだからね！」

「ごめん」

「もう、さっきから、謝ってばっかりじゃないのよ！」

名鈴は俺に跨がる。

「おい、名鈴！」

「この、鈍感男」

そして、目を閉じ顔を近づけてくる。

「め、名鈴、冗談よせよ。俺たちは終わっているだぞ。」

「……」

無言で近づけてくる。

そして……してしまった。

名鈴とキス、接吻、チューを。

「……」

「……」

名鈴はキスをしたらすぐさま俺から離れた。
俺は体を起こし背中を向ける。

「ね、ねえ、紫苑？」

「な、なんだよ」

「……」

「っ！」

名鈴が背中から抱き付く。

「責任取ってよね。き、キスまでしたんだから」

「それは、お前からだろ！」

「そうやって、人のせいにする。」

「は？　人のせいって――」

「抵抗できたはずだよね？」

「ぐっ……」

「だから、責任、取ってね」

そして、名鈴は俺の耳たぶを噛む。

「や、やめろ！」

「紫苑の弱点だもんね～カプリ」

「う、はぁ……や、やめろ……。」

「いや、紫苑いじるの好きだし。」

ふうって息をかける。

「あっ……はぁ……」

「吐息がかわいいよ紫苑！」

「お、お前、いい加減に――っ、ああっ」

今度は舐める。

「はぁ……も、もう……や、やめて……」

「いや、責任を取るって約束するまで止めない。」

「こ、こっちが責任取って欲しいわ！」

「私はいつでも紫苑のためだったら責任取ってあげるよ」

「嘘つけ！」

「もう、うるさいよ。……カプリ」

「あ、あっ、はぁ……」

（名鈴の体液の音が耳元で聞こえる。　や、ヤバい、変になりそう）

「……ぴっちゅぁ……ちゅぱ……カプリ」

「ああ、あっ、……こ、これ以上はダメ！　や、やめて……」

「じゃあ、なんて言うのかな？……カプリ」

「せ、責任……あっ……取り……ま……すぅ……」

「本当に！」

言わされてしまった。

凰　紫苑、一生の不覚……。

「お、お前が言わせたんだろ！」

「私は、やめて欲しかったらなんて言うのって言っただけよ」

「嘘つけ！　責任取るって約束するまで止めないって言っただろうが！」

「そうだっけ？　ふうっ…。」

「うわ、バカやめろ！」

「スキンシップよ」

スキンシップって……。

「もう、帰る」

「逃がさないわよ～」

「せ、セシリア！？　なんでこんなところにいんのよ！」

「鈴さんこそ！　か、勝手に旅館を抜け出して、怒られても知りませんわよ」

この声は鈴とセシリア、あと、遠くて聞こえるずらいがシャルロットとなぜかラウラがいるな。

「い、一夏……。　いきなり、だな……。その、人気のない場所に連れて……わ、私とて、困る……」

「う？」

近くで一夏と箒の声が聞こえる。

「せっかくのいいムードだったのに……。」

「俺としては助かったな」

耳の三種類の攻撃をあと一、二回食らっていたら危なかった。

主に精神が、一歩間違えたら名鈴を押し倒していたかも……考えるだけで寒気が……。

「……ブルー・ティアーズ……」

キュィィィ……。

「ぬあああっ！？」

ズバシュッ！！

「――よし、殺そう」

「一夏、何をしているのかな……？」

「ふふっ、うふふふふっ」

「はじまったぞ、一夏の地獄のマラソンが」

「ほう……」

「ふたりとも、こんな所でなにしてるのかな？　くっついて」

「「っ！」」

俺たちは凍り付いて、ゆっくりと声の下方に顔を向ける。

「ら、ラウラ」

「え、エイミー」

「「死ね」」

いきなり攻撃ラウラはプラズマ手刀、エイミーは《銀の鐘》試作壱号機・腕部装備砲(ハンドカノン)での攻撃

「おっと、危ない」

俺は青龍を右腕だけを部分展開、そして氷華でシールドを作る。

「さすが、私の夫ね」

「こら、名鈴！　変なことを口走るな！」

「夫！？」

「紫苑、お前は私の嫁だろう？」

「嫁！？」

エイミーがオーバーアクションをしているなぜかいやな予感が拭えない。

「ふふっ、ふふふふっ、そうか、そうよね～」

エイミーはＩＳを展開そして武装のガトリンクを展開そして、撃つ

ダガガガガガガガガガガガッ！！

「氷華が間に合わねえ　名鈴逃げるぞ！」

「え、きゃっ」

「かわいい声出すじゃねえか……じゃなくて！」

「なにひとりでボケとツッコミやってるのよ！」

「ごめん！」

そんなことを名鈴と話しながら青龍のウィングスラスターを展開して夜空を逃げている。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四二パーセントかぁ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む。
子供のように。天使のように。
明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない。
いつだってどこか退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった。

「んー……ん、ん～」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこで百式第二形態とは青龍第二形態の戦闘映像が流れていた。
　それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす。
目の前にはただ海が広がり、高さは三〇メートル近い。落ちれば無

事では済まないその場所でも、束の表示はけして変わることはない。

「う～。青龍には、驚くなぁ、いやしーくんが凄いなのかな？　まさか、動く氷を造るし操縦者の生体再生まで可能なんて、そんなに設定私見たことないなぁ～」

氷龍――元々氷華は凍らせて動きをとめ絶対防御を発動させるためのワンオフ・アビリティーだしかし、第二形態に移行した為いろんな凍らせ方が出来るようになったが動き氷は作ることなんてできない。

本来なら

「コアナンバー〇〇〇私に唯一完成出来なかった、失敗作なのに。」

今度は白式第二形態の戦闘映像を呼び出す。

「は～。　それにしても白式にも驚くなぁ。まさか操縦者の生体再生まで可能なんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー〇〇一にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇すべてを引き連れているかのような静かな威厳に満ちていた。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

ふたりは互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさっきまで

と同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。
どんな顔をしていのか、別に見なくてもわかる――。
そんな確かな信頼が、ふたりの間にはあった。

「とこれでちーちゃん、問題です。私が唯一完成出来なかったコアナンバー〇〇〇はなぜ完成したんでしょうか？」

「紫苑が完成させたんだろ」

「うーん少し違うかな、本当はしーくんがずっと持っていたからだよ」

「どういう意味だ？」

「記憶の欠落、それが答えだよ」

「ふっ、そうか」

紫苑の記憶の欠落はショックでもなんでもない紫苑自身が望んだことだ
そしてその記憶は青龍のコアに組み込まれた。
青龍とのシンクロ率稼働率があがるほど記憶が戻る仕組みになっている

「もう一つ問題です白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼べば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしただけの

ことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体された、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件の境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやりとりしていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、（同じワンオフ・アビリティーを開発したとしてもふしぎじゃないよねぇ）」

「……」

千冬は、答えない。

しかしそんな反応はお構いなしに、束は続ける。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体はコアは分解前に初期化したのに、なんでなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけとね」

「不思議なこともあるものだな」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。それは、束にとっても同じ。

しかし、束は別にわからなくても問題ない。

「……そうだな。私も一つたとえ話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねぇ」

「例えば、とある天才が一人の男子を高校受験場所をもう一人を研究所の中を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるＩＳを、その時だけ動くようにする。そうすると、（本来男が使えないはずのＩＳが使える）、ということになるな」

「ん～？　でも、それだと継続的に動かないよねぇ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じものに手を加えることはしないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？　とある天才」

「どうなんだろうねー。　うふふ、青龍はともかく、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねぇ。いっくんはＩＳ開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねぇ」

「嬉しいだろう？」

違いないね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。

そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのＩＳの暴走事件だ」

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねぇ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二ヵ国の軍事コンピューターを同時にハッキングするという歴史的大事件を自作した、天才がな」

束は答えない。千冬も、もう言葉は続けない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

「――――――」

その風の中、何かをつぶやいて……束は消えた。忽然と。突然と。

「……」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる。
その口元から漏れた声は、潮風に流されて消えた。

雪羅と氷鈴（ドレッシィ・ホワイトとアイス・ベル）（後書き）

わかりましたか？
青龍の第二形態があるアニメが見え隠れしているのが
答えは――ブリーチのあの人です。

ではでは、またどこかで

君の名は（ユア・ネーム・イズ）（前書き）

おまけですよ～。

無駄な時間つぶしです。
あまり内容よくないですけど本編どうぞ。

翌朝。朝食を終えて、すぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる。
それもそろそろ終わる。

「あ、箒。少しいいか？」

「なんだ？　紫苑？」

探し人を見つけて声をかける

「いや、昨日渡しそびれてな」

俺はポケットから細長い真っ白な箱を取り出す。

「1日遅れだが、誕生日おめでとう箒」

「紫苑、覚えてくれてたのか……。」

「まあな……幼なじみを甘くみては困るな。」

実際、忘れてたのだが……。

「開けていいか？」

「ああ、気に入るかわからないが」

「これは……簪か？。」

「ああ、箒は和服が似合うからな、リボンより簪の方がいいと思ってな」

「ありがとう。しお――」

「しお～ん！」

箒の言葉を遮って俺の名前を呼ぶ名鈴が飛びついてきた。

「なんだよ、鬱陶しいな」

「そんなこと、言わないでよ～。……ふうっ」

「っ！　や、やめろ！」

名鈴が昨日の乗りで耳に息を吹きかける。

「彼女を優しくしないからだよ～だ。次は噛むぞ～」

「やってみろ」

ちょんと名鈴の口元を触ると凍り付く。

「もがもがもが！」

約　（え、口が凍ってる！　紫苑、ＩＳ使ったでしょ！？）

「凍傷にはならないからそのままでいろ。あと、俺はヨリを戻したつもりはないぞ？」

「もがもがもが、もがー！」

約　（この、そういう問題じゃない！　そして、昨日ヨリ戻したでしょうが！）

「じゃあ、箒。学園でな」

「あ、ああ」

俺は名鈴を抱きつかせたまま、自分たちのバスへ戻る。

「嵐が去った……」

ぽつりと箒が言葉をこぼして箒も自分のバスへと戻る

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「もがもがもが、もがー！」

約　（早く溶かしなさいよ！）

もがもが言いながら俺を叩く。

席がまた隣になってしまった。

「わかったよ、うるさいな」

ちょんと名鈴の口元の氷に触れると氷は粒子となって消える。

「ひどいな～、彼女にこんなことをするなんて～。」

「お前がすぐに俺の耳に息を吹きかけるからだろう？」

「だって、紫苑の吐息がかわいいんだもん。」

「かわいい言うな！」

そっぽ向く俺にぴったり身を寄せる名鈴。

「ねぇねぇ、噛んでいい？」

しかも、頬をスリスリとしてくる

「やめろ、暑苦しい。それに人の目があるだろうが！」

「いいじゃん」

「いいじゃん、じゃない！離れろ」

「なに、あんたらヨリ戻したの？」

バスに入ってきた鈴が言う。

「うん、昨日ね」

「ふん、無理やり戻されたんだよ」

「無理やりじゃないでしょー。」

「あれが無理やりじゃあなかったらなんて言うんだよバカ名鈴」

「バカとはなによバカとは！」

「うるさい、暑苦しい、俺に触れるな」

名鈴顔を手で押さえて無理やり引き剥がす。

「まあ、なにより、おめでとう名鈴」

「ありがとうね、鈴ちゃん」

「ねえ、織斑紫苑くんっているかしら……あ、今は凰　紫苑だっけ？」

「あ、はい。俺ですけど」

一番前でイチャイチャ（不覚だがイチャイチャだ）をしていた俺は呼ばれたまま、素直に返事をする。

その女性は、多分二十歳くらい。千冬さんと同じくらいだろう、それにしても、鮮やかな金髪が夏の日差しで輝いて眩しい。

格好はというと格好いいブルーのサマースーツを着ている。といっても千冬さんみたいなビジネススーツではなく、おしゃれ全開のカジュアルスーツ。開いた胸元からは大人の女性特有の整った膨らみがわずかに覗いている。

その胸の谷間に持っていたサングラスを預けると、腰を折って俺を見つめてきた。

「君がそうなんだ。しかも彼女持ちか。　へぇ」

女性はそう言うと、俺と隣の名鈴を興味深そうに眺める。品定めをしているというわけではなくて、どうも純粋に好奇心で観察しているといった感じだ。

俺は名鈴の前に手をだして庇う感じで女性に訊く。

「あなたは、誰ですか？」

「あ、ごめんなさい。私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え――」

予想外の言葉に困惑していると、いきなり頬に唇が触れた。

「ちゅっ……。　これはお礼。ありがとう、蒼いナイトさん」

「えーと……？」

「じゃあ、またね。バーイ　エドワードもバーイ　」

「は、はぁ……」

ひらひらと手を振ってバスから降りていったナターシャさん。

「……カプリ」

「ひゃん！　な、な、な、なにするんだよ、名鈴！」

「紫苑が悪い……ペロリ」

「や、やめ、ろ……」

ストンと席に座り込む俺

「クス、相変わらず耳弱いわね紫苑は」

「う、うっさい……はぁっ、あっ、名鈴、いい加減、やめろ！」

「いや、さっきの鬱憤を晴らすまでは……ふうっ、カプリ」

「く、はっ……や、やめて……ら、らめ！！」

バンッ！

「きゃっ！？」

名鈴を突き飛ばして立ち上がる俺。

「はぁ、はぁ、ご、ごめん。名鈴」

「いたた、ひどいな紫苑は」

「お、お前が悪い」

「確かに今のは名鈴が悪いわね」

鈴がうんうんと頷く

「う……」

「そんなことはいいから、ほら、立てよ」

「うん、ありがとう紫苑」

「俺、少し外の空気吸ってくる」

俺は名鈴の横をするりと抜けてバスを降りる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はぁ……」

自販機のに背中を預けてため息を付く。

「はぁ～あ」

そしてペットボトルのお茶を飲む

「どうしたの？　紫苑くん？」

「ナターシャさん、いえ、なんでもないです。」

「そう、でもあまりため息は良くないわよ、幸せが逃げてしまうからね」

「ご忠告どうも、では失礼します」

俺はナターシャさんに一礼してバスに戻った。

ウェルカム・イン・ザ・サマー！（前書き）

今回は後書き書きません

ウェルカム・イン・ザ・サマー！

八月。クソ暑いったらありゃしない。昔から、この国の夏は嫌いだ。
大ッ嫌い。
そもそも、私はこの国の人間じゃない。最初は両親の都合、次は祖国の都合でここにいる。

凰　鈴音（ファン・リンイン）。それがあたしの名前。
ＩＳ『甲龍』（シェンロン）の専属操縦者にして国家代表候補生。
現在はＩＳ学園に通う一年生。

「あっつぅ……なんで紫苑は平気なのよ……」

「それは、こっちでの暮らしが鈴姉より長いからかな？」

「っ！　紫苑、いつの間に！」

「さっきから隣にいだけど？　まあ、一夏のことで頭がいっぱいか」

うんうんと頷いているのはあたしの双子の弟

凰　紫苑（ファン・シオン）。それがこいつの名前。

ＩＳ『青龍』の専属操縦者にして国家代表候補生（非公認）。
世界初のＩＳを動かせる男子の二人目
現在はＩＳ学園に通う一年生。

「うるさい、あんたはさっさと国に帰れ！」

「いやだ、鈴姉と離れたくない」

そして、こいつはかなりのシスコンであたしにべったりなの、でもそこがかわいい。

「暑苦しいからくっつかないで！」

「わかってるよ」

「ならなぜくっつこうとした」

「気のせいだ――」

「し～お～ん～」

「鬱陶しいやつが来たな」

「彼女なんだから優しくしなさいよ」

紫苑には彼女がいる。

「暑苦しいから俺に触れるな」

「いいじゃん、スキンシップだよ。　それとも耳に息を吹きかけるぞ」

「殴るぞ」

彼女の名前は、李　名鈴（リ・メイリン）。

韓国と中国のハーフであたしたちの幼なじみでもある。
紫苑とは一度別れて臨海学校の時にヨリを戻したらしい。
らしいとは、紫苑が戻してないとかぶつぶつ言ってるからである。
それでも、いつもベタベタくっついていて見てるこっちが暑苦しくなる。

「きゃ、怖い」

「凍らせるぞ！」

「少しは涼しくなるわね」

「ちょ、鈴まで！」

「こっちはあんたらがいつもベタベタして暑苦しいのよ！　ただでさえ暑いってのに！」

「怒るなって、俺だって好きでベタベタしてるんじゃない、名鈴がしてくるんだから仕方ないだろ……ほら、冷たいぞ」

紫苑が左手をあたしの前にだす。その手の中には氷の華が乗っていた。

「ありがとう。」

「こんなの朝飯前だよ。」

紫苑のＩＳ『青龍』のワンオフ・アビリティーは氷雪系（ひょうせつけい）、なにもないところから氷を作り出しことができる。

「私にも作って！」

「はいはい……ほらよ」

そしてもう一つ作り名鈴に渡す。

「ありがとう！　紫苑！」

「くっつくつな！」

「いっそのこと凍らせちゃえば？」

「ははは、そうしたいがこんなところに氷漬けにされた人がいたら千冬さんに怒られるよ」

ポリポリと頭をかじる紫苑、その顔は左目を隠すように眼帯がついている。

臨海学校の時にやってしまったものだ。

「左目、活性化再生治療受けてないの？」

「うん、なんかめんどくさくて、それにこの眼帯気に入ってるしね」

「めんどくさいで終わらせないの！」

「そうよ！」

「なんだよ、急に怒ってよ～。」

ぷくっと紫苑が頬を膨らませる。

それをあたしと名鈴でつぶす。
ぷくーと頬が小さくなる。

「気にしなくても、受けに行くから気にしないでよ。あと、見えてないわけじゃないから大丈夫だよ」

「そう」

「お、鈴に紫苑、名鈴じゃねーか。三人で集まって、どうした？」
「あ～、一夏なんでもないよ。じゃあ、名鈴行くか」

「ええ、邪魔しちゃダメね」

ふたりは気を使って一夏とふたりっきりにしてくれるみたいだが、まだ心の準備ができていないのでつい紫苑の服を掴んでとめる。

「？」

「……ちょいと顔貸して」

一夏に聞こえないようにウイッキングで話す。

パチパチ
『一緒にいて』

パチパチパチ？
『なんで？』

パチ、パチパチ

『いいから！　お願い』

パチパチパチ

『せっかくのふたりっきりのチャンスなのにいいのか？』

パチパチパチ

『まだ心の準備が……』

パチパチパチパチ

『俺が行くともれなく名鈴がついてくるぞ？』

パチパチ

『いいから』パチパチ

『わかったよ』

「……？」

ぐ……『何してんだ、コイツらは』って顔してるわね……。

あー、ごほんごほん！

「きょ、今日は暑いわね」

「……ぷ」

紫苑の含み笑いをにらみとばす。

「ん？　そうか？　涼しい方だぞ」

「ま、まあそうだな」

「あたしは暑いのよ！　この国の夏は昔から！」

「あー、そういやお前昔から暑いのダメだっけ」

あ、う。

昔のことをちゃんと覚えていてくれたのが、ちょっと嬉しい。

――ああ、ダメダメ！　こいつは、肝心な約束忘れるようなやつなんだから！

「ま、いいや。それなら俺の部屋でも行くか？　紫苑も名鈴も来るか？　エアコンつけるぞ」

「紫苑が行くなら」

「たまには行くかな」

「ま、まあ、そうね。じゃああんたの部屋に行ってあげる。飲み物出しなさいよ？」

「へいへい。麦茶でいいよな」

「冷たけりゃなんでもいいわよ」

そう言って、あたしは一夏と並んで歩くその後ろに紫苑と名鈴がついて来る

「鈴？」

「なっ、なによ！」

「なによって、部屋についたぞ。入れよ」

「わ、わかってるわよ、バカ……」

「……ツンデレ」

ぼそっと後ろから声が聞こえたが意味がわからないので無視して一夏のあとについて部屋に入る。別に何回も入ったことがある場所なのに、どうしてだかドキドキしてしまった。

（あー……うー……なによ、もう……）

「あ、アルバムがあるじゃん、一夏見ていいか？」

「おう、いいぞ。ちょうど整理も終わってるし」

一夏に許可をえて紫苑はアルバムを開く

「んげっ！」

開いてすぐに紫苑は変な声をだす。

何事なの！

「おい、一夏！　なんでこんなものまでファイリングしてんだよ！」

「あ？　どれ？　……ほれ、鈴麦茶」

「あ、ありがとう」

「これだよ、これ！」

アルバムの写真を指す紫苑。
それを全員で覗く

「あ、これか、千冬姉が入れとけといったから入れといた。」

それは、紫苑が浴衣（女物の）を着ている写真だった。
隣には箒に一夏、千冬さんが写っている。

「かわいいじゃない」

「かわいい言うな」

昔から女装させられてたんだ。

「俺の黒歴史が……でもまあ、この頃はまだ俺織斑だったな～」

「だな～」

2人で黄昏てるし

「確かこの頃紫苑、告られたよな」

「え！　誰に」

「そうだっけ？　てか、お前もそうだろ」

「え、誰よ！」

とっさに反応してしまったわ。

まあ、こいつらはフラグ立てるの得意だからしかたないわね。

「そうだよ。確か吉田キサラって女子だよ」

「う……。あ、あの子かいつも男子と混じってサッカーやってた女子か！」

「そうそうでそいつとはいえどうなったんだ？」

「う～、付き合わなかった気がする。　で、お前の方はどうなったんだよ。　結構な噂だったぞ」

「あれか～思い出したくないな……」

「箒にボコボコにされたもんな」

「うん……」

「あ、こっちが小学校一年生時か」

「ああ、そうだぞ」

「やっぱり、少しはずいな。」

そう言って紫苑はアルバムを次のページにめくってしまう。

「えーと、こっちは二年のときか。たしか遠足でブドウ狩りに行ったんだよ。紫苑、覚えてるか、この写真」

「俺のもあるのかよ……げ、なんだこれは、また俺の黒歴史が」

その紫苑が言った写真を覗くと

「うわ、紫苑モテモテね」

その写真には紫苑と一夏紫苑を囲むように女の子がたくさんいる。

パキッ！

「「「え？」」」

「し～お～ん～」

音のした方を見ると名鈴がプラッチックのコップを握力だけで砕いていた。

「えーと、名鈴？　これは小学校のときの話だぞ！？　なぜ怒ってる！」

紫苑の慌て振りからでもわかる。

名鈴はキレている

紫苑、ご愁傷様

「死ね！」

「やめろ！！」

ボフ！

「う……がはっ」

名鈴の聖賢付をが紫苑の腹部にヒットして、紫苑はうずくまる

「ふん、いい気味よ」

「お前……加減をしろよ……てか、お前わざと俺の死角から殴ったろ！」

「さーね」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「くそ、まだ痛いぞ……」

「大丈夫か紫苑。」

相当痛かったらしい。まだ腹部をさすっている。てか、紫苑って名鈴には弱いわよね。
尻に引かれてるのかしら？

「一夏」

「ん？」

「あんたさぁ、夏休みなのにどこも行かないわけ？」

「う～ん……そう言われるとどっかに行きたくなるなぁ」

――よしよし！ここまでは予想通り！

「そろそろ、俺は部屋に戻るよ」

「おう、じゃあ、またな」

そんなことをいい部屋を出るとき紫苑をウイッキングで話しかけた。

『押し倒せ！』

「なっ、なっ！」

『冗談だよ』

クスクス笑いながら紫苑と名鈴は部屋を出て行った。

「ねえ、一夏ここにいかない？」

あたしは、ポケットから二枚の紙切れを掴んで一夏に見せつける。

「ん」

「これは？」

あたしが取り出したチケットを、しげしげと眺める一夏。……食いつきは上々ね。

「なにアンタ知らないの？　今月できたばっかのウォーターワールドよ。言っとくけど前売り券は今月分が完売。当日券だって開場二時間前に並ばないと買えないのよ？」

「そうか」

ムカ。感動のないやつね。　これを手に入れるのにあたしがどれだけ苦労をしたと――

「で、いつ行くんだ？」

「あ、行くの？」

「？　そのために持って来たんだろうが」

「そ、そうだけど……」

うわあああ、やった！　どうやって誘うか一番悩んだのに、あっさりクリアーした！

――っと、落ち着いて落ち着いて。勝利の目前ほど再度自らを見直すべしって何回も訓練で習ったしね。

「ま。一夏を誘うなんてあたしか紫苑くらいしかいないもんね。感謝しなさいよ」

そう言ってぺちぺちとチケットで一夏のチケット額を叩く。

（とかなんとか言いながら、あたしの心臓ってヤバいくらいにドキドキしてる……）

「で、いくらだよ？」

「へ？」

「だから、買うから。いくらだよ」

「今回はタダでいいわよ……」

「……どういう風の吹き回しだ？　熱でもあるんじゃねえのか？」

そしてあたしの額に一夏の手が触れる。

（え、ちょ、ちょっと！　い、一夏が、あたしに触れてる！）

「熱はないな」

「あ、あったり前でしょ！　で、いらないわけ？　なら紫苑にでもあげるわよ」

「貰うよ、で日時は？」

「明日の土曜日」

「そりゃまた急だな」

一夏にしてはもっともなことを言う。

（仕方ないでしょうがっ、友達のキャンセル品ひきとったんだから！）

「まあ、俺の方は大丈夫だな。鈴は？」

「あ、あたしも大丈夫だけど！？」

ああ、またやっちゃった……。

とっさに出した声は明らかに動揺していて、あたしの内心を見事に表している。

「どこで待ち合わせる？　学園内だと制服しかダメだし、やっぱ外か？」

「う、うん！　そうね！　せっかくだしゲート前で待ち合わせがいいわね！」

――やった！　すごく、すごくデートっぽい！

（ていうかデートよね！）

あたしは心の中でグッと右手を握りしめる。

ここ最近ライバルの増加に出遅れることが多かったけど、今度こそはあたしがリードしたわね！

「じゃあ待ち合わせは何時にする？　午前中だよな、もちろん」

「そうね、じゃあ十時に」

「おう」

やった！　やったあ！

あたしは心の中で何度もガッツポーズを繰り返して、麦茶を一気に飲み干す。　タンッとテーブルにコップを置いて、立ち上がる。――フ、決まった。

「何変な顔してんだ？」

「し、失礼ね！　とにかくっ、明日遅れるんじゃないわよ！」

ばたん！　と後ろでドアが閉まる音を聞いて、あたしは廊下に出る。そして出るなり、今度は心の中じゃなく実際にガッツポーズをした。

（やったあああっ！　やった、やったあ！）

さすがに声は出せなかったけど、もうとにかく嬉しさのあまり動かずにはいられない状態だった。

（早速部屋に戻って準備をしないとね！）

半ばスキップに近い足取りで、あたしは自分の部屋へと戻る。
夏の暑さは、気がつけばどうでもよくなっていた。
いつも長く感じる自室までの距離も、今日に限っては気にならない。
あたしの足には今翼が生えているに違いないわね。マジで。
途中、何人かの生徒とすれ違った気がするけど――うん、たぶん気のせいね。

「ただいまあ！」

バンッ！　と自室のドアを吹き飛ばしかねない勢いで開ける。

「あら、まだ紫苑帰ってきてないのかぁ」

そのまま自分のベッドへとダイブ。そして布団をぎゅうう〜っと抱きしめる。

（あぁ〜、早く明日にならないかしら！？）

おっと、こうしてはいられない。　早速、明日の準備をしよう。

（水着は大丈夫、服も新しく買ったやつを出して、それからそれから――）

――それから、下着、とか。

（……）

いや、うん、ほら、夏だし。　高気圧が人の心を左右するらしいし。な、なにかあったら、ねぇ？　そう、これは念のための準備。準備なのよ！　備えあれば憂いなしって昔のヤツはよく言ったもんね！　えらい！　考えたヤツ、えらい！

鈴は部屋でずっと、そんなことを考えていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

時間は少しさかのぼり。
紫苑と名鈴が一夏の部屋をでた後

「ねえ、紫苑」

「なに？」

「私の部屋に来ない？」

「なんでだよ」

廊下を名鈴の部屋の方に歩きながら会話をする。別に俺の部屋もこっちなだけだ。

「イチャイチャしたいから」

「……いつも、してんじゃん……」

名鈴の一方的だがな

「やあ、紫苑くん。インタビューしたいんだけといいかな？」

おなじみの新聞部副部長の黛薫子先輩だ

「えーと、なんのインタビューですか？」

「名鈴ちゃんとのことかな？」

なぜ疑問系？

「報酬はこれよ」

黛先輩がポケットから三枚の紙切れを取り出して俺と名鈴に見せる。

「これ今月できたばっかりのウォーターワールドの前売り券だ」

「そうなの明日だけど、あるんだけど、どう？　インタビュー受けてくれない？」

「物で吊るとは……。まあ、いいですよ、差し障りがない程度なら」

「やった！　よーし、早速、なぜエイミーちゃんじゃなくて名鈴ちゃんを選んだのか教えて」

そう言って、ボイスレコーダーを向けてくる

「えーと……、好きだから……でしょうか？」

「じゃあ、次の質問、別れたのに、またヨリを戻したのはなぜ？」

「脅されたから」

「ちょ、こら。嘘を言うな！」

「半分嘘で半分本当だ」

「じゃあ、その半分は？」

「好きだからってこともありますが……名鈴が悲しい顔をするのが嫌だったので」

チラリと名鈴を見て話す。

それにしても顔が熱い、絶対に真っ赤だな俺

「質問は終わりね、最後に写真を撮りたいからもう少しくっついて！」

「暑いからいやなんだけと……仕方ないか」

俺は名鈴を引き寄せて腰を抱く。

「やっぱり腕を絡めた方が恋人ぽいからそうして」

「俺の一番嫌いなくっつき方だ」

「これなら、いいでしょ紫苑？」

そう言って名鈴俺の制服の裾を掴む。

「ああ、それが一番好きなくっつき方だよ。」

「じゃあ撮るね」

パシャ

「はい、終了。　お疲れ様、これどうぞ」

黛先輩あのチケット三枚を俺に渡す。

「じゃあ、またね」

そして、走り去っていく元気な人だな……。

「チケット三枚も要らないんだが……ほれ、名鈴一枚」

「ありがとう！　ふふ、ねえ、部屋行こ」

ぐいぐいと腕を引っ張る

「わかったよ……行くか」

「うん、大丈夫、今ルームメイトいないから」

「なにが大丈夫なんだよ」

名鈴の横に並んで部屋に向かう。名鈴は腕を絡める。

（俺は一体なにをされるんだ……）

「イチャイチャしてもいいし、そ、その――」

「それ以上は言うなよ」

「むぅー」

「むぅー、じゃねえよ」

「じゃあ、え～」

「言葉をかえても、ダメだ」

「そんなことよりついたよ」

「ああ、わかってる」

名鈴に続いて俺は部屋に入る。

「そこのベッドに掛けて」

「あ、ああ」

（う……名鈴の匂いがする……）

「お茶飲む？」

ひょっこりと顔を出す名鈴にドキッとしながらも冷静に答える

「ちょうだい」

「なにがいい？」

「烏龍茶」

「まためんどくさいのを選んだわね」

「今から煎れるのかよ」

「うん、番茶しかないからね」

「なら番茶でいいよ」

「そう、なら今煎れるね。」

そして顔を引っ込める。

「はうっ」

ばたりとベッドに倒れる

（なぜ、こんなに緊張してるんだ？　確かに名鈴の部屋に入るのははじめてだけど、緊張するのはおかし――）

カプリ

「ひゃん！」

また変な声が！

「め、め、名鈴！　なにするんだよ！？」

「呼んでも返事しないからでしょ」

「ご、ごめん」

体を起こして誤る。

「もしかして、紫苑私の部屋に入って緊張してる？」

「そ、そんなわけ、あ、あるわけないだろ」

「クス、嘘ね。　目が泳いでるし、慌ててるし」

はい、図星ですよ。でも気づかれないようにします。

「で、呼んだのはなに」

「話を逸らしたわね。まあ、いいわ。はい、お茶」

「どうも」

差し出したお茶を受け取り一言お礼を言う。

「それにしても、紫苑の声かわいいね」

「かわいい言うな」

ずずずずっとお茶を啜る俺

「もう、その飲み方じじくさいからやめてよ」

「別にいいだろ」

「老けるわよ」

「老けたらその時だよ」

「むぅー」

膨れた名鈴のほっぺたを突っつく。

「ぷしゅ～」

「擬音語はいらないから」

そしてずずずずっとお茶を啜る。

「ふふふふふっ」

「キモいやめろ」

「キモいとはなによ！？」

「名鈴、おかわり」

コップを突き出す。

「え、うん……じゃなくて！」

「チッ」

「こうなったら！　えぃっ！」

「うわっ！」

ばたん
名鈴に押し倒される。
（なにをされるんだ！）
「私をキモいなんて言ったから罰よ」
俺の上に横になって――カプリ
「あっ、なにすんだよっ！」
「罰って言ったでしょう――ふうっ」
「ひゃ！　ダメ！」
「もっと聴かせてよ。かわいい声を――ペロリ」
「うっ……あはぁっ……」
（こ、このままだと名鈴のペースにのまれる！）
「この、変態女が！」
「強がっていられるのは今だけよ。この態勢なら私を突き飛ばす事は出来ないだろうしね――カプリカプリ」
「あっ、ああっ、やめろ！」

「かわいい声ね」

（こいつ、キャラが変わりすぎだろ！　こうなったら）

「――カプリ」

「や、やめ……あっ」

最後の手段で場所を入れ替えるつもりが名鈴の攻撃に撃沈する。

「なにしようか知らないけど無理よ。紫苑は耳を噛まれると力が入らなくなるんだし」

「そ、そうだよ……悪いか！」

「そんなこと言ってないわよ。しかも、敏感だから面白い」

クスと笑う。

「俺で遊ぶな！」

「私キモいの？」

「冗談に決まってんだろ！　いいから降りろ暑いから！」

「じゃあ、キスして」

「なんでだよ！」

「女の子にキモいと言ってなにもいわ――」

言わせておいたらいつまでも続く愚痴を遮るために名鈴にキスしてやる。

「は、早く降りろ！」

「う、うん」

名鈴は素直に俺の上から降りる。

「……」

「……」

なんだよ、この沈黙は……。

「……」

「……」

はじめて、恋人の部屋に来た空気だぞ。

まあ、実際はじめて部屋に来たんだが……。国にいるときはしょっちゅういってたから変わらないはずなんだけど……。

「ね、ねえ、紫苑？」

「な、なんだよ」

「やっぱり、なんでもない」

「なんなんだよ」

「ただ呼んだだけ～」

クスクス笑う名鈴が凄く可愛かった。
絶対に本人には言わないけど。

「そろそろ、帰るわ」

「ダメ！」

立ち上がろうと腰を浮かすが名鈴が袖を引っ張ってまたベッドに戻る。

「なんでだよ」

「もっと、一緒にイチャイチャしよ」

「冗談はその趣味だけにしてくれよ」

ベッドの下からメイド服が顔を出している。

「え、これは紫苑のよ」

「……やっぱ帰る」

どうしてそんなに俺に女装させたがるんだ。

「なんでよ～」

抱きついてきた名鈴をずるずると音をさせながら引きずり部屋の出口まで行く

「離せよ名鈴」

「いやいや」

「……」

「なんで、無言なの？」

「なんとなく……よっと」

「きゃ！？　な、なによ急に！」

名鈴を抱きかかえてベッドで降ろす。

「ベッドって……も、もしかして……ま、待ってこ、心の準備が」

「くふふ、心の準備って？」

ずいっと顔を近づける。

「ま、待って！」

「だからなにを？」

名鈴は顔を真っ赤にしてオドオドしている。

「な、なにをって……私にい、言わせるの！？」

こいつはなにを考えてんだよ。

だけど、もう少しいじめよっと。

面白いし、楽しいし、それに可愛いし。

「言ってみなよ」

「この、サディストが！！」

「元々そうだけど？　ただ、お前が俺をいじめてるから見えないだけだよ」

そして、また顔を近づける、鼻先が触れる距離だ

「ち、近い！」

「くふ、近いってなんで？」

「な、なんでって！？　近いからよ！？」

「クス、今のお前可愛いぞ」
「か、かわ、可愛い！？」

「くふ、可愛いよ。下着も可愛いの着けてるのか？」
そう言って俺は名鈴の胸元のリボンを解く。
「え、あ、ちょっと！？」
「なんで？」
「な、なんでって、私たちには、ま、まだ！！　は、早いわ！」
「そうか？　でもお前期待してるんだろ？」

そして、名鈴の制服のボタンを一つずつ外す。
「き、期待なんか……し、して……ないもん」

「……ぷっ。」

ボタンを四つくらい外したところで、俺は我慢の限界がきて吹き出す。
「え？」

「なっ、なんでも……ない……っやっぱり無理だっはあはあはあはあっ」

笑いながら名鈴の上から退く。

「え、ちょっと！　なによ!?」

「はあはあはあはあっ。ダメ、腹痛い！」

腹を抱えて笑う俺

「な、なんなのよ！」

「い、いや、まさか。本気にするとわ」

「本気って、まさか！　あれは冗談だったわけ！」

真っ赤にして飛び起きる。

「なんだよ、やっぱり期待してたんじゃねえかよ」

「う、うるさい！　それは、あそこまで行けば期待するでしょうが！」

「怒るなよ。それより……ボタン、留めてくれ」

名鈴が目を逸らす。

自分でやったんだけど、目のやり場が困る。

「じ、自分でやったんでしょう！」

そう言いながらボタンを外していく……えーと、名鈴？

「なにやってんだ。お前！」

「え？　なにってシャワーを浴びるから服を脱いでる」

「ここで脱ぐな！　脱衣場で脱げ！」

「あ、ごめんつい癖で……一緒に入る？」

耳元でそう言う名鈴

「なら、入るか」

「え！？　じ、冗談よ！」

「知ってるよ。いいから、浴びてこい」

「はいはい。私が出るまで部屋にいてよ！」

「それは、わからないな」

そう返すがもう名鈴は脱衣場の中だ。

「これは待ってなくてはいけないのか……はぁ」

ばたりと横になる。

「あいつは昔から変わらないな……。」

少し時間があいて寝息が聞こえた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「くぁー、寝てしまった。」

体を起こそうとしたが起き上がれない。

「うお！」

俺の背中に抱きつくように名鈴が寝ていた。

「おい、名鈴。起きろ」

「う～」

ぎゅっー。

抱きつき締め付ける。

（む、胸が、あ、当たってる！）

「名鈴、起きろ！」

「う～、紫苑？」

「そうだよ、起きろ。」

「わぅ～、温かい。紫苑の温もりがする」

「いいから起きてくれ！」

（俺はそれどころではないんだよ！　む、胸が！）

そんな事はお構いなしに名鈴はまたぎゅっと抱きつく。

「紫苑は、私の物。誰にも渡さない。鈴にもエイミーにも織斑先生にも」

「俺は誰の物でもない！」

てか、なぜ千冬さんが出てくるんだよ。

「違う、私の物よ」

「いいから、離れろ」

「いや」

（う～ん、こういう時はなんて言ったら良いのだろうか――）

「紫苑は、私の事嫌い？」

考え事をしているときに重ねるように名鈴が言葉を重ねる。

「嫌いだったら、部屋になんか来るかよ。き、キスだってしねえよ」

そして体ごと名鈴の方に向ける。

俺より小さい名鈴は俺の胸の中にすっぽりと入ってしまう。

そして、名鈴は俺を上目使いで見る。

（こんな時に言う言葉はこれしかねえだろ）

「名鈴」

「なに？」

「好きだよ、お前は俺の物だ。誰にも渡さない、絶対に」

「にゃは、嬉しいな～。紫苑が初めて好きって言ってくれた」

可愛い笑顔についぎゅっと抱きしめてしまった。

それで、俺は確信した。

俺は本当に名鈴が好きなんだと。

「苦しいよ～。紫苑」

「好きだ。名鈴！」

「わ、わかったから。離して苦しい。」

「ご、ごめん」

ばっと離れて誤る。

「謝らなくてもいいわよ」

「そ、そうか」

「でも、嬉しいな～。」

「なんで？」

「紫苑が好きって言ってくれたし。ぎゅっと抱きしめてくれたし、昔は言ってもくれなかったし、してもくれなかったもんね。してくれたのは、デートと手を繋ぐぐらいだった。」

名鈴はパタパタと手で扇ぎながら話す。

「どうしたらいいかわからなかったし、自分の気持ちがわからなかったからな……これ使えよ」

袖口から扇子をだして名鈴に渡す。

「どこから……てか、その袖口は四次元ポケットなのいや、四次元袖口か」

「秘密」

「あ、この扇子は……」

扇子を開いてなにかに気づく名鈴。

「そうだよ。名鈴からのプレゼントのやつだよ。　ずっと使ってるよ」

名鈴が俺の誕生日にプレゼントしたものだ。
ちなみに俺の誕生日は十月の十五日では名鈴が十一月の十五日だ。

「ありがとう。嬉しいよ」

「そうかよ」

「うん！　大体の人は別れたら。恋人から貰った物は捨てるんだけど。紫苑は捨ててなかったんだね！」

「まあな」

「私も捨ててないんだよ」

机の上の小物入れから一つのキーホルダーを取り出す。
それはハートが割れているやつでもう一つが重なって一つになるものだ。

「これ、覚えてる？」

「おま、それは。はずいからしまってくれよ！」

俺が名鈴の誕生日にお揃いで買ったキーホルダーだ。
今思えばものすごく恥ずかしい物を買ったと後悔している。

「そんなこと言いながら携帯に着けてるじゃん」

「なんでそれを知ってんだよ！！」

「鈴からの情報よ」

やっぱり鈴からか……。

「私もまた付けよっと」

そう言って携帯を取り出して付け始める
その携帯は普通の女の子のように、キーホルダーや、ストラップが付いていなかった。

「あれ？　入らない」

携帯の穴に紐が通らないみたいだ。
みるに見かねた俺は名鈴から携帯とキーホルダーを奪い合い、付けて返してやる。

「ほらよ」

「ありがとう、紫苑」

「お前は昔っから不器用だよな。こんなのも昔っから通せなかった

し」

「う、うるさいなー」

真っ赤になってそっぽむく名鈴を見ながら笑みがこぼれる。

「さて、帰るよ」

「う、うん。」

「じゃあ、明日の１０時にウォーターワールドのゲート前でな」

「わかった」

そして、ばたんとドアを閉める

「さて、もう一枚はエイミーに出もやるか」

そう決めてエイミーの部屋に向かって歩き出すがすぐに止まる。

「あいつ帰って来てるのか？」

確か国に帰るとか言ってたな。

「まあ、行ってみればわかるか」

そして、また歩き出す。

数分でエイミーの部屋につく

コンコンとノックして待つ。

「はーい、どちら様？」

この声はエイミーだ。

「俺だ。紫苑だ」

「え！？　紫苑！　少し待ってて！」

部屋からガサガサと音が聞こえる。

待たされること五分ちょっと。

「どうぞ」

がちゃとドアを開けてエイミーが顔をだす。

「お邪魔します」

そう言って入る。

「適当に座ってて、今お茶出すから」

「ああ」

エイミーの私物らしい物が置かれているベットに掛ける。

（ううん、女の子特有の匂いがする）

ガシャーン。

「あーやっちゃった」

「どうした？　エイミー？」

「食器割っちゃった」

そしてお湯が沸きやかんを止める前に転ぶ

「いたた。」

起き上がり火を止めながらぶつけた鼻を撫でる。

「エイミー、俺がやるから。座ってろ」

「え、でも紫苑はお客だし」

「そんなことより、やかんのお湯をこぼして火傷される方が困る」

「う……。わかった。お願います。」

（エイミーってドジだったのか、なんか新しい一面が見れて嬉しいな）

そんなことを考えながら割れた食器を片付けてお茶を淹れる

「ほら、紅茶」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

俺はエイミーの隣に座る。

「今日はなんなの？」

「これを渡そうと思ってね」

ポケットからあのチケットをだす。

「これは、先月開店した。ウォーターワールドの前売り券よね」

「うん、三枚の内の一枚だよ」

「どこで手に入れたの？」

「買収されて貰った。」

「買収？」

「まあ、そんなことはどうでもいいだろ。ほら、やるよ。」

「え、いいの？」

「ああ、そのために持ってきたんだし。ほら」

ぐいっとエイミーにチケットを渡す。

「ありがとう」

エイミーは受け取り眺めている。

「どうした？」

「紫苑って名鈴とつき合ってるのよね？　なのに私に渡していいの？」

（う～、どう言うかな～）

「名鈴にも渡してある」

「……そう……やっぱりね」

「う？」

最後の方が聞こえなかった

「なんでもないわ。で、いつ行くの？」

「明日の午前中１０時くらいにゲート前だ」

「わかったわ」

「じゃあ、明日な」

「うん」

ばたんと後ろで閉めて自分の部屋に向かって歩き出す。

「カフェにでも行くかな……」

そして引き返してカフェへ向かった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

場所は変わって学園の食堂に隣接しているカフェ。

冷暖房完備、年中無休のここでは駅前のコーヒーショップなんか目じゃないくらいの本格的なドリンク、それに四季折々のスイーツが楽しめるとあって、夏休み中であっても学園生の姿は絶えない。

「ね、ね、あれ、今度は一年の凰君じゃない？」

「ホントだ！　初めて生で見た！」

「やーん、可愛い～。でも、彼女いるんだよね～」

「そうなんだよね～」

「誰だけ、彼女の名前」

「確か、韓国代表候補生の李　名鈴って子だった気がするわ」

（はぁ～。なんか、慣れてきたな……。）

そんな事を考えながらアイスコーヒーをかき回す。

「はうっ～。」

（どっするかな……。）

一枚の紙を見ながらため息に似た息を吐く。

紙にはこう書いてある。

『凰　紫苑さん。　あなたを特別合宿に参加を求めます。　期間は約二週間。開始日は追って連絡します。』

先ほど、千冬さんに渡されて行けと言われた。

「今、考えるのはやめよ。ケーキがまずくなるし」

アイスコーヒーと一緒に頼んだイチゴショートケーキを頬張る。

「う～、幸せだ～」

◆◆◆

（あれで来ればよかったかな……？）

あれとは中国の民族衣装のことだ。

「あれは目立つか」

……。

……。

……。

「暇だ……。」

そう呟いたとき一人目の待ち人が来る。

「は、早いね紫苑」

「エイミーもな」

「なんか、元気ないね……？　どうしだの、やっぱり私がいるといや？」

「そんな事ねえよ。少し、考え事をな」

「そうなの？　もし力になれるんだったらいつでも相談してね」

「ああ、ありがとう。エイミーは優しいな」

ぽんぽんと頭を撫でる。
周囲の男子組がリア充死ねよって目で睨まれている。

「と、当然でしょ！？」

「くふ、そうだな」

真っ赤にして顔を逸らしたエイミーを見ながら少し含み笑いをする。

「なにやってるのよ！？」

「やっときたよ」

「名鈴、彼氏を待たせるのはいけないわね」

エイミーから十分ほど遅れて名鈴がやってきた。

「あ、うん。ごめん……じゃない！　なんでエイミーがいるのよ！？」

「なんでって俺がチケットあげたがら」

「なんであげるのよ！」

「なんで怒ってんだよ！　てか、このチケットは俺のだろが俺が誰にやろうと勝手だろが！」

ふ、決まった。

「……ぐっ……カプリ」

「あうっ……このアマ。言葉で返せないから行動に表すのかよ！？」

「非常にムカついたからよ！　このバカ紫苑」

「おい、待てよ！」

俺たちを置いて先にゲートをくぐってしまった。
そしてまた、男子組が両手に花崩壊。
などと呟いている。

「エイミー、行くぞ」

俺はエイミーの手をひき名鈴を追いかける。

（わ、紫苑が私の手を握ってる！）

エイミーの心の中はかなり慌てていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「はぁ～。お前は」

びしりと名鈴の額に指をはじく。

「ごめんなさい……。」

「反省してるならいい」

「はーい」

こいつ、調子いいな本当に、俺がどんだけ探したと思ってんだよ。
この人ごみの中、十分ちょっとで探せたのは奇跡だな

「2人とも泳いで来いよ。俺はここで待ってるから」

「ねえ、あれやろうよ！」

名鈴が指している方を見るとウォータースライダーがあった。

「いいわね。名鈴私もやりたいは。」

「ダメよ。紫苑は私の紫苑だし、あんたはひとりで滑りなさい。」

「俺は誰の物でもねぇよ」

「そうよ、紫苑はみんなの紫苑よ」

「いや、みんなの物でもない。俺は俺の――」

「「紫苑、うるさい！！」」

言葉を言い終わる前に遮られた。

「はぁ～。順番に滑ればいいだろ？」

「そうね。じゃあ私が先ね」

「なんでよ！」

「だって、紫苑の彼女だし」

「ジャンケンしろよ」

「なんでよ～」

「いいから」

目で圧力をかけられたら名鈴はしぶしぶエイミーとジャンケンをした。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「やったね。やっぱり私と紫苑は赤い糸で結ばれてるのね。」

「はいはい。そうだね」

けっきょくジャンケンで勝ったのは名鈴だった。名鈴の話を軽く流して。ウォータースライダーのスタート地点に行く。

「カップル様ですかなら彼氏さんの上に彼女さん座ってください」

「え？」

「いいから俺の足の上に座れ」

「うん」

「そしたら彼氏さん彼女さんを後ろから抱きしめてください」

俺は名鈴の後ろから抱きしめる。

「では、いってらっしゃい～」

係員のお姉さんが後ろから押してスタートする。

「うお、結構速いな」

「きゃぁぁぁぁ」

「くふ、こんなので恐がっちゃって」

「こ、恐くなんかない。だけどキスして」

「なんでだよ!?」

「いいから」

「断る。てか、ながいな」

ごつん

「いて、もっと大きく作れや!」

跳ねた時に頭がぶつかった。

「し、しお～ん」

いつの間にか体勢を変えていた名鈴は俺と向かい合わせに座っていた。

「おい、危ないから捕まってろよ！」

「う、うん」

名鈴は俺の首に腕を回して――カプリ

「ひゃ！　こんな時になにしやがる！」

「こんな時だからこそ。したくなるのよ……カプリ」

「もう、やめろ！　出口だ」

バシャーン

「ちょっと！名鈴なにしてるのよ！」

「なんってお姫様抱っこ」

「お前が仕組んだんだろうが！」

「てへ、バレた～。」

「次は私よね行くわよ」

エイミーに手を引かれたので名鈴を下ろして再びウォータースライ

ダーのスタート地点に行く。

「あら、さっきの彼氏さん。両手に花なの？」

うわ、すごい睨んでるよ

「まあ、とにかくとっとと滑ってね」

「はい」

名鈴と同じようにして滑る態勢をつくる。

「しっかり捕まってろよ」

「うん」

「いってらっしゃい」

さっきのように係員のお姉さんが後ろ押してスタート

「きゃぁぁぁぁ」

「怖くないだろこんなの」

「紫苑は女の子の気持ちがわからないのね。」

えーと、なんだが知らないけどごめんなさい。

ごつん

「いて、今度は違う場所で打ったぞ。もっと大きく作れや！」

「ちょ、紫苑どこさわってるのよ！」

「え？」

「いいから離れろ！」

バシ

「いって！」

チョップの拍子に俺たちは離れてしまった。

やば、危ない！

「エイミー離れるな」

「うるさい、変態！」

いや、さっきのは不可抗力だろ。

「たく、この！」

「きゃっ！　お、襲われる！」

「こんな所で襲わねえよ！　いいから捕まってろ、もうすぐ出口だ」

「うん」

ぎゅっと俺の腕を抱きつくエイミー

バシャーン

「長かった……。」

「だ、だね……。」

俺とエイミーがぼやいていると園内放送が響き渡った。

『では！　本日のメインイベント！　水上ペアタッグ障害物レースは午後1時より開催いたします！　参加希望の方は12時までにフロントへとお届け下さい！』

『優勝賞品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

特に、興味なんてなかった俺はあくびを噛み締めてベンチに座ると

「「紫苑！！」」

「は、はい！？」

急に呼ばれて起立気をつけをする。

「「でるわよ！！」」

「は？」

ガシッと紫苑の腕を掴む名鈴とエイミー。そのままフロントへ引きずられていく紫苑。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「さあ！　第1回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会出来のお姉さんがそう叫ぶと同時に大きくジャンプをする。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになった。そのせいなのか、はたまた単純にレースの開始を喜んでか、わぁぁぁっ……！　と、会場からは歓声（主に男性の）と拍手が入り乱れる。

レース参加者は全員女なのだから、観客のテンションもおおいに上がっているようだ。

なお、参加を希望した男はことごとく受付で『お前空気読めよ』という無言の笑みに退けられた。

女性優遇の社会であるが、それはそれ。やはり水上を走り回るのは女性がいいに決まっている。それは主催者であり当園オーナーである向島光一郎の指針――というか、趣味であった。

「さあ、皆さん！　参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！」

再度巻き起こる拍手の嵐に、レース参加者は手を振ったりお辞儀したりとそれぞれ応える。

「なんだ鈴とセシリアもいんのか」

反応がないペアをよく見ると鈴とセシリアだった。

ふたりとも念入りに準備運動をしながら、それぞれ体をほぐしていた。
一方的名鈴とエイミーは
「みんながんばるね～」
「やりますか」
名鈴テンション高。エイミーも気合い充分だな。
「くだらねえ」
そして俺はベンチに転がる。
「優勝賞品は南国の楽園・沖縄五泊六日の旅！みなさん、がんばってください！」
「沖縄なんだよな、てか南国だったらハワイだろ。どう考えたって」
もっともなことを言う紫苑だが主催者の向島光一郎の人間性がわかるところだ。

「では！　再度ルールの説明です！　この五〇×五〇メートルの巨大プール！　その中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！　なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央の島へと続いています。その途中途中された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっています！　ペアの協力が必須な以上、ふたりの相性と友情が試されるということですね！」

「鈴とセシリア組と名鈴とエイミー組か……なにも起きないといいけど。」

この嫌な予感は的中する事になることは紫苑はまだ知らなかった。

「さあ！　いよいよレース開始です！　位置について、よ～い……」

パァンッ！と乾いた競技用ピストルの音が響き、二十四名十二組の水着の妖精たちが一斉に駆け出す。

「セシリア！」

「わかっていますわ！」

「鈴、セシリアお先に～」

名鈴が鈴とセシリア組に手を振りながら妨害組をエイミーと共にかわす。

「名鈴！」

「鈴さん！」

鈴とセシリア組も名鈴とエイミー組を追いかけるためにかわし水面に落としたりしながら追いかける。

「ああもう、うっとうしい！」

「邪魔ですわ！」

「頭を使わないとね」

「だよね～向こうには筋肉バカがいるから仕方ないよエイミー」

「誰が筋肉バカよ！」

「鈴さん……このままでは置いてかれますわ！」

名鈴たち先頭組は二番目の島を渡り三番目の島にたどり着くとこだ。

『早速だけと、奥の手よ』

『はぁ……。どうなっても知りませんわよ』

『勝つためよ！』

『そ、そうですわね！　勝つためなら！』

ついでにプライベート・チャンネルで交信をして、鈴とセシリアはしつこい妨害ペアに向き直った。

「「うりゃあああああっ！」」

がっつりと組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペア。なにがそうまでさせるのか、鈴とセシリアは一度ため息を漏らしたあと、風を裂くような素早い動きで一閃した。

どぼーん！　とプールに落ちる妨害ペア、しかしそれはもはや慣れっこのようだった。

「何度でも蘇るわよ！　私たちは！」

水面へと浮上したふたり組。しかし、その体にあるべきものがない。

「ふっ……。人は水着無くして生きてはいけない……」

「マリー・アントワネットの言葉通り、水着がないなら全裸でどうぞ」

「「きゃあああああっ!?」」

「はぁ……。鈴もセシリアもよくやるよ」

転がるをやめてベンチに座っていた紫苑はため息吐きペットボトルのお茶を一口飲む。

「こ、これはすごい！　ふたりは高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？」

「まあ、国家代表候補生だし四人とも」

ぽつりとつぶやいた

「きたわね。鈴、セシリア」

「名鈴行くわよ」

「セシリアこっちも行くわよ」

「おおっと、トップの名鈴・エイミーペアとそれを追いかける鈴・セシリアペアは知り合いでしたか！」

鈴とセシリア名鈴とエイミーは風を裂くような素早い動きで一閃した。

「「っ！」」

「名鈴さん水着は」

「え、きゃあああああっ」

どぼーん。

「セシリアあんたは？」

「え？　なっ！」

バシャーン

「エイミーあなたの水着わ？」

「う、嘘！」

バシャーン

「よしっ！」

セシリアたちを犠牲に鈴は一気にゴールへ到着。フラッグを手に取る。

「勝ったぁ！」

「ふ、ふ、ふ……」

「鈴やったわね！」

「紫苑だけの、裸を！」

全員がＩＳを展開して水面から飛び出す。

「はっ、やろうっての？　――甲龍」

対する鈴もすぐさま甲龍を展開し、即応態勢へと移る。

「な、なっ、なぁっ！？　あの四人はまさか――ＩＳ学園の生徒なのでしょうか！　この大会でまさか四機のＩのを見られるとは思いませんでした！　え、でも、あれ？ルール的にどうなんでしょう……？」

困惑と興奮の入り混じった声で、司会のお姉さんはまくし立てる。大きな身振り手振りに、またしても豊満なバストが弾んだ。

「おいおい、まじかよ……」

「ぜらぁあっ！」

「はあぁぁっ！」

「止めに入りますか　――青龍」

青龍の武装氷鈴を先に展開そして氷華を発動と共に氷鈴を振り抜く

ピシャ！

「「「「？」」」」

「な、なんだ!?　突然氷が飛んできたぞ！　しかも空中で停止。なにが起きたんだ～？」

まくし立てる。お姉さんはひとまず無視してＩＳを展開している四人に怒鳴る。

「鈴、名鈴、エイミー、セシリア！　降りてこい、次は狙うぞ？」

氷鈴は青白く光始める。

「「「「わかりました！」」」」

「おおっと、男でＩＳを起動してるってことはもしかしたら、織斑――」

「すいません、黙っててもらえますか？」

ギロリと一睨みして司会のお姉さんは撃沈。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

バシ

「いた」

バシバシバシ

「いた」

「いて」

「いたた」

「お前らはことごとく俺が予想することとやってくれるな。　すいませんでした！」

「いえ、被害は出てませんし」

全員が私服に着替えて事務室で紫苑にこってりと絞られていた。

幸い、けが人０の被害０だった。

紫苑は全員の代表に司会のお姉さんに頭を下げる。

「はぁ……。」

「もう、いいから帰んなさい」

「失礼しました。ほら、行くよ」

「「「「はい」」」」

四人がＩＳで大暴れしたため、大会は途中で中止。
そのため、優勝者はいない。

「いつまで、暗い顔してんだよ。――よし、何か奢ってやるよ。甘いモノがいいだろ？　なにがいい？」

「「「「……」」」」

全員が数秒考えた後。
鈴と名鈴が、ぼそりとつぶやいた。

「……@クルーズ」

「……期間限定の一番高いパフェ」

「よし、あとのみんなもいいか？」

コクリと頷いた

「なら、行くか」

紫苑が歩き出すがみんなはついてこない。

「？　どうした。行かないのか？」

「行くけど、なんか紫苑優しくない？」

鈴が代表として言う。

「いつも、優しいだろ。」

「そうだけど、どういう風の吹き回し？」

今度はエイミーが訊いた。

「なんだよ。行かないのか～」

「違う、優しい理由が知りたいの」

「理由なんてねえよ。気まぐれだ。ほら、行くぞ。俺が気の変わらない内にな」

「うん」

そう言っていつものように左腕に名鈴、右腕にエイミーをそして紫苑の後ろから鈴とセシリアが歩いてついて行く。

「暑苦しいから離れて」

「「いや」」

はぁ～とため息をつきながら駅前のファミレス・@クルーズへと向かって歩き出した。

おまけ二匹の子猫と一匹の猫（前書き）

おまけだよ～。

少しずつ増やそうと思いますでは、本編どうぞ

おまけ二匹の子猫と一匹の猫

「最近、これを着ることに慣れてしまったな……」

「いいじゃねえか、かわいいし」

「かわいい言うな」

場所はＩＳ学園一年寮の廊下
紫苑は例の青猫パジャマで一夏と共にシャルロットとラウラの部屋に向かっている。

「紫苑って昔から女モノの服を着させられたり。かわいい服着せられたりしてるよな」

「そうだな」

「おっと、ここだ」

コンコン。

「はーい、どうぞ～」

「おっす。お、なんか変わった服着てるな。黒猫と白猫だ、それと青猫だな」

「俺を足すなよ……」

「いいじゃねえか、仲間だぞ」

「そうだな……まあ、いいみやげだ」

@マークが大きく書かれたクッキーの包みを取り出す

「さて、食べるか。一夏ココアクッキーだからホットミルクにだな」

「そうだな、子猫二匹もいるし一匹の猫もいるしな」

「すまんがやってくれ。この手じゃ無理だし」

「おう、任せろ」

そう言って簡易キッチンに向かう。

「あ、いいよ！　僕が用意するから、ふたりは座っててよ」

「いや、シャルロットも無理だろ」

紫苑は自分の手を見せてにぎにぎしてみせる。
シャルロットもラウラも紫苑も肉球ハンドなのだから。

「あ、そうだね」

「まさか、猫パジャマが三人になるとは……」

「あ、あのさ、一夏、紫苑。この服、可愛い？」

「おう。可愛いと思うぞ。黒猫と白猫ってチョイスがまたいいな。ふたりとも似合ってる。紫苑も違和感ねえぞ」

「そこが悩みどころなんだよ……」

普通は男がこんなのを着ていたら引かれるはずなのだが、紫苑は違和感が全くない。

（男としてなんか、複雑なんだよね）

「紫苑はどう？」

「ああ、可愛いぞ。　だけど名鈴には見つかるなよ。　着せ替えさせられるぞ」

「わかった」

「了解した」

それからすぐに一夏がホットミルクとクッキーを持ってきた。

夏の夜、けれど飲み物はホットミルクで、四人の秘密のお茶会を過ごす。

黒猫が一匹、白猫が一匹、青猫が一匹、王者が一人の不思議なお茶会だった。

おまけ二匹の子猫と一匹の猫（後書き）

どうでした？

猫パジャマが三人集合しましたよ。

すごく、書きたかった場面なんですよ！

すごく可愛くないですか！

はっ！

興奮してしまった。

で、で、次回にお会いしましょう。

真夏の夜の夢（前書き）

風邪から復活してからの一作目です。
頑張ってみました。
それでは、本編どうぞ

真夏の夜の夢

（何も変わってないな、ここは……）

八月のお盆週。その週末に、私は――篠ノ之箒――はとある神社にいた。

とある神社、というか……篠ノ之神社だ。私が転校する前の家であり、生家でもある。

（本当に、変わってない）

板張りの剣術道場は、今でも昔のままだった。聞くところによると、定年退職した警察官の方が善意で剣道教室を開いてくれているらしい。

剣は礼に始まり礼に終わるという教えの通り、子供たちに道具の手入れ道場の掃除をさせているとのことだが、素晴らしい考えだ。

（今では結構な人数がいるようだな。昔は、私と千冬さんと、それに一夏と紫苑だけだったが）

壁の木製名札を見ながら、少しだけ昔の思い出に浸る。

『今日は俺が勝つ！』

『がんばれ～』

『ふん』

『だあああっ！』

べしっ、くしゃっ。

『あ、明日は俺が勝つ！』

『ふん。その明日はいつ来るのだろうな』

『いつもいつもおまえらは飽きねえなー』

……。

（いや、待て。私はそこまで愛想の悪い子供だったか？　というか、剣術以外の思い出はないのか。もう少し、こう、いい思い出とかだな……）

しかし、叩いてみても揺すってみても、そういうような思い出しか出てこない。

（い、いや、なにもそんな思い出ばかりではない。ない……はずだ）

生徒手帳を取り出し、そこに挟んである写真をそっと覗く。

剣道着を着た一夏と箒がふたりで写っている、思い出の写真だった。

――実際は、箒の横に束、一夏の横に千冬と紫苑と並んでいるのだが、その両端を折って見えないようにしてある。

実のところ、写真を折り曲げてツーショットねつ造というのは、鈴もしているところだった。奇妙なところで一夏の幼なじみは感覚が似ている。

「箒ちゃん、ここにいたの」

「は、はいっ！？」

急に声をかけられて、箒は生徒手帳を後ろ手に隠しながら振り向く。そこにいたのは四〇代後半の女性で、年齢相応の落ち着いた物腰と柔らかい笑みを浮かべている。

「懐かしくて、つい。すいません、雪子叔母さん」

「あら、いいのよ。元々住んでいたところだもの。誰だって懐かしくて見て回るわよ」

うふふと微笑む姿はただ一つの裏もなく、純粋に楽しそうな顔だった。

昔から、箒はこの叔母さんに怒られたことがない。たとえ箒が悪いことをしても、叔母さんは怒ることも叱ることもしない。

『だって、悪いことをしたって自覚があるのならそれで十分でしょう？』

そんな風に言われるたび、たまらなく箒は自分が恥ずかしくなるのだった。

そして、自分の悪いところを自発的に直していく。そういう手のかからない子供だった。

「それにしても、よかったの？　夏祭りのお手伝いなんてして」

「め、迷惑でしょうか？」

「そんなことはないわよ。大歓迎だわ。でも、箒ちゃん？　せっかくの夏祭りなんだから、誘いたい男の子の1人もいるんじゃないの？」

「そ、そんなことはっ……」

ボッと赤くなる箒。　その脳裏には、当然一夏の姿が浮かんでいる。
その反応を見るだけで何かしらの理解と納得を得た雪子叔母さんは、また小さく笑みを漏らした。

「それじゃあ、せっかくだから厚意に甘えましょうか。六時から神楽舞だから、今のうちにお風呂に入ってちょうだいね」

「はいっ」

元々、篠ノ之神社で行っていたお盆祭りというのは、厳密な分類では神道というよりも土地神伝承に由来するものらしく、正月だけでなく盆にも神楽舞を行う。
現世に帰った霊魂とそれを送る神様とに捧げる舞であり、それが元々は古武術であった『篠ノ之流』が剣術へと変わった理由でもある。
　正確なことは戦火によって記録が消失したので不明とのことだが、この神社は女性の実用刀があったりと、とにかく『いわくつき』の場所なのだ。
箒たち一家が離れた後もこうして親戚がその管理を受け継いでいる。

（ここも変わってないな）

脱衣所でかつて住んでいた家を懐かしむ箒。

そして、不意にこの家を離れた理由を思い出す。

（あの人がＩＳを作らなければ……）

そうすれば、ここにいられた。

――そして、一夏の隣にいられたはずだ。

「……」

少しだけ険しい顔で衣服を脱いでいく。その手がふと左腕の『それ』に気づいて止まる。

幅は一センチほどの赤い紐。それが交差するように巻かれ、その先端にそれぞれ金と銀の鈴が一対になっている。――『紅椿』の待機形態だった。

（けれど、これをくれたのもあの人だ……）

初めて言った妹のわがままに、けれど姉は快く応じてくれた。

あの時の心の底から楽しそうな声を思い出すと、少しだけ恨みがましい思いが晴れる。

（私は……本当はどうしたいのだろうか……）

許したいのか。

断じたいのか。

（……わからない……）

わからない。ただ、わからない。

どちらも本心のように思えるし、どちらも偽りのように感じられる。

（……。とにかく、今は風呂に入ろう）

神楽の前の禊ぎであるため、本来は川か井戸の冷水を使うのだが、その辺は結構いい加減――というより、『続けさせるために緩くする』という先人たちの工夫だった。

ゆえに、篠ノ之神社の禊ぎは風呂に入るだけで構わない。

箒は紅椿の腕飾りだけを身につけた姿で、浴室へと入る。

箒が幼い頃に改築したという風呂場は、総檜木のしっかりとしたものだった。先月に臨海学校で行った温泉宿にも引けを取らない。さすがに広さはそこまでではないが、それでも四人くらいは十分に足を伸ばして入れるだけの広さがある。

「ふぅつ……」

何年かぶりに入る湯船は、やはり昔と同じで心地が良かった。

箒の好み通り、湯船には少し熱めのお湯が張られている。

その中で体を伸ばすだび、ちゃぷ……と小さく水音がこだまして、どこまでも気分が和らいでいくのがわかった。

（やはり、風呂はいい……）

それから箒がお風呂からあがったのは実に五〇分後だった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「よし、と。これで準備万端ね」

純白の衣と袴の舞装束に身を包み、金の飾りを装った箒はいつもよりもぐっと大人びている。それだけではなく、神秘的な雰囲気も纏い、息を呑むような美しさがあった。

「口紅は自分で塗れる？」

「は、はい。昔もしていましたから」

「あ、そうよね。箒ちゃん、小さい頃からやってたもんね、神楽舞。う～ん、あの姿も可愛いかったわぁ」

「む、昔の話は……」

「うふふ。ごめんなさいね。歳をとるとどうしてもそうなのよ」

照れ隠しに表情を引き締めた箒は、小指の先で小皿から取った口紅をすっと唇に塗っていく。スティックルージュではなく、昔ながらの口紅を使うのもこの神社のしきたりだ。

（……よし）

鏡を見て、うまく口紅を引けたことを確認して箒は満足する。

「はい、箒ちゃん」

「あ、どうも」

叔母さんが、祭壇から宝刀を持ってきて、箒はそれを受け取る。

「そういえば箒ちゃん、昔はこれ、1人で持てなくて扇だけだったわねぇ」

「い、今はもう持てます！」

その言葉通り、一息で刀を抜いてみせる箒。そして、刀を右手に、扇を左手に持つ。

この一刀一扇の構えは古くは『一刀一閃』に由来し、現在も篠ノ之流剣術の型の一つにある。

この型の応用をして実戦で使っているのは紫苑だだ1人だ扇をバトルファンに持ち替えて扇、刀での両方攻撃を得意にしている。

「ねえねえ箒ちゃん、扇振って見せてよ。叔母さん、小さい頃のしか見たこと無いから」

「え、ええ。では練習もかねて舞ってみましょうか」

刀を鞘へと戻し、それを腰帯に差す。それは神楽というよりもモロに侍のようだったが、これで正しい。少なくとも篠ノ之流は。

「では」

閉じた扇を開き、それを揺らす。

左右両端一対につけられた鈴が、シャン……と厳かに音色を奏でた。

練習でありながら、神楽を舞う箒には本番さながらの気迫にも似た雰囲気があり、あたりが突然静かになったような錯覚さえ覚える。

扇を右へ左へと揺らしながら、腰を落としての一回転で刀を抜き放つ。

そして刃を扇に乗せ、ゆっくりと空を切っていく。
それらの様はまさしく『剣の巫女』の名にふさわしい厳格さと静寂を兼ね備えており、幼かった頃よりもぐっと美しくなった箒はそれらを自然と纏っていた。

「……以上」

「まあ！まあまあまあ！　すばらしいわ、箒ちゃん！　ちゃんとここを離れても舞の練習はしてたのね」

「え、ええ……まあ……。その、一応巫女ですから……」

叔母さんの喜色満面の笑みに押されて、箒は照れくさそうにそう告げる。
しかし、これに関しては絶対に一夏そして紫苑には知られたくなかった。女らしいことをしている、というのは箒にとって若干トラウマでもある。

（昔も男子に冷やかされた……）

それをかばってくれた一夏、紫苑が眩しく見えた。最初の印象こそ最悪だった一夏だったが、その件で境に箒の態度は緩和していった。だからこそ、一夏には知られたくない。もちろん紫苑にもだ。
昔は『数人がかりで女子をいじめる男子が気にくわない』という理由で怒りをあらわにした。けれどそれは、『箒が侮辱されたから』というわけではない。

もし、一夏、紫苑に『女らしいことは似合わない』と言われたら、トラウマどころではない。
最悪、みっともなく泣き出してしまうかもしれない――。

そう思うと、この神楽舞を見られるわけにはいかなかった。だから、一夏も紫苑め誘わなかった。

（どうせあいつらのことだ。夏祭りを覚えていても、わざわざ来たりはしないだろう。面倒だ、とかなんとか言ってゴロゴロしているに違いない）

そう考えると、それはそれで面白くない自分がいるということを自覚してしまった。

（え、ええいっ。とにかく！　一夏、紫苑は来ない！　だから私は精一杯舞を舞うだけだ！）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「よっ」

「俺は忘れてると思ったのか？」

「……」

「お疲れ」

「忘れるわけねえだろ。まあ、お疲れ」

（待て。待て待て。おかしい。おかしいぞ。私は神楽を終えてから軽く汗を拭くついでに巫女服に着替えてお守り販売の手伝いに来たところになぜ一夏と紫苑が！？）

混乱の余りここ数十分の行動を振り返りつつ棒読み反復し、改めて現状を確認する。

「それにしても、すごいな。様になってて驚いた」

「だな～、余り昔の記憶がないからわからないが。すごいな。」

（これが夢という可能性はないだろうか。あり得ないことが起きるとは大抵夢だ）

「それに、なんというか……キレイだった」

「まさに巫女だな」

「意味分からんぞ。」

「っ――――」

「わからなくていいんだよ」

（う、う、うう？　ゆ、ゆ、夢だ。　絶対に夢だ。あ、あの一夏が、わ、私にこんなことを言うはずがない。そうだ、そうだとも、夢だ！」

「夢だ！」

「な、なに？」

「くふふ」

突然の大声に驚く一夏は、若干間の抜けた声で聞き返す。

「これは夢だ。夢に違いない。はやく目覚めろ！」

「まあまあ、箒ちゃん。大きな声を出してどうしたの？　……あら？」

異変に気づいてやってきた雪子叔母さんは、箒の様子と一夏と紫苑の姿を交互に見る。

「本命はどっちなの？」

「こっちです」

紫苑は親指で一夏を指す。

「ああ」

そしてぽん、と手を打ってなにやら得心する雪子叔母さん。その頭上なは豆電球が光っていた。

「箒ちゃん、あとは私がやるから、夏祭り行ってきなさいな」

「なっ！？　……くっ、さすがは夢だ。　あり得ないことばかり起きる。ならば……」

ぶつぶつとつぶやきを繰り返し、まだこれが夢だと思っている箒に雪子叔母さんはうーんと腕組みをして考えた後、再度閃き電球を輝

かせた。

「えい」

べしっ。

柔らかな物腰とは裏腹に、鋭いチョップが飛んできた。

「あいたっ!?」

「箒ちゃん、現実に戻ってきてね」

「は、はぁ……」

叩かれた頭を押さえながら、どうにか現実に帰還する箒。

そしてすぐさま、雪子叔母さんがくるりと箒を回れ右させて背中を押す。

「ほらほら、急いで。まずはシャワーで汗を流してきてね。その間に叔母さん、浴衣を出しておくから」

「あ、あ、あのっ」

「いいからいいから」

箒の反論を許さず、強引にその体を母屋まで押していく。そして、去り際に振り向いて一夏に言った。

「ちょっとだけ待っててね。彼女を待つのも彼氏の役目よ」

「え？」

「クス」

ぽかんとしている一夏に、ウインクを送ってそのまま箒と一緒にいなくなる。

「なんで、紫苑笑ったんだよ」

「なんとなくだ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

（あ、あ、あり得ん！）

ざぱーんと三回のお湯を頭からかぶりながら、さっきからずっと繰り返している言葉を箒はさらに続けて紡ぐ。

（一夏、紫苑が飛んできた夏祭りに来た。　それは可能性としてゼロではない。し、し、しかしだな！）

ざぱーん。四回目のお湯を頭からかぶる。

ぐっしょりと濡れた黒髪からポタポタと滴が落ちるが、気にしてはいられない。

（あ、あ、あの一夏が、あの一夏が！　わ、私に『キレイだ』などと……）

脳内美化四割り増しの一夏が、甘く箒に侍ささやきかける。無論紫

苑は蚊帳の外。

『キレイだぞ箒……』

『ま、待て、一夏。は、花火を見るためにここに来たのではないのか？　わ、私ばかり見てどうなる……』

『あんなの、ふたりきりになる口実に決まっているだろ。邪魔な紫苑もいないし。』

『い、一夏……』

『箒……』

そしてふたりの唇はゆっくりと重なって――

「だあああっ！」

ざぱーん！桶に張った満杯のお湯をまた頭からかぶる箒。

「箒ちゃーん？　なんだか大変な声が聞こえているけど、大丈夫ー？」

「はっ、はひっ！　大丈夫ですっ！」

思わず裏返った声でした返事は、見るからに大丈夫そうではない。

「とりあえず、そろそろ上がってねー。もう三十分も経ってるわよー」

「ええっ！？」

時間のことをすっかりと忘れていた箒は、それから慌てて体と髪を洗い、しっかりと汗を落とす。

上がってすぐにドライヤーで髪を乾かしながら、時間短縮といって浴衣の着付けをしてくる叔母さんに逆らえず、されるがままになってしまう。

「うん、できた。やっぱり箒ちゃんって和服が似合うわ～。　お母さん譲りの髪のおかげかしらね」

「ど、どうも……」

褒められたことと浴衣を着せてくれたことの両方にお礼を言いながら、箒はいつもとは違う服装に若干戸惑いの色を隠せない。

浴衣を実に数年ぶりに着た箒だったが、雑誌のモデルと比較しても遜色ないほどの雰囲気と一体感、それに着こなしを見せていた。

（な、なかなかに……似合ってる……と、思いたい。す、少なくともおかしくはないはずだ）

自分の容姿についての自覚がない箒は、そんな自信のないことを考えながら改めて鏡を見る。

白地に薄い青い水面模様が付いた浴衣は、アクセントに朱色の金魚が泳いでいる。所々に置かれた銀色の珠と金色の曲線とが、けして派手な自己主張はせず脇役に徹していて、涼しげな印象と落ち着いた雰囲気とを醸し出していた。

「それじゃ、これ持って行ってね。お財布とか携帯電話とか、他に必要なの色々入れておいたから」

そういって巾着を渡される。

いつの間に用意したのか……というのは、訊かないでおこうと箒は思った。昔から、雪子叔母さんはとにかく気が利く人で、いつだって誰かのために何か用意している。

「あ、あの、雪子叔母さん」

「なあに？」

「あ、ありがとう……」

照れくさそうにそう言う箒ひ、叔母さんは少しだけ意外そうな顔をした後、とびきりの笑顔で返した。

「どういたしまして。それより、ほら。彼氏をあんまり待たせちゃダメよ」

「い、いや、あの、あいつは――」

「はいはい。急いで急いで」

急かされるまま脱衣所を出て、玄関へと向かう。途中、壁掛けの時計を見ると、時刻はすでに6時を過ぎて、外は橙色に包まれていた。

「8時から花火よね。ちゃんとふたりきりになれる場所に行くのよ

？」

「で、ですから、あいつは――」

「はーい、いってらっしゃーい」

「ううっ……」

まったく話を聞いてくれない雪子叔母さんにまぁ言い足りない箒だったが、草履を履くなり外に出されてしまってはもう反論の余地もない。

それになにより、かれこれ一時間は待たせている一夏たちが気がかりだった。

（ど、どうしよう。思ったよりも時間がかかってしまった。帰ってしまったりしていないだろうか。それにそもそも叔母さんの勘違いなわけで、……ああ、なんと説明すればいいんだ）

浴衣の裾を乱さないように気をつけながら、それでもできる限りの早足で神社の鳥居へ向かう。昔から、待ち合わせといえばそこだった。

（一夏……）

鳥居に着くと、すでに多くの人で溢れかえっていてなかなか一夏たちを見つけられない。

特に、鳥居から神社の中へと向かう人がほとんどの中で、こうして立ち止まっているだけでも通行人の邪魔になってしまうのが気がかりだった。

（やはり、一夏たちはもう帰って――）

そう思いかけたとき、ぐいっと手が引かれた。

「遅いって、箒。待ちくたびれたぞ。　――お？　浴衣だ」

「い、い、一夏っ。　い、いたのかっ。ぜ、全然気がつかなかったぞっ」

またしても突然の再会に、箒はつい焦る余りおかしなことを口走ってしまう。

（お、落ち着け、落ち着け……あぁっ!?　手を握られてっ……）

今更ながら、しっかりと握られている手に意識が向いて、また頬が赤く染まる。

幸運だったのは、あたりがそれなりに暗くなったおかげで、その顔色を一夏にきづかれないということだった。

「へぇ。いいな、それ。似合ってる」

「そ、そうか!?　わ、わっ、私もそう思っていたところだ！」

――ほ、褒められたっ!?　またしても、褒められた!?

軽いパニックと好意にのぼせそうになっている箒

「おい、紫苑！　箒も来しそろそろ行こうぜ！」

突然、鳥居の上の方に向かって一夏が紫苑を呼ぶ。

「あ、やっと来たか」

そう言う声が鳥居の上から聞こえた。

「ああ、早く降りてこいよ」

「わかった」

そう言ってしゅたっと箒たちの前に紫苑が降り立つ。

「よく寝たぜ」

「このチート野郎が」

「どこがチートだ。ただ木と木を蹴って上に登って鳥居に移動しただけだろ」

「し、紫苑！　帰ったのではなかったのか！？」

紫苑は箒にそっと近づき耳打ちをする。

「……俺は何処までも誰の恋路を邪魔するぜ。鈴姉のためにな……」

ふっと笑って箒から離れて言葉を続ける。

「さて、色々回るか。　夏祭りに来るのは四年ちょっとなのかな？

記憶があまりないから知らないけど」

「俺は二年ぶりだな。去年は受験勉強してたしなあ」

「……」

いつの間にかドキドキが収まっていた箒は、紫苑を睨む。

紫苑は気づいていても無視する。

「わたがしに焼きそばに焼もろこしに、一通りあるな。さすがは篠ノ之神社」

「意味が分からんぞ」

もっともなツッコミをいれる紫苑。

「そうか、それより最初はどこに行くか？」

「俺に聞くな。箒に聞け」

さっきから睨んでいる箒をちらりと見て紫苑は言った。

「そういえば、箒って金魚すくい苦手だったよな」

「い、いつの話だ！　いつの！」

「ん？　今は違うのか？」

「当然だ。私をいつまでも過去のままだと思うなよ」

「じゃあ、勝負するか？　負けた方が食べ物おごりな」

「いいだろう。望むところだ」

「じゃあ、俺は傍観者で」

腕を組んでうなずいた箒は、一夏、紫苑と一緒に金魚すくいの屋台を探す。

少し行ったところに目的の場所を見つけて、一夏と箒は同時に一回分の料金を差し出した。

「あ、でも箒、浴衣だよな。　大丈夫か？」

「和服の扱いには慣れている。心配も手加減も無用だ」

「そっか。……じゃあ、勝負！」

「望むところ！」

ふたりのモナカが同時に水をくぐった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「いや、悪いな。焼きそば奢ってもらっちゃって」

「な、納得いかん……」

「確かにあれは……」

ほくほく顔で焼きそばを食べる一夏の隣で、箒はうぐぐ……っと拳を握りしめていた。そして箒の隣で紫苑はりんご飴を舐めていた。勝負は三対三の引き分けに終わると思いきや、なんと箒の器から一匹の金魚が跳ねて水槽へダイブ。その一連の流れに注意を取られたふたりともそこでモナカがちぎれて、決着となった。

「あの金魚め……真剣勝負に水を差すとは……」

「金魚だけにな」

「はぁ～」

ギロッといつもより二割増しの睨みを利かされて、一夏は口を閉じる。

「ま、いつまでもむくれてるなよ。ほら、焼きそばうまいぞ。箒も食えよ」

そう言って、今し方まで口をつけていた箸のまま、焼きそばをつまんでよこす一夏。

（こ、こ、これは、その……間接キスというものでは……）

（でたよ。一夏の天然が……）

またドキドキと暴れ出した鼓動を、どうにか顔に出てしまわないように気をつけながら、箒はちらりと一夏の表情をうかがい。紫苑はりんご飴を舐めながらそう思っていた。

「ん？」

当の本人はといえばけろっとした表情をしていて、およそ他意はない様子だった。

それがすこし悔しい反面、自然に優しさが嬉しくもある箒は、わずかに恥ずかしそうに目を伏せながら、焼きそばを『はい、あーん』の要領でいただく。

「ん、ぐ。お、思ったより、うまいな……」

「だろ？　それに、箒も原減ってるだろ。神楽やってたし」

「う、うむ。　そ、そう、だな……そうかも、しれないな……」

正直、空腹など言われるまで忘れていた。

しかし、とりあえずうなずいておいたのは、余計なことを言って一夏が天然でしている

『はい、あーん』状態を終わらせたくなかったからだ。

（しかし、こいつは誰にでもしそうだな）

そう考えると、少しだけちくりと胸がうずく。

――自分だけに特別な態度を取って欲しい――。

箒は、そう思わずにはいられない恋する１６歳、そのままだった。

「の、喉が渇いたなっ？」

「そうだなー。人混みのせいで暑いし、仕方ないよな。何か買いに行くか？」

「俺が買ってくるよ」

「頼んだー。ってもういないし」

そう言って紫苑はりんご飴を食べながら行ってしまった。

（い、今だ、このまま自然に手を取って――）

間合い抜きのときと同じ剣豪の目で、ぐぐっと一夏の手を注視する箒。

そして、絶好のタイミングが訪れた。

（い、い、今だ――――！！）

「――あれ？　一夏……さん？」

「お？」

突然かけられた声に一夏が振り向いて、箒の手はするりと宙をかすめる。

しかし、みっともない姿を見せまいとして、箒は狙いを外した手をそのまま髪に持って行き、乱れを直すように振る舞った。

（ああもう、誰だ！　私たちの邪魔をするのは！？）

「おー、蘭か」

（……う、うん？　誰だ？）

箒が知らないのも無理はないが、自分は見知らぬ――しかし、一夏

とは顔見知りの女子の登場に気が気ではない。

「き、奇遇、ですね……」

「そうだな――――」

「お、浴衣の妖精が居ると思ったらチビ蘭か残念。」

ぼふっと蘭の頭に手が置かれる。
その手はさっき飲み物を買いに行った紫苑だった。

「紫苑、居たの!?　……てか、なんで残念なのよ!」

「だって、発育が悪いじゃん」

「あなたの姉だって同じでしょ!」

「残念なことに鈴姉の成長は止まっているんだよ……ほら、食うか」

自分が食べていたりんご飴を蘭に渡す。

「あ、え、それ……」

「ん?　ああ、悪い。新しいのやるよ」

袖口から新しいりんご飴を蘭にやる。

「ありがとう……ございます」

「蘭が俺に敬語だ……。」

「なんですか！？　私だって敬語ぐらい使えますよ」

（もう使えてないじゃん）

「そうだな。悪い悪い」

紫苑は蘭をぽんぽんと撫でる

「それにしても蘭の浴衣姿って初めて見たな。洋服の印象しか無かったけど、和服も似合うんだな」

「そ、そう、ですかっ。あ、ありがとうございます……」

ぼわっと赤く染まった頬を隠すように、ややうつむき加減になる蘭。その様子から恋心を察した箒は、警戒センサーを感度抜群に跳ね上がる。

「あー、会長が照れてるー。めずらしー」

「そっかぁ。他校の男子にはもちろん同校の女子になびかない理由なこれかぁ」

「会長、ふぁいとっ♪」

蘭のすぐ後ろにいた、同じく浴衣姿の一行がそう、言ってはやし立てる。

「あ、あっ、あなたたちねえっ！」

「きゃー、会長が怒った～」

「逆鱗触れた～」

「こわーい」

「ふっ、可愛いな～」

「おいおい、紫苑。　そんな事言ってると名鈴に怒られるぞ」

一夏の声にぴしっと凍りつく紫苑。
そして、ゆっくりこっちを向く

「一夏、俺は今！あいつの縛りから解放されてるのにあいつの事は禁句だぞ」

「メイリン？　誰ですか？」

「紫苑のかの――べふ」

蘭のが聞いたことを話そうとした一夏の顔にペットボトルが飛んできた。

「禁句と言っただろ？　一夏」

ハイライトの消えた瞳で一夏を見る紫苑。

「ご、ごめん」

「よろしい。で、蘭名鈴は俺の幼なじみだ。あ、……心配しなくても一夏の幼なじみじゃないから大丈夫だぞ。」

途中からさっと蘭の耳元で囁く。
そして、またぼわっと赤く染まる蘭。

「で、蘭後ろの浴衣の妖精は学校の友達か？」

「え、はい。生徒会のメンバーです」

「ふ～ん。俺は凰　紫苑だよろしくな」

すっと、後ろの三人に手を出す紫苑。

「よ、よろしくお願いします。」

「ど、どうも」

「よ、よろしくです。」

三人共各自に言葉と握手を交わす。

「あ、あの……紫苑さんって中国人ですか？」

「うん、そうだよ。」

三人の内ひとりが訊く。

「そうでしたか。あの、もう一つ聞いていいですか？」

「なにかな？」

「彼女いるんですか？」

「彼女か……居るよ。　蘭ちゃんが俺の彼女」

「「「えー！」」」

「ちょ、紫苑！」

「なーんてね。冗談だよ。　彼女は一応居るよ。証拠にほら」

左手の薬指のリングを見せる。

「えっと、もしかしてさっき言ってた名鈴さんですか？」

「さぁね。さて、こんなところにたまっていても仕方ない。　一夏、どうする？」

「そうだなー。　蘭一緒に回るか？」

「君たちも回るか？　もしくは帰るか？」

「えっと、私は回りたいんですがいいですか？」

さっきから話していた女の子が訊く。

「もちろん、祭りを回るんだったら大人数の方が楽しいしね。他の2人はどうする？」

「じゃあ、私も」

「私も」

「決まりだ。よし、一夏は箒と蘭と回ってやれよ。俺は妖精さん三人と回るから」

「わかった。……お、悪い。紹介がまだだったよな。えっと、こっちが五反田蘭。ほら、前に話した弾ってやつがいただろ？あいつの妹」

「五反田蘭です」

「さて、俺たちは行くか？　……言っておくけど、なにもしないからね」

「わかってます。行きましょう」

さっきの女の子が紫苑の手を取ってそのまま連れて行く。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「へー、君、吉田の妹か」

「はい、吉田咲です。姉のこと知ってるんですか？」

さっきの女の子――吉田咲ちゃんが俺の手をがっちりと掴んだまま訊いてくる。

「知ってるもなにも。同じ小中学校同じだったし。それにあいつに告られたし」

「本当ですか！」

「本当だよ。嘘ついてどうするんだよ」

「そ、そうですね。ははは」

「さっきから、ずっとりんご飴食べてますけど、飴好きなんですか？」

今度は違う女の子名前は確か田中灯莉（たなか・あかり）だ

「甘いものが好きなんだよ。　う～、なんか食べるか？　奢るぞ」

「じゃあ、あれ！」

咲が指したのはわたがし屋さんだ。

「咲ちゃんはあれだね　灯莉ちゃんは？」

「同じでいいです」

「そうか。晴香ちゃんは？」

ずっと黙ってついてきていた女の子――野田晴香（のだ・はるか）に振る。

「え、えっと……その前に一ついいですか？」

「なにかな？」

「紫苑さんの学校って……ＩＳ学園ですか？」

「えっと、なんで？」

「テレビで一度観たことあります。だけど、その時には左目に眼帯してませんでしたし。なんか雰囲気も違いましたから違うのかなっと思いましたが決め手は左手の腕輪です。」

「ふ～、晴香ちゃんってよく人を見てるんだね」

目線を合わせるために紫苑はしゃがみ、晴香の目を見て話す。

「た、たまたまです」

急に近くなった紫苑の顔に驚きながらも言葉を紡ぐ晴香。

「そうだよ。俺はＩＳ学園の生徒だよ。……はい、生徒手帳」

内ポケットから生徒手帳を出して晴香に見せる紫苑

「そうですか！　……やっぱり」

「ん？」

「な、なんでもないです！」

最後の方が聞こえなかった紫苑は聞き返すが晴香は両手をブンブンと振ってごまかす。

「で、なに食べる？」

「みんなと同じで」

「よし、わかった。」

咲の手と晴香の手を引き、灯莉を連れてわたがし屋に向かう

「いらっしゃーい」

「おじさん、４人分ください」

「お。両手に花かいうらやましいねぇ。　よし、おまけ無しだ！」

「元々まける気ないでしょ？」

「ははははっ。　バレたか」

笑うおじさんは、そんなことを言うわたがし屋の大将は、くるくるっとわたがしを作る

「はい。お待ち」

「どうも」

わたがしを受け取り４人分の料金を払った。

「まいど。……お、女の子の分まで払うとは兄ちゃん甲斐性ある

な。最近のガキにしちゃ珍しい」

「男が女の子分を払うのは当然でしょ？」

「それも、そうだな。でも最近はそんな奴らいないからな」

「そうですね。では」

「まいど。」

わたがしの大将との世間話を済ませて三人の元に戻る

「紫苑さん。わたがしありがとう！」

「どういたしまして」

戻って来てすぐに腕を抱きしめる咲の頭をぽんぽんと撫でる紫苑。

「さて、そろそろ。帰った方がいいんじゃないかな？」

携帯の時計を見ながらそう言う紫苑

「あ、そうですね。今日はありがとうございました」

灯莉がそう言って九十度のお辞儀をする。

「どういたしまして。他の2人はまだ回る？」

「私はまだ回る」

「私も」

「そうか。じゃあ灯莉ちゃん。またいつか」

「またいつか」

もう一度お辞儀をして出口に向かって歩いて言った

「じゃあ、行こうか」

「はい！」

「うん」

――ドンッ。

ベチャ

「きゃっ！？」

「おい、このアマ。俺の洋服に飴がついたじゃねえか」

「ご、ごめんなさい……」

それ違った人にぶつかってわたがしを服につけてしまった晴香。

そして、運が悪いことにたちの悪い男にぶつかった

「ごめんなさいで済むわけねえだろが！？」

「ひっ！」

「おい、女の子に手を出すとか男の屑だな」

振り上げた手を横から紫苑が掴む。

「んだと、てめー」

「こんな人混みの中で腕を振り回すと他の人に迷惑ですよ」

腕を振り払い紫苑を殴りかかってくるその右腕をひょいと交わす。

「うるせえ！　俺はムカついた奴は誰だろうと殴る！」

「ふ～ん。ただのバカだねそう言うのは、それに自分と相手の力量ぐらい考えなよ」

「ぐっ！？」

もう一度殴りかかってきた男の右腕を交わし男の腹部に殴った。

「すまんが俺は空手経験者なんでね。キミみたいなヤクザまがいみたいなやつには負けないよ」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「大丈夫かい？　晴香ちゃん？」

「は、はい。ありがとうございました」

「お礼なんていらないよ。当然の事だからね」

「は、はい」

さっきの男は警察に連行されておさらばになった。

「さて、もう帰んない。これ以上男の人と一緒に居ると変なん勘違いされてしまうよ」

「は、はいそうします。」

「咲ちゃんもね」

「わかった」

「じゃあ、またいつかね」

「はい」

「ばいばい」

ふたり共お辞儀をして帰って行った。

「礼儀正しいな」

ふうーっと息を吐いて木に体を預けて花火が始まるのを待った。

と、そこに携帯電話が鳴った。

「もしもし、なんだ一夏？」

「いや、いまどこかなってな」

「今か？　木の上」

「は？」

一夏の抜け出し声をだして、聞き返す。

「冗談だよ。今な屋台の裏側の林だ」

「そうか、あの子たちは居るのか？」

「今帰した」

「そうか、俺たちの方もさっか蘭が帰ったよ」

「そうか」

「この先の林を抜け出し場所で落ち合わないか？」

「いつもの場所？」

頭を振っても揺すっても出てこない。

「あ、記憶がないのか。今からそっち行くよ」

「いや、いいよ。どっちにしろ俺先に帰るから」

「そうか。じゃあな」

「ああ」

携帯電話をポケットにしまって帰宅路にはいった紫苑

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「紫苑も先に帰るってよ」

「そ、そうかっ」

つい思わず嬉しそうな声が出てしまったことにハッとして、箒は自分の態度に恥じ入る。

（み、みっともないぞ、私は……）

考えるととても恥ずかしいことだと気づき、箒はややうつむき加減になって指を弄っていた時にちょうど携帯電話にメールが入った。

「なっ!?」

「ん?」

携帯電話を開きメールを確認した箒が驚きの声を上げる。それに気になり一夏が覗き込もうとするが後ろ手に隠してしまった。

内容は『ふたりっきりのチャンスなんだから一歩ぐらい前進しろよ。

』だった。

（あ、あいつはなんなんだ。恋路の邪魔をするとか言っておきながら応援するとわ……）

「なあ、箒」

「な、なんだ？」

「紫苑なんだって？」

「き、気を付けて帰ってこいだと」

「そうか、じゃあ、行こうぜ」

「あっ……」

ぱっと一夏は箒の手を取り、そのまま神社裏の林へと向かう。

（ひ、人気のないところに行く……わけではないよな）

さすがにそこまで浮かれてはいない。特に、夏祭りの花火といえば、この林を抜けたところに秘密の穴場があるのだ。

背の高い針葉樹が集まってできたこの裏の林は、ある一角だけが天窓を開けたように開いている。それはさながら季節を切り抜いた絵のようで、春は朝焼け、夏は花火、秋は満月、冬は雪と、色とりどり四季折々の顔を見せる秘密の場所だった。知ってるのは、千冬に束、そして一夏と箒、そしに今は記憶がないが紫苑の５人だけだ。

「おー、変わってないな。ここも」

そんな一夏の声は箒の耳には届いていなかった。

りぃん、りぃん、と。虫の音だけが響く、人気のない林。わずかに吹く風が、夏の暑い空気をどかしていく。

そんな場所で意中の相手とふたりきり……となると、平常心でいられるはずがなかった。

（い、今は、一夏と私しかいない……。そ、それに、その、なんだ……ふ、雰囲気も、い……。……。……）

ちらりと、期待するように一夏を横目で覗く箒。しかし、当の本人はというと、ワクワクとした顔で空の窓を見つめている。

（こ、こ、これは、こっ、ここっ、告白のっ、チャンスではないだろうかっ！？）

誰に聞いているのかと訊かれれば、こう言う。『答えは自らの中にある』（ファインド・アウト・マイ・マインド）、と。

（ううううっ……？）

じいっと一夏を見つめる箒。その顔はだんだんと赤く染まっていき、気温とは関係のない汗が滲み出す。

（い、言う。言おう。言えば。　言うとき。……言え！）

五段階活用を頭の中で繰り返しながら、尻込みをする自らを焚きつける。頭の中で小さい箒がうじうじとしている自分を蹴り、そしてそれを蹴り、さらにそれを蹴り……というループを繰り返していた。

（わ、私から？　私からか？　私から言うのか？　こういうのは男からではないのか？　いやしかしらあの一夏が？　自分から言うわけがない。というか私が好きかもわからない――いや！　好きなはず！　好きなはずだ！　そうとも、好き……）

自分の中で繰り返した言葉を改めて意識して、箒はボッと赤くなる。人混みの喧噪も遠く、今は聞こえない。

（い、今しかない――）

いよいよ箒は覚悟を決めて、その言葉を口にした。

「い、一夏！」

「ん？」

「わ、私は、お前がっ、す――」

ド――――――――ン！！

「おおっ？　はじまったな、花火！」

「す、す、……、……」

「ん？　どうした、箒？」

「……」

ぎゅうっと握りしめた手を、箒はさっと後ろに隠す。

（ううっ……、花火などに邪魔をされるとは……）

しかし、恨んでも仕方がない。花火がはじまる前に言い出せなかった自分のせいだ。

この花火大会は百連発で有名で、一度はじまると一時間以上ぶっ通しで轟音と夜空の彩りが続く。

（今日は諦めよう……。はぁっ……）

そう考えると急激に力が萎えていく。矛先を無くした怒りも、すぐに自然消滅した。

「お～すげー」

パッ、パパッと花火が瞬くたびに、楽しそうな一夏の横顔が明るく光に照らされる。

そんな無邪気な顔を見ていると、箒はふっと可笑しくなる。

――今は、隣にいられるだけで十分。

そう思えてきて、一夏と一緒に空を見上げた。

そこでは赤、青、緑、黄色と様々な色の花火が多くの観衆を楽しませている。

「きれいなものだな……」

「ああ、本当にな」

空を見つめながら、箒は少しだけ大胆に振る舞う。

一夏の左腕にそっと自分の腕を絡めた。

「ん？　なんだよ？」

「このくらいは許せ」

「なあ、いいけど」

一度だけ横を向いた一夏は、そしてまた夜空の花火へと視線を戻す。
花火の光に照らされた箒の横顔は、赤く染まっていながらも恥ずかしそうではなく、どこか誇らしげなそれだった。
十六歳の夏の思い出は、華やかな火に彩られて過ぎていく――。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

箒たちの後ろの林の木の上には先ほど帰ったはずの紫苑がいた。

「俺はいつまでも記憶喪失だと思わないで欲しいな……まあ、その前の記憶がないけどな。」

そう呟きながらあの紙を見ていた。

「それにしても……一夏の鈍感さには殺意が出てくるな……箒もドンマイだな。」

そして黙って花火を見る紫苑。

「よし、決めた。合宿行こう、一夏だけには話すか」

そう言って花火を見ながら紙をしまい左腕の青龍の待機形態に触れる。
紫苑の新たなる覚悟だった。

真夏の夜の夢（後書き）

蘭ちゃんの生徒会メンバーの名前を勝手に付けてみました。
なんかすいません。

ではでは次回にお会いしましょう。

語られなかった話（紫苑編）（前書き）

紫苑の記憶欠落編です。実際紫苑編とか書いてありますが一夏編書く予定は今のところありません。

まあ、短いですけど本編どうぞ

語られなかった話（紫苑編）

「一夏、今日どうするか」

「そうだな……たまには遊びに行くか」

「そうだな、いつ頃にする？」

時は中ニの夏休みの中間場所は織斑家の居間。

「午後ぐらいにするか」

「そうだな。じゃあ昼食べたらにしよう。それまで勉強するか」

「よしやるか！」

居間のテーブルを挟んで一夏と紫苑はテキストを開き勉強をはじめる。

数時間が過ぎて勉強の手を止めたのは紫苑だった。

「そろそろ、昼飯作るか。一夏なに食べる？」

「そうだな……紫苑に任せるよ」

同じく勉強の手を止めた一夏が少し考えてからそう言うと紫苑は立ち上がりキッチンへ向かう

「なら、チャーハンにするぞ」

「ああ」

手際よく食材を切り炒める。

「なあ、一夏、どこに遊びに行くんだ？　やっぱゲーセンか？」

「そうだな、鈴や弾も誘って行くか」

「いや、鈴姉うるさいからふたりで行こうぜたまにはさ、俺もそのためにこっちに泊まったんだし」

もうこの時期には紫苑の両親と鈴が来ていて自分の家と一夏の家を行き来していた。

「泊まったって紫苑も家の家族だろ？」

「そうだけど、両親たちこっちに着てるし。あまり千冬さんに迷惑かけるのも嫌だし。……はい、できたよ」

コトンっと音を鳴らしながら皿を置くその中には美味しそうな香りが立ちこめたチャーハンが盛ってある。

「お、サンキュ。　じゃあ俺たちだけで行くか」

「うん、じゃあ、いただきます」

「いただきます。」

それから昼を食べて、分担して片付けをして街に繰り出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「あ、そう言えば今日第二回モンドグロッソじゃなかったか？」

「そう言えば」

エアホッケーでの接戦での汗を流した俺たちは近くのファーストフード店に入り涼みながら会話をしていた。

「千冬姉の事だからまた優勝すると思うけどな」

「だな。　次どうすっか」

「うーん、紫苑今日も泊まるのか？」

「そうだな……まあ、泊まってくかな。どうせ千冬さん帰って来ないと思うし」

コーラのストローを加えながら紫苑が言う

「そうか、じゃあ買い出しに行かないとな。千冬姉が帰ってきても困らないようにな」

「じゃあ、行くか」

「だな」

残りのコーラとポテトを食べてファーストフード店を出た。

「今日はなににするんだ？」

「肉じゃがと野菜炒めかな」

「お、美味そうだな」

「野菜炒めだったら紫苑の店の方が美味いよ」

「そりゃあどうも」

紫苑の家は中華屋でほど毎日一夏は食べに来ていた。

「なんだよ、あまり嬉しくないみたいだな」

「いや、嬉しくないわけじゃねえんだよな……ただ両親がなんか俺に対してよそよそしいんだよな」

「紫苑の勘違いじゃあねえの？」

「ならいいんだけどな……」

路上に駐車してある二台の黒い車の横に着くと突然ドアが開いた。

「「！？」」

中から出てきた黒服の男たちは俺たちを囲み俺と一夏の腕を掴んだ。

「離せ！　なんなんだよおまえらは！」

「チッ、この離せ！」

必死にもがく俺たちはハンカチで何かを嗅がされて意識を失った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

――どこだ……ここは？

どことはわからない真っ白な空間に俺はいた。

『あなたは力を欲する？』

突如頭の中に声が流れ込んできた。

――は？

『もう一度訊くわ　あなたは力が欲しい？』

――これ以上の力はいらない。

――力をなにに使うか？

『そう、なら質問を変えるわ。あなたは力が合ったらなにに使う？』

――難しい事を訊くな。なら君ならどう思うんだ？

『そう、あなた力をなんだと思う？　なんのための物だった思う？』

『わからないわ。私はそれを探しているのよ』

――俺も力がなんのための物かわからない

『なら一緒に探しましょ』

――一緒に？

『そう、一緒に』

――ああ、一緒に探そう。そのためにはなんでもするよ

『ありがとう。なら、あなたの記憶のカケラを私に分けて』

――記憶のカケラ？

『そう、記憶のカケラよ。私とあなたが一緒にいるためにはそれが必要なの』

――わかった。あげよう、君に俺の記憶のカケラを

そう言うと真っ白だった世界が青白く光って俺を包み込んだ。

――な、なんだ……？　頭の中が洗われていく感じがする。

そして、頭の中から大事な物が抜け落ちる感覚を感じながら意識がなくなった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「し、紫苑！」

「うっ……うう？」

「よ、良かった！」

目が覚めたら目の前に見慣れた顔がいた

「り、鈴姉？　なんで泣いてるの？」

「あんたが誘拐されたって聞いたからよ！」

「誘拐？　い、一夏は！」

「俺はここにいるぞ」

体を起こして見ると隣のベットに一夏がいた。

「なんで、俺たち助かったんだ？」

「千冬姉が決勝戦放り投げて助けに来てくれたんだよ」

「そうか、千冬さんにお礼を言わないとな」

「ちょっと紫苑！　なんであたしにはなにも言わないのよ！　し、心配したんだからね……」

「り、鈴。おいで」

両手を広げて鈴を呼ぶ

そして、涙を隠しながら鈴は紫苑に飛び込んで……

バシ

「いて！！　なにしやがる！」

「なにがおいでよ。　まったく、あたしがどんだけ心配したと思ってるのよ本当に……」

そんな事を言いながら鈴は紫苑を抱きしめる。

「ごめんね、姉ちゃん。心配かけて」

「いいわよ。無事だったんだから」

紫苑は抱きしめ返す。

それを見ていた一夏はふっと笑みがこぼれた。

「紫苑少しいいか」

「あ、千冬姉」

「ええ、いいですよ。千冬さん。鈴は少し席を外してくれないか？」

「ええ、わかったわ」

千冬と入れ違いに鈴は病室を出る。

「一夏も少し席を外してくれないか。」
「ああわかった」
一夏も鈴の後に続き病室を出た。
「紫苑、お前の両親は来ない。」
「気にしませんよ。そんなの」
「それと、紫苑」
「なんですか？」
「お前昔の事は覚えているか？」
「は？」
唐突に変なことを言う千冬に聞き返す紫苑。
「いいから覚えているか？」
「え？　……あれ？　なにも覚えてない……ど、どうして？」
「やっぱり」
「どういうことです？」
「私もわからない。」

「なんで記憶が……。昔どこに住んでいたかも覚えてないし、でも覚えているものもあるどうして……？」

紫苑は自分がどうしたのかわからずとにかく頭をフル回転させて抜け落ちている記憶を探すが出て来ない。

「紫苑……、今日はとにかく帰れ」

「え、千冬さん……」

「今日は帰ってゆっくり休め」

「いやです。　あんな家に帰るのは、嫌だ。」

「……」

「普通考えたって、子供が誘拐されれば心配するでしょ？　なのに顔も出さないなんて……最低の親たちだ……」

紫苑は布団に潜ってしまう。

「……」

千冬にはかける言葉が見つからない。

自分たちも親に捨てられているだけど、紫苑は捨てられてはいないが親たちの態度が酷すぎるそして、記憶の欠落までした。

そんな紫苑にかける言葉がない。

「……千冬さん、1人にしてくれませんか？」

「あ、ああわかった」

そう頷いて、千冬は病室を出た。

「ううっ……グスン……」

それから紫苑は布団に潜って誰にも訊かれずに泣いた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ごめん、お待たせ！」

病室の外で待っていた鈴、一夏、千冬に紫苑は挨拶した。

「なに？　どうしたの？」

「なにが？」

「なにがって、なにかが吹っ切れたみたいな感じじゃあないのよ」

出てすぐに鈴が驚きながら訊いた。

「どこが？　いつもの俺だよ」

「まあ、いいわ。帰るわよ。」

「ごめん、今日も一夏の家に泊まるわ」

「そう、わかったわ。じゃああたし帰るわよ」

「じゃあね」

鈴を見送り、不意にポケットを触る

「ん？」

「どうした？」

首を傾げてポケットをさぐる紫苑に一夏が訪ねた。

「あれ？　なんで束さんから預かったお守りがここに入っているんだ？」

紫苑の手には五センチくらいの四角いキューブが握られていた。

「紫苑、それいつあいつから預かった？」

「うーん……忘れた」

実際預かったものだとはわかっているがいつ預かったかは覚えていない。

「紫苑、それを私に渡せ」

「う、うん」

疑問に思いながらも紫苑は千冬にキューブを渡した。

それが青龍のコアになったのは紫苑は知らないと言うかＩＳのコアだと言うことも知らない。

「さて、一夏、帰ろうか。」

「ああ、千冬姉。今日は帰って来れるよね」

「ああ、なるべく早く帰るとしょう」

「わかった。夕飯作って待ってるよ」

「おう」

俺たちは千冬さんを残して先に家に戻った。

１人残った千冬は壁に背を預けて紫苑から預かったコアを見て呟いた。

「あいつ、紫苑にコアなんかを渡してどうするつもりなんだ？」

だれとなく呟いた疑問は束にしか知らない。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「一夏、今日の夕飯は肉じゃがと野菜炒めでしょ？」

「おう、そうだぞ。紫苑は野菜を洗って切ってくれよ」

「任せろ」

家に戻った俺たちは夕飯の支度に勤しんでいた。とにかく動いていたかった。
なにもしないでいると思い出してしまうから。

「一夏出来たよ」

「サンキュ。じゃあ、野菜炒めを頼むよ」

「了解」

フライパンを熱して油を引き炒めはじめる。

「こっちはこれでよし」

「こっちも終わるから一夏皿出して」

肉じゃがの火を止めた一夏に頼み皿を出してもらう

「ほい」

「サンキュ、よし終わりだ」

フライパンの火を止めて野菜炒めを皿に移し終える。

「お疲れ様」

「ああ、一夏少し寝ていいか？　頭が痛いんだ」

「おお、いいぞ。あ、あとシーツを持って行っといてくれよ。紫苑の部屋のシーツ今日洗ったばかりだし」

「あ、ああわかった」

（俺の部屋……？）

そんな事を思いながらもソファーに掛かっていたシーツを持ち二階に登った。

「ふうっ、ここが俺の部屋か……。」

記憶には一夏たちと暮らした記憶はない束さんといつどこで会ったかも覚えていない。

「とにかく寝よ、頭が痛いし……。」

そのまま倒れるようにベットに入り眠った。

語られなかった話（紫苑編）（後書き）

どうでしたか？

色々考えた結果こんな感じになりました。
本当は夢落ちで終わらせるつもりでしたが、なんか夢落ちにした続きをどうすればいいか悩むのできりのいいところで終わらせてもらいました。

ではでは次回でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4972v/

ＩＳ これが私の弟よ

2011年10月21日11時00分発行